

74, 80, 83-87. (512) ⊗

松本市文化財調査報告 No.74

OHOTSUKA

松本市 大塚古墳

MINAMIGATA

南南 方方 古遺 墳跡

—緊急発掘調査報告書—

1990・3

松本市教育委員会



OHOTSUKA
松本市 大塚古墳

MINAMIGATA
南南 方古墳跡

—緊急発掘調査報告書—

1990・3

松本市教育委員会



南方古墳横穴式石室



南方古墳石室奥壁下出土土器



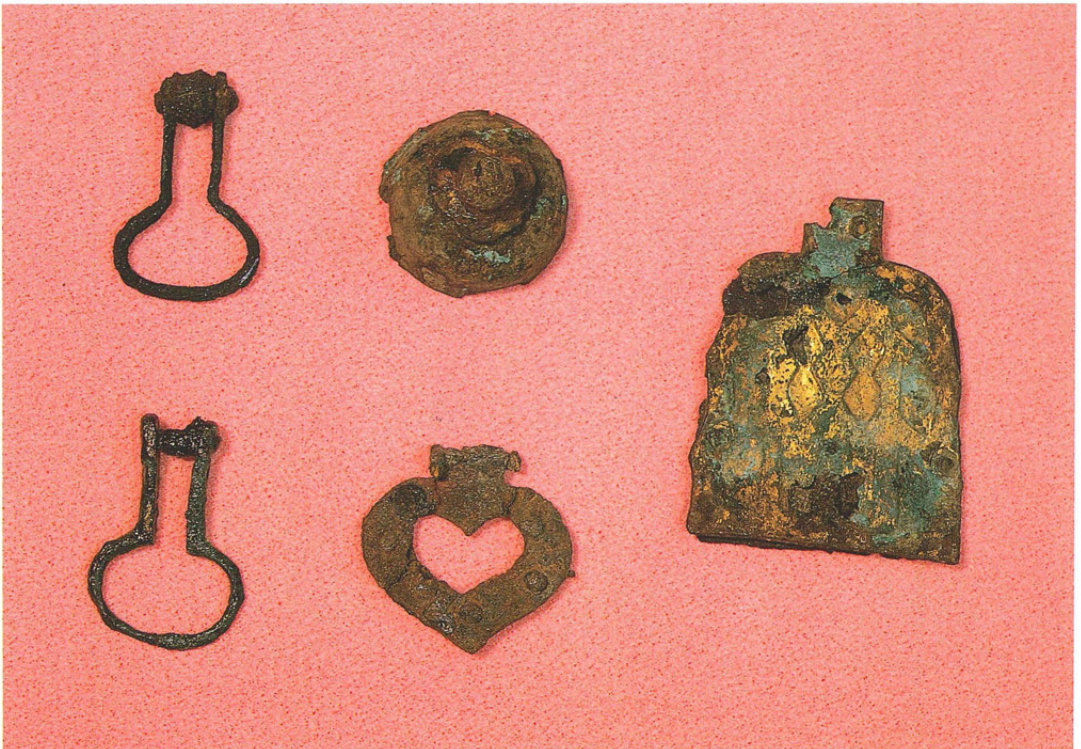
南方古墳出土装身具(右下は平玉)



南方古墳出土耳環(右下は銀環)



南方古墳出土承盤



南方古墳出土馬具



南方古墳出土圭頭太刀



大塚古墳出土陶磁器

序

山辺地区には多くの遺跡が存在しており、なかんずく薄川周辺には、針塚古墳をはじめ数多くの貴重な古墳が集中しています。筑摩野を遥かに見渡せる地に築かれたこれらの古墳は、そこに葬られた人たちの権勢をわたしたちに、語りかけてくれるものがあります。

しかしながらこの地にも開発の波が容赦なく押し寄せているのが昨今の情勢です。今回は県営ほ場整備事業対象地内に大塚古墳、南方遺跡が含まれたため、松本市が松本地方事務所の委託を受けて、緊急発掘調査を実施することになったものです。

大塚古墳は薄川右岸に位置し、昭和63年8月26日から10月26日にかけて、また南方遺跡は昭和63年12月5日から翌年の3月31日にわたり発掘調査が行われました。その途中、規模・副葬品その他あらゆる面で県下有数規模の南方古墳を発見しました。これらの調査結果の全容は本書に記すとおりであります。本書が埋蔵文化財保護への、皆様の一層の御理解につながることとなればこのうえなく幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたりまして並々ならぬ御理解と御援助をいただきました薄川土地改良区をはじめ関係諸機関、および全面的に御協力くださった地元の方々に心より感謝申し上げます。

平成2年3月

松本市教育委員会 教育長 松村好雄

目 次

I 文書記録	4
II 遺跡の環境	
1 大塚古墳	5
2 南方遺跡及び古墳	6
3 周辺遺跡	7
III 大塚古墳の調査	
1 調査の概要	9
2 調査結果	9
IV 南方遺跡の調査	
1 調査の概要	13
2 遺構	13
3 遺物	33
V 南方古墳の調査	
1 調査の概要	74
2 調査結果	74
3 遺物	81
VI 調査のまとめ	116

例 言

1. 本書は昭和63年10月1日から11月7日にかけて行われた松本市^{きとやまべ}里山辺に所在する^{おおつか}大塚古墳と、昭和63年11月25日から平成元年1月27日にかけて行われた^{みなみがた}南方遺跡および平成元年2月14日から3月31日まで行われた南方古墳の緊急調査報告書である。
2. 本調査は昭和63年度県営ほ場整備事業山辺地区に伴う緊急発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所から委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。
3. 本書の執筆は下記の分担で行った。
I：事務局 II-1, 2：太田守夫 II-3, IV-3-§3：神澤昌二郎 V-3-§1：直井雅尚
V-3-§2, §3：関沢聡 IV-3-§1-1)：島田哲男 IV-3-§1-2)：新谷和孝
IV-3-§1-3)：原明芳 その他：柴暁彦
4. 石器の石材鑑定は太田守夫、獣骨、人骨の鑑定は西沢寿晃の各氏にお願いした。
5. 遺物の写真撮影は宮嶋洋一氏による。
6. 本書の編集は事務局が行った。
7. 発掘調査・整理にあたり次の方々から御指導、御協力を賜った。記して感謝する。
石上周蔵 小林康男 原明芳 望月映
8. 本調査の事務記録、作業日誌類、出土遺物、測量図面類は、松本市教育委員会が保管している。
9. 今回は大塚古墳の調査結果のみ扱い、遺物についての記載は別の機会に報告する。

目 次

第1図	周辺遺跡……………8	第33図	石器(1)……………64
第2図	大塚古墳墳丘平面図及び 断面図(その1)……………11	}	}
第3図	大塚古墳墳丘平面図及び 断面図(その2)……………12	第37図	石器(5)……………68
第4図	南方遺跡調査区全体図……………15	第38図	石器(6)・石製品……………69
第5図	南方遺跡遺構配置図(1)……………16	第39図	鉄器……………72
第6図	南方遺跡遺構配置図(2)……………17	第40図	鉄器・銭貨……………73
第7図	第1号住居址……………18	第41図	南方古墳石室平面図及び 断面図……………76
第8図	第1号住居址遺物出土図……………19	第42図	南方古墳墳丘・周溝平面図 及び断面図……………77
第9図	第2・5号住居址……………20	第43図	石室内土器出土状況……………78
第10図	第3号住居址……………21	第44図	石室内装身具出土状況……………79
第11図	第4号住居址……………22	第45図	石室内金属製品出土状況……………80
第12図	土坑(1)……………24	第46図	古墳出土土器(1)……………83
}	}	}	}
第16図	土坑(5)……………28	第50図	古墳出土土器(5)……………87
第17図	竪穴状遺構……………31	第51図	金属製品(1)……………93
第18図	溝址……………32	}	}
第19図	縄文土器(1)……………38	第57図	金属製品(7)……………99
}	}	第58図	装身具(1)……………109
第30図	縄文土器(12)……………49	}	}
第31図	縄文土器(13)・土製品……………50	第64図	装身具(7)……………115
第32図	中世土器・陶磁器……………58		

目 次

第1表	南方遺跡土坑一覧表……………30
第2表	青磁一覧表……………52
第3表	中世遺物出土一覧……………53
第4表	石器一覧表……………61
第5表	鉄器一覧表……………71
第6表	銭貨一覧表……………71
第7表	装身具一覧表……………103

I 文書記録

- 昭和62年 9月7日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月21日 昭和63年度補助事業計画書提出。
- 昭和63年 6月1日 昭和63年度県営ほ場整備事業山辺地区大塚古墳・南方遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 9月6日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。
- 9月12日 昭和64年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 9月19日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
大塚古墳埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 11月11日 大塚古墳埋蔵文化財拾得届及び同保管証の提出。
- 11月19日 南方遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 11月21日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定変更通知。
- 12月21日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定変更通知。
- 12月22日 昭和64年度補助事業計画書提出。
- 平成元年 1月9日 大塚古墳埋蔵物の文化財認定通知。
- 2月9日 南方遺跡埋蔵文化財拾得届及び同保管証の提出。
- 3月13日 南方遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 4月3日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月3日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 5月24日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月11日 南方古墳埋蔵文化財拾得届及び同保管証の提出。
- 7月15日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月18日 平成元年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 9月11日 平成元年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 平成2年 1月25日 南方古墳埋蔵物の文化財認定通知。

II 遺跡の環境

1 大塚古墳

(1) 位置と地形

本遺跡は松本市里山辺兎川寺の南およそ150mの耕地上にあり、薄川の現河床からは北およそ450m、段丘崖近くに位置する。地形上は薄川扇状地のはん濫原の中央に当たり、天井川となっている現河床と段丘との間に明らかに旧河床と考えられる凹地帯を挟んでいる。もともと薄川は、入山辺桐原・南方付近を扇頂とする沖積扇状地を広げ、さらに下方侵食により多くの段丘面と段丘崖を形成している。本遺跡ののる段丘はその中で、現河床に続く河床面に形成された段丘面（崖）より一段高く、山辺小学校裏を通る段丘崖の延長に当たる。形成年代では、現河床やこれに続く河床面より一時階古い、はん濫原の堆積層である。したがって段丘線の方法は、後の河床から蛇行侵食を受け、微地形には一定しないが、およそN40°～80°Wの範囲である。段丘崖の高さは2～2.4m、段差が明りょうである。

調査体制

大塚古墳

団長 中島俊彦（松本市教育長） **調査担当者** 神沢昌二郎 **現場担当者** 熊谷康治 **調査員** 大久保知巳、田中正治郎、森義直

作業協力者 赤羽包子、赤羽真人、石合英子、伊藤智子、乾靖子、内沢紀代子、海野洋子、大出六郎、開鳴八重子、金井ひろみ、上條尚美、神澤ひとみ、小松正子、後藤みさを、酒井文雄、瀬川長広、沢柳秀利、滝沢龍一、武田睦恵、鶴川登、直井スガ子、中島新嗣、中村あき子、中村恵子、永沢周子、中山ゆみ、西村好、林和子、二木茂雄、町田庄司、松尾明恵、三沢元太郎、宮浦紀江子、宮城晴美、宮沢佳代、百瀬二三子、横山小夜子、横山光代、横山保子、吉澤克彦、米山明子

南方遺跡・南方古墳

団長 中島俊彦（松本市教育長） **調査担当者** 神澤昌二郎 **現場担当者** 熊谷康治、中村賢二、柴暁彦 **調査員** 石上周蔵、綿田弘実

作業協力者 赤羽育代、赤羽今朝雄、赤羽貞子、赤羽真人、赤羽すゑみ、赤羽貴子、赤羽紀子、赤廣紀久子、赤広元子、浅川久子、浅川文子、石合佐千子、内山みどり、海野清、大出六郎、小笠原喜美枝、小沢泉、開鳴八重子、小出英子、小島茂富、小松正子、柴暁彦、瀬川長広、関沢結城、滝沢龍一、武井孝嘉、武井竹代、武井千代子、武井恒子、武井弘子、武川順子、鶴川登、遠山明、直井由加理、中島新嗣、中嶋督朗、中村賢二、原田幸、平林薫、二木茂雄、丸山朝人、丸山久司、三沢元太郎、宮坂志づか、宮坂紀子、宮坂春枝、百瀬清子、百瀬とし子、百瀬久、横山篤美

事務局 浅輪幸市（社会教育課長） 田口勝（文化係長） 熊谷康治（主査） 降旗英明（主事）
山岸清治（事務員） 佐々木仁美

(2) 堆積層と礫

付図は調査地の堆積層の地層断面である。(1) (2) (3)は古墳および古墳近くの段丘状の層で(4)は段丘下の新しい沖積層である。

段丘状の耕土は厚さ30cmほどで、かつては畑地、戦後は水田に利用されたもので、すでに斑鉄や鉄分の沈着ができています。古墳周辺の土層の厚さは70～100cmほどで、砂質粘土である。土の色は斑鉄が含まれるうちは黄褐色、その後褐色、深くなるに従い色の濃さを増し暗褐色となる。深さ1mを越えると細・中礫を含み始め、あと礫混り土層、礫層が卓越して大・巨礫が含まれるようになる。

古墳の積石は地下30cmほどの深さから積み上げている。造成に使用された石の種類は、安山岩類、閃緑岩類(閃緑岩・花こう閃緑岩・石英閃緑岩)・緑色凝灰岩類・礫岩・砂岩で、形は安山岩にへんべいや球状が多く、他は不整形の円礫・亜円礫である。礫径は60×40・50×35・44×22cmの巨礫を始め大礫で占められ、そのほとんどが、現在の薄川で普通に見られるものである。付図一(4)は段丘下の新しい沖積層の断面であるが、砂質分が多く、深さ1mから始まる礫層は巨礫を混じえ、段丘上の礫層の土混じりに対し、よく洗われているのが対照的である。段丘下の沖積層は前述のように、旧河床もあり、また最近まではん濫に見舞われていたことが明らかである。一方段丘上には本古墳近くに、同じ積石塚の針塚古墳など古墳群が集まっているが、当時すではん濫を逃れ安定していたものと考えられる。

2 南方遺跡及び古墳

南方遺跡及び南方古墳は標高670mほどの上位段丘に位置し、北側に薄川が西流する。また南側には林城山がせまっていて、山辺谷が松本盆地へ向かって開口する入口付近に所在する。

対岸は入山辺桐原の県道沿いに当たり、桐原側は崖錐に埋まっている。当遺跡の付近でも、崖錐の堆積がせまっている。この段丘上に遺跡が形成された当時は小扇状地や崖錐におそわれていた桐原側より安定していた場所だと思われる。

古墳の石室を構築した石材は薄川水系の安山岩、緑色凝灰岩、石英閃緑岩等が使用されている。

3 周辺遺跡

山辺谷には40の遺跡と20の古墳がある。それらは小県、諏訪、東筑摩の三群境の三峰山を源流とする薄川の段丘を中心として散在している。今回調査の大塚古墳と南方遺跡・古墳とは1.5kmほどの隔りがあるが、それらを含めた遺跡地図では第1図ようになる。遺跡は複合遺跡が多いが、そのうち主となる時代を取り上げて見ていきたい。

薄川右岸から見ると、東桐原、おりと・おやしき、上金井、矢崎、藤井、堀の内、石上、針塚があり、左岸では南方、橋倉、大嵩崎、林山腰である。総じて言えることは段丘上に多いということである。縄文早期は上流の大和合周辺にかたまっているが、前期末のものは針塚遺跡、石上遺跡から出土している。中期は前述した遺跡の殆どがこの時期にあたり、長野県内での一般的な遺跡の在り方を示している。右岸の林城山西の林山腰遺跡は過去に大形の石棒2本を出しており、1987年の発掘調査では中期初頭の住居址と後期の敷石住居址を検出している。晩期は右岸の薄宮神社東の鎌田遺跡から少量出土している。

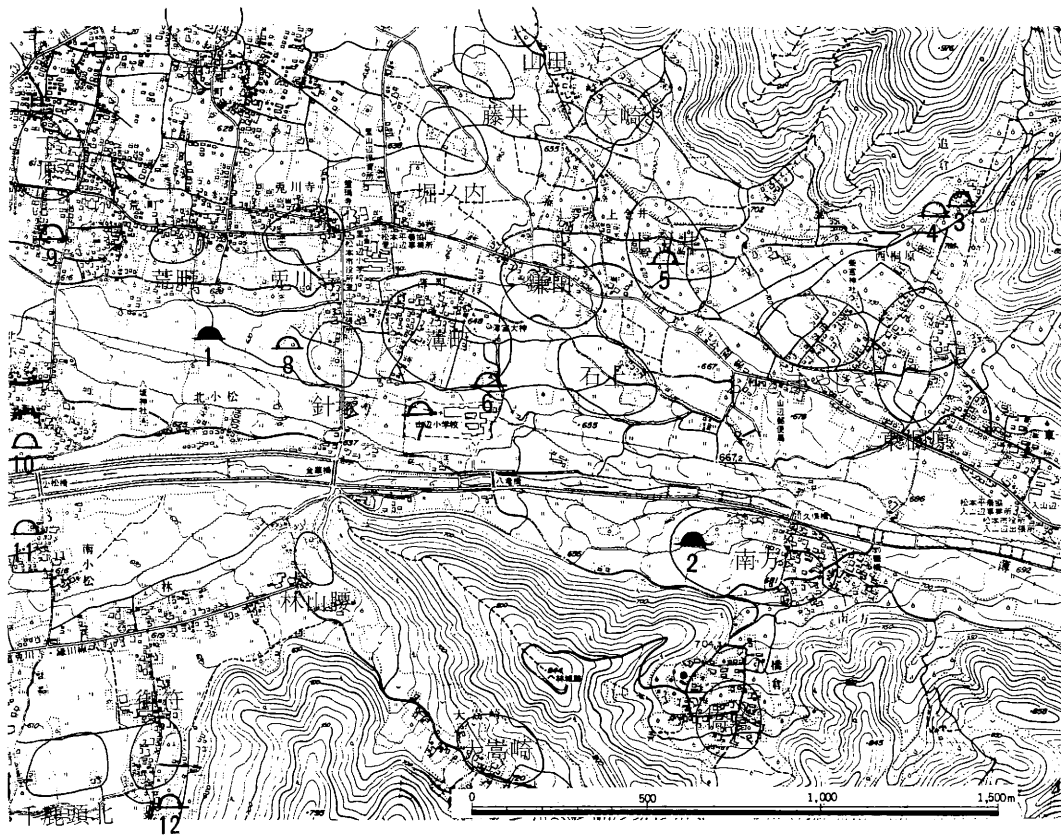
弥生時代になると松本市全体の遺跡数は少なくなるが、ここ山辺では針塚遺跡から中期初頭の土器を使った再葬墓を検出している。鎌田遺跡でも後期の遺構を検出している。

古墳は20基あるが、特記すべきは6基の積石塚の存在である。積石塚は旧河川の氾濫原に、東西に並んでおり、渡来系の文化を示すものと言われている。河川敷きに近い古墳としては里山辺11号の北河原屋敷古墳があり、墳丘がよく残っている。対岸の里山辺12号の中上古墳は水田化されて現存しないが、過去に直刀・馬具・管玉・須恵器などを出土している。今回調査の大塚もその一つである。山麓には横穴式の古墳がある。地元では人穴とも呼んでおり、南方古墳も人穴があったとの話を聞きながら、その時は古墳の確認は出来なかったものである。

古墳時代の集落では千鹿頭北遺跡で40軒を越す前期と後期の住居址を検出している。松本ではこの時期の集落の検出が少ないので貴重な発見である。鎌田遺跡では古墳時代中期の住居址が出ている。山辺中学校の敷地からも古墳時代後期から奈良時代にかけての住居址が出ている。

平安時代になると薄町、石上、兎川寺、荒町、新井遺跡など平地に点々として、遺物が検出され、住居址も発見されている。

さらに遺跡は西方へと続き、右岸では四谷遺跡や県町遺跡、左岸では松本工業高校遺跡、富士電機工場遺跡、筑摩遺跡へと続いている。これらの遺跡は四谷遺跡で縄文時代の石皿を出土している以外は、弥生から平安時代の遺跡である。このように薄川両岸には遺跡が点々と存在しているが、松本市街地寄りになるにしたがって湧水が多く、遺跡は僅少となる。



古墳一覧

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1 : 里山辺 2 号墳(大塚) | 7 : 里山辺17号墳(猫塚) |
| 2 : 南方古墳 | 8 : 里山辺 4 号墳(針塚) |
| 3 : 里山辺14号墳(人穴 2) | 9 : 里山辺 1 号墳(荒町) |
| 4 : 里山辺13号墳(人穴 1) | 10 : 里山辺11号墳(北河原屋敷) |
| 5 : 里山辺12号墳(上金井) | 11 : 里山辺10号墳(巾上) |
| 6 : 里山辺16号墳(古宮) | 12 : 里山辺 9 号墳(御符) |

第1図 周辺遺跡

Ⅲ 大塚古墳の調査

1. 調査の概要

大塚古墳の位置は東に美ヶ原^{うつくしがはら}、西に北アルプスの山々を臨み、美ヶ原に源を発する薄川^{すすきがわ}の扇状地である。また本古墳は河岸段丘の末端部分にあたり、現状は水田に囲まれている。

調査は山辺地区の県営ほ場整備事業に伴う事前調査であり、調査後は水田として利用されている。調査方法は本古墳が積石塚古墳であることから、土のマウンドを持つ古墳と異なり、墳丘自体にトレンチを入れると、崩壊の危険もあり困難なため、墳頂部から均一に礫を除去する方法を採った。

結果は基底部に達しても主体部の痕跡すらつかめなかった。また遺物の出土も墳頂部から基底部まで銭貨が出土し、基底部付近では近世陶磁器とともに人骨が出土した。一方、古墳本来の遺物は前記のものと同じ混じり合って発見された。副葬品は鉈・鉄鏃・銀環・ガラス製勾玉・ガラス小玉がある。

この古墳に伴う周溝は北側部分で幅80cm、深さ20cm前後の円礫を含んだ孤状の落込みが検出されたため、周溝の一部と思われる。したがって大塚古墳は方墳ではなく、円墳であった可能性もある。

2. 調査結果

外形 本古墳は従来報告によると方墳ということになっている。しかし実際は多角形であり、とても本来の姿をとどめているとは思われない。外形は二辺が極端に長い不整五角形である。各辺の長さは北側10.40m、北東側4.88m、南東側11.44m、南西側11.76m、北西側4.48mとなっている。また墳丘の高さは現地表面から1.70m程度である。

外形を概観すると、墳丘の南東側から北西側にかけては5段ほどの石垣状をなしており、明らかに後世に積み直された感を受ける。

また現在の墳丘裾の北側に3本のトレンチを入れ、現地表面から下部の状況を確認した。現地表面下は黄褐色土層であり、多少砂利や小礫を含むなどの変化はあっても、顕著な土層の変化は見られなかった。また1本のトレンチを墳丘まで延長し、基底部下の土の堆積状況を確認したが、礫間の腐植土を除去すると、墳裾と同じ黄褐色土であった。しかし基底部の礫を据えるために黄褐色土層が掘込まれたような痕跡はなく、黄褐色土の基盤に直接置かれたような状況を呈していた。

周溝の有無については、トレンチを入れた北側部分で確認したが、墳裾の外側80cmなどのところで幅80cm程度の礫を含む部分が見られた。これは墳丘を巡るように思われるが、北側部分のみ確認されただけで詳細は不明である。しかし2本のトレンチでそれぞれ26cm、17cmの落込みが

見られることから、おそらく周溝の一部であろう。

内部構造 内部の構造および主体部の確認については墳頂より平面的に礫を除去していく方法を採った。礫は人頭大から径40cm大ほどの河原石を用いている。礫間には暗褐色のさらさらとした土が詰まっている。礫の除去にあたっては主体部の有無を確認しながら礫1個分約40cmずつ下げていったが、主体部は確認されず、結局、積石の基底部まで礫を除去したが、最後まで主体部らしきものは見あたらなかった。また基底部の礫間は黒褐色腐植土であった。

遺物出土状況 本来、主体部に副葬されたはずの遺物は、礫を除去していく段階で、礫間より四散した状況で出土した。おもに寛永通宝を中心に多数の銭貨が墳頂部から基底部まであらゆる場所^{ところ}で出土している。そうした銭貨・近世陶磁器・鏝などととも、須恵器坏片、鈿、鉄鏃、銀環、ガラス製勾玉、ガラス小玉が出土した。また基底部の礫間では、近世陶磁器とともに人骨が出土している。

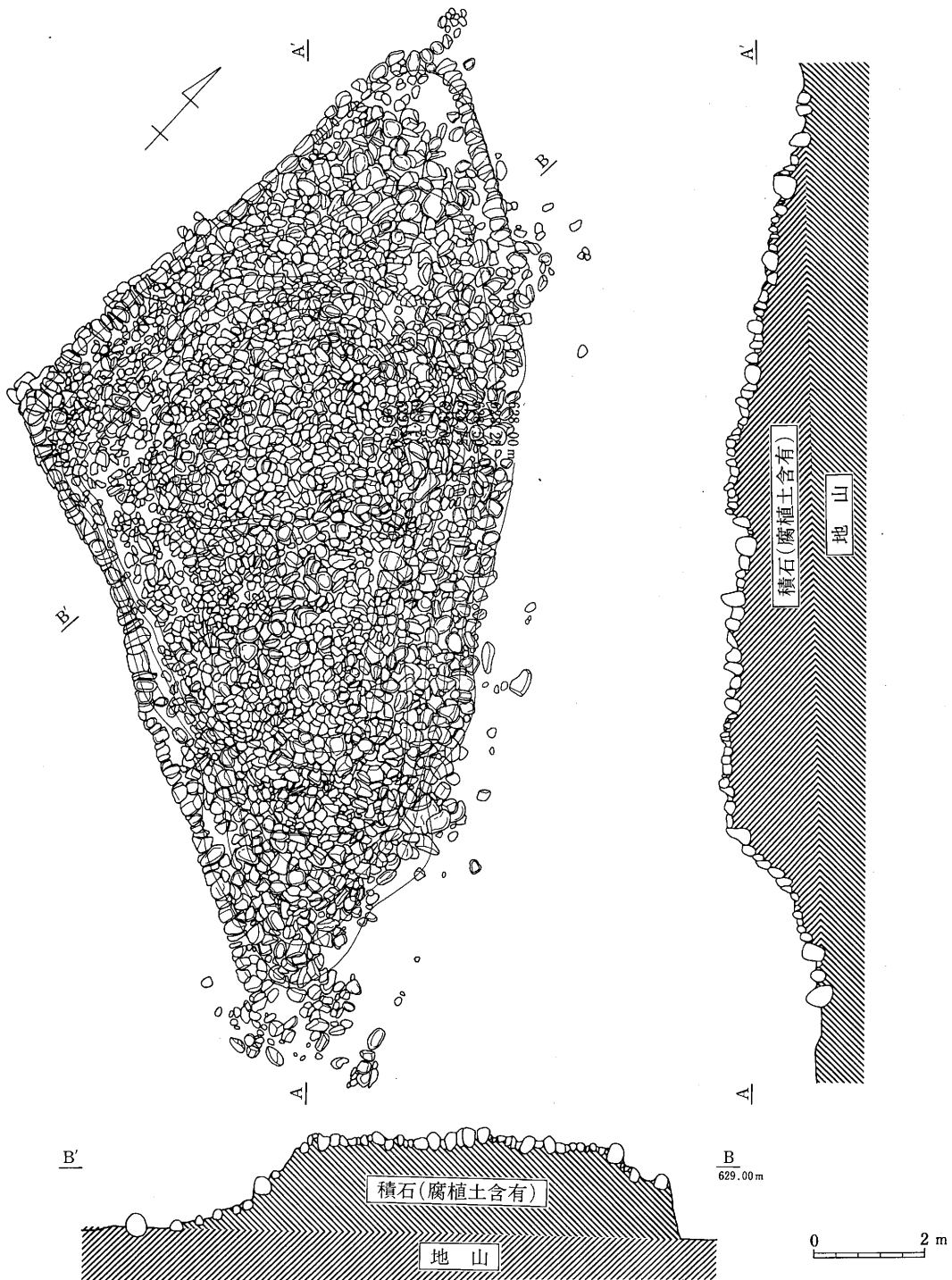
骨類についての所見 出土骨類は古墳の西側残10cm～1m、東側残20cmの各所からの検出である。これらは人骨（生骨・焼骨が混在）、馬骨・馬歯（生骨）に分けられる。

人骨：頭蓋骨の平たい板状の骨が3片ほど認められ、脳頭蓋の一部と推定される（焼骨）。歯が計5本残存する。歯種は上顎（右）第1・2大臼歯、下顎（右）第1大臼歯、（同）左第2大臼歯、破片1個である。各歯根の先端を欠くが、おおむね形態は残されている。咬耗の程度に若干の差異があるが、咬合面に平坦状に進行し、歯髄が点状に露出するものが多く、壮年期以降の年齢のものと推定される（生骨）。なお、個体の別の検討は略す。前腕とみられる長骨片。指骨の基節骨の底部が1片（ともに生骨）。大腿骨（左）の骨体下半部が残り、やや強壯な形態を具える（生骨）。粗線の一部を残す断片が2片（焼骨）。脛骨の骨体下部（生骨）などと共に、他の多くの細片は一括して人骨であろうと推定される。

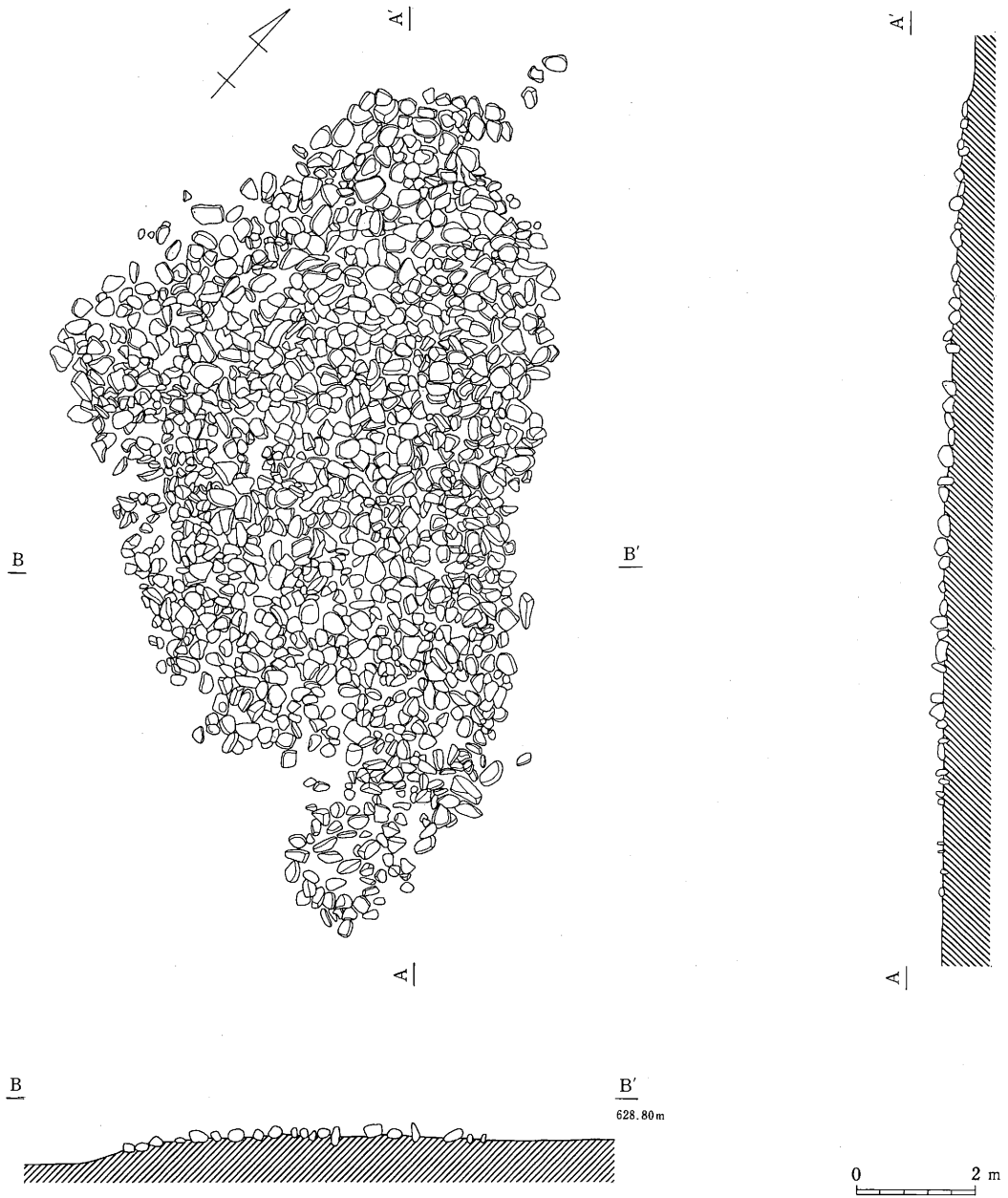
馬骨・馬歯：側頭部（右）の外耳孔・乳様突起の部分が堅い骨質として保存される。肋骨片1片。中手骨の骨体がほぼ完存するが、骨表面は滑沢で、やや新しい時期のものとも考えられる。中足骨の下端^{もと}なども識別できる。

歯は切歯4本、臼歯6本が残存する。歯根の先端を欠くが、ほぼ形態を残している。切歯の咬合面は一様に強い鋭角状となり、縦楕円形を呈し、歯髄腔も露出している。臼歯もエナメル質は殆ど失なわれ、極度な陥凹面を形成するほどの磨滅が、進行している。いずれもかなりの老齡馬のものと見なせるものである。

以上、墳丘および遺物出土状況から本古墳は、外形ばかりではなく、墳丘自体が破壊を受けており、基底部からの近世陶磁器や人骨の出土から考えても、盗掘、積み直されたものである可能性は高い。また相当数の銭貨の出土があること、直接結び付きはないだろうが、薄川右岸にある^{あるみや}古宮古墳が薄宮の社地と伝えられ、現在でも残されている基底部に小祠があることなどから、本古墳も近世以降、信仰の対象として利用されていたと思われる。



第2図 大塚古墳墳丘平面図及び断面図(その1)



第3図 大塚古墳墳丘平面図及び断面図（その2）

IV 南方遺跡の調査

1. 調査の概要

本調査地は薄川^{すずきかわ}の扇状地の左岸に位置する。眼下に川を見下ろす段丘上にあり、南側は林城山^{はやしじょうやま}（金華山^{きんかざん}）が間近に迫る。こうした川と山に挟まれた、入山辺南方^{いりやまべみなみがた}の水田の中にある。

調査はほ場整備対象地に I～V の調査区を任意に設定したものである。I・II 地区は耕作道を挟んで南北の水田、III 地区は地区の公民館脇の水田の畦畔に沿った幅 2 m の東西のトレンチ、IV 地区は民家西側の水田、V 地区はブドウ園の南西隅突出部と水田である。

検出遺構は竪穴住居址 5 軒（I 地区）、土坑 88 基（I～V 地区）、ピット 36 基（I・II 地区）、竪穴状遺構 2 基（I 地区）、溝 2 本（I 地区）である。

出土遺物は縄文土器片はすべて破片ばかりであるが、早期後半～後期後半まで多岐にわたっている。中世土器は土器皿、山茶碗、白磁・青磁碗、こね鉢、石鍋、青白磁合子などである。一方石器は、石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、打製石斧、磨製石斧、凹石、石皿、砥石、大珠、石刀と思われる石製品、玦状耳飾、ヒスイ製装飾品が出土している。金属製品は鉄鏃、銭貨、かんじき等が出土した。

2. 遺構

§1 竪穴住居址

1) 第 1 号住居址（第 7 図）

本址は I 地区 N15-E 9 で検出された。平面形は 5.55×4.05m の長方形を呈する。第 2 号住居址を切り、主軸が N-80°-W でほぼ一致と思われることから、第 2 号住居址の建て替えの可能性もある。検出面から床面までの深さは 30cm を測り、壁面はゆるやかに立ち上がる。床面及び壁は地山の黄褐色土が叩きしめられ堅緻である。カマドは見られなかった。支柱穴は壁面からやや中央寄りに 4 個確認された。住居址の覆土は床面直上にわずかに暗茶褐色土が堆積し、その上に茶褐色土が堆積している。第 1 層中には人頭大からひと抱えほどもある礫が西側部分に集中し投棄されており、人為堆積の様相を呈す。また本址の廃絶後、南西隅に 2.49×1.80m ほどの長方形を呈すると思われる土坑が本址の床面まで掘り込まれている。

遺物 破片が多く図示できるものは少ないが、土器皿 102 点、山茶碗 4 点、龍泉窯系青磁碗 7 点、こね鉢 5 点、常滑甕 1 点、土鍋 3 点、青磁水注 1 点が出土している。石器は覆土中より石鏃（1～4）、石匙（28）、打製石斧（40）、凹石（49～52）、石皿（54）が出土している。本址の時期は土器より 12～13 世紀に比定できる。

2) 第2号住居址(第9図)

プランの半分以上を第1号住居址に切られ、北西隅を溝1によって切られている。全体形は知ることはできないが、主軸方位が第1号住居址と一致すると思われることから、平面形は長方形であったと思われる。残存する部分の床面からの壁高は12cmを測る。本址に伴うピット、径36cm、深さ33cmのものが1個あるが、柱穴かどうかは不明である。覆土の状況は黄色土ブロック、焼土粒、炭化物を多量に含む暗黒灰色土で、焼土粒、炭化物を多量に含む点が第1号住居址と異なる。西壁中央部が特に焼土、炭化物が多い。しかしカマドはない。覆土中には拳大から人頭大の礫が投棄されている。

遺物 土器はすべて破片であるが、土器皿24点、山茶碗1点、白磁碗1点、龍泉窯系青磁碗2点、こね鉢4点、土鍋6点、石器は石匙(29)が出土している。本址も12~13世紀に比定されよう。

3) 第5号住居址(第9図)

調査区の北西隅の溝1と溝2に挟まれるN21-EWOに位置する。本址の西隅は調査区外のため未発掘である。本址は溝1を切っている。平面プランは3.00×2.52mの長方形を呈している。ピットは3個が確認されたが、本址に伴う主柱穴とするには位置の上から疑問が残る。壁面はわずかに起伏をうかがえる程度が東側から西側の一部にかけて残存するのみである。床面は地山の黄褐色土を掘込んでおり堅緻である。

遺物 住居址内のP2の覆土中より石鏃(8)が出土している。

4) 第3号住居址(第10図)

調査区の南西N9-E3に位置する。5.10×3.75mの長方形のプランと思われるが、南西隅は確認できなかった。主軸方位はN-15°-Eである。検出面から床面までの深さは45cmを測り、南側と西側の壁は不明であるが、残存している部分を見る限り、緩やかに立ち上がっている。ピットは6個確認され、P₁は径30cm、深さ12cm、P₂は径30cm、深さ9cm、P₃は30×21cm、深さ10.5cm、P₄は径27cm、深さ33cm、P₅は径30cm、P₆は24×21cm、深さ9cmを測る。本址の覆土は一時期に埋土されたらしく、暗茶褐色土の単一層である。

また本址の廃絶後、このプランに納まるように楕円形を呈する第4号住居址が掘込まれている。

遺物 覆土中より龍泉窯系青磁碗の破片1点、石鏃(5、6)、検出面よりスクレイパー(31)とピエス・エスキーユ(35)が出土している。土器より本址は12~13世紀に比定される。

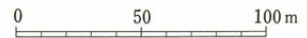
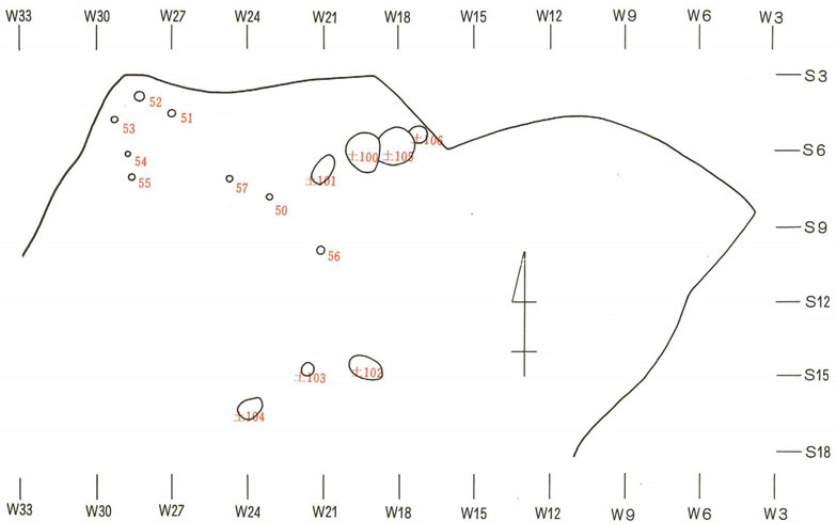
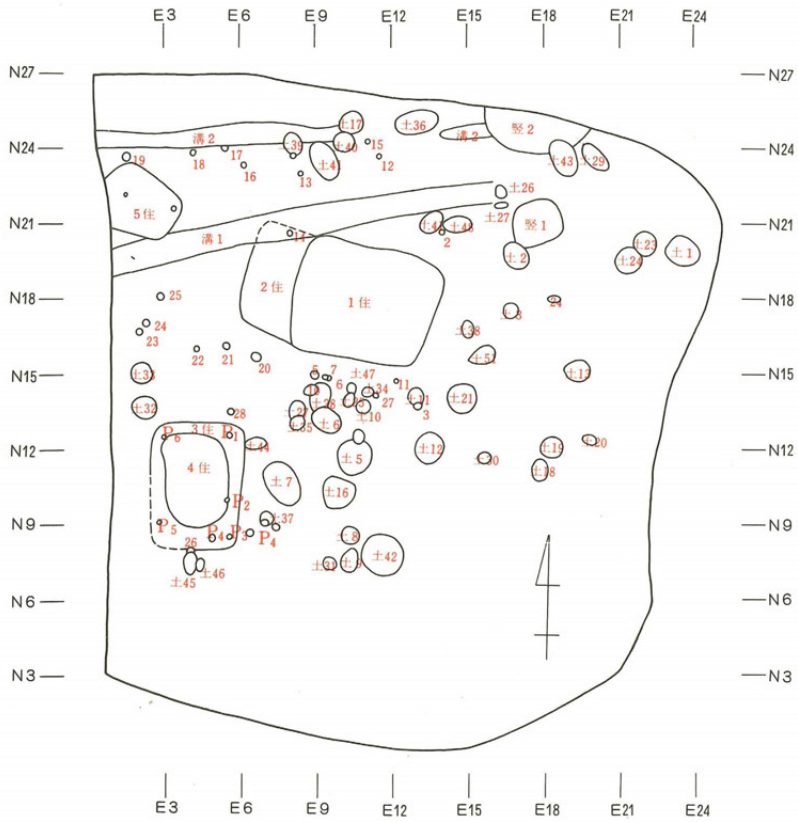
5) 第4号住居址(第11図)

本址はN9-E3に位置する。第3号住居址廃絶後、そのプランに納まるかたちで掘込まれている。平面形は3.90×3.06mの楕円形を呈し、主軸方位はN-0°を示す。壁高は検出面から33cmを測り、壁面は皿状に緩やかに立ち上がっている。本址に伴うピット等の遺構は確認されなかった。おそらく本址は廃絶時に人為的に埋土されたものと思われる。

遺物 覆土中より石鏃(7)が出土している。



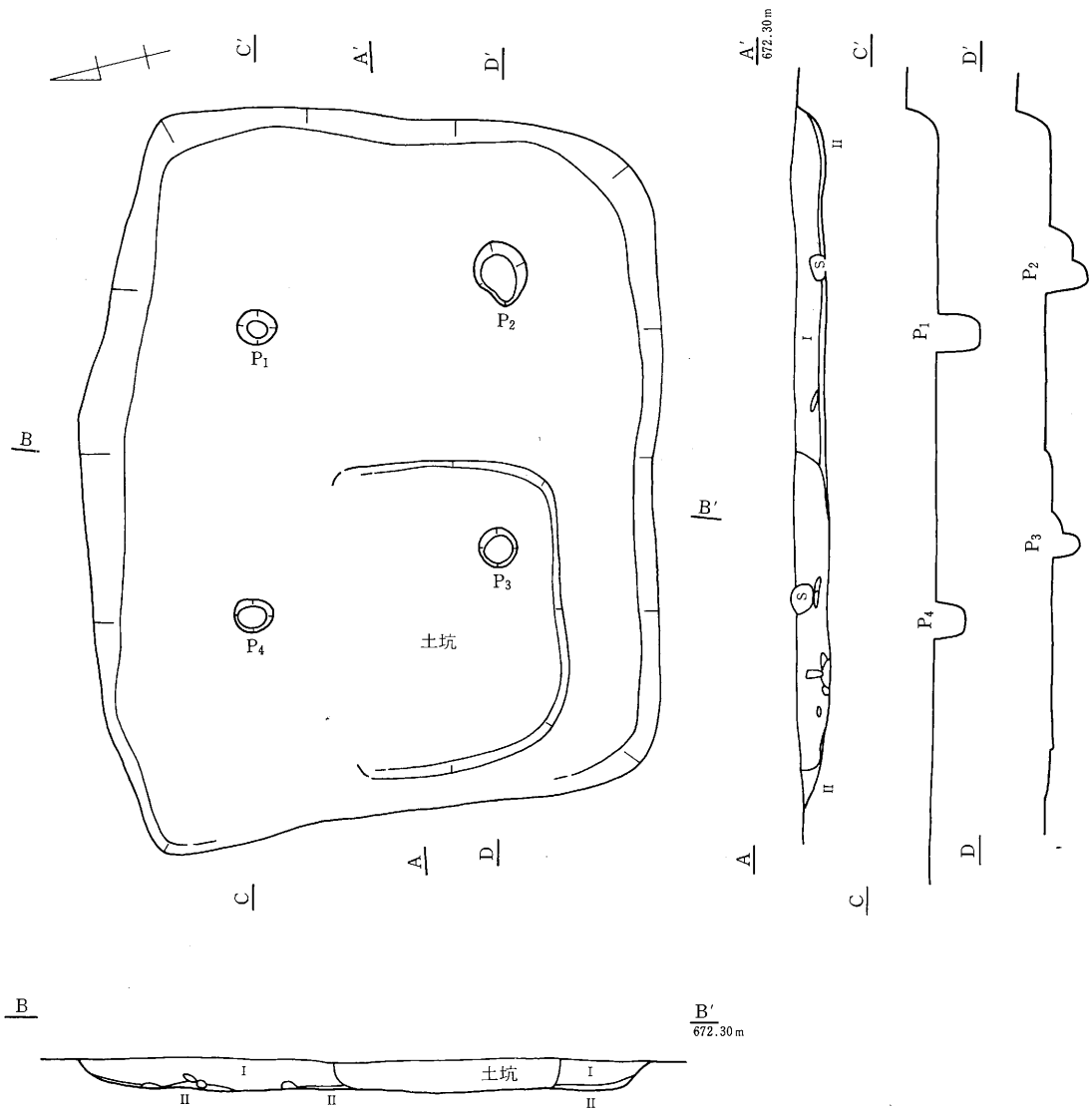
第4図 南方遺跡調査区全体図



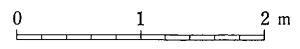
第5図 南方遺跡遺構配置図(1)



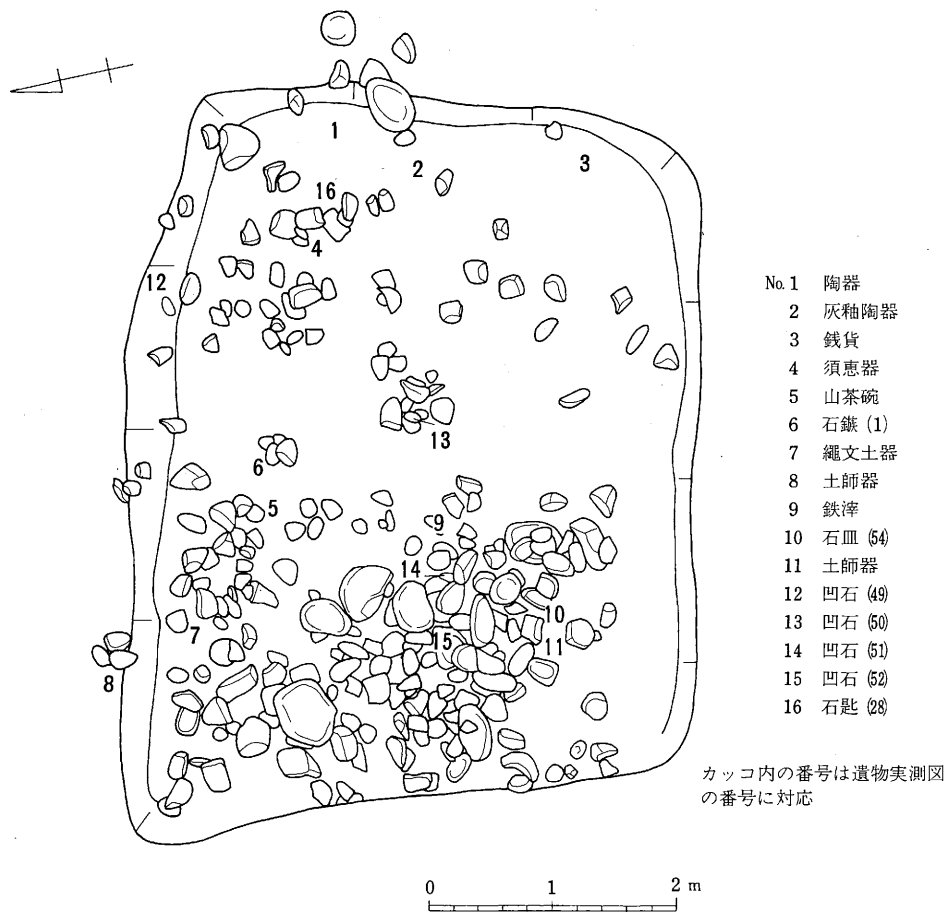
第6图 南方遺跡遺構配置図(2)



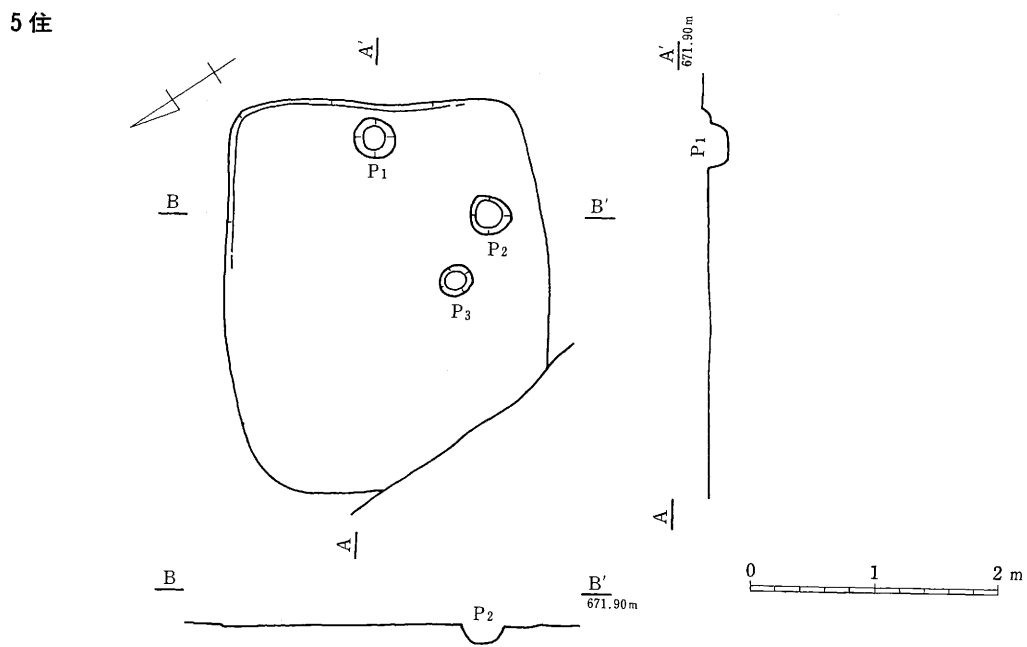
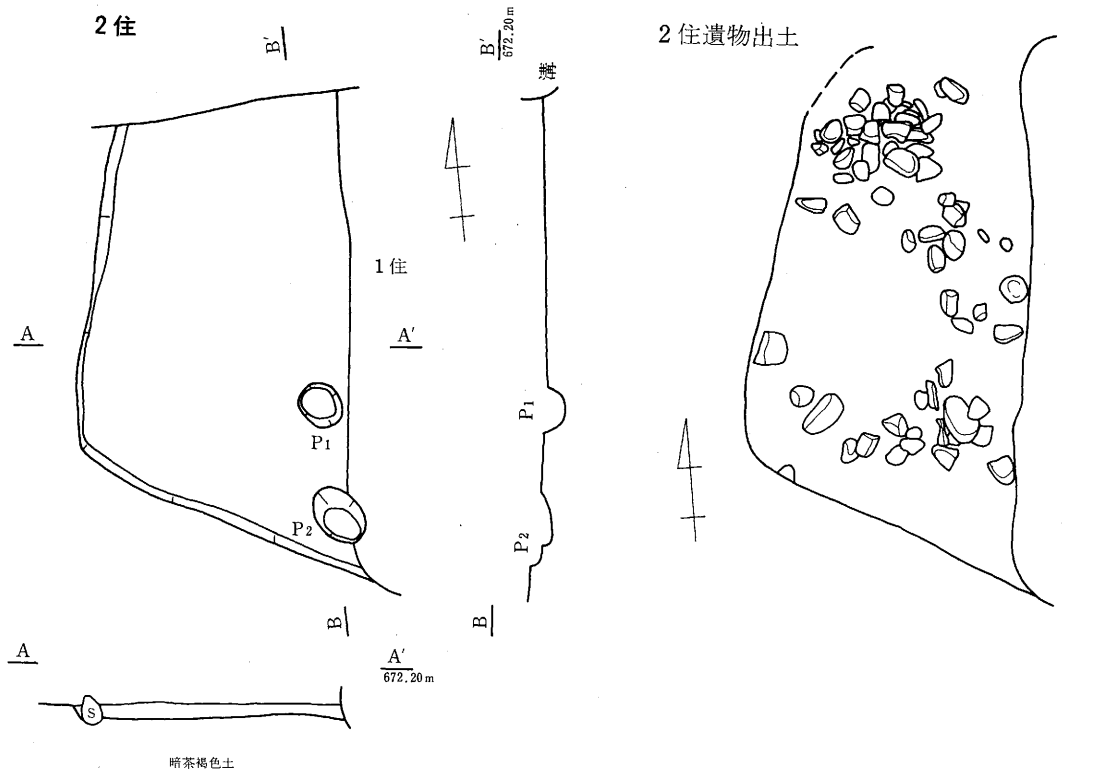
I : 茶褐色土、(小礫混入、堅い)
 II : 暗茶褐色粘質土、(黄色土粒、灰色土ブロック混入)



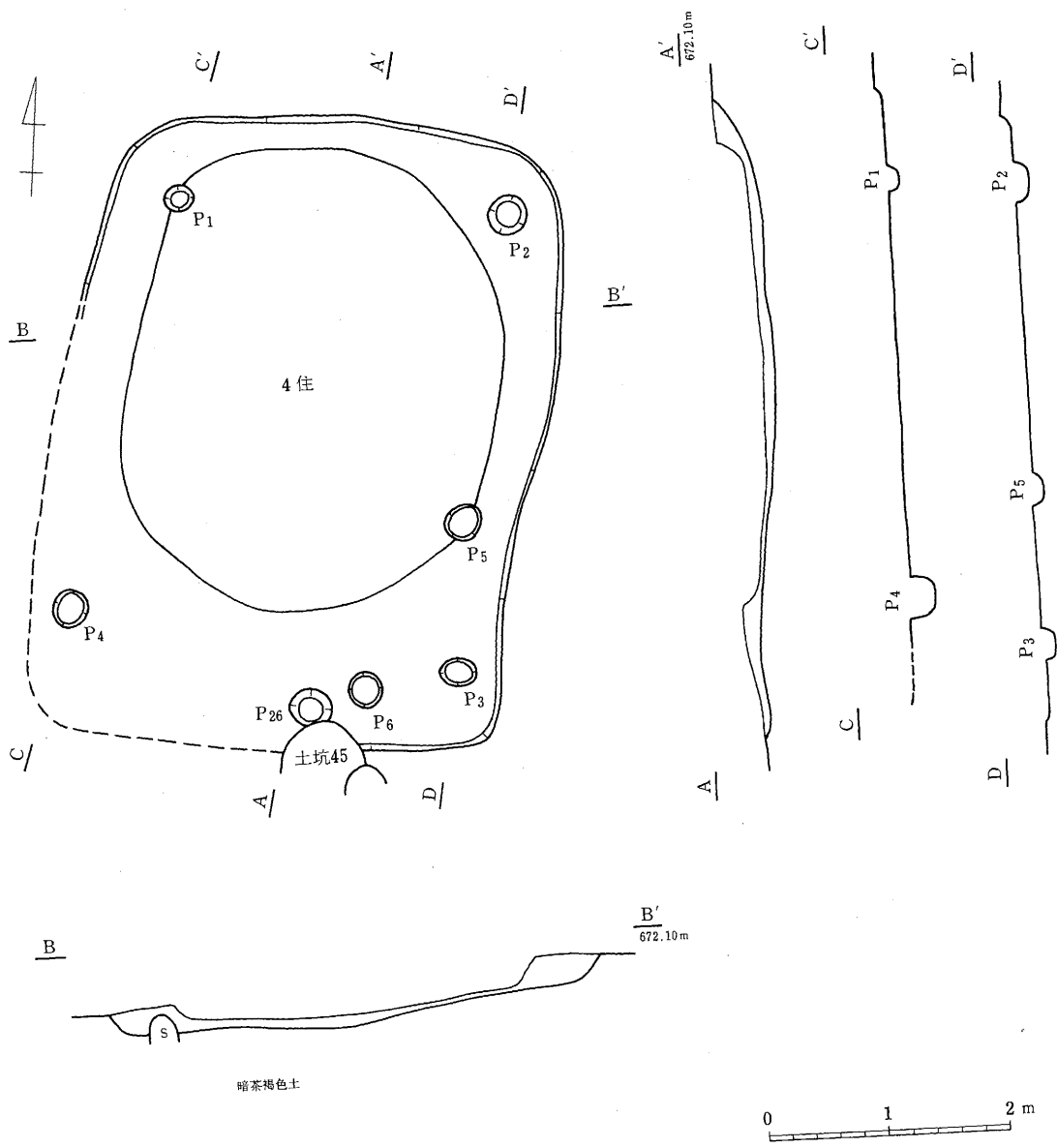
第7図 第1号住居址



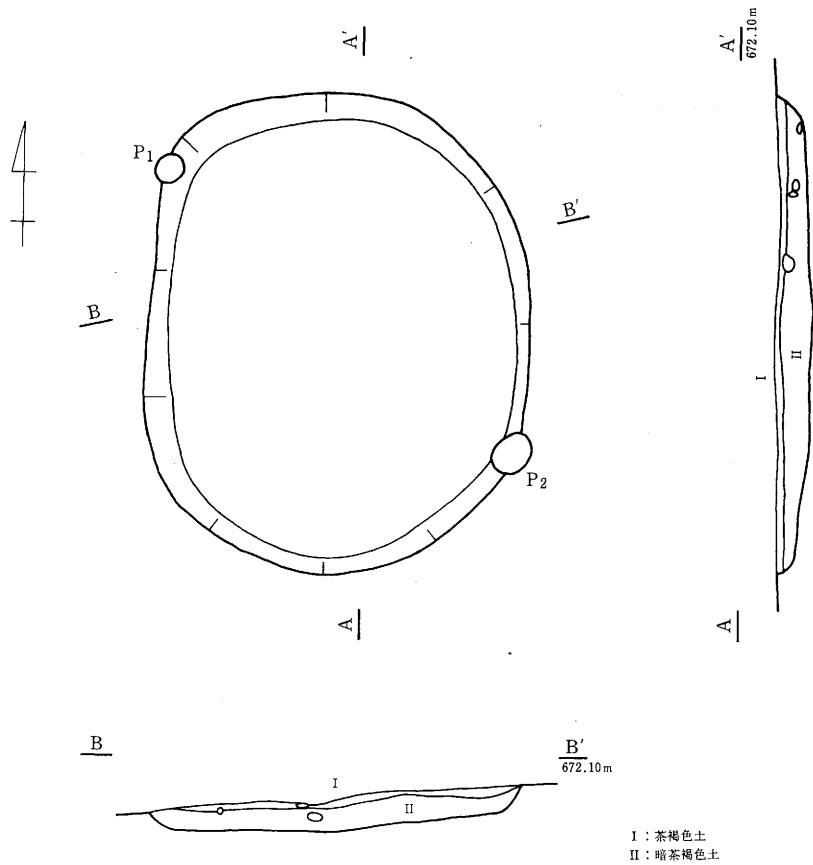
第8図 第1号住居址遺物出土図



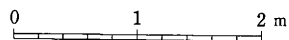
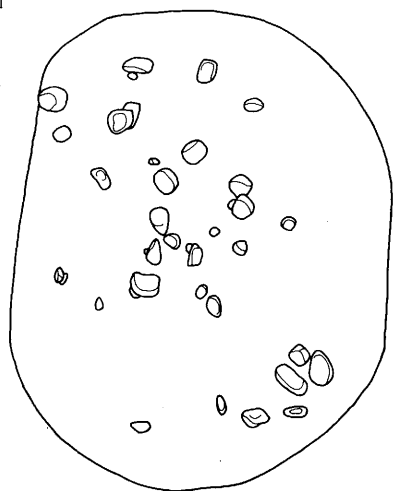
第9図 第2・5号住居址



第10图 第3号住居址



礫出土状況図



第11図 第4号住居址

§2. 土坑・ピット (第12図～16図)

今回の調査区Ⅰ～Ⅴ地区で土坑は総数88基を数える。内訳はⅠ地区が調査区中央やや西寄りに住居址を中心にして48基がほぼ全域に分布する。Ⅱ地区は南北に長い調査区であるが、北隅に7基がまとまっている。Ⅳ地区は調査区面積が狭いが、21基がほぼ全域にわたっている。Ⅴ地区は古墳周溝を中心にして12基が検出された。

これらの土坑をまず平面形で分類すると、円形、楕円形、不整円形、長方形の4つに大別される。その中で多いものは楕円形と不整円形を呈するもので、それぞれ全体の39.7%を占めている。次いで円形17%、長方形のものは少なく2.2%となっている。

次に断面形についてはA1・A2・B・C・Dの5つに分類が可能である。

- A1 底面から壁面へ傾斜変換をしながら立ち上がる、皿状の深さ30cm未満のもの。
- A2 底面から壁面へ傾斜変換をしながら立ち上がる、皿状の深さ30cm以上のもの。
- B 底面・壁面が不明確で、緩やかに立ち上がる摺鉢状を呈するもの。
- C 径に対して深さの深いもの。
- D 壁面が二段に落ち込むもの。

A1は39基あり全体の44%、A2は20基で22.7%、Bは20基で22.7%、Cは3基で3.4%、Dは6基で6.8%である。

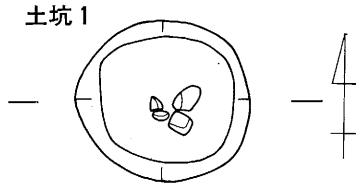
今回の調査区は縄文時代の遺跡の範囲内のため、各遺構の覆土中に縄文時代の遺物が混入しており、土坑は純粋に時期決定できるものは少ない。なお本調査では竪穴住居址に伴わない径50cm以上のものを土坑として扱っている。

Ⅰ地区

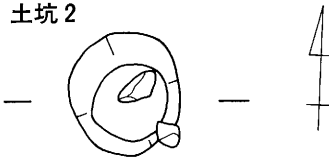
土坑2 N18—E15に位置し、99×90cm、深さ64cmの円形の土坑である。平面形に比して深さがかなり深く、上記分類のCに相当する。覆土は4層に分層され、自然堆積による様相を呈している。遺物は第Ⅰ層中より縄文土器片3片(22・23・24)が出土している。

土坑14 N21—E12に位置する。長軸93cm、短軸84cm、深さ32cmの楕円形を呈する。掘込みは東壁面が二段に落ち込む。暗黄褐色土の覆土中には拳大から人頭大の礫が底面から上面までぎっしりと詰まっており人為的な埋土と思われる。遺物は縄文土器片2片(14・15)、打製石斧(42～44)が礫間より出土している。土器片(14)は縄文時代中期後半、(15)は早期末～前期初頭と接合関係もなく、本址の置かれる時期も不明である。

土坑18 N9—E15に位置し、長軸120cm、短軸90cm、深さ22cmと測り、断面摺鉢状に立ち上がる。覆土は黒褐色土と暗茶褐色弱粘質土の2層から成り、覆土中に拳大から人頭大の円礫を含んでいる。遺物は礫間より縄文土器片4片(16～19)、また第Ⅰ層上層では下半部を破損した定角式石斧(48)が出土している。



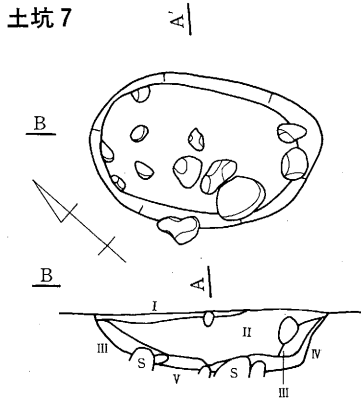
- I : 黒褐色土(炭化物, 焼土粒少量混入)
- II : 茶褐色土(小礫混入)
- III : 茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 10cm, 小礫混入)



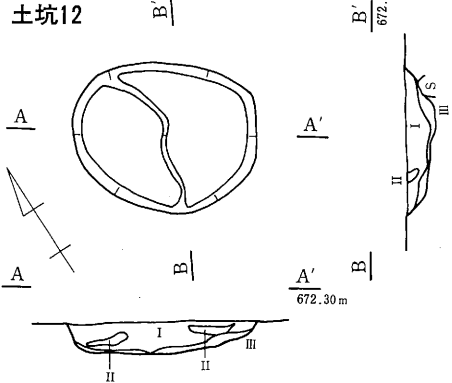
- I : 暗茶褐色土(土器含有)
- II : 茶褐色土
- III : 茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 5-6cm混入)
- IV : 茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 1-3cm混入), 土器含有



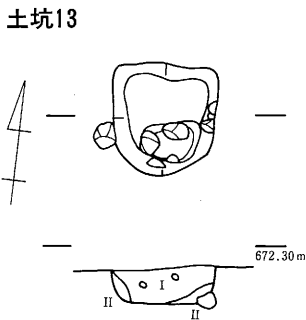
- I : 茶褐色砂質土(黄色土ブロック ϕ 1-3cm混入)
- II : 茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 5-10cm混入)



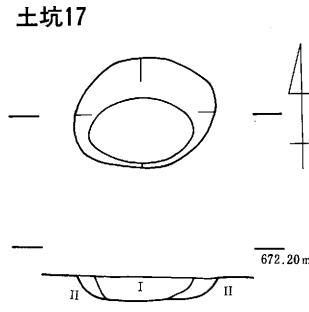
- I : 茶褐色弱砂質土
- II : 暗茶褐色土(小礫少量混入)
- III : 暗茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 10cm混入)
- IV : 暗茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 10-20cm混入)
- V : 黄茶色砂礫層



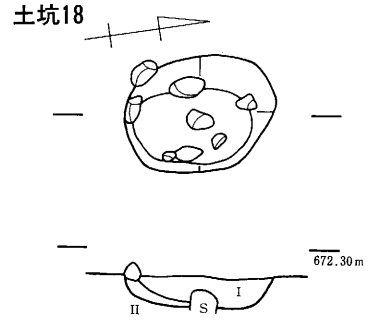
- I : 茶褐色弱砂質土
- II : 灰色土
- III : 茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 5cm混入)



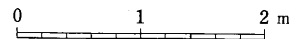
- I : 茶褐色土(上部に炭化物, 全体に小礫混入)
- II : 茶褐色砂質土(黄色土ブロック ϕ 1-5cm混入)



- I : 暗茶褐色砂質土
- II : 暗茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 10cm混入)

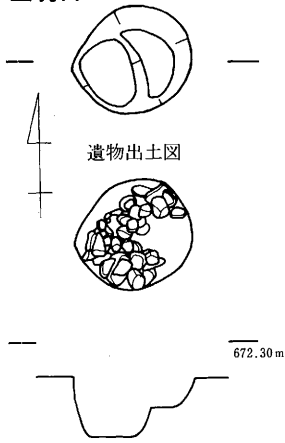


- I : 黒褐色土
- II : 暗茶褐色弱粘質土



第12図 土坑(1)

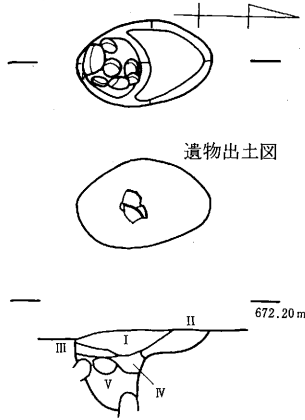
土坑14



遺物出土図



土坑26

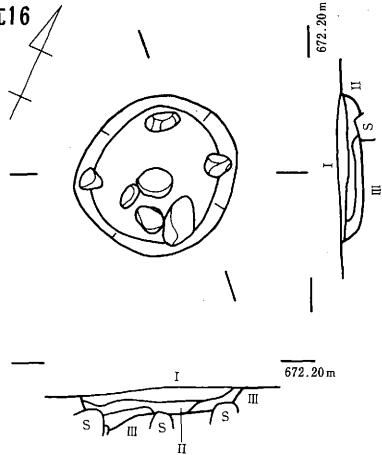


遺物出土図



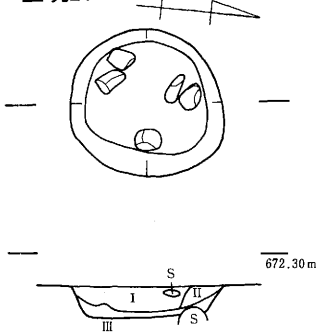
- I: 暗茶褐色土
- II: 黄褐色土(暗茶褐色土ブロック ϕ 1~5cm混入)
- III: 暗茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 1~5cm多量混入)
- IV: 暗茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 0.5cm少量混入)
- V: 黒褐色砂質土

土坑16



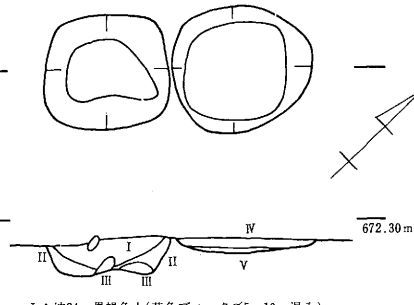
- I: 暗褐色土(黄色土ブロック ϕ 1~3cm混入)
- II: 暗褐色土(黄色土ブロック ϕ 5~10cm混入)
- III: 黄褐色土(黒色土ブロック ϕ 5~10cm混入)

土坑21



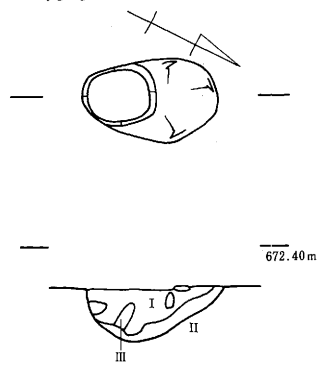
- I: 暗茶褐色土(炭化物混入)
- II: 暗茶褐色土(炭化物, 焼土, 黄色土粒混入)
- III: 暗茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 1~3cm混入)

土坑23・24



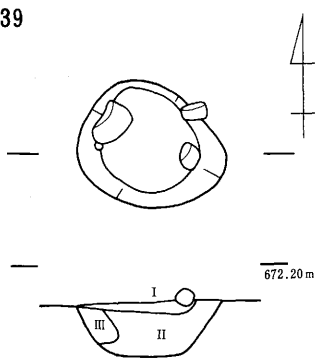
- I: 坑24・黒褐色土(黄色ブロック ϕ 5~10cm混入)
- II: # 暗茶褐色土(黄色土ブロック1~10cm混入)
- III: # 黄色土
- IV: 坑23・暗茶褐色砂質土
- V: # 黄褐色砂質土

土坑29



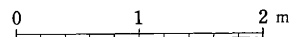
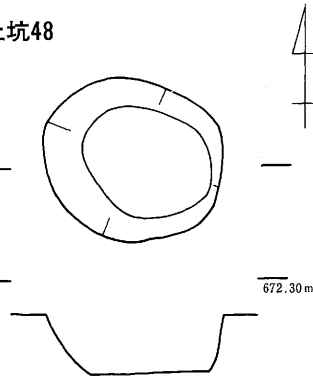
- I: 暗茶褐色砂質土(小礫混入)
- II: 黄褐色土
- III: 暗茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 3~5cm混入)

土坑39

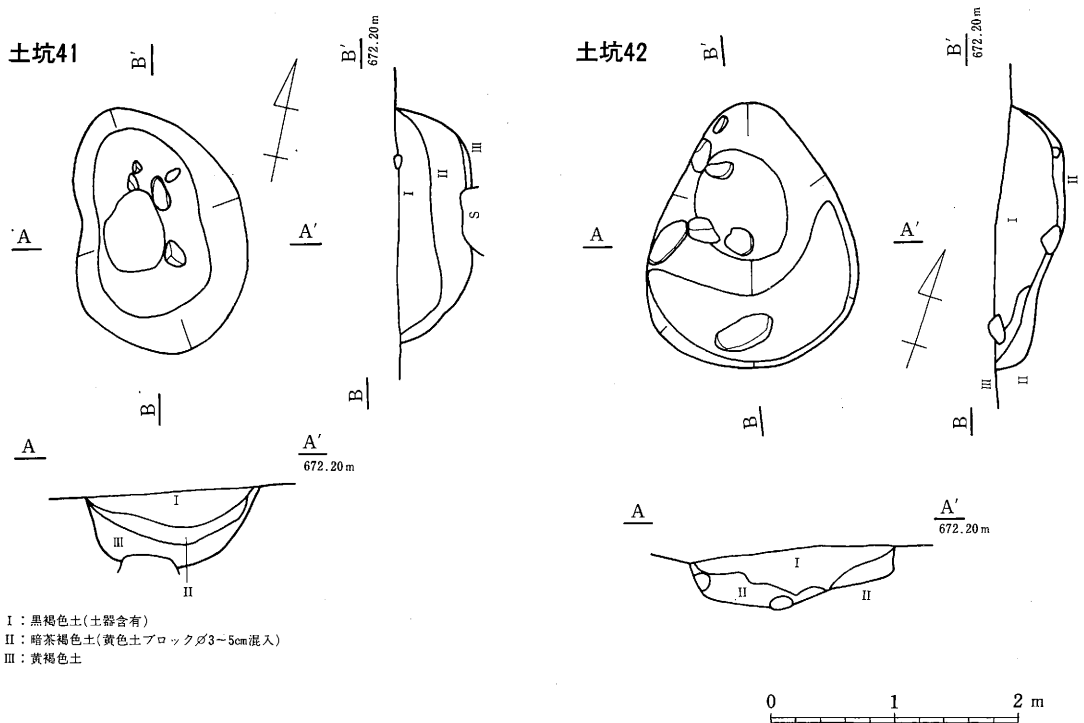


- I: 暗茶褐色土(小礫少量混入)
- II: 黒褐色土(小礫少量混入)
- III: 暗茶褐色土(黄色土ブロック ϕ 0.5cm, 小礫混入)

土坑48



第13図 土坑(2)



第14図 土坑(3)

土坑26 N12-E12に位置し、長軸104cm、短軸66cm、深さ32cmの楕円形を呈している。北側は浅く緩やかに掘込まれ、段をなして落込む。南側は掘方が急に落込んでいいる。覆土は検出面直下の第I層中で須恵器の甕口縁片が出土し、第V層中に底面から浮いた状態で拳大から人頭大の礫が出土している。遺物は縄文土器片が4片(30~33)が出土した。

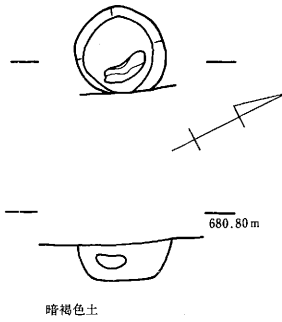
土坑29 N21-E18に位置する。長軸108cm、短軸66cm、深さ36cmの長楕円形の土坑である。断面の形状は摺鉢状を呈する。覆土は第2層が流れ込んだ後、一気に埋土されたと思われる。第I層中には拳大の礫がまばらに含まれている。遺物は縄文土器片19片(34~52)、ピエス・エスキーユ(36)が出土している。土器片は接合関係はないが、大半が前期末~中期初頭のものであり、時期もこの辺に求められるだろう。

土坑39 N24-E6に位置し、溝2に後行する。長軸117cm、短軸96cm、深さ42cmの不整円形をしている。覆土は3層に分層され、比較的短期間に堆積したものである。覆土中には底面から浮いた状態で子供の頭大から、人頭大の礫が含まれている。遺物は縄文土器片が5点(20~24)が出土している。

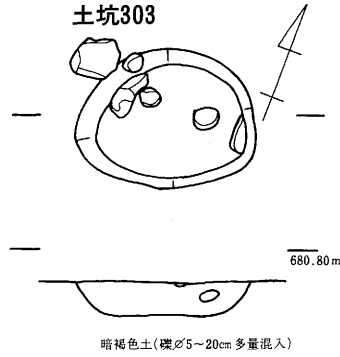
IV地区

土坑303 N3-E6に位置し、114×112cm、深さ28cmの不整円形を呈している。断面形の分類はA1である。覆土は単一層であり、覆土中に子供の頭大の礫を含んでいる。これは人為的に埋土

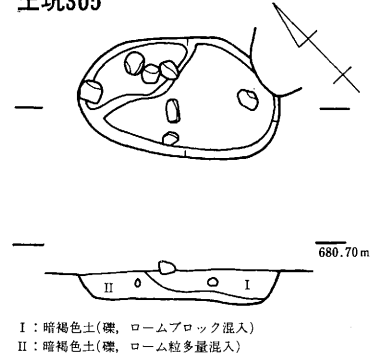
土坑302



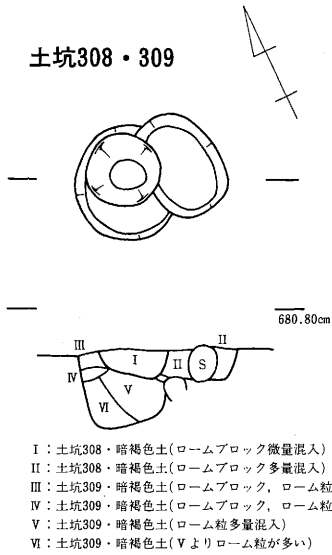
土坑303



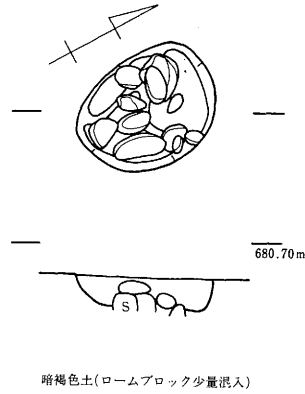
土坑305



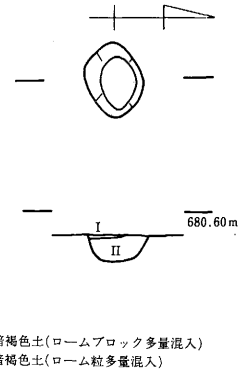
土坑308・309



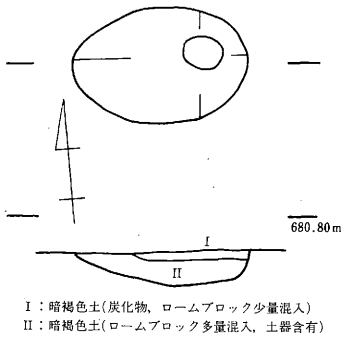
土坑311



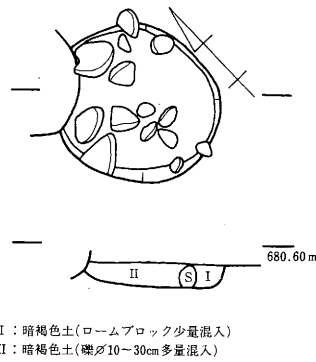
土坑313



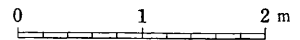
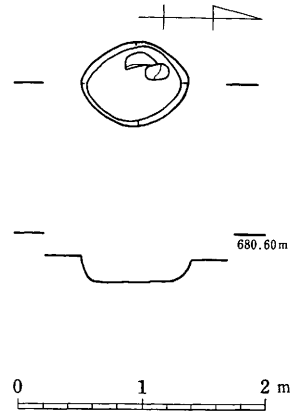
土坑316



土坑318

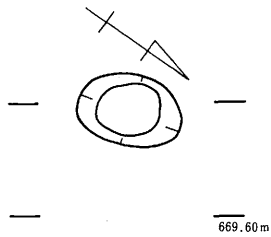


土坑321



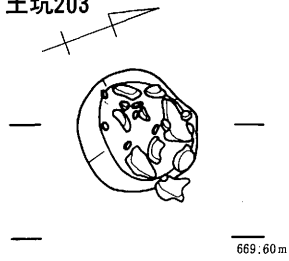
第15図 土坑(4)

土坑201



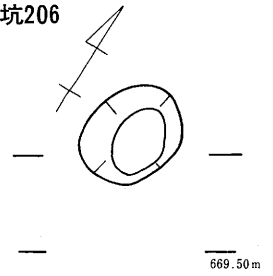
暗褐色粘質土(ロームブロック多量混入)

土坑203



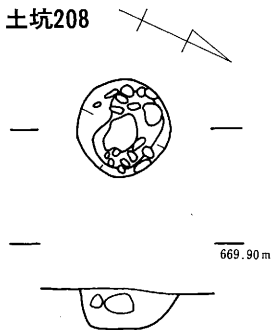
I: 暗褐色土(炭化物混入)
II: 暗褐色砂質土(ローム粒微量混入)

土坑206



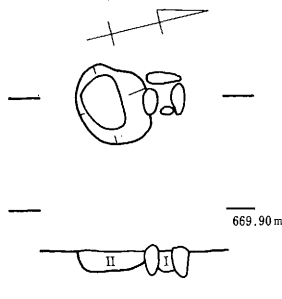
I: 暗褐色土(炭化物, ローム混入)
II: 暗褐色土(炭化物, ロームブロック混入)

土坑208



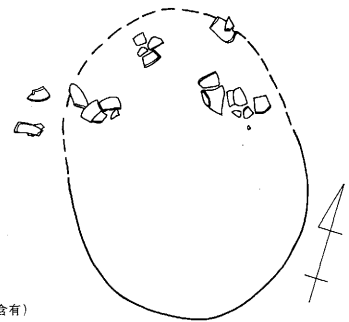
暗褐色土(礫, 3~25cm大混入)土器含有

土坑212

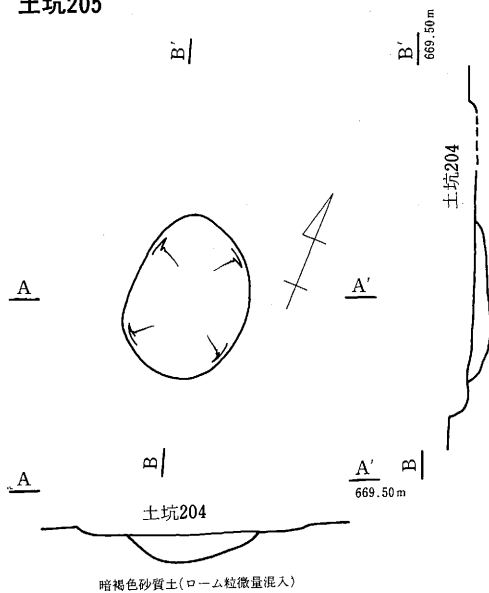


I: 炉・暗褐色土(炭化物, 土器片含有)
II: 土坑212・暗褐色土(炭化物, ローム粒混入, 土器含有)

土坑204 遺物出土

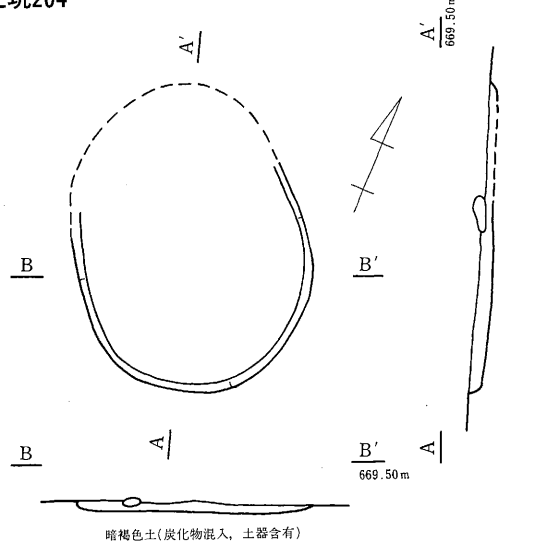


土坑205

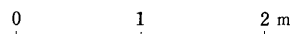


暗褐色砂質土(ローム粒微量混入)

土坑204



暗褐色土(炭化物混入, 土器含有)



第16図 土坑(5)

されたものと考えられる。遺物は縄文土器片9点(287~295)が出土している。土器片は前期末~中期初頭のものから、後期後半のものまで含んでおり、時期の確定はできない。

V地区

土坑208 N3-E6に位置し、径74cm、深さ34cmのほぼ円形を呈するものである。覆土は暗褐色土の単一層で径3cm大から人頭大の円礫が多数投棄されている。礫の出土は底面から浮いた状況を呈しており、埋土される際に一括して投棄されたものであろう。覆土中には縄文土器片7点(280~286)が出土している。これらの土器に関してはすべて前期末~中期初頭でまとまるため、土坑もこの時期に比定されるであろう。

土坑212 N6-E12に位置する。古墳羨道部の脇の黄褐色土層(地山)で検出された。縄文時代中期の石囲炉に隣接するものである。古墳築造時に削平されてしまったらしく、住居址のプランは検出されなかった。平面形は不整形円形を呈し、規模は長軸69cm、短軸65cm、深さ18cmを測る。覆土は暗茶褐色土の単一層であり、覆土中に炭化物、土器片を含んでいる。このほかに遺物も出土しなかったため炉の廃絶したものかもしれない。

ピット6 N12-E9に位置し、ピット7に切られている。規模は推定27cm、深さ24cmを測る。覆土は暗褐色を呈している。覆土中から縄文土器片(59)が出土している。

ピット10 N12-E9に位置し、土坑28を切っている。径36cm、深さ22cmのほぼ円形を呈しているものである。覆土は茶褐色土の単一層である。特にピットに伴う出土遺物が少ない中で、図示可能な龍泉窯系青磁碗が出土している。

§3 竪穴状遺構 (第21図)

1) 竪穴状遺構1

I地区北東N18-E15に位置し、一部土坑2に切られている。長軸218cm、短軸192cm、深さ22.5cmの断面皿状を呈する遺構である。覆土は暗褐色土の単一層であり覆土中には人頭大の礫が数個投棄されている。覆土に黄褐色土がブロック状に含まれ、人為的な埋土であると思われる。

遺物 すべて破片で接合できるものは少ない。縄文土器片15点(60~74)が出土している。また石器ではフレークが1点出土している。縄文土器片は前期末~中期初頭の範囲でおさえられる。よって本址の時期もそこに求められるだろう。

2) 竪穴状遺構2

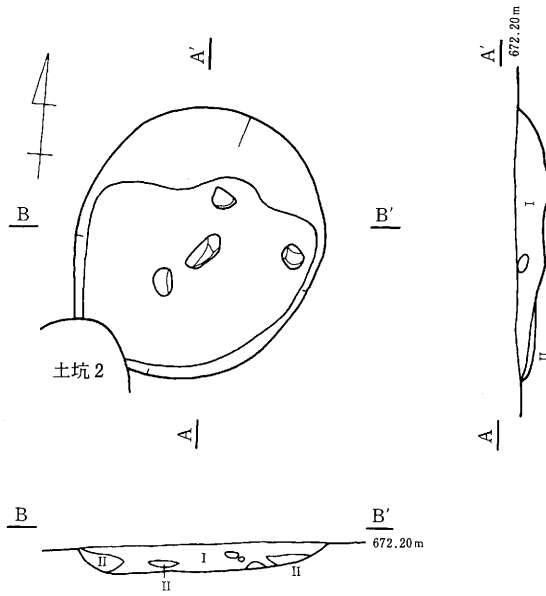
I地区北部N21-E15に位置し、遺構の北半が調査区域外のため未確認である。本址は溝2と土坑43を切っている。規模は推定で長軸4.11m、短軸2.70m、深さ90cmを測る。遺構の形状は断面摺鉢状を呈している。覆土は7層に分層される。第IV・VI・VII層には拳大から人頭大の礫を含んだ層がある。VII層には地山に噛んだ礫もあり、人為的に投棄されたものか区別のつかないものもある。本址は第VII・VI・IV層を埋めた後、自然堆積により埋まったものと思われる。

遺物 縄文土器片、石器、石製品の出土がある。土器片は30点(75~104)以上を数える。石器

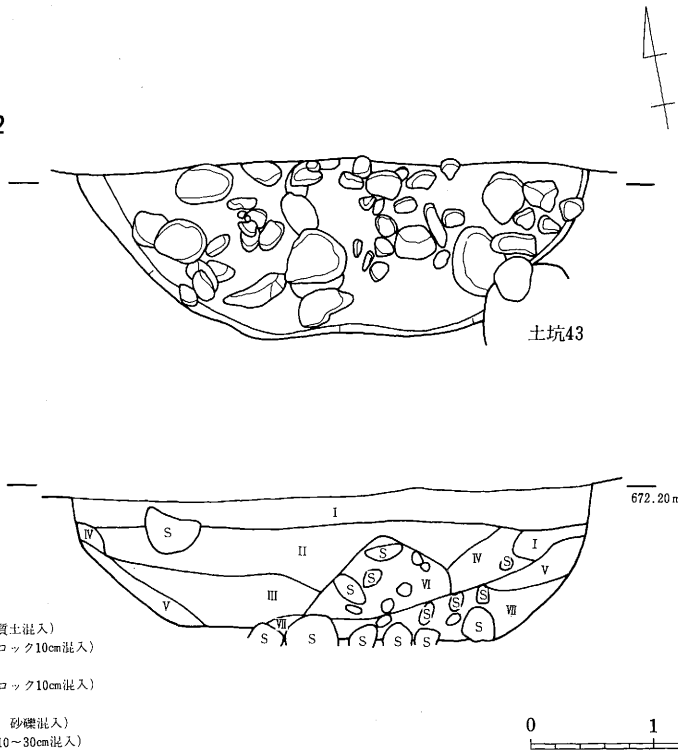
第1表 土坑一覧表

掲載図	遺構	位置	主軸	平面形	規模(長軸×短軸×深さ) cm	備考	掲載図	遺構	位置	主軸	平面形	規模(長軸×短軸×深さ) cm	備考
12	1	N18-E21	N-86° -E	円形	149×129×24			45	N6-E3	N-8° -E	楕円形	100×70×22	土坑46に切られる
12	2	N18-E15	N-76° -E	円形	99×90×64			46	N6-E3	N-0°	不整形円形	44×36×14	
	3	N15-E15	N-0°	円形	54×52×14			47	N12-E9	N-0°	円形	46×44×20	土坑25に切られる
12	4	N15-E18	N-90°	楕円形	66×39×30		13	48	N21-E12	N-58° -W	楕円形	147×129×48	
	5	N9-E9	N-90°	長方形	140×124×40			100	S3-W18	N-33° -W	不整形円形	156×126×48	
	6	N12-E9	N-60° -W	楕円形	120×104×24			101	S3-W18	N-44° -E	楕円形	132×72×34	
12	7	N9-E6	N-43° -W	楕円形	186×120×42			102	S9-W18	N-84° -W	楕円形	140×86×26	
	8	N6-E9	N-43° -W	楕円形	76×64×20			103	S9-W18	N-46° -E	楕円形	72×50×20	
	9	N6-E9	N-45° -E	楕円形	86×70×50			104	S12-W21	N-74° -E	不整形円形	130×84×42	土坑100に切られる
	10	N12-E9	N-58° -E	楕円形	46×34×24			105	N3-W15	N-86° -E	不整形円形	204?×160×60	土坑105に切られる
	11	N12-E12	N-30° -E	楕円形	72×54×14	P3に切られる		106	N3-W15	N-75° -W	不整形円形	80×68×34	
12	12	N12-E12	N-49° -W	楕円形	147×120×24		16	201	N3-E6	N-17° -W	楕円形	86×56×26	周溝を切る
12	13	N15-E18	N-0°	不整形円形	90×81×24			202	N3-E6	N-25° -E	円形	62?×60×32	
13	14	N21-E12	N-45° -E	円形	93×84×32		16	203	N3-E6	N-40° -E	不整形円形	94×80×38	
	15	N15-E15	N-76° -E	不整形円形	106×68×20		16	204	N6-E3	N-15° -W	不整形円形	236×190×16	
13	16	N9-E9	N-22° -E	円形	129×120×30		16	205	N16-E3	N-16° -W	不整形円形	140×96×(14)	土坑204に切られる
12	17	N24-E9	N-46° -E	楕円形	117×90×20		16	206	N6-E3	N-11° -E	楕円形	88×70×32	
	18	N9-E15	N-0°	不整形円形	120×90×22			207	N6-E3	N-34° -E	円形	100×92×36	
	19	N12-E18	N-40° -W	不整形円形	118×100×39		16	208	N3-E6	N-66° -E	円形	74×74×34	
	20	N12-E18	N-62° -E	楕円形	60×48×18			209	N3-E6	N-0°	不整形円形	90×80×24	
13	21	N12-E12	N-25° -E	円形	126×117×24			210	N3-E3	N-48° -E	楕円形	122×60×30	周溝を切る
	22	N12-E6	N-17° -W	楕円形	90×62×22	土坑35に切られる		211	N3-E6	N-38° -E	楕円形	102×80×22	
13	23	N12-E21	N-34° -E	不整形円形	116×99×12		16	212	N3-E6	N-77° -E	不整形円形	69×57×18	
13	24	N18-E21	N-41° -E	円形	99×90×30			301	N3-E3	N-65° -E	不整形円形	110×86×42	
	25	N12-E21	N-13° -W	円形	54×50×42		15	302	N3-E6	N-82° -W	円形	74×70×30	
13	26	N21-E15	N-14° -W	楕円形	104×66×64		15	303	N3-E6	N-64° -E	不整形円形	144×112×28	
	27	N21-E15	N-80° -W	不整形円形	62×38×20			304	N6-E3	N-63° -E	不整形円形	154×74×20	
	28	N12-E9	N-34° -E	楕円形	106×100×32	土坑6に切られる	15	305	N3-E3	N-37° -W	楕円形	164×96×30	土坑314をわずかに切る
13	29	N21-E18	N-21° -W	不整形円形	108×66×36			306	N6-E3	N-67° -E	楕円形	96×62×16	
	30	N9-E15	N-55° -E	楕円形	66×44×14			307	N3-E3	N-6° -E	不整形円形	114×104×30	
	31	N6-E9	N-90°	円形	48×46×18		15	308	N6-E3	N-15° -W	楕円形	86×60×24	土坑302に切られる
	32	N12-W3	N-0°	円形	106×100×42		15	309	N6-W3	N-21° -E	楕円形?	92×80?×64	土坑308及び320に切られる
	33	N12-W3	N-27° -W	円形	102×98×34			310	N6-E3	N-90°	不整形円形	104×72×34	
	34	N12-E9	N-57° -E	不整形円形	56×54×24		15	311	N3-W3	N-0°	不整形円形	116×90×28	
	35	N12-E6	N-25° -W	不整形円形	68×60×16			312	S6-E3	N-35° -E	不整形円形	100×88×28	
	36	N24-E12	N-72° -W	不整形円形	144×134×30		15	313	S3-W3	N-86° -E	不整形円形	60×46×22	
	37	N9-E6	N-86° -W	楕円形	44×34×20			314	N3-E6	N-78° -E	不整形円形	130?×84?×30	東側 調査区域外のため未確認
	38	N15-E15	N-0°	不整形円形	76×66×23			315	N3-E6	N-85° -W	楕円形	70?×46×42	東側 調査区域外のため未確認
13	39	N24-E6	N-70° -W	不整形円形	117×96×42		15	316	N6-E3	N-85° -W	不整形円形	140×94×28	東側隅調査区域外のため未確認
	40	N24-E9	N-5° -W	楕円形	115?×84×34	土坑17及び溝2を切る		317	S3-E3	N-34° -W	楕円形?	220?×168×34	土坑305、314、315に切られる
14	41	N21-E9	N-35° -W	不整形円形	198×138×60		15	318	N3-E3	N-24° -E	楕円形?	140?×124×20	土坑305、314、315に切られる
14	42	N6-E9	N-20° -W	不整形円形	210×168×56			319	N13-E3	N-41° -W	楕円形?	94?×68?×22	
	43	N21-E18	N-24° -W	楕円形	114×82×30			320	N6-W3	N-90°	円形	64×60×26	
	44	N12-E6	N-53° -E	楕円形	106×62×20		15	321	S3-E3	N-0°	不整形円形	86×68×13	

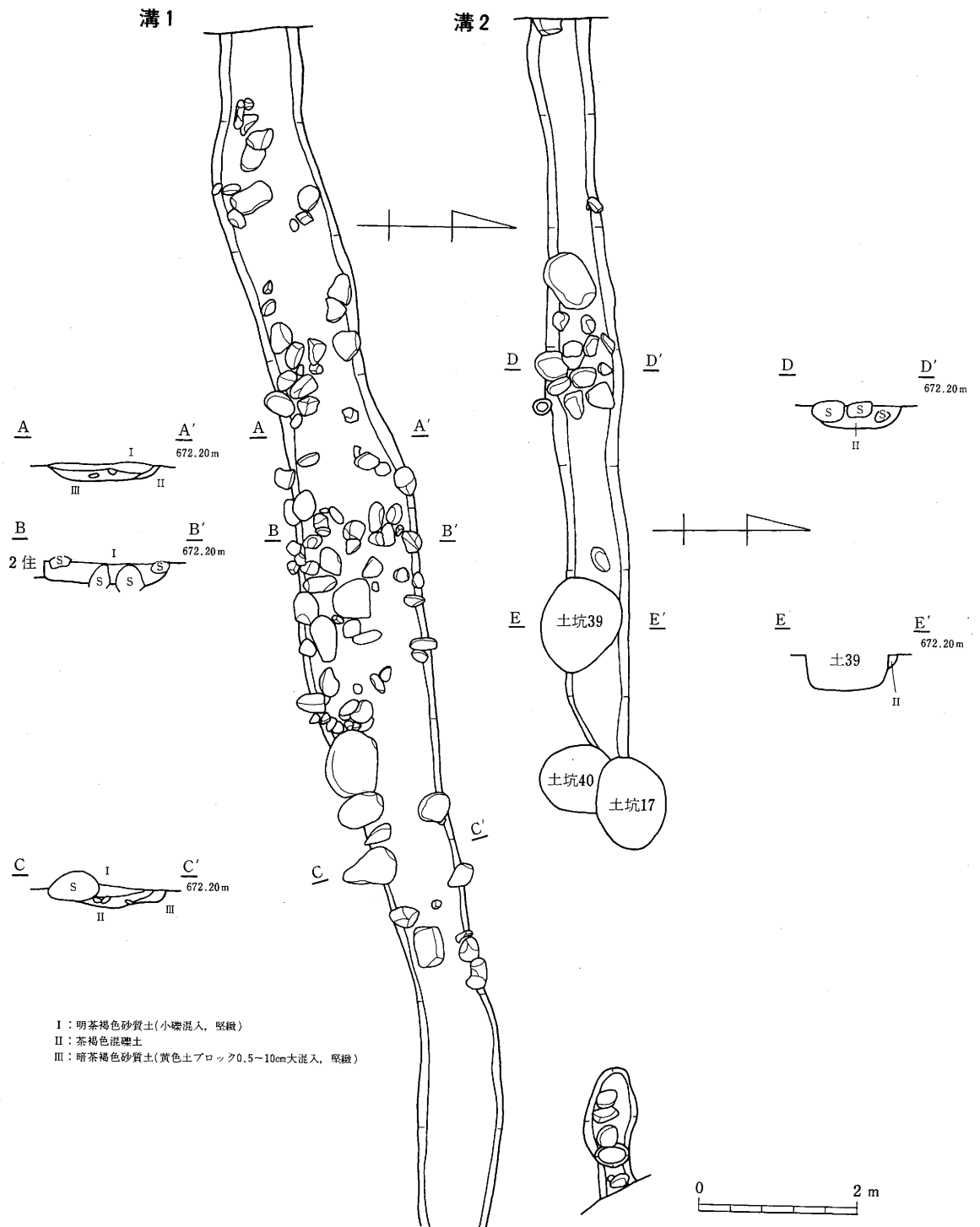
豎穴状遺構 1



豎穴状遺構 2



第17図 豎穴状遺構



第18図 溝址

は石鏃（9）、凹石（53）、フレークが出土している。また石製品ではメノウ製珧状耳飾（58）が出土している。

§4 溝址（第18図）

1) 溝1

I地区北部N15~21、E15~W3に位置し、第2号住居址を切っている。東から西へ緩やかに傾斜し、調査区外へ延びていく。本址の確認された長さは7.6m、最大幅0.8m、深さ0.16mを測り、断面皿状を呈する。覆土は3層に分層され、第II層中には拳大からひと抱えもある礫を含んでいる。中には地山に噛んでいるものもあり、投棄されたものか不明のものもある。遺物は、土器皿28点、白磁碗2点、龍泉窯系青磁碗5点、こね鉢1点、常滑甕1点、石鍋1点、青白磁合子1点、石鏃（12~15）、打製石斧（45）、砥石（55）が出土している。石鏃、打製石斧は混入と考えられ、時代はその他の遺物より12~13世紀に比定される。

2) 溝2

I地区N21~24、E12~W3に位置する。土坑39、40、41に切られ、さらに東端は竪穴状遺構2に切られている。本来は一連の溝であったと思われるが、複数の土坑が切り合っているため、連続関係はつかめなかった。規模は推定で長さ7.6m、最大幅0.5m、深さ0.18mを測る。本址も溝1同様に東から西へ傾斜している。いずれも自然地形を考慮したものと思われる。覆土中には一部分にまとまって礫が投棄されている。

遺物は土器皿18点、山茶碗1点、こね鉢2点、石鏃（16）、打製石斧（46）が出土している。

3. 遺物

§1. 土器、土製品、陶器

1) 縄文時代の土器（第19図~第31図）

今回の発掘調査では、縄文時代前期後半~末の土器を主体として、早期後半、早期末~前期初頭、中期、後期の土器群が出土した。これらは、土坑、遺構外からの出土で、I~V地区とも層位的にとらえられるものではなく、同一包含層の中に混在していた。

出土土器で、完形及び完形に近いものはなく、すべて破片であった。ここでは土器群の型式がもつ文様及び特徴的な土器の様相を含めて分類してみた。

第1群土器 早期後半の土器（1・105）

胎土に繊維を含み、条痕文が施される土器群である。1は胴部中半部片で条痕文上に沈線により区画文が施文されている。105は、胴下半部片で内外に貝殻と思われる条痕が施されている。これらは鶺鴒ヶ島台式期に併行する一群であろう。I地区で出土している。

第2群土器 早期末~前期初頭の土器（2・4・7・8・15~17・22・106）

胎土に繊維を含み、表面に縄文が施された土器群で、すべて胴部片である。ほとんどが単節の縄

文であるが、16は、異節縄文で内面に細かな条痕が残る。I地区で出土している。

第3群土器 前期後半の土器（3・10～13・19～21・26・41・47・58・59・75・76・90・98・99・108～148）

I地区で数多く出土した一群である。この土器群は諸磯C式併行期（八ヶ岳西南麓地区（井戸尻）の編年で日向I・II式期、諏訪湖周辺地区編年で下島式・下島直後型式期）にあたる一群である。この土器群は、諸磯式併行期でも新しい様相をもつものが多く、同じくI地区で数多く出土している第4群土器と共存していた可能性も考えられる。

地文が半截竹管による集合沈線文・竹管文・平行沈線文等が主体で、結節状沈線文、結節状浮線文、ボタン状貼付文が組合わさり施文されているもの、集合沈線文のみのも等が見られ、渦巻状や直線や曲線の幾何学的なモチーフのものが多い。ただし、破片が主体であるので同一個体で分かれてしまったものがある可能性もありうる。以下文様の組み合わせを示す。

- | | |
|--|---|
| 1. 集合沈線文+結節状沈線文—12・19・116 | 4. 集合沈線文+結節状浮線文+ボタン状貼付文—113 |
| 2. 集合沈線文+結節状浮線文—10・21・99・134～137・139～148 | 5. 集合沈線文+ボタン状貼付文—20・47・58・59・76・108～112 |
| 3. 集合沈線文+結節状沈線文+ボタン状貼付文—114・115 | 6. 集合沈線文—3・11・13・19・26・41・75・98・117～133・138 |

結節状浮線文には、半截竹管を押し引いたもの（a）とへらで切るもの（b）の2種類が見られる。2 a—10・99・134～139・142～146・148 2 b—140・141・147 4 a—113

第4群土器 前期末の土器（5・9・27・29・31・32・34・36・40・45・46・48・84・87～89・91～94・97・100・149～166・176・210・211・212～219〈以上I地区〉・316〈IV地区〉）

第3群土器と同じく、I地区で数多く出土した一群である。この土器群は十三菩提式併行期（八ヶ岳西南麓地区編年で日向II式期の新しい段階～籠畑式期、諏訪湖周辺編年で晴ヶ峰式期）にあたる一群である。この土器群は、比較的時期的な時間幅が短かったようにも思われ、第3群、第5群が共存していた可能性も考えられる。

地文が縄文によるものと沈線文・竹管文・平行沈線文等を主体とするもの、粘土紐及び隆帯貼付（基本的には無文に入ると思われる。）に大別される。そして、粘土紐貼付文、結節状浮線文などを組み合わせ施文しているものが見られる。モチーフは直線、曲線の幾何学的な文様や格子目状に粘土紐を貼付するものが見られる。器形ははっきりとしないが口縁部が開くもの、キャリパー型（特に縄文地文のものに多いと思われる。）が主体的である。この一群においても、破片が主体であり、同一個体で分かれてしまっている可能性をもつものがある。以下文様の組み合わせを示す。

- | | |
|--|---|
| 1. 縄文+粘土紐貼付文—9・32・36・84・87～89・91・155
～159・161・162・276 | 8. 沈線文+押圧隆帯文・隆帯文—215・216・219 |
| 2. 縄文+粘土紐貼付文+結節状浮線文—48・151～153 | 9. 沈線文+結節状沈線文—163～166 |
| 3. 縄文+結節状浮線文—92・94・154・314 | 10. 結節状浮線文—100 |
| 4. 縄文+結節状浮線文+鋸歯状文・刺突文—93 | 11. 結節状沈線文—45・76 |
| 5. 縄文+押圧隆帯文—213・214 | 12. 粘土紐貼付文（押圧隆帯文と組み合うものもある）
—160・212 |
| 6. 沈線+粘土紐貼付文—31・149・218 | 13. 沈線文—5・34・40・46・97・217 |
| 7. 沈線文+結節状浮線文—150 | 14. 刺突文—27 |

第5群土器（7・15・17・18・23・24・30・49・77・78・79～83・85・86・224・227～243）

I地区で出土した縄文地文の土器群である。ただ、この類においては、この第3・4群の土器と共伴ないし、それらの土器の胎土等と比較し、この類としたので他の群のものも入ってしまっている可能性は高い。

大まかに器壁が薄いものと厚いものとに分けられる。縄文は単節のものが主流である。49・224はキャリパー型の器形からみて、第4群に属するものであろう。23・24・30・224は、口縁端部に粘土帯を付け加えるが、外側に折り返して厚くしているのが特徴的な土器である。おそらくこれらのもも30の器形から見て、第4群の時期に属するものと考えられ、今後この時期における縄文のみ施文の土器の形としてとらえられるものと思われる。

第6群土器 前期末～中期初期の土器（6・25・33・35・37～39・42～44・50～57・60～74・95・96・101～104・167～175・177～205・207～209・221～223・225・226〈以上I地区〉、277・280～290・292・296・297・299～301・305〈以上IV地区〉、311～314・323～325・327・328～330・331〈以上V地区〉、322・334・379〈以上III地区〉）

I地区で数多く、III・IV・V地区においてもある程度出土した土器群である。この土器群は、十三菩提式期の新しい時期～五領ヶ台I式併行期の古い段階（八ヶ岳西南麓編年籠畑I式期の新しい段階～籠畑II式期、諏訪湖周辺編年踊場式、梨久保式期の古い段階）にあたる。I地区におけるこの土器群は、五領ヶ台I式併行期でも古い様相を示すものが多く第3群と共存していた可能性も考えられる。また、IV地区出土の一部、V地区出土のものはこの群の中でも新しい傾向にあるように思われ、これらは、第5群との共存も考えられる。

地文は、半截竹管等を中心とした竹管文（沈線文・平行沈線文等と縄文の2種類に大きく分けられ、竹管を使用した沈線・結節状隆帯等を組み合わせ施文されている。沈線は半隆起線となるものも見られる。モチーフは縦・横・斜行・格子目状の直線のものも多く、幾何学的な区画文をもつものも見られる。また区画文の周囲を削り取り、くぼませたものもある。縄文では結節縄文が施文され、北陸地方の影響と思われる木目状燃糸文も見られる。この一群においても、破片が主体であり、同一個体で分れてしまっている可能性をもつものがある。以下、文様の組み合わせを示す。

1. 縄文+沈線文—60・203～205・207～209・324
2. 縄文+沈線文+結節状隆帯文—322
3. 縄文+竹管文+連続刺突文—74
4. 沈線文+結節状隆帯文—50・68・69・168・173・292・296・297・325・327・331
5. 沈線文+鋸歯状文・連続刺突文（三角状文・三叉状文）—51・172・220・317
6. 沈線文+集合結節状隆帯文—334
7. 沈線文+隆帯文—330
8. 沈線文（区画文）—54・101
9. 縄文—25・55・56・225・226・281～284・289・290・305・311
10. 沈線文—6・33・35・37～39・42～44・52・53・57・61～67・70～73・95・96・102～104・167・169～171・174・175・177～199・201・202・221・222・277・280・285～288・299～301・312～314・323・329・379
11. 木目状燃糸文—223

第7群土器 縄文時代中期初頭の土器（200・244～247・252・253〈以上I地区〉、270～272〈以上II地区〉、278・337〈以上IV地区〉、315・318～321・326・332・333・335・336・341・343・345・

346・350・353・354・357・377・378 <以上V地区>

V地区の古墳石室、周溝内及び周辺から数多く出土し、I～IV地区においても多少ながら出土した土器群である。この土器群は、五領ヶ台I式～II式併行期（八ヶ岳西南麓地区編年九兵衛尾根I・II式期、諏訪湖周辺地区編年梨久保式期）にあたる。この土器群は、五領ヶ台I式～II式併行期（九兵衛尾根I式期、梨久保式期中段階）にあたる一群（第1類）と五領ヶ台II式併行期（九兵衛尾根II式期、梨久保式期新段階）にあたる一群（第2類）に分けられる。そして、一部両者が共存していた可能性も考えられ、また、第1類は、第6群土器の一部と共存していた可能性も考えられる。

第1類土器（200・252・253・270・271・278・315・318～321・326・332・333・335～337・341・357・378）

地文が半截竹管、丸竹管（棒状工具の可能性もある）を中心とした沈線文（基本的には無文）のものと縄文のもの2種類に大別される。沈線文（特に平行沈線文）は第6類のものに比べて浅く施文される傾向が強く、連続する刺突文、交互刺突文、隆帯等を組み合わせ施文している。モチーフは、縦、横の直線の組み合わせ、曲線的なもの、渦巻状のものなどが見られる。深鉢が主体であるが336・337のように浅鉢もこの一群においても、破片が主体であるので、同一個体で分れてしまった可能性をもつものもある。以下、文様の組み合わせを示す。

- | | |
|--|--------------------------|
| 1. 沈線+連続刺突文+交互刺突文—278・332・378 | 6. 縄文+沈線+隆帯—357 |
| 2. 沈線+連続刺突文+隆帯—319・337・341 | 7. 沈線—200・270・335 |
| 3. 沈線+連続刺突文+隆帯+結節状沈線—315 | 8. 結節状沈線（押し引き沈線）+刺突文—337 |
| 4. 連続刺突文+結節状隆帯—326 | 9. 結節状沈線（押し引き沈線）—336 |
| 5. 縄文+沈線+連続刺突文—252・253・271・318・320
・321 | |

第2類土器（244～247・272・343・350・354・377）

地文が縄文・捺糸文のものと沈線文のもの2種類に大別される。縄文地文のものには沈線文が組み合わさっているケースが多い土器群である。

第8群土器 中期前半の土器（245・248～251・254～256 <以上I地区>、334・344・351・352 <以上3地区>、349・373 <以上IV地区>、338・340・342・345～348・355・356 <以上V地区>）

隆帯で区画文や幾何学状、抽象的な文様を貼付し、その周囲にく字状やキャタピラ状の結節状沈線文（押し引き沈線文）を施す土器を中心とした一群である。新道式併行期（1類—245・256・306・342・345～348）と藤内I式併行期（2類—248～251・254・255・338～340・344・349・351・352・355・356・373）に分かれる。

第9群土器 中期後半の土器（14・28・257・259～267 <以上I地区>、273 <II地区>、361～363・365～367 <以上III地区>、294・298・302～304・308・309・360・368 <以上IV地区>、359・364 <以上V地区>）

1類、14・364・365は曾利I式併行期、2類 263・359・361・366は曾利II式併行期、3類

28・257・259～262・264・265・294・298・304・308・309・360・362・366～368は曾利Ⅲ～Ⅳ式併行期、4類 266・267・302・303は曾利Ⅴ式併行期の土器である。これらの土器群は、地元分布する沈線文を地文とする唐草文系土器と縄文が地文となる関東地方の加曾利Ⅴ式系に分けられ、28・259・266・303・304が加曾利Ⅴ式系の他は、唐草文系土器である。

第10群土器 後期前半の土器 (258・268 <以上Ⅰ地区>、274・275 <以上Ⅱ地区>、293・295・309・369・375・376・380 <以上Ⅳ地区>、370～372 <以上Ⅴ地区>)

沈線文、縄文が組み合わさった土器群で、275・370・371のように、櫛歯状工具や半截竹管を使用した沈線文も見られる。ほとんどが深鉢であるが、269は鉢形の土器の口縁部、295・376は注口土器の胴上半部片である。この一群は堀之内式併行期にあたる。

第11群土器 後期後半の土器 (276・381・374 <以上Ⅲ地区>、279・291 <以上Ⅳ地区>)

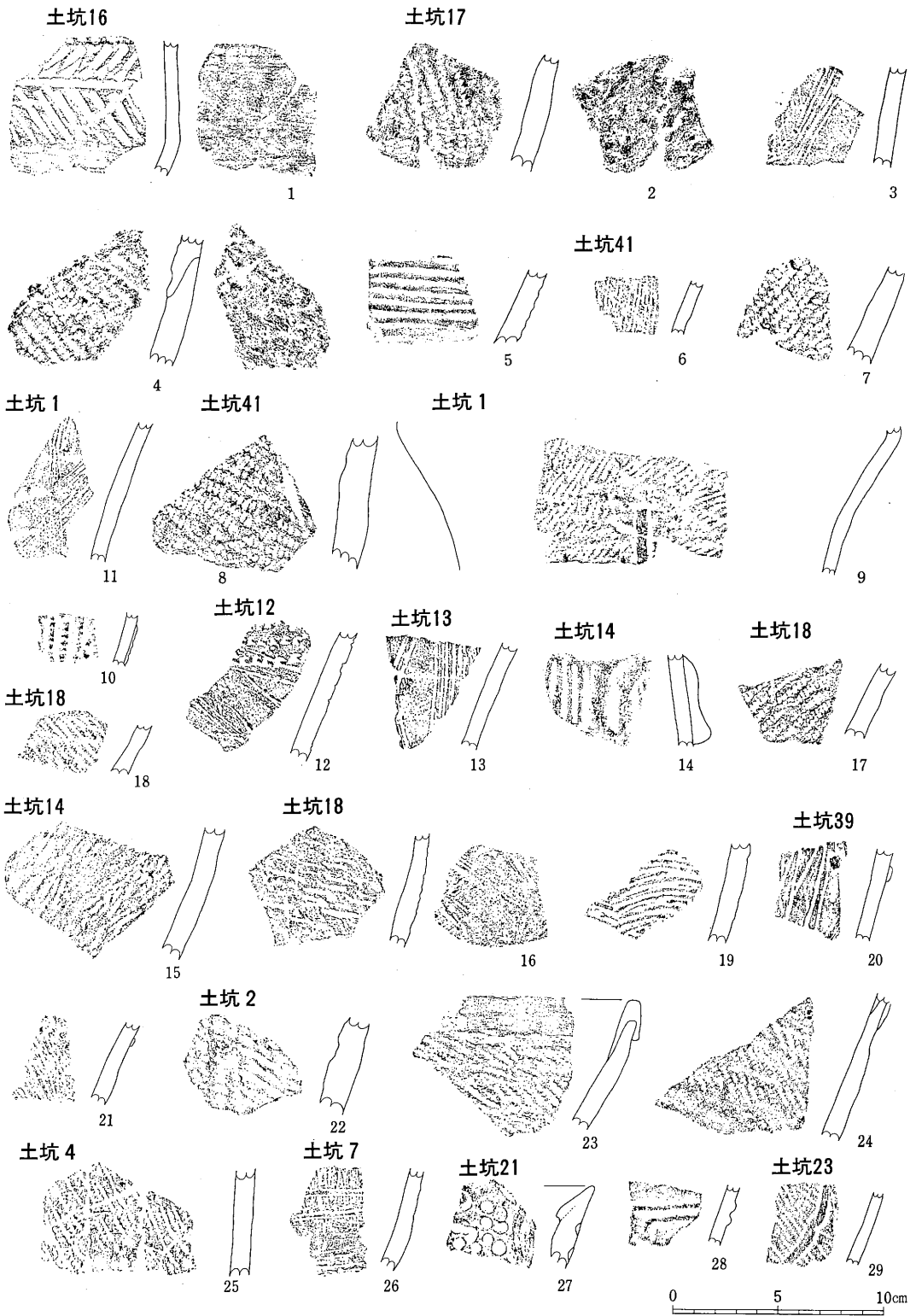
加曾利ⅤⅠ式併行期の土器群である。381は粗製の深鉢で一部に沈線文が見られる。276・279・374は精製の深鉢で沈線文、磨り消し縄文等で施文している。295は浅鉢口縁部片で隆線文、沈線文を使用し外面に渦巻、内面に波状のモチーフで加飾している。

2) 土製品 (第31図)

今回の調査では、表面採集によるものを含めて、土偶1点、土製円盤3点が出土している。

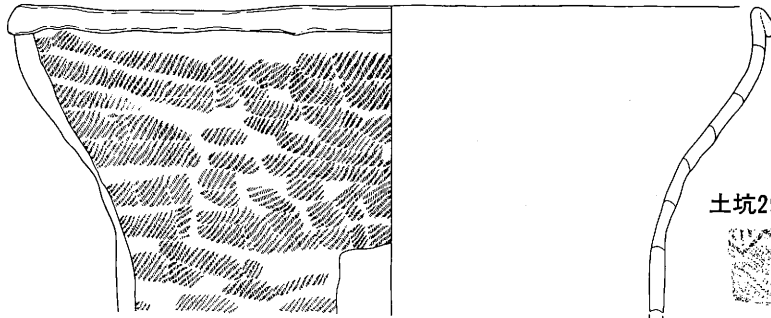
土偶 Ⅰ地区付近で地元の中学生宮田貴史君により表面採集された。胴部下半の破片で、遺存部は高さ3.69cm、幅3.12cm、厚さ1.22cm、重さは13.35gである。正面の上部を大きく欠き、下端は脚との接合部が剥がれるように欠損している。表面は滑らかに仕上げられているが、わずかに荒れている。腹部の中央にはへソ部分の突起が貼り付けられていたと思われるが剥落している。文様は棒状工具による沈線で背中には2本の沈線で尻部が表現されている。胴の中央部には、胴部と脚部を接合する芯が入っていた穴が2本貫通している。穴の直径は約2.5mmで、やや斜めに通っている。他にもう1本頭部と接合するのに用いられていたと思われる穴が上半部にあるが、こちらは貫通していない。尻の部分には、わずかに粘土を貼り付けて整形したあとが見られる。胎土には砂の細粒が、わずかに含まれ、焼成は良好である。この土偶は形態等より縄文時代中期後葉の有脚出尻土偶と推定される。この種の土偶としては、非常に小型であり、類例のないものである。しかしその製作技法は大型の土偶と同じであり、大変興味深い資料である。

土製円盤 3点のうち、2点を図示した。2は第3号住居址、3は竪穴状遺構2の覆土より出土した。2点とも全周を使用している。2は時期不明、3は縄文時代前期末のものである。他の1点は第28図320の土器で、Ⅴ地区の検出面より出土した。側縁の一部をわずかに使用している。



第19图 繩文土器(1)

土坑26



0 5 10cm

土坑29



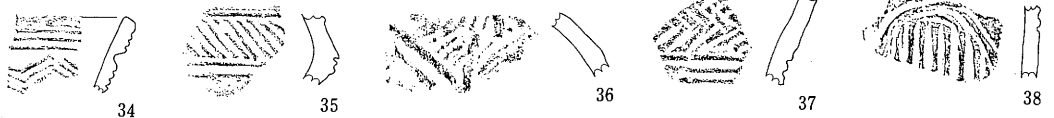
31



30

32

33



34

35

36

37

38



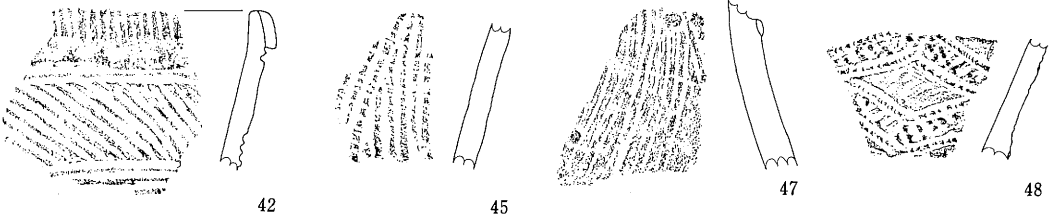
39

40

41

43

44

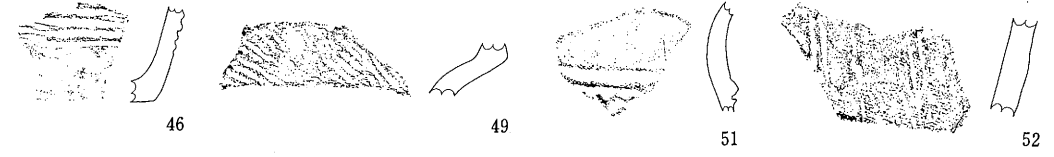


42

45

47

48

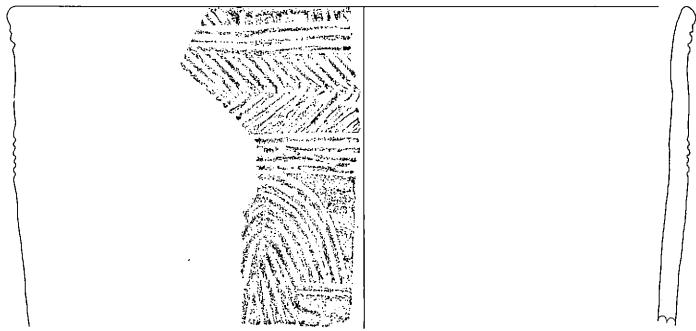


46

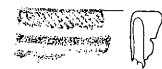
49

51

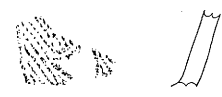
52



土坑4



53

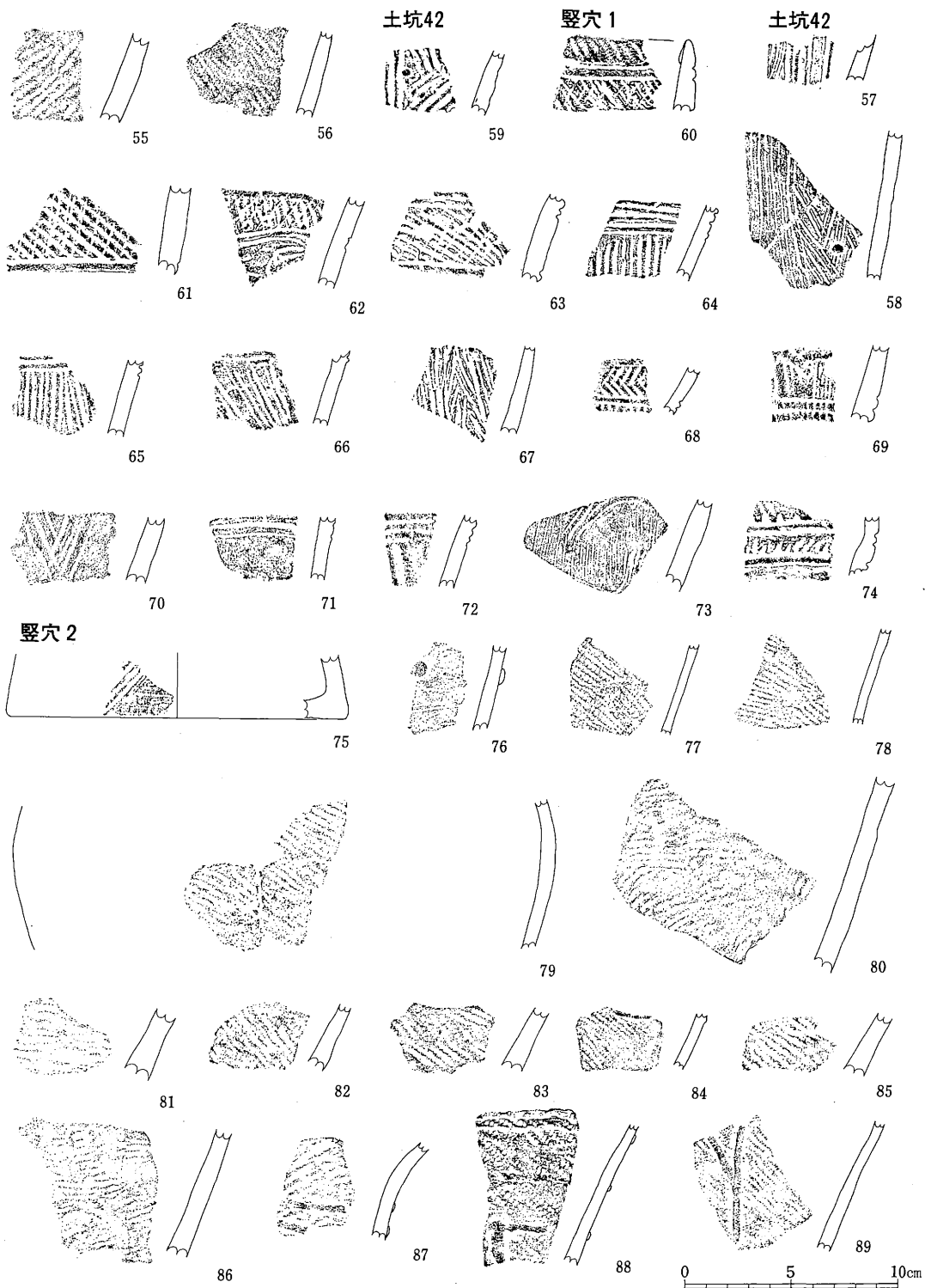


54

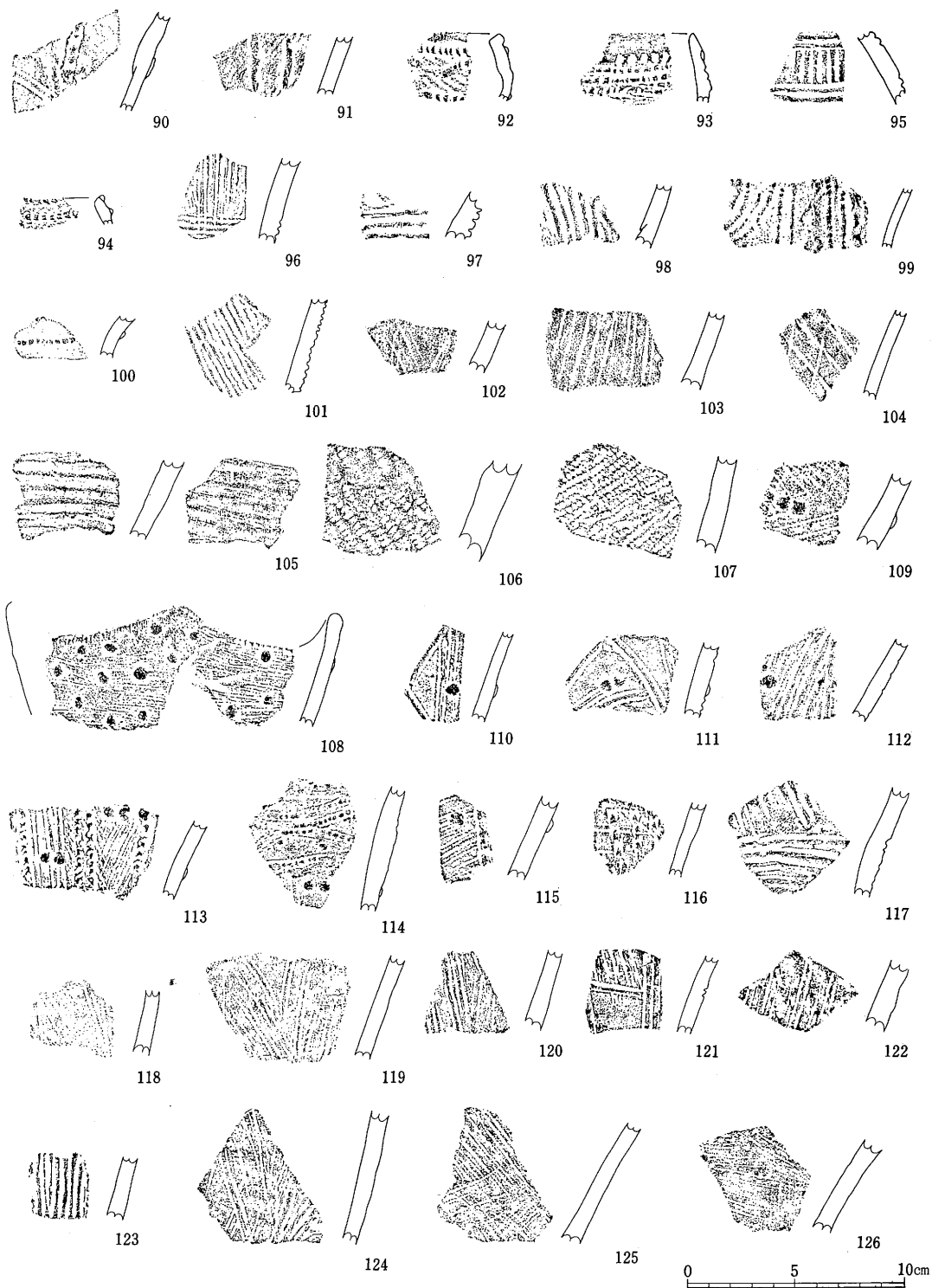
50

0 5 10cm

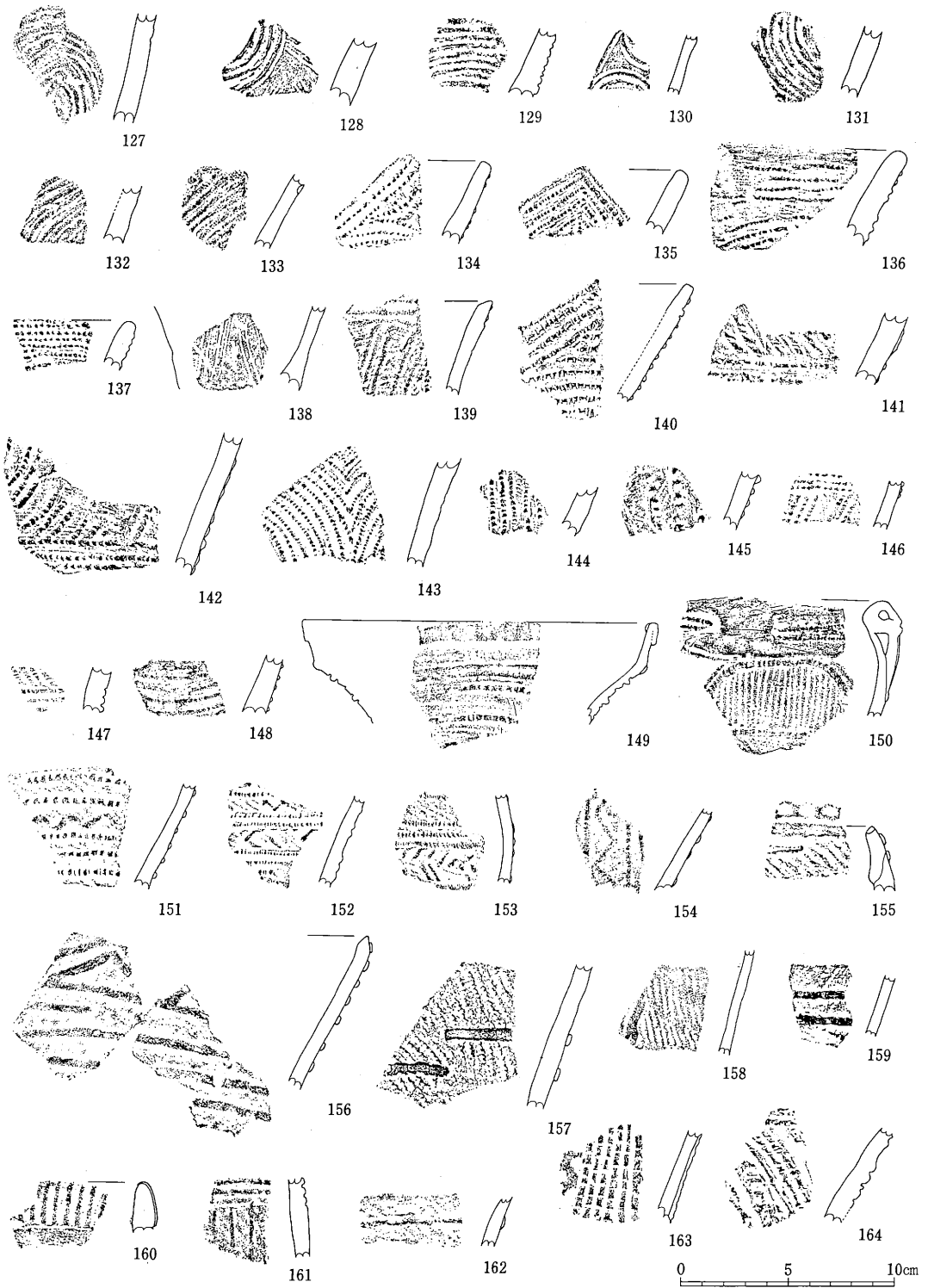
第20図 縄文土器(2)



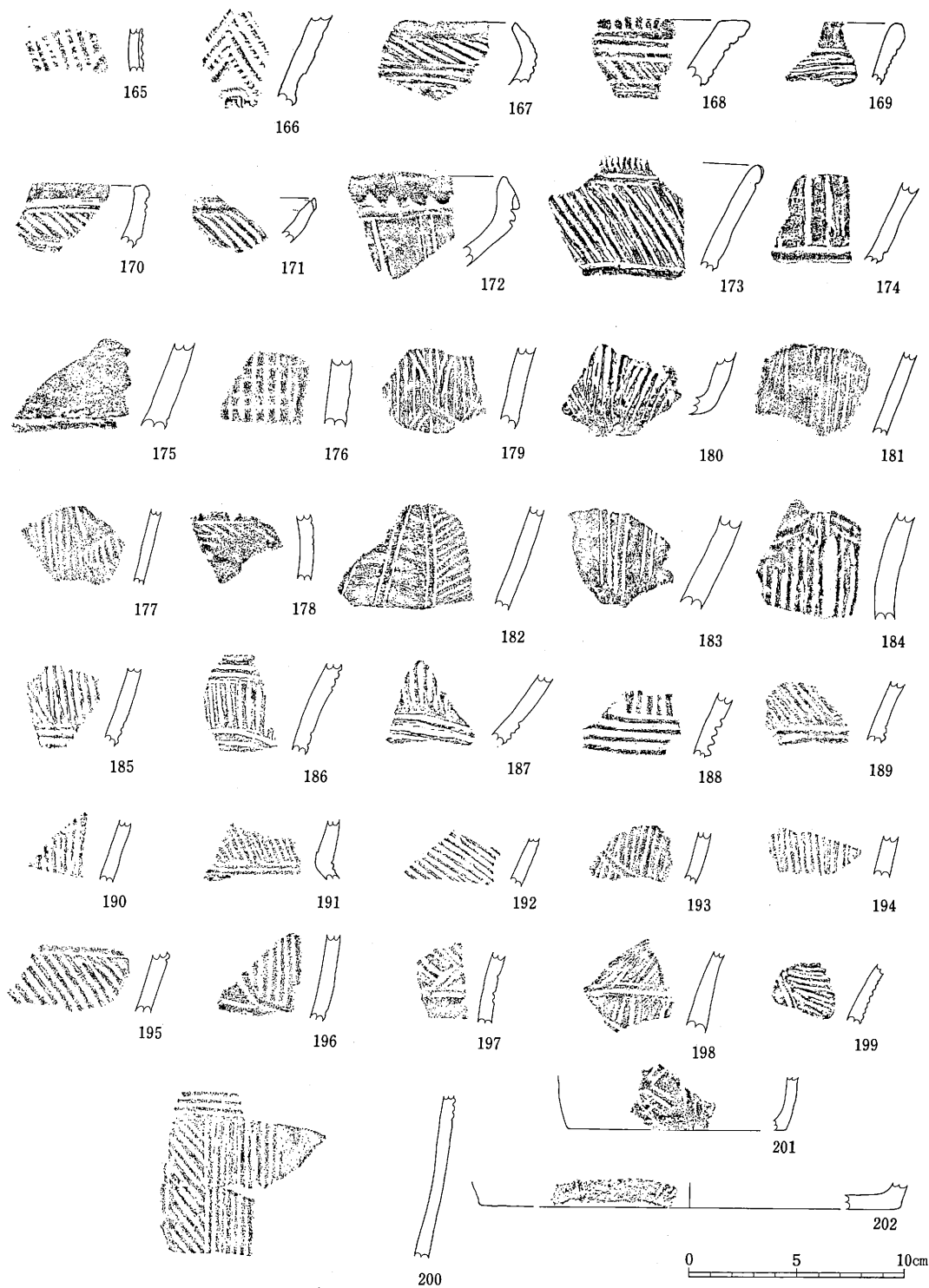
第21图 縄文土器(3)



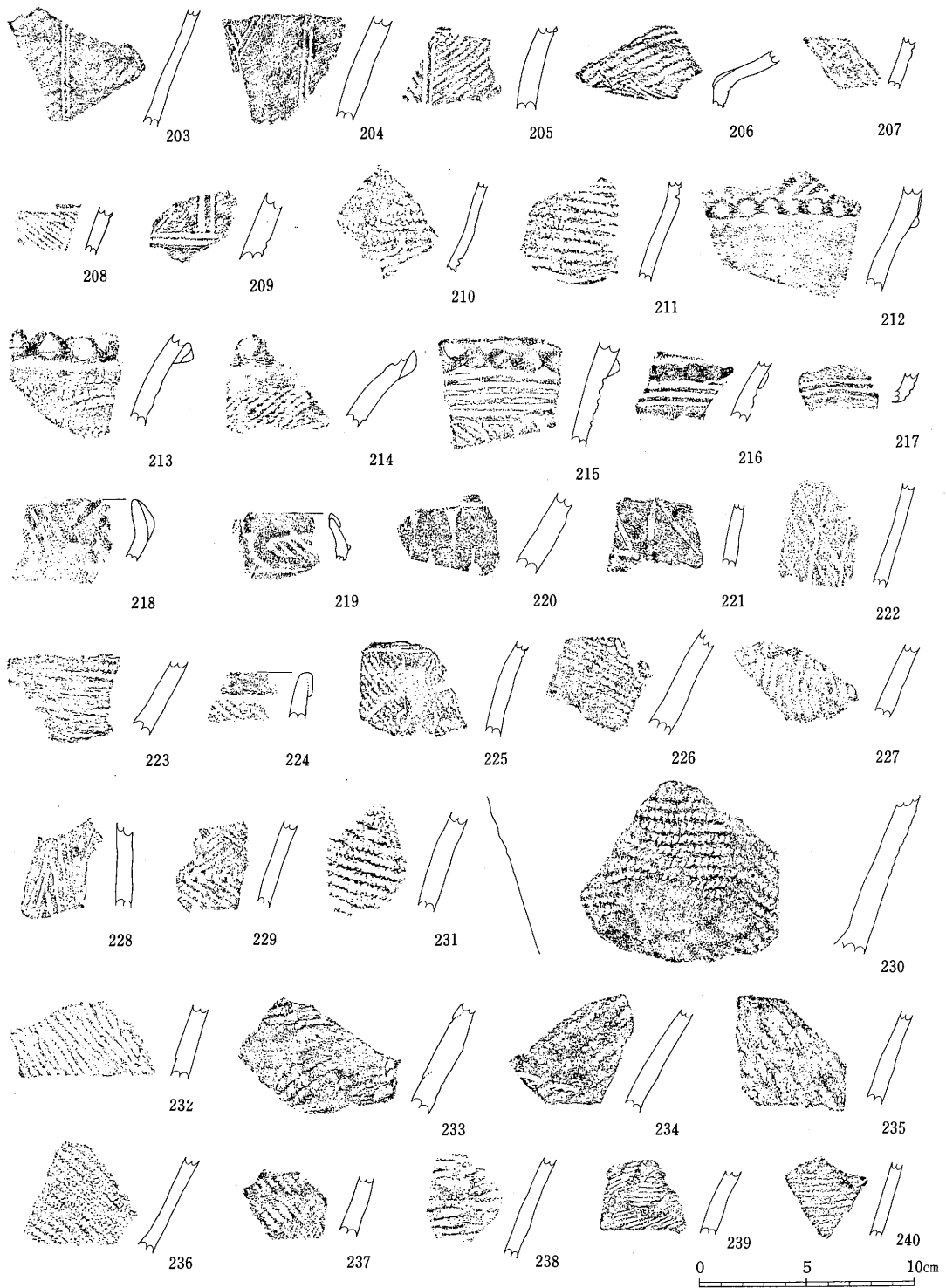
第22図 縄文土器(4)



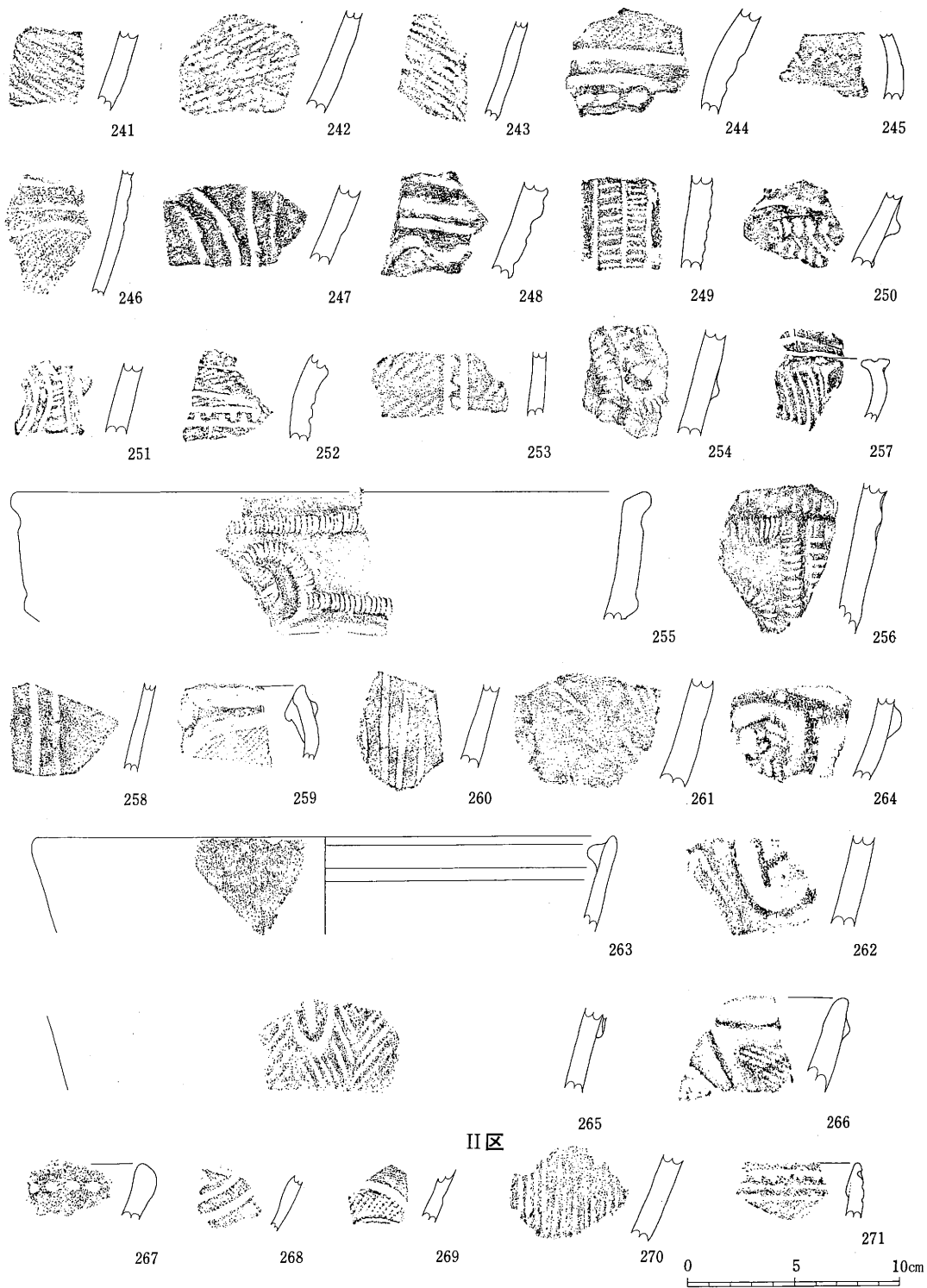
第23図 縄文土器(5)



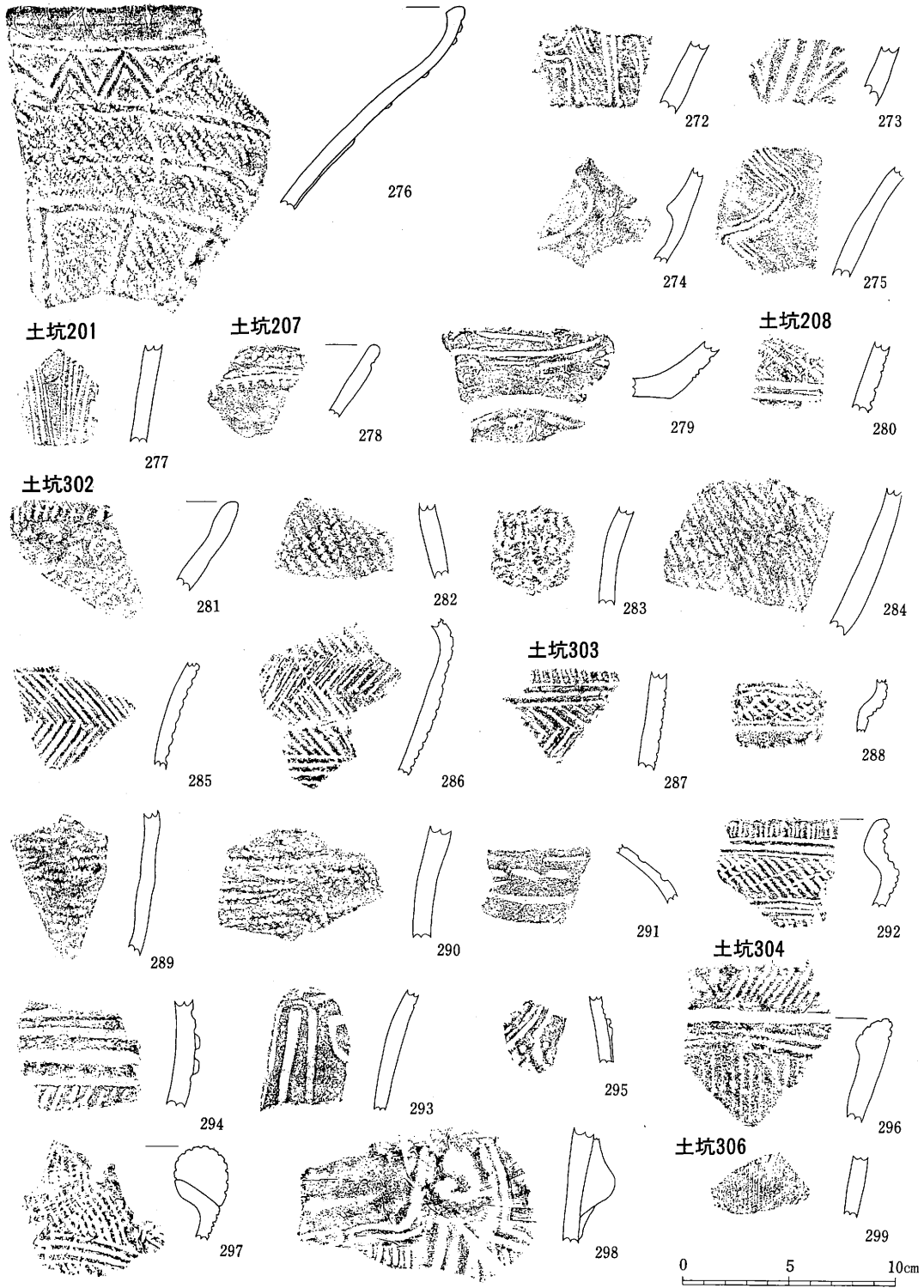
第24図 縄文土器(6)



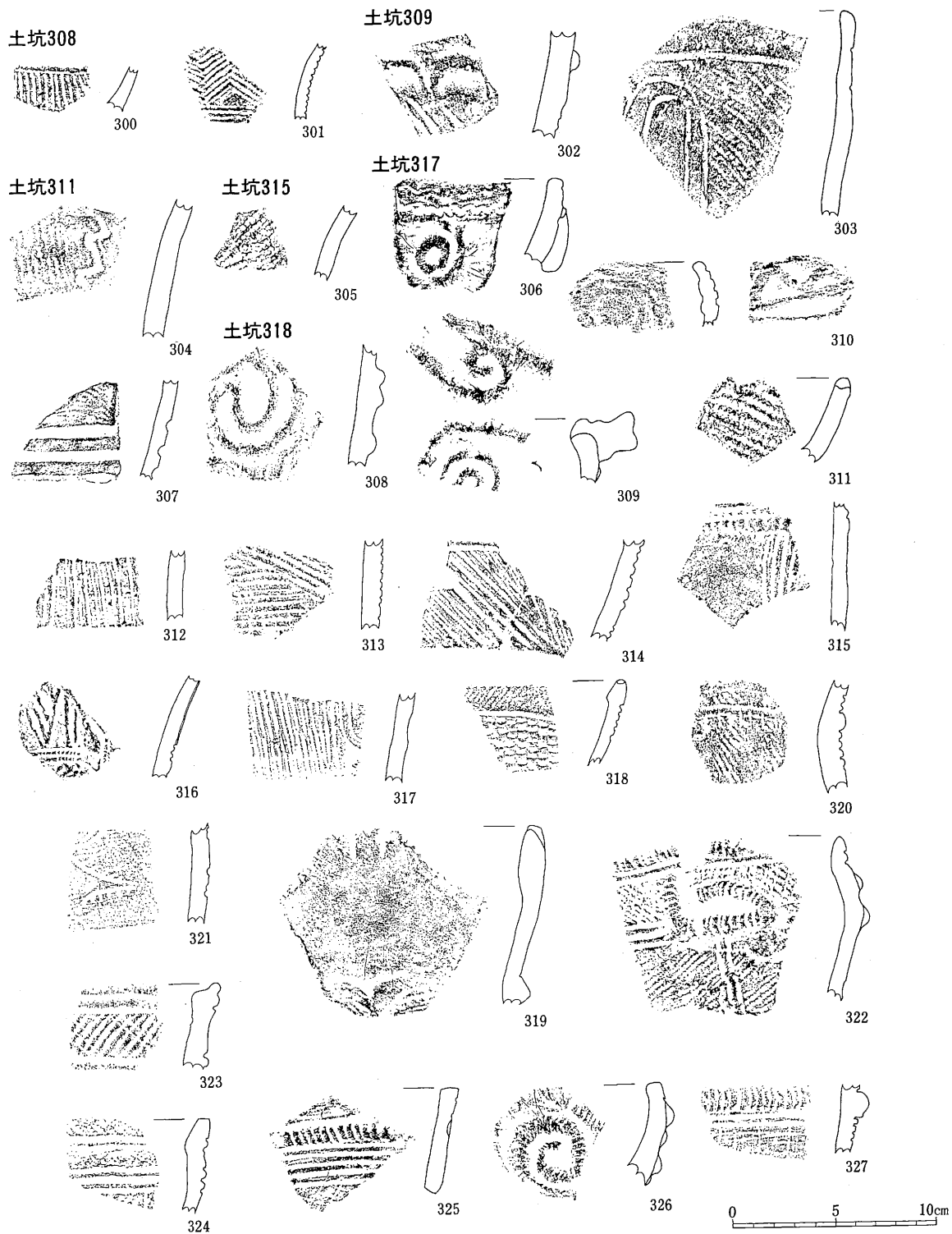
第25図 縄文土器(7)



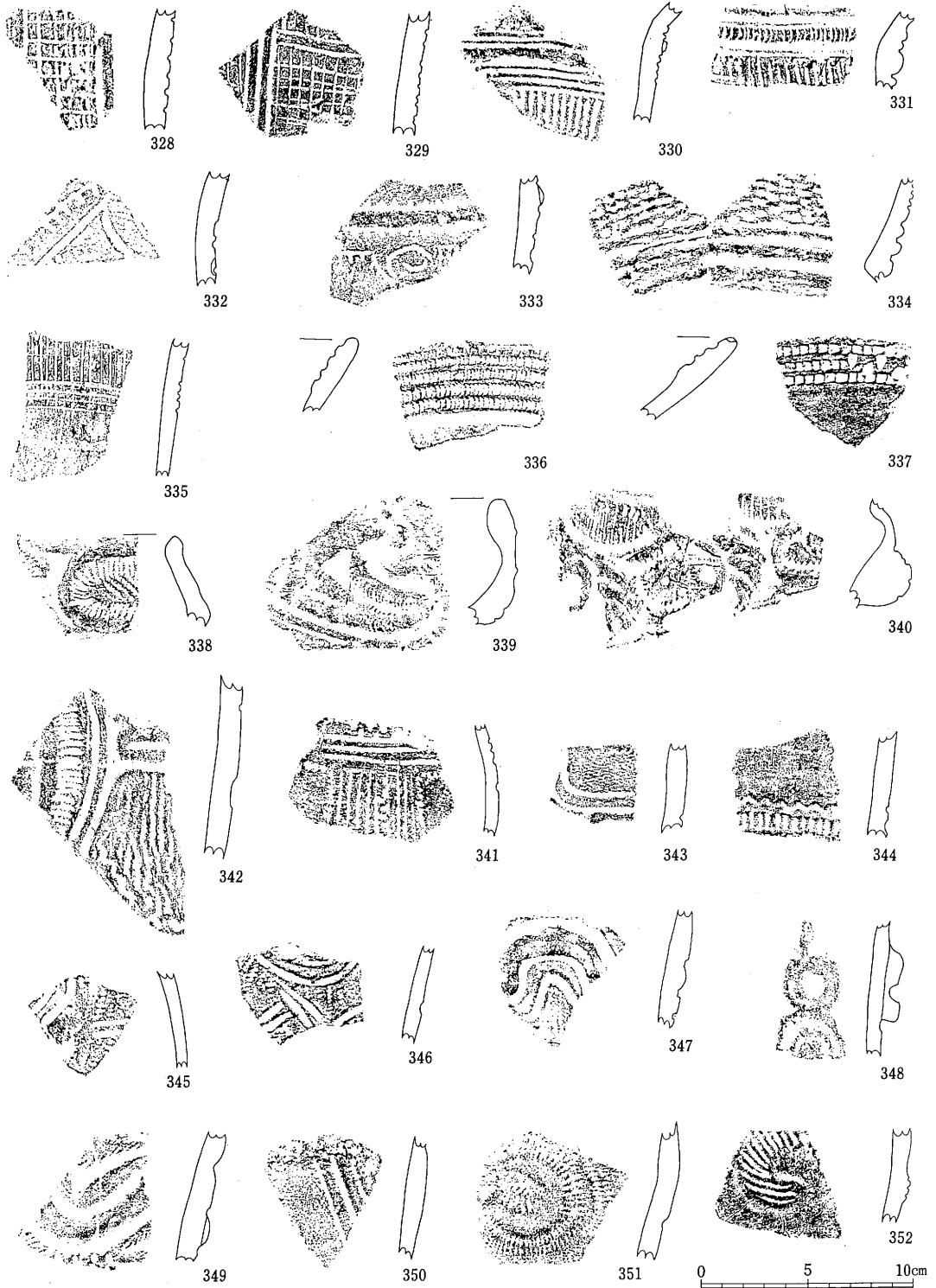
第26図 縄文土器(8)



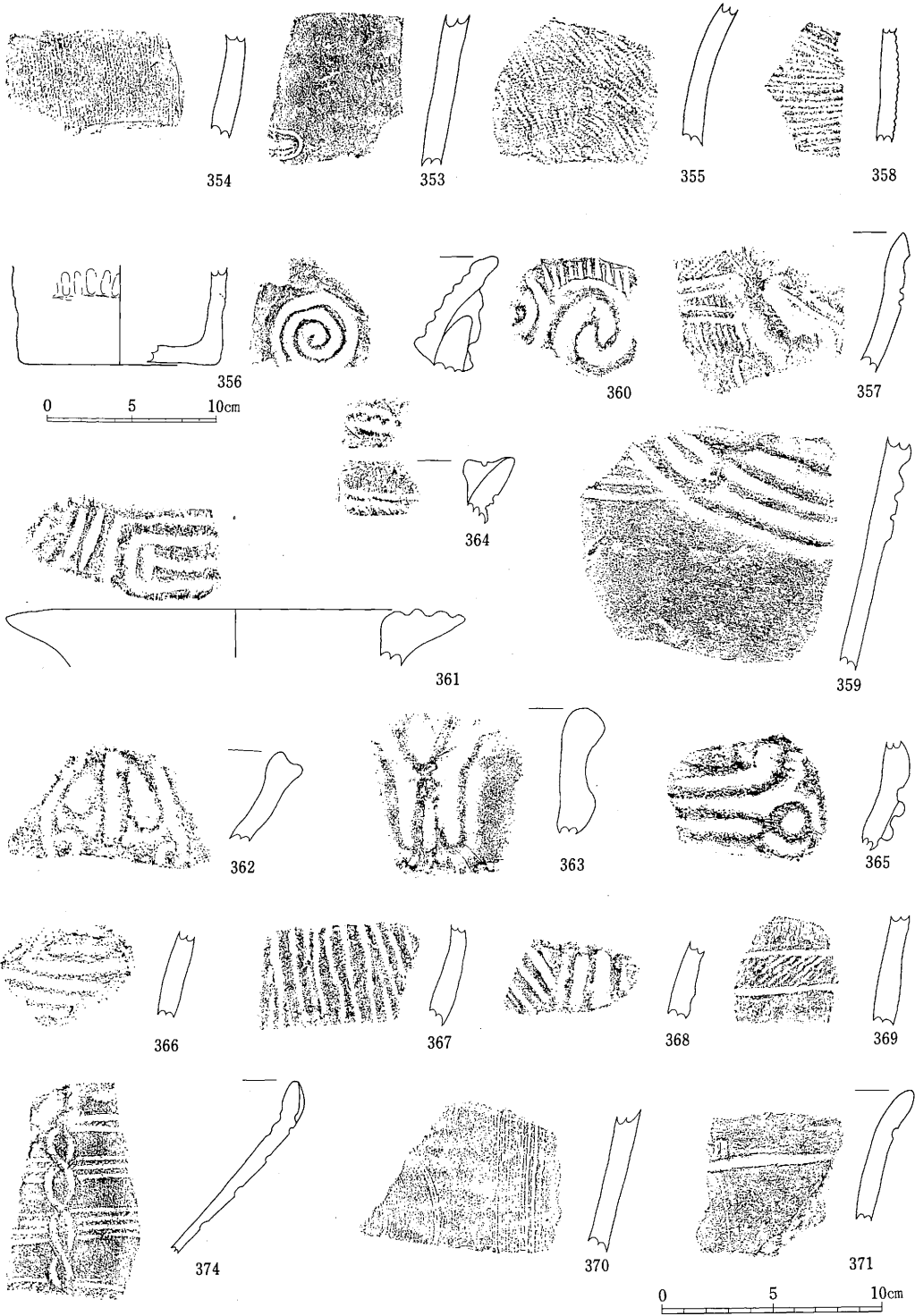
第27图 繩文土器(9)



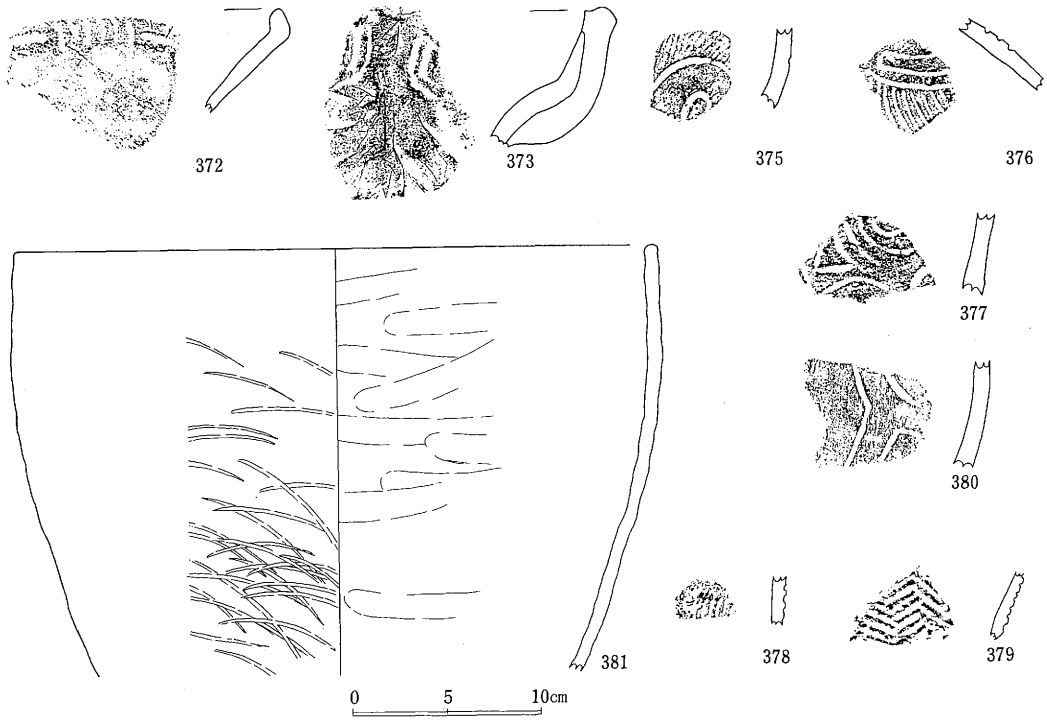
第28图 繩文土器(10)



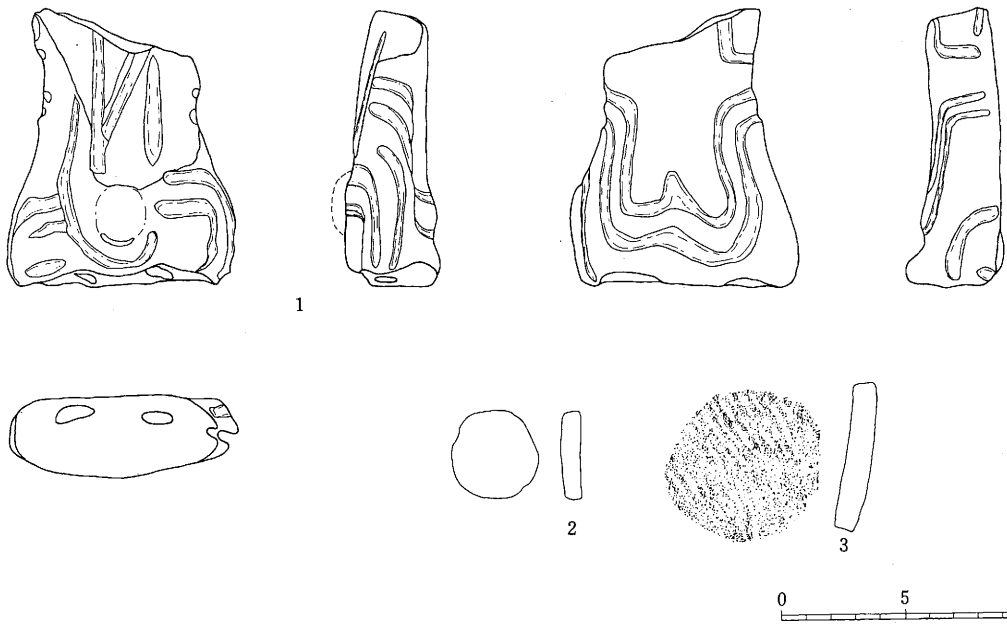
第29図 縄文土器(1)



第30図 繩文土器(12)



土製品



第31図 縄文土器(13)・土製品

3) 中世の出土遺物

その総数は焼物や石製品を合わせて、258点である⁽¹⁾。また出土地点別に整理すると第3表のようになる。以下それらを食膳具、調理具、貯蔵具、煮炊具、その他に分けてふれていく。そして最後に今回出土した遺物をもとに、松本平の中世、特に13世紀の遺物の様相について、考えてみたい。

註1 破片数である。個体識別は細片のため行っていない。

1 食膳皿 (第32図1~9)

「かわらけ」、あるいは土師質土器と呼ばれる素焼の皿である。すべて非ロクロ成形である。細片が多くさらに摩耗が著しいため、接合がほとんどできず、全体の形が、わかるものはほとんどない。また調整もはっきりしないが、口縁部にヨコナデ、それより下部はヘラケズリあるいはおさえの後ナデをするのを基本としている。その量は多く、遺物全体の72パーセントを占める。法量は細片が多いため正確な計測値を示すことはできないが、大きく2つに分けることができそうである。大型(7~9)は口径12cm前後、器高3.5cm前後に集中する。小型(1~6)は口径8cm前後、器高1.5cm~2cmに集中する。胎土と焼成は、大きく2つに分けられる。一つは灰白色硬質で砂などの不純物を含まないもので大半を占め、もう一つは褐色軟質で砂や小石などの不純物を含むものである。前者には器壁を薄く仕上げるものが多く、口縁部を2段にわたってヨコナデしている。それに対して後者は、器壁を厚く仕上げるものが多い。

(2) 山茶碗 (第32図10・11)

7点出土している。いずれも器壁が薄く仕上げられており、口縁部端部は玉縁状に仕上げている。10はやや外傾する高台がつき、端部には靱殻圧痕がついている。底部内面には糸切り痕が残り、内面底部には重ね焼き痕がみられ異方向のナデがはいる。体部外面にも縦方向のナデがところどころにはいる。胎土と焼成をみると、灰白色硬質で不純物は含まない。東濃産白土原1号窯式と思われる(田口昭二1983)。

(3) 輸入陶磁器 (第32図12~17)

いずれも細片であり、図示したものの法量については問題が残る。分類については横田賢次郎・森田勉の研究に従う(横田・森田1978)。

ア 白磁

3点出土している。いずれも器壁は薄く、12は体部から口縁に直線的に立ち上がり、内面の口縁近くに細い一条の沈線が入る。VIII類椀に分類できる。他の2点もV類あるいはVIII類椀に分類できそうである。

イ 青磁

その内訳については第2表に示した通りである。

13は比較的幅の広い蓮弁文が外面に付けられており、碗Ⅰ類に分類できる。14は内面口縁近くに一条の沈線が入り、劃花文が内面に入る碗Ⅰ類に分類できる。15は比較的器壁が厚く仕上げられた底部で、端部は露胎であり、碗Ⅰ類に分類できる。16は比較的間隔の狭い蓮弁文が施されており、碗Ⅲ類に分類できる。17は口縁端部が面取りされており、体部下半が強く折れ曲がり、杯Ⅱ類に分類できる。

第2表 青磁一覧

	1住	2住	3住	溝1	Pit 10	検出面	合計
碗Ⅰ類-2 (劃花文)		1					1
碗Ⅰ類-4 (飛雲文)			1			1	2
碗Ⅰ類-5 (鎬蓮弁文-広巾)	2					4	6
碗Ⅲ類 (鎬蓮弁文-狭巾)	1			2	1	2	5
杯Ⅱ類	1						1
不明	2	1		2		3	8
合計	7	2	1	5	1	10	26

2 調理具

こね鉢 (第32図19~26)

16点出土と比較的多く出土しているが、いずれも東海系の無釉のこね鉢である。いずれも破片で残存比率が小さく、図示したのもも口径などの計測値に問題が残る。胎土と焼成をみると、比較的少量の砂などを含み白色で硬質のものから、砂などの不純物を多く含み灰白色をしたものまで様々である。これは産地の違いを示している可能性が強い。口縁部が比較的多く出土しており、その形態も様々であり、取り上げてみたい。

19は、強く外反し先端が細く仕上げられている。24は19に比較して端部がやや肥大化し先端が丸く仕上げられる。20は器壁が厚く端部が丸く仕上げられ体部下半は横方向の手持ちのヘラケズリがなされる。21はやはり肥大化し先端が面取りされるように丸く仕上げられ、内面下半は使用のため摩耗している。23は端部が厚く丸く仕上げられその下部に強いヨコナデが入るため玉縁状になる。端部の面取りははっきりしてきている。22は面取りが明瞭になされ断面がそのためコの字状になり、端部中央がやや凹む。25は同じく断面コの字状であるが、端部中央に幅1mm程の沈線が入る。26は端部中央が大きく凹む。このように様々な形態がみられるが、19のような外反する形態から26のような形態へ鋤柄俊夫氏の指摘では変化するようである(鋤柄1985)。

3 貯蔵具

(1) 常滑

甕の破片が2点出土しているのみであり、いずれも小片のため全体の形態は不明である。

(2) 古瀬戸(第32図27)

1点のみの出土である。27は四耳壺の取っ手の部分である。非ロクロの成形でやや緑がかかった灰釉がかかる。取っ手の上面には筒状の工具により6本の沈線が入る。古瀬戸前期様式と思われる

(藤沢良祐1982)。

4 煮炊具

(1) 土鍋(第32図28)

形態は内耳鍋と同様に口縁部が「く」の字状に外反する。端部は面取りがなされ、やや内側に折れ曲がる。ただし体部下半の形態は不明であり、取っ手が付けられるかも不明である。調整は外反部がヨコナデ、下部は不定方向のナデがなされる。胎土は灰褐色で、砂や小石を含み、いわゆる「内耳鍋」に近い。外面全体にススが付着し、内面は器壁が剥落しており、火を受けたことを物語っている。

(2) 石鍋(第32図29)

滑石製で、口縁部の小片で口径は22cm程である。幅1cm程の断面台形の鏝が付けられており、口縁はやや内湾し、森田勉氏の分類に従えばB類になる(森田1987)。さらに断面をみれば、上部から下部へ、外面から内面へ、2方向から補修孔があげられている。この石鍋については後述したい。

5 その他

(1) 青白磁(第32図18)

18は、青白磁いわゆる影青の合子の蓋である。形態は壺型合子で類例については以前にふれてあるので参照されたい(原1988)。この他図示していないが水注の取っ手の破片がある。類例としては大町市山寺廃寺の出土品がある(大町市教育委員会1983)。

第3表 中世遺物出土一覧

出土位置		1住	2住	3住	溝1	溝2	土坑7	土坑10	土坑16	土坑17	土坑29	土坑42	Pit10	検出面	合計
食膳具															
土器	皿	102	24	6	28	18	1	1	2	3	1	1		42	187
山	茶碗	4	1			1								2	8
輸入陶磁器	白磁碗(V or VII類)		1											1	4
	同安窯系青磁碗													1	1
	龍泉窯系青磁碗	7	2	1	5								1	10	26
調理具															
東海系	捏鉢	5	4		1	2								4	16
貯蔵具															
常滑	甕	1			1										2
小瀬戸	四耳壺													1	1
煮炊具															
土	鍋	3	6												9
石	鍋				1										1
不	明													1	1
その他															
青白磁	合子				1										1
青白磁	水注	1													1
合計		123	38	7	39	21	1	1	2	3	1	1	1	62	

南方遺跡出土資料からみた松本平の中世前半の生活用具の様相

1 遺物群の年代

まずここで得られた遺物群の年代について考えてみたい。年代を記した資料がないため、ある程度生産地の研究者により年代がかたまってきた陶磁器から考えることにする。

最初に輸入陶磁器を横田・森田分類に従ってみたい。白磁Ⅴ類あるいはⅧ類の椀は12世紀代を中心に日本に搬入される。青磁についてみると、椀Ⅰ類は12世紀後半から、13世紀代にかけて多量に搬入され、椀Ⅲ類および坏Ⅱ類は13世紀後半から14世紀前半に搬入される。青白磁の合子をみると12世紀代を中心に搬入される。

次に山茶碗は東濃窯白土原1号窯式であり、13世紀後半に比定されている(田口昭二1983)。

こね鉢について鋤柄俊夫の研究に従ってみたい(鋤柄1985)。東海系こね鉢は12世紀後半から14世紀代にかけて生産される。今回の資料の中に口縁部の形態が受部状になるXⅣ類はみられず、14世紀前半までにはおさまりそうである。

滑石製石鍋をみると、今回出土したB類は森田勉の研究によると、13世紀後半におけそうである(森田1987)。

古瀬戸についてみると、藤沢良祐に従うと前期様式は14世紀前半までにはおさまりそうである。また消極的な理由ではあるが椀などの食膳具は入っておらず、それらが本格的に生産される15世紀より新しくはならないと思われる。

次に在地生産の土師器についてみると、ロクロ調整はみられずほとんどが非ロクロ成形であることが大きな特徴である。吉田川西遺跡の成果からみると、ロクロ調整の土師器は少なくとも12世紀中頃までは主体を占めるようである(原1989)。このことから12世紀中頃以前には遡らない。

これらのことから、今回出土した生活用具群の年代は、12世紀後半から14世紀前半という幅に収まりそうである。従来この時期の遺物については陶磁器などの個別については研究がなされているが、松本平においてはその全体の様相についてはっきりしない部分が多かった。そのため今回得られた資料は空白を埋めるものとして貴重である。

2 組成について

ここで組成について考えていくわけであるが、この時期の遺物の量は12世紀以前と比較して非常に少なくなる。これは消費活動の違いに起因するのか、遺構の問題に起因するのか、またはまったく別の要因なのかははっきりしない。

(1) 食膳具

この遺跡の資料からは、大きく椀と皿の2つの器種が存在することがわかる。椀についてみると、いずれも搬入品である輸入陶磁器と山茶碗がある。双方とも法量のうち口径は14cm前後と共通し、一法量のみである。それに対して皿は土器のみでありそれも非ロクロ成形である。法量は少なくと

も大小二種あり、この点も椀と異なる。このように椀は広域流通品、皿は在地生産品という組合せである。このような構成が松本平において一般的であることは、吉田川西遺跡の例を見ても明らかである（市川隆之1989）。ただし注意しなければならないこととして、土器皿の量の違いをあげなければならない。南方遺跡の土器皿の量は、定量的な分析はしていないが、他の遺跡と比較して群を抜いて多い。通常は青磁椀よりその量が少ない場合が多い。この土器皿の量に違いがみられる理由としては、その非日常的な用途からくる、遺跡の性格の違いが原因と思われる。

今回の出土品にはみられないが、漆器椀なども見られるようである。

この他ここで取り上げた小型品の他に、青磁などの鉢もわずかにみられる。

（2）貯蔵具

量は少ないが、常滑の甕や壺（吉田川西遺跡、北中遺跡）、古瀬戸の壺などがみられる。また1点ではあるが上木戸遺跡からは珠洲焼の壺がみられ、輸入陶磁器の壺などもわずかに存在する。しかし大きくは東海産の製品が主体であることは間違いない。このように在地生産品による貯蔵具はみられず、搬入品が全てを占める傾向には変わりがない。しかし焼物の貯蔵具の絶対量は少なく、他の材質例えば曲げ物などの木製品の存在も考慮しなければならない。

（3）調理具

今回は東海産の無釉陶のこね鉢が出土した。このあり方は吉田川西遺跡（長野県埋蔵文化財センター1984）などの他の遺跡でも一般的である。この他、丘中学校遺跡（塩尻市教委1983）や北中遺跡（松本市教委1988）、吉田川西遺跡、吉田向井遺跡（長野県埋蔵文化財センター1988）などにみられる須恵質の摺鉢が加わるようである。また石臼については存在が確認されず、この時期以降に本格的に使用されるようになるとと思われる。

（4）煮炊具

従来この時期の煮炊具ははっきりしていなかった。今回得られた資料はその空白を埋めるものとして貴重である。土鍋についてみれば、その形態は取っ手の有無を別にすれば15～16世紀に盛行する内耳鍋と良く似ており、13～14世紀までその源流が遡る可能性が出てきた。しかしその量は、比べものにならないほどで少なく、また他の遺跡にも普遍的にみられないため、この土鍋が一般的であったとは即断できない。あえていえば、阿智村杉ノ木平遺跡（長野県教育委員会1972）で出土しているような、土鍋と形態が類似している鉄鍋が主体であったと現時点では考えておきたい。

石鍋は後述するように県内において類例は余りなく、持ち込まれたこと自体、遺跡の性格によると思われ、一般的とはいえない。

（5）その他

食器以外をここで取り上げることにする。

青白磁の合子は今回みられた壺型合子の他に、平型合子がみられる。全てとはいわないが、かなりの遺跡から出土しており、一般集落にある程度は入り込んでいた可能性が高い。

青白磁の水注はいくつかの遺跡でみられるが、まだ合子ほど一般的でなくその出土は集落の性格

によると思われる。

この他に石製品や鉄製品（農具、工具等）を取り上げなければ、生活用具としてまとめるうえで片手落ちであるが、いまだはっきりした資料は得られておらず、今後の課題としたい。

滑石製石鍋について

県内にはこれまではっきりした類例はない。ただ一つ石鍋の可能性のある資料がある。それは下伊那郡豊丘村田村原遺跡16号住居址（豊丘村教育委員会1975）より、石硯として報告されている資料である。報文を引用すると「硯と思われる石製品（4）があり石質は不明であるが軟質の岩石によってつくられている。」のように説明している。実測図と写真を見る限り、比較的厚く平坦な面も少なく硯の可能性は少なく、軟質の岩石というのは滑石の可能性が強く、その形態は石鍋の底部の可能性が強い。再検討をする必要がある。16号住居址の他の出土資料を見ると、非ロクロの土器皿と古瀬戸と思われる陶器をとまっており、14世紀代の可能性が強い。また遺構も中世にみられる掘立柱建物址に伴う竪穴状の遺構の可能性が強い。この資料は今回の資料とほぼ同時期かやや後出すると考えられる。

滑石製石鍋の生産地として今までに確認されているのは、九州に集中している。九州の中でも大きく3ヵ所あり、最も多く生産されたのは長崎県西彼杵半島一帯で、そのほか福岡県内に2ヵ所ほどみられる。前者においては製作址もみつかっており、下川達弥らによって、その製作工程へのアプローチもなされている（下川1973）。

石鍋の全国的な分布についてみてみたい。下川氏の集成によれば、ほぼ全国的に認められる。さらにその分布の傾向をみると、生産地でありそれに近い九州一帯に多くみられ、本州では畿内以西それも京都や瀬戸内海沿岸に集中し、東では鎌倉のみに集中してみられる。とくに本州では京都、大阪、鎌倉などの都市に集中して見られることが指摘されている。

石鍋の形態分類はいくつか行われているが、森田勉氏の分類を紹介してみたい（森田1987）。大きくAからCの3つに形態を分けている。A群は方形の耳状の取っ手を付けるタイプ、B群は今回出土したような鋳付きで口径に比して底径が大きく体部が直立気味になるタイプ、C群は底径が口径に比して小さく体部の傾斜が大きいタイプの3つである。また編年はA群は良好な資料が少ないが10・11世紀に多くみられ、B群は最も多く全国的にみられるタイプで、12・13世紀に多くみられる。C群は13世紀後半から15世紀後半までみられる。

文献においても石鍋の記述はいくつかみられるようである。長勝寺遺跡の報告書で詳しく取り上げられている（長勝寺遺跡発掘調査団1978）。まずその用途については、煎蜜や甘葛煎の際に用いられたようで、「銅石鍋同用」とされており銅製品の鍋と同様の目的で使用されていることがわかる。またその値段は、石鍋4個と牛1頭が同じ価格であり、だいぶ高価であったこともわかっている。また石鍋についての記録は1131年から1535年にわたってみられるが、それも前半に集中していることが知られている。

最後に今回石鍋が出土した背景について考えてみたい。東日本では分布の際にふれたが当時の政

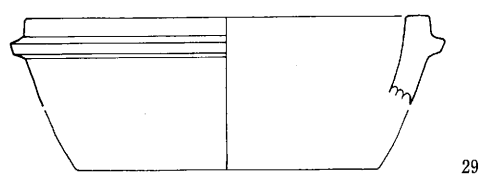
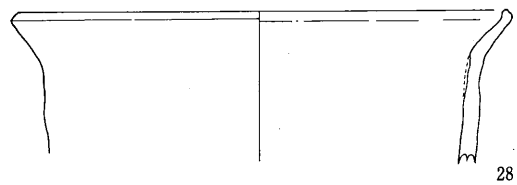
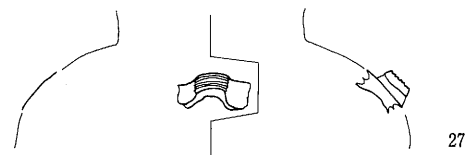
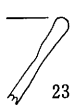
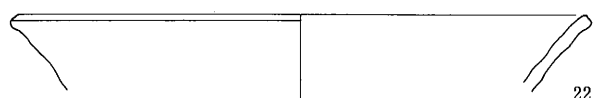
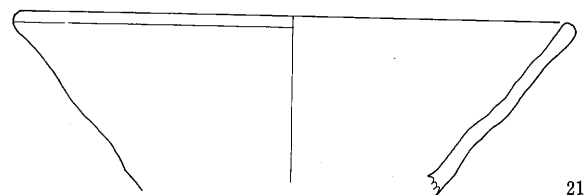
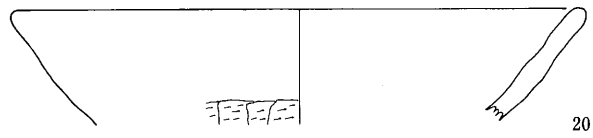
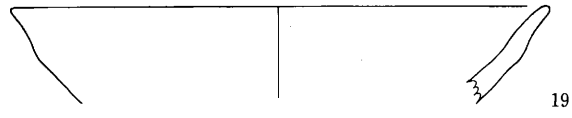
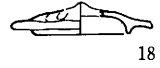
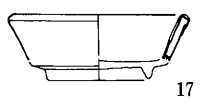
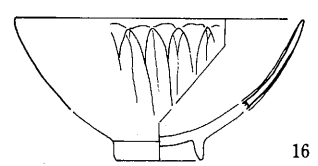
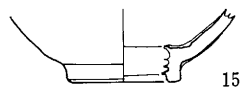
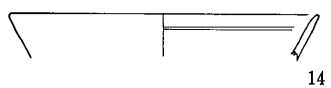
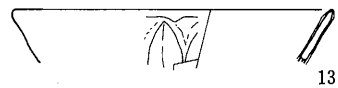
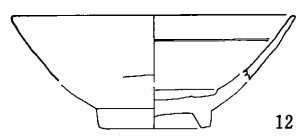
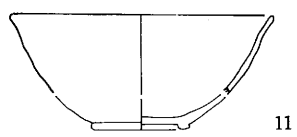
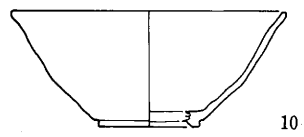
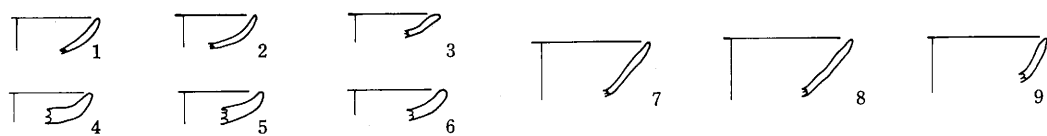
治の中心地である鎌倉からの出土量が最も多い。それは他と比べものにならない量である。分布をみる限り畿内以西の分布のあり方が流通に基づいていたといえそうである。しかし鎌倉での出土量の多さは単に流通機構では説明できない量である。このことは政治の中心地としての都市鎌倉が必要としていたと思われる。具体的には九州に関係の深いあるいはそこに根拠地をおいた有力後家人が使用消費したものと考えられなくもない。ただ出土した全てがそれらによって使用されたというより、石鍋を使用する習慣が鎌倉の他の有力者の中に広まったと考えれば納得がいく。今回出土した石鍋は西からの流通ルートにのって入ってきたとはその分布から考えられない。そうとすれば、都市鎌倉を媒介として入ってきた可能性が強い。このことから南方遺跡に鎌倉と直接あるいは直接でないにしろ密接な関係を持った有力者の存在があったためといえそうである。

3 おわりに

最後に遺物からみた南方遺跡の特質について考えてみたい。近年、龍泉窯系青磁碗、東海系無釉陶こね鉢、常滑の甕・壺などが出土する遺跡は増加している。しかし今回みられるような非クロの土器皿を多量に出土する遺跡はない。土器皿の性格については、以前に指摘した通り日常生活用具からは離脱し、すでに宴会のための道具となっていた可能性が強い(原1987・1989) 今回の多量の出土は何回となくあるいは大きな規模の宴会が開かれたことを物語っているといえる。当時の宴会の機能については、原田信男によって指摘されているように、支配関係を明確に表現する場であり、それが確認される政治的に最も重要な場面である(原田1986)。すなわち、このような宴会を開く必要のある、あるいは開くことができる有力者がこの集落の中に存在していた可能性を示している。その有力者は、ある程度広域的な範囲に影響力を持っていた可能性が強い。石鍋、青白磁の水注の存在もこの有力者の性格を物語っている。

参考文献

- 市川 隆之 1989「平安時代末期から鎌倉時代の土器皿」『吉田川西遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
 大町市教委 1983『大町市指定文化財調査報告書2』
 塩尻市教委 1983『丘中学校遺跡』
 下川 達彌 1973「滑石製石鍋考」『長崎県立美術館研究紀要』第2号
 鈴木 俊夫 1985「中世信濃の東海系移入陶器」『同志社大学考古学シリーズII 移動と移住』同志社大学考古学シリーズ刊行会
 田口 昭二 1983「美濃窯における白瓷と山茶碗」『美濃陶磁資料館館報II』
 長勝寺遺跡発掘調査団 1978『長勝寺遺跡』
 豊丘村教委 1975『田村原遺跡』
 長野県教委 1972『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』下伊那郡阿智村斜坑広場その1
 長野県埋蔵文化財センター 1988『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』
 1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 吉田川西遺跡』
 原 明芳 1987「信濃における食器の系譜」『文化財信濃』14-3
 1988「9号墳出土の青白磁」『森將軍塚古墳—保存整備事業第7次発掘調査概報』更埴市教委
 1989「吉田川西遺跡における食器の変容」『吉田川西遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
 原田 信男 1987「食器の体系と共食・饗宴」『日本の社会史』第8巻 岩波書店
 藤沢 良祐 1982「古瀬戸 中期様式の成立過程」『東洋陶器』8
 松本市教委 1987『北中遺跡』
 森田 勉 1987「滑石製容器—特に石鍋を中心として—」『仏教芸術』148
 横田賢次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入陶磁器」『九州歴史資料館研究論集』4



第32图 中世土器・陶磁器

§ 2 石器・石製品 (第33図～38図)

今回の調査の出土石器は総数で93点を数える。定形的な石器のほか素材となった石材の剥片、破片も多数出土している。ここでは、定形的な石器について取扱うが、出土石器の詳細は付載した観察表を参照されたい。また石質の鑑定については太田守夫氏のご教示を受けた。なお本文中では各器種内の通し番号により記述している。

1) 石鏃 (1～24) 合計34点を出土している。石質は黒曜石製25点、チャート製9点である。凹基無茎鏃が大半を占めるなか、平基無茎鏃としたものに(7)と(29)がある。しかし細部を観察すると、全体的に剥離面がかなり荒く、整形段階と考えられること、基部に厚さを残していることから、いずれも未製品である可能性が高い。また(19)は両面加工途上の未製品であろう。

(15)は黒灰色を呈するチャート製の凸基有茎鏃である。横長剥片を用いた形の整ったもので、側縁部は鋸歯状を呈し、アールを持っている。基部は丁寧に加工され、尖っている。この型は縄文時代後期以降に見られるものである。(23)は黒曜石のなかに不純物が混入しているために破損したものである。(31)は小型品である。先端部を欠失しているものの他の製品と比べ抉りが長さの1/3以上となる類のないものである。(34)はこの項で扱うが、表裏とも長軸に直行して研磨痕がみられるため、磨製石鏃の未製品の可能性もある。

2) 石錐(25～27) 4点出土している。(26)のみ赤色チャート製であり、他は黒曜石製である。(1)は全体形よりつまみ部を作出するものである。錐部は断面菱形を呈し、両面に刃をつけている。(2)は横長剥片を使用し対面に刃をつけているが個々の剥離は浅く未製品である可能性が高い。(3)は全体形は棒状を呈し対面に剥離を有する。錐部は突出した稜が磨耗し、一部に白濁も見られる。断面形は三角形を呈している。

3) 石匙(28・29) チャート製が3点出土している。つまみ部分の抉りが水平になるように置いた場合の分類をする。(1)は黒灰色チャートの横形・直刃タイプである。つまみ部は全体形に比して小さなものである。素材は横長剥片を使用し、両面加工を施しているが、片面は急斜度の刃部を持つが、もう一方はごく浅い剥離のみの片刃である。(3)は斜形・直刃である。光沢を持たない灰白色のチャートを用いている。横長剥片を使用し両面加工をしているが、(1)と同様片刃である。刃部および剥離の稜は磨耗が見られる。

4) スクレイパー (30～34・58) 合計7点の出土である。(1)(3)(4)は全体形が舌状を呈し、剥片を用いた片面加工の石器である。(2)は外湾する両面加工のものである。(6)は赤色チャートの縦長剥片を利用し両面加工をした直刃である。(7)はホルンフェルス(砂岩)の横長剥片を利用し、片面加工を施した直刃のものである。刃部は磨耗し、縁辺部もつぶれが生じている。それ以外にも剥離面の突出した稜線は磨耗が見られ、使用の度合いをうかがわせる。

5) ピエス・エスキーユ (35～39) 7点出土している。(3)のみチャート製で、あとはすべて黒曜石製である。細かい剥離が連続している縁辺を上下とした場合、(1)のみ横長となる。

全体形を見ると(3)は紡錘形を呈しており、その他のものは塊状あるいは四辺形を呈するものである。(6)はこの項に入れたが、上部平坦面にパンチマークを持ち下部はつぶれ白濁している。他のものとは様相が異なるため、両極打法の石核としてもよいかもしれない。

6) 打製石斧(40~47) 15点出土している。全体形が把握できるものは、(2)(6)(11)(13)である。器形は撥形が9点、短冊形が2点ある。刃部の形体は円刃が最も多く7点、偏刃が3点、直刃が1点である。石質は千枚岩・硬砂岩・ホルンフェルス(砂岩)製がそれぞれ3点ある。(2)(6)(11)(13)については、刃部の磨耗が激しく、顕著な使用痕を残している。特に(6)と(13)は刃部ばかりでなく、全体を剥離調整した際の剥離面の稜線がかなり磨耗している。その他刃部が残存する(7)(9)(12)についても、刃部の磨耗が認められる。(1)は短冊形・円刃の打製石斧として扱ったが、上半部が欠損しているものの法量から見るかぎり、小型品であり、実用に即したか否か疑問である。しかし、刃部、側縁部につぶれが確認されるためこの項で扱った。

7) 磨製石斧(48・49) 定角式石斧が2点出土している。(1)は下半部が欠損し、(2)は上半部が破損している。いずれもよく研磨された蛇紋岩製である。(1)は胴部の研磨痕は表面が右下がりのものが多く、裏面は右下がりのものと、長軸方向に直行する痕跡が残る。(2)は表面が左下がり、刃部に関しては右下がりに研ぎ分けている。裏面は右下がりの研磨痕が目立つ。

8) 凹・敲・磨石(50~54) 本来、凹石・敲石・磨石は個々の石器の名称であるが、機能として複合で使用される場合が多く、単独で扱うことは困難である。よってここでは一括して扱うことにする。(1)は両面に3つ以上のくぼみを持ち、片面は磨面と併用している。(2)は敲打痕は殆ど見られず、磨石として機能していたと思われ、扁平である。(3)(4)(5)は敲打によるくぼみや磨減面を持ち、2つ以上の機能を持たせて使用されていたものと考えられる。

9) 石皿 2点出土し、どちらも欠損しており完形品はない。(1)は残存形は方形を呈し、浅いくぼみを持っている。凹部と側面は磨っているらしく、表面がなめらかになっている。(2)は丸い河原石を利用し、表面あばた状の丸く浅いくぼみを持っている。反対の面には敲打痕を持ち、複合機能のもとに使用されていたものである。

10) 砥石(55) 4面に砥面がある。表裏面には線條痕が見られ、鉄器用の砥石と思われる。砥面は黒く変色していることからかなり使い込まれたものと思われる。砂岩製。

11) 石製品(56・57) (1)はよく研磨された砂岩製の石製品である。先端部分につぶれが見られる。用途不明のため全体形はわからないが、石刃の可能性も考えられる。(2)は長楕円形の蛇紋岩の転礫を利用したものと思われるものである。長軸中心やや上よりに敲打による径1cmほどの穿孔が見られる。全体形からすると大珠の未製品かもしれない。(1)は乳黄色を呈するメノウ製の塊状耳飾である。全体の1/3ほど破損しているが、破損面も丸みを帯びていることから、破損後も何らかのかたちで使用されていたものと思われる。

第4表 石器一覧表

石 鏃

No.	図 No	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	1	平基・無茎	I地区1住	1.88	(1.72)	0.49	(1.32)	チャート	片脚欠	青灰色
2	2	凹基・無茎	I地区1住覆土	(1.59)	1.15	0.17	(0.28)	チャート	先端欠	青灰色
3	3	凹基・無茎	I地区1住東ベルト	1.55	1.69	0.31	0.74	黒曜石	ほぼ完形	
4	4	凹基・無茎	I地区1住南東	1.88	1.61	0.34	0.72	黒曜石	ほぼ完形	
5	5	凹基・無茎	I地区3住	2.39	1.05	0.25	0.77	チャート	完形	赤色
6	6	凹基・無茎	I地区3住	(2.16)	(1.42)	0.32	(0.75)	黒曜石	片脚欠	
7	7	平基・無茎	I地区3・4住	2.31	(1.78)	0.60	(2.17)	黒曜石		未製品?
8	8	凹基・無茎	I地区5住P2	(1.45)	(1.61)	0.32	(0.61)	黒曜石	先端・片脚欠	
9	9	凹基・無茎	I地区竪2	(1.97)	(1.60)	(0.29)	(0.67)	黒曜石	両脚欠	
10	10	凹基・無茎	I地区土坑19	(2.34)	(1.96)	(0.46)	(1.31)	黒曜石	片脚欠	
11	11	凹基・無茎	I地区土坑19	1.96	1.57	0.36	0.65	黒曜石	先端欠	
12	12	凹基・無茎	I地区溝1	(1.36)	(1.55)	(0.31)	(0.62)	チャート	先端・片脚欠	白赤
13	13	凹基・無茎	I地区溝1	(2.65)	(1.19)	(0.34)	(0.84)	チャート	片脚欠	淡灰色
14	14	凹基・無茎	I地区溝1	(1.78)	(1.23)	(0.49)	(0.61)	チャート	先端・片面体部欠	灰黄色
15	15	凸基・有茎	I地区溝1	2.76	1.52	0.29	0.92	チャート	完形	灰色
16	16	凹基・無茎	I地区溝2	(1.85)	1.23	0.31	(0.58)	黒曜石	ほぼ完形	青灰色
17	17	凹基・無茎	I地区検出面	1.56	1.68	0.37	(0.64)	黒曜石	完形	
18	18	凹基・無茎	I地区検出面	1.99	(1.55)	0.33	(0.58)	黒曜石	片脚欠	
19		不明	I地区検出面	(2.28)	(1.43)	0.55	(1.47)	黒曜石		未製品
20	19	凹基・無茎	I地区検出面	2.34	1.54	0.42	(1.25)	黒曜石	ほぼ完形	
21	20	凹基・無茎	II地区	2.30	(1.68)	0.44	(1.18)	黒曜石	ほぼ完形	
22	21	凹基・無茎	排土	(2.59)	(1.77)	0.38	(1.16)	黒曜石	片脚欠	
23		凹基・無茎	排土	(1.13)	1.69	0.37	(0.72)	黒曜石	先端2/3欠	不純物による折れ
24	22	凹基・無茎	III地区検出面	(1.58)	1.28	0.29	(0.55)	黒曜石	先端・片脚欠	
25		不明	III地区検出面	(1.65)	1.09	0.31	(0.55)	黒曜石	茎部欠	
26		凹基・無茎	III地区検出面	(1.75)	(1.13)	0.39	(0.70)	黒曜石	両脚欠	
27		凹基・無茎	III地区5	(1.84)	1.64	0.35	(0.90)	黒曜石	先端・片脚欠	
28	23	凹基・無茎	南方古墳石室内中層	(2.35)	(1.96)	0.43	(1.55)	チャート	片脚欠	
29		平基・無茎	南方古墳石室内下層	(2.22)	(1.57)	0.64	(1.70)	黒曜石		未製品?
30		凹基・無茎	南方古墳石室内下層	(1.61)	(1.05)	0.29	(0.25)	黒曜石	片脚欠	
31		凹基・無茎	南方古墳	(1.01)	1.10	0.28	(0.20)	黒曜石	先端欠	
32		凹基・無茎	南方古墳石室内覆土	(1.76)	(0.80)	(0.30)	(0.40)	黒曜石	縦半欠	
33		凹基・無茎	南方古墳周溝	(1.84)	(1.35)	0.41	(0.70)	黒曜石	先端・両脚欠	
34	24	不明	III地区検出面	(3.26)	2.07	(0.25)	(1.85)	ホルンフェルス(砂岩)	下部欠	未製品(磨製石鏃)?

石 錐

No.	図 No	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	25	つまみ	I地区土坑19	3.21	1.96	0.79	3.35	黒曜石	完形	
2	26	つまみ	I地区土坑21	4.00	2.86	0.74	2.19	チャート		未製品 赤色
3	27	棒状	II地区検出面	2.86	0.91	0.59	1.32	黒曜石	完形	
4		棒状	南方古墳周溝	(2.08)	(1.19)	(0.58)	(0.90)	黒曜石	錐部半欠	

石 匙

No.	図 No	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	28	横形・直	I地区1住	3.58	5.07	0.94	13.12	チャート	完形	灰色
2		横形・不明	I地区2住	(3.09)	(3.76)	0.69	(3.94)	チャート	刃部半欠	赤色
3	19	斜形・外湾	南方古墳	6.08	4.30	0.85	11.70	チャート	完形	灰色(白濁)

スクレイパー

No.	図 No.	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	30	舌状	I 地区土坑19	2.39	1.76	0.61	2.34	黒曜石	完形	
2	31	外湾	I 地区 3 住検出面	(3.74)	2.07	0.73	(6.22)	チャート	完形	黒灰色
3	58	舌状	I 地区検出面	3.75	2.04	0.68	4.50	黒曜石	完形	
4	32	舌状	I 地区検出面	3.53	2.41	0.55	5.64	チャート	完形	青灰色
5	33	外湾	地区外ブドウ園下	(3.57)	2.21	0.67	(5.06)	黒曜石	完形	
6		直	V 地区土坑205	3.12	5.64	1.60	15.50	チャート	完形	赤色
7	34	直	南方古墳周溝	5.74	6.71	1.31	54.00	ホルンフェルス(砂岩)		

ピエス・エスキュー

No.	図 No.	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	35	I 地区 3・4 住	1.77	2.47	0.83	2.56	黒曜石	完形	
2	36	I 地区土坑29	3.78	2.29	1.25	9.92	黒曜石	完形	
3	37	I 地区土坑21付近	2.53	1.74	0.66	2.29	チャート	完形	
4	38	I 地区 3 住付近検出面	1.98	1.26	0.65	1.34	黒曜石	完形	
5	39	I 地区土坑37付近検出面	2.24	1.79	0.63	2.27	黒曜石	完形	
6		南方古墳周溝	(3.42)	(2.14)	1.09	(7.35)	黒曜石	両端欠	
7		南方古墳石室内覆土中層	(1.69)	(2.10)	(0.45)	(1.85)	黒曜石	両端・体部欠	

打製石斧

No.	図 No.	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	40	短冊形・円刃	I 地区 1 住	(4.27)	2.31	0.69	(15.48)	砂岩	頭部欠	
2	41	撥形・円刃	I 地区 3 住	(9.73)	(4.63)	1.17	(82.00)	千枚岩	頭部端欠	
3	42	不明	I 地区土坑14	(6.61)	(4.37)	1.64	(53.89)	チャート	刃部欠	淡赤色
4	43	不明	I 地区土坑14	(6.76)	4.84	1.57	(57.54)	硬砂岩	刃部欠	
5	44	撥形・不明	I 地区土坑14	(6.62)	5.32	1.48	(57.69)	緑色凝灰岩	頭部端・下半部欠	
6	45	撥形・円刃	I 地区溝 1	(8.60)	4.07	1.21	(54.78)	砂質泥岩	完形	
7	46	撥形・偏刃	I 地区溝 2	(6.52)	6.51	1.52	(94.00)	硬砂岩	上半部欠	
8	47	不明	I 地区検出面	(3.92)	(4.52)	0.58	(16.54)	砂岩	頭部・下半部欠	
9		撥形・円刃	南方古墳石室内覆土	(4.98)	5.20	1.17	(45.05)	ホルンフェルス(砂岩)	上半部欠	
10		短冊形・偏刃	南方古墳石室内上部	(7.98)	4.96	1.81	(104.75)	千枚岩	上半部欠	
11		撥形・円刃	南方古墳周溝	8.85	4.46	1.74	80.75	安山岩	完形	
12		撥形・直刃	南方古墳検出面	(7.96)	4.82	(0.88)	(56.35)	ホルンフェルス(砂岩)	上端部欠	
13		撥形・円刃	南方遺跡表採	10.30	3.92	1.25	60.60	ホルンフェルス(砂岩)	完形	
14		撥形・円刃	南方古墳周辺	(5.14)	5.41	1.38	(51.25)	硬砂岩	上半部欠	
15		短冊形・偏刃	南方古墳脇住居址	8.16	3.71	1.25	47.55	蛇紋岩	刃部端欠	
16		撥形・不明	南方古墳石室内上部	(8.02)	4.37	0.91	(50.20)	千枚岩	刃部欠	

磨製石斧

No.	図 No.	分類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	48	定角式	I 地区土坑18	(9.13)	(5.66)	(2.25)	(175.09)	蛇紋岩	下半部欠	
2	49	定角式	V 地区土坑211	(5.06)	4.10	(1.29)	(42.70)	蛇紋岩	上半部欠	

凹・敲・磨石

No	図 No	凹部	敲打痕	磨面	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	50		○		I地区1住	(20.58)	6.40	3.73	(453.0)	石英閃緑岩	一部欠	
2	51			○	I地区1住	10.07	6.77	2.38	(243.0)	安山岩	一部欠	
3	52		○	○	I地区1住	10.69	6.76	5.81	526.0	石英閃緑岩	完形	
4	53		○	○	I地区1住	12.29	9.02	6.02	911.0	凝灰角礫岩	完形	
5	54		○		I地区竪2	9.02	5.68	4.57	267.0	安山岩	完形	
6			○		III地区	8.25	7.04	4.03	277.05	安山岩	完形	
7			○		III地区	9.10	7.29	4.73	426.0	安山岩	完形	

石皿

No	図 No	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1		I地区1住	(20.30)	(16.30)	(11.50)	(5,200)	安山岩		
2		南方古墳	(12.05)	13.47	6.60	(1,460)	安山岩		

砥石

No	図 No	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	55	I地区溝1	(10.51)	4.38	3.48	(334.0)	砂岩	ほぼ完形	

石製品

No	図 No	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	56	II地区	(6.68)	2.79	1.29	(34.0)	砂岩	下半部欠	
2		不明	8.25	3.85	1.90	66.09	蛇紋岩	完形	

袂状耳飾

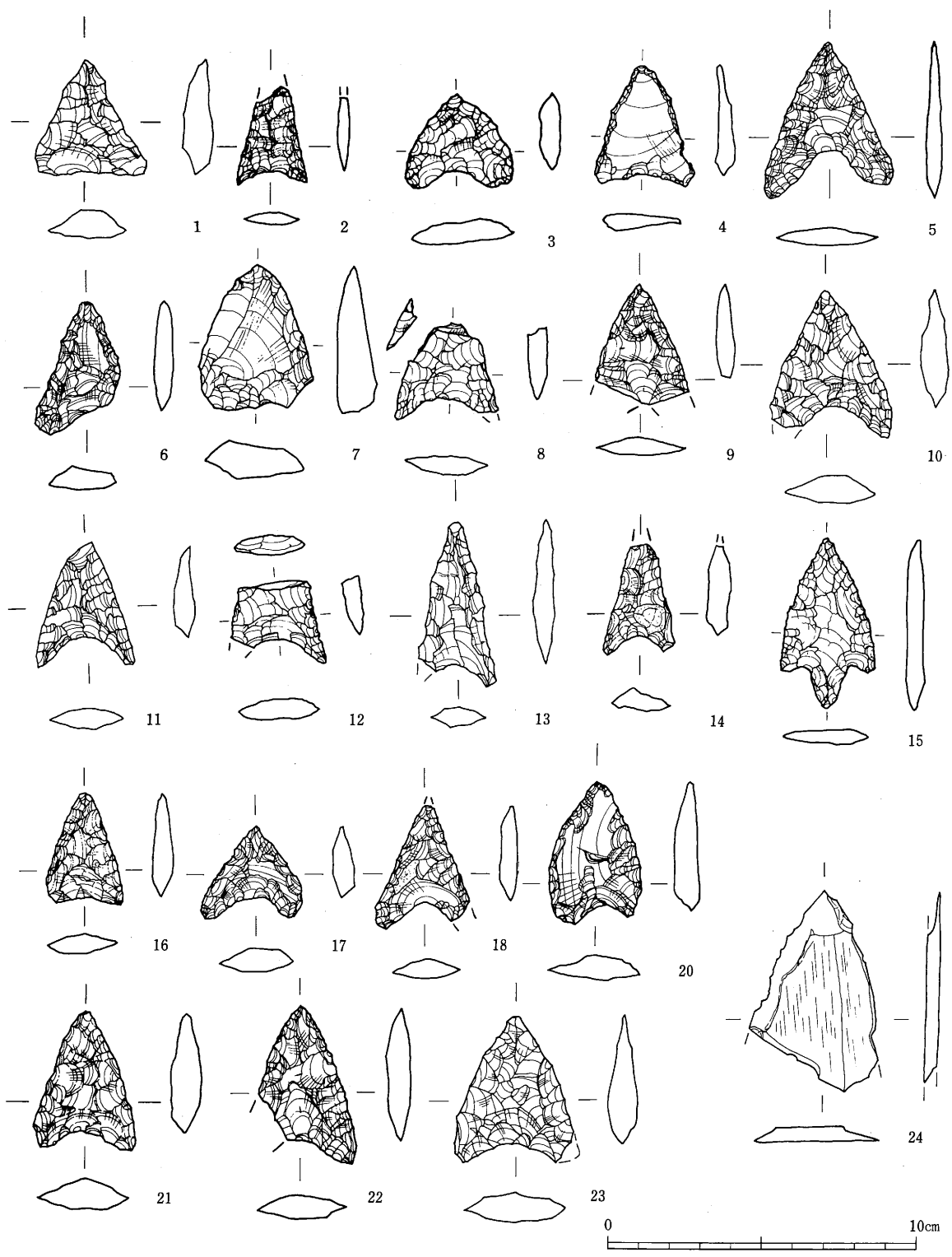
No	図 No	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1	57	I地区竪2	4.75	(4.04)	1.02	(20.39)	メノウ	1/3欠	

フレーク

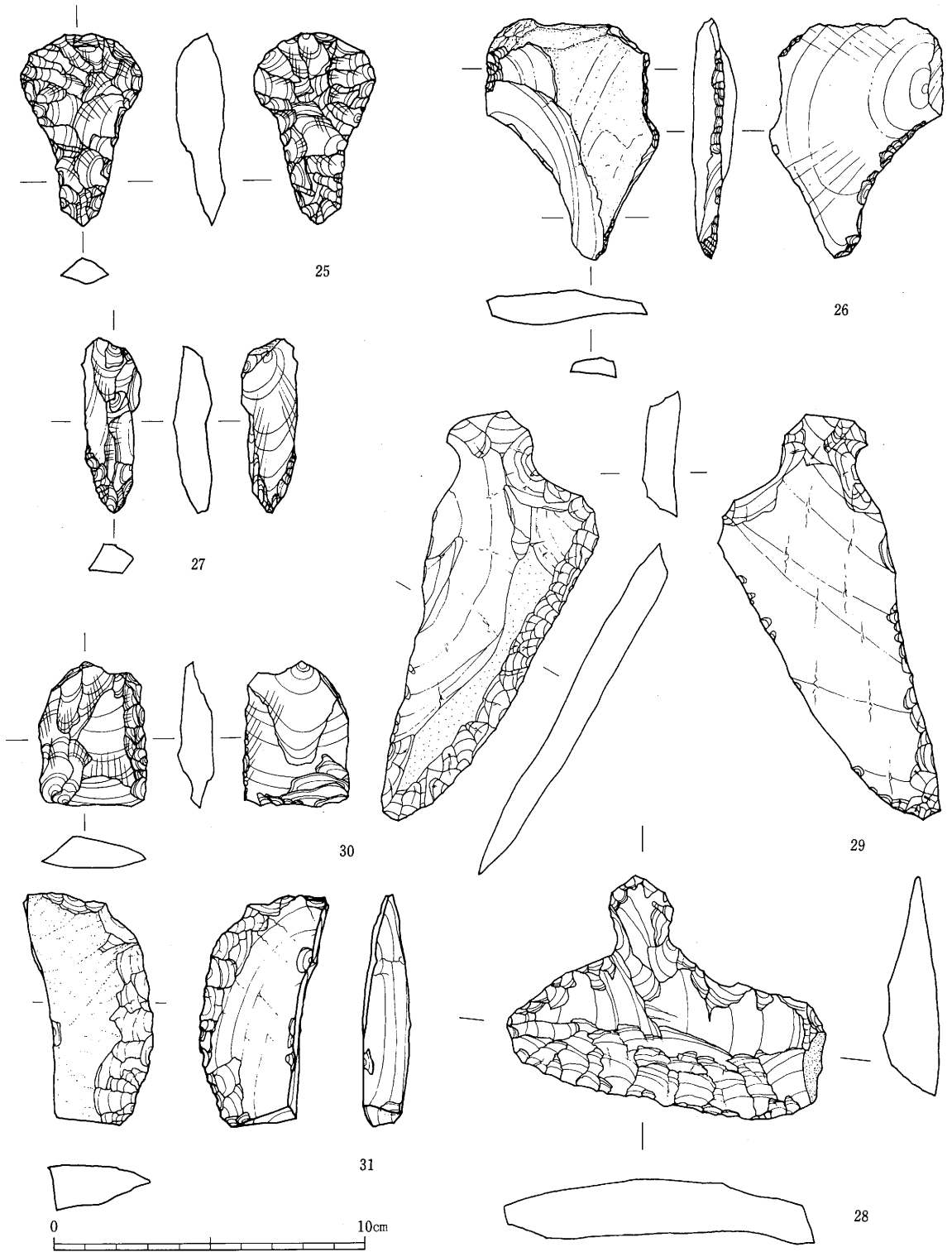
No	図 No	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1		I地区1住	2.41	0.54	0.39	0.36	黒曜石		
2		I地区3・4住	2.12	0.94	0.38	0.58	黒曜石		
3		I地区竪2	3.49	1.91	0.69	4.86	黒曜石		
4		I地区3・4住	2.10	1.84	0.62	2.29	黒曜石		
5		I地区3・4住	1.97	0.84	0.52	0.72	黒曜石		
6		I地区竪1	3.60	2.48	0.84	8.86	黒曜石		

スポール

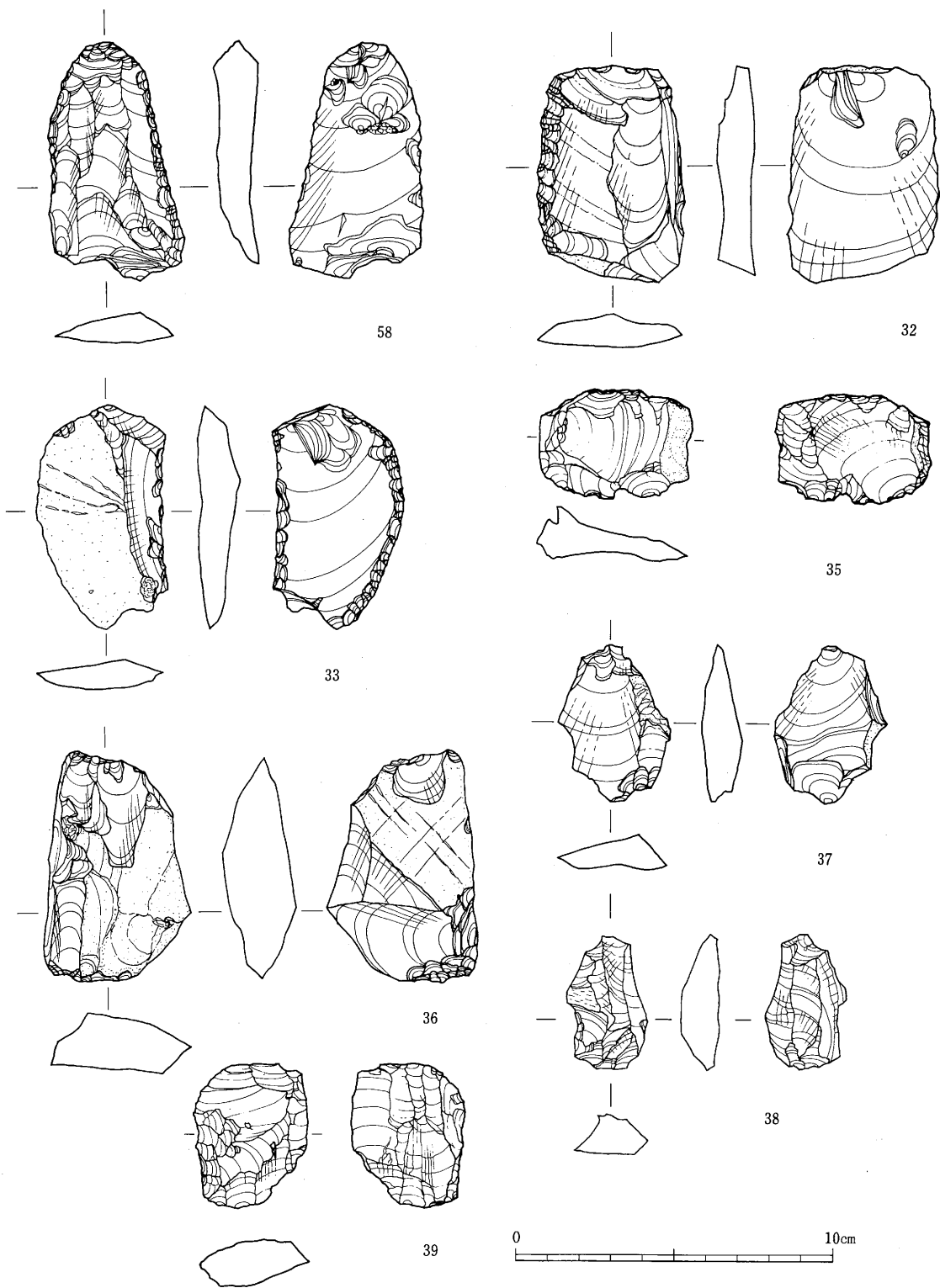
No	図 No	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	破損状況	備考
1		I地区3住	4.84	1.34	0.88	6.21	黒曜石		



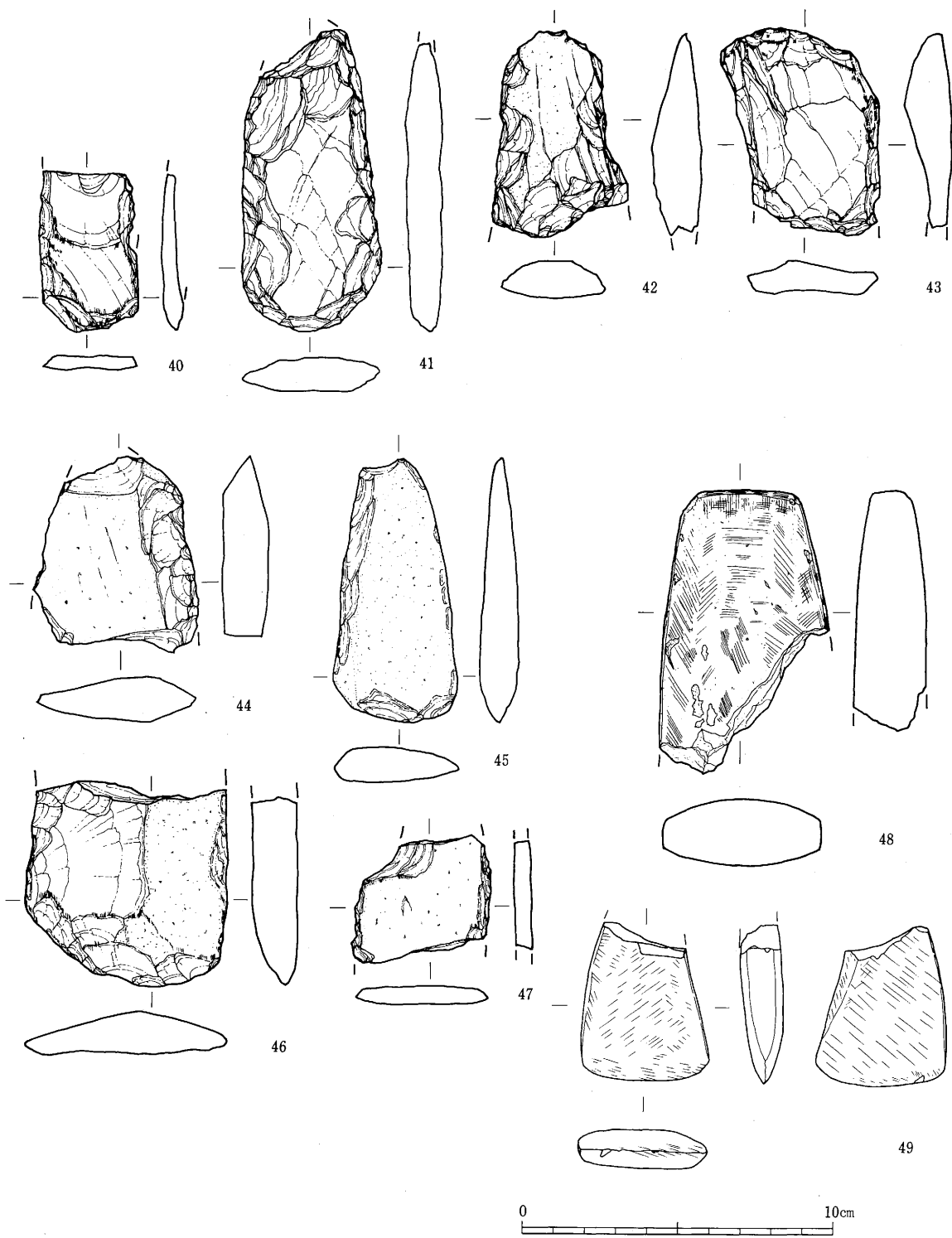
第33图 石器(1)



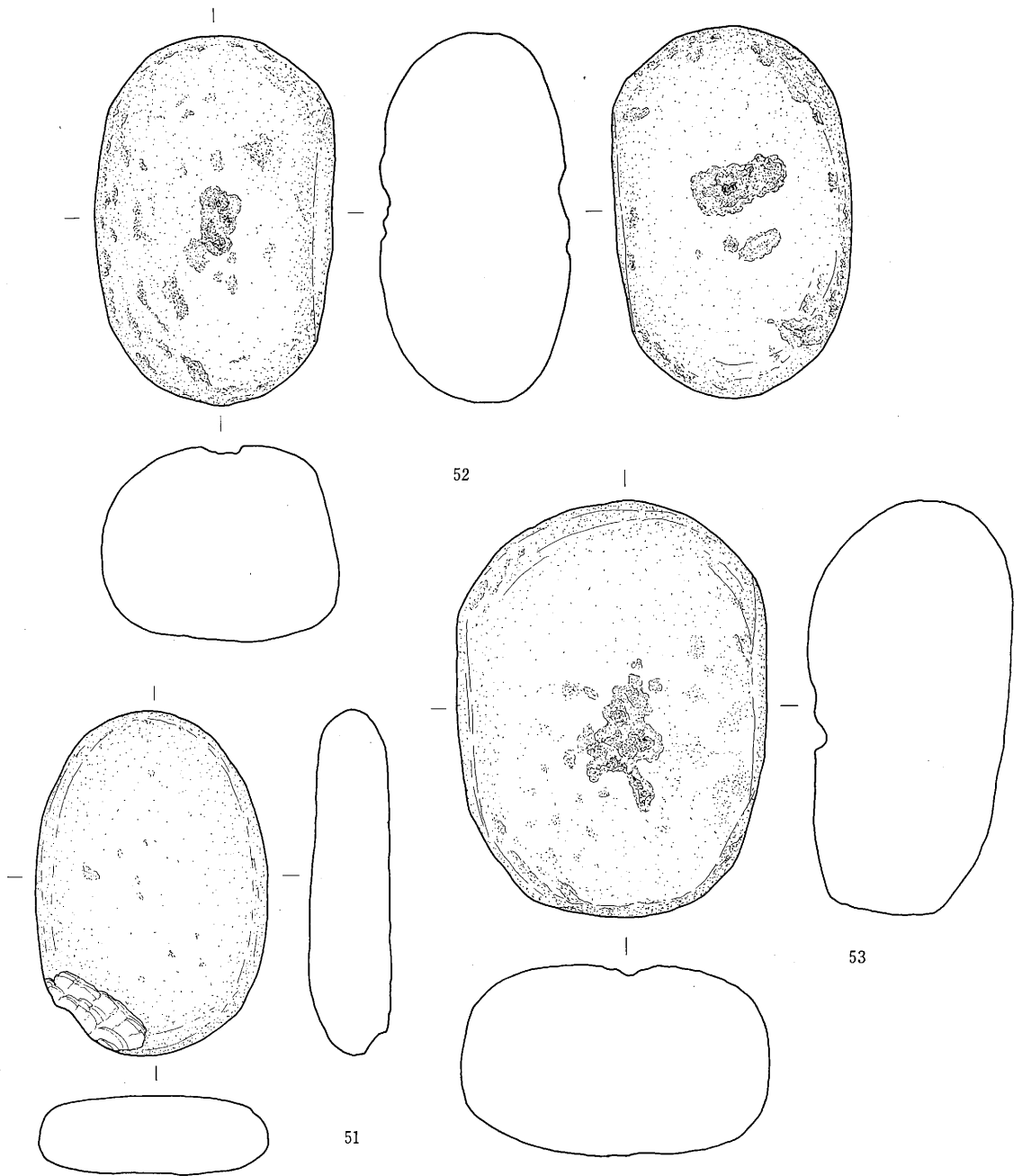
第34図 石器(2)



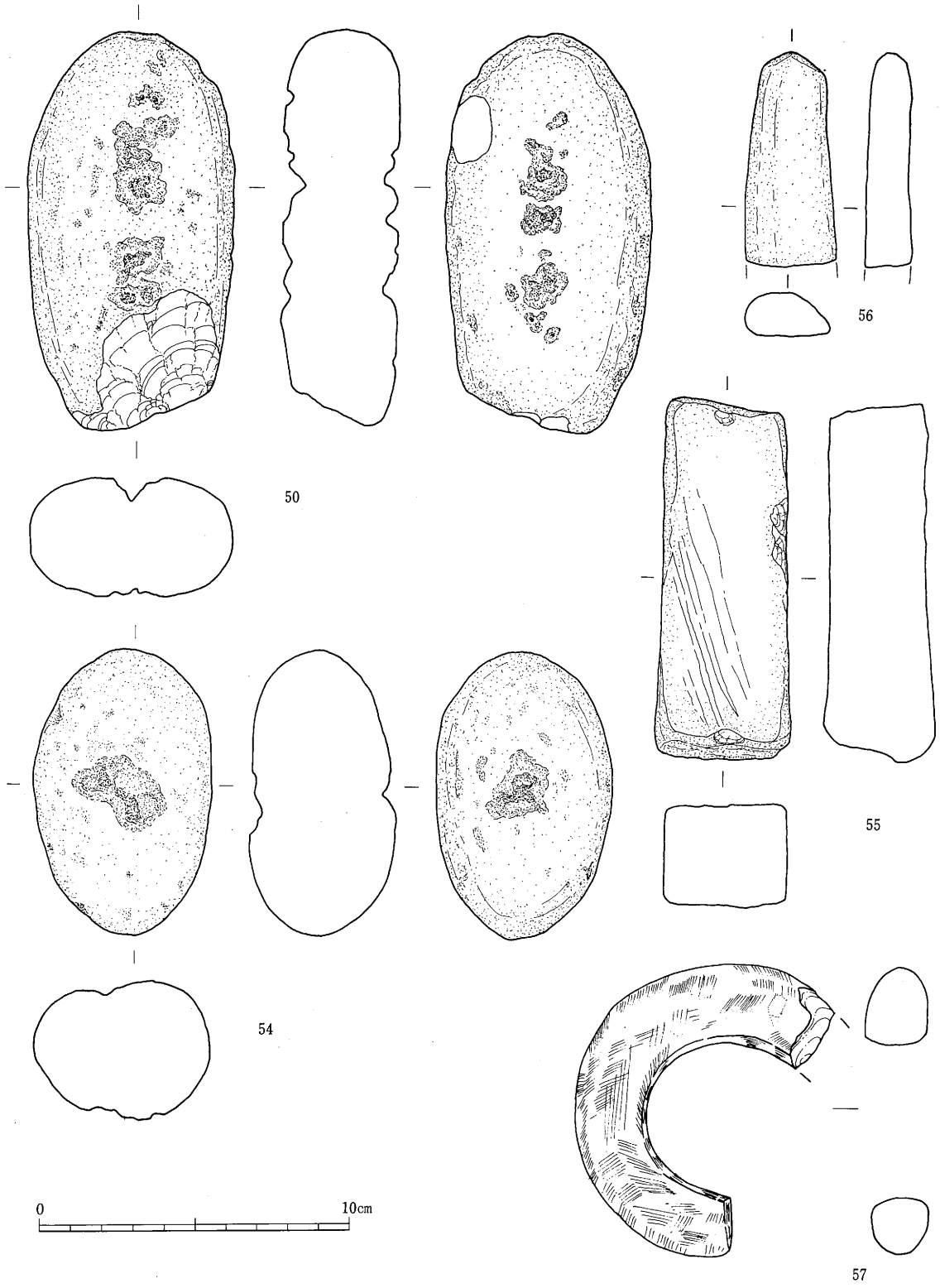
第35图 石器(3)



第36图 石器(4)



第37図 石器(5)



第38图 石器(6)・石製品

§3 鉄器・銭貨（第39図・第40図）

鉄器・銭貨は39点を図示したが、他に4点の小破片と245.2gの鉄滓が第1号住居址から出土している。39点のうち古銭は8点あり、鉄器は機種不明のものがほとんどであるので、類似した器種に含めて類別している。

1～10は棒状鉄器ともいうものであるが、1は頭部が膨らむもので断面は空洞になっている。3片に切損したものを接合している。2も頭部があるもので断面形は円形である。3は直なもの、4はやや四角ばったもので縦に鬆が入っている。6はずんぐりとしたもの、7は上部の断面は楕円形、下部は円形で中心に細い空洞がある。8も先端の断面には小孔が開いている。9は真直なもの、10は錆の塊が強く、小石を含んでいる。出土遺構は3～6・8が第1号住居址とかかわり、7と9が土坑11である。11から22までは釘状のものを集めたが、前者との違いは細いと言う点にあり確実に釘と言えるものは2点しかない。11は頭がやや平たいもので太目の釘である。12は細長い釘で二つに折れている。13は頭部が曲がっている。14はやや太目の真直なもの、15～19は細いものである。20は空洞で横にも孔が開いている。21・22は曲がりの強いものである。23は頭部がへら状になっているもので、断面は空洞である。24は断面がやや平らなものである。25はカギ状に曲がっているが、錆の塊が大きく付いている。26は器種・形状が全く不明のもので現状は三角形をしている。出土遺構は13・15～17・19・21・22・24が第1号住居址で、11・18は第2号住居址である。

27・28は鎌で27は先端部分で第2号住居址出土、28は茎の部分で第1号住居址出土である。ともに断面は薄い。29は鉄鍬で雁又である。両先端を欠くがかなり大き目のものである。茎部の断面は円く、中心は鬆が入った状態である。第3号住居址出土。30は刀子の破片で中心部分が欠落している。31は「かんじき」で馬用のものである。十文字の板の先端を丸め、そこに環を付け紐で縛り付けるようにしてある。裏面には長さ8mmほどの刃が5本付けられている。このような「かんじき」は山から木材の伐り出しなどの際に使われたもので、現代のものではないかと思われる。第II区土坑6周辺検出面出土。

32～39は銭貨である。いずれもがかなり劣化しており、外縁の欠けたものが多い。元豊通宝が3枚、天聖元宝・天禧通宝・熙寧通宝・皇宋通宝・不明のもの各1点である。出土地点は32・33が第2号住居址覆土、34が溝1、35・37はI区検出面、36は第1号住居址、38は第6号住居址、39は第2号住居址である。

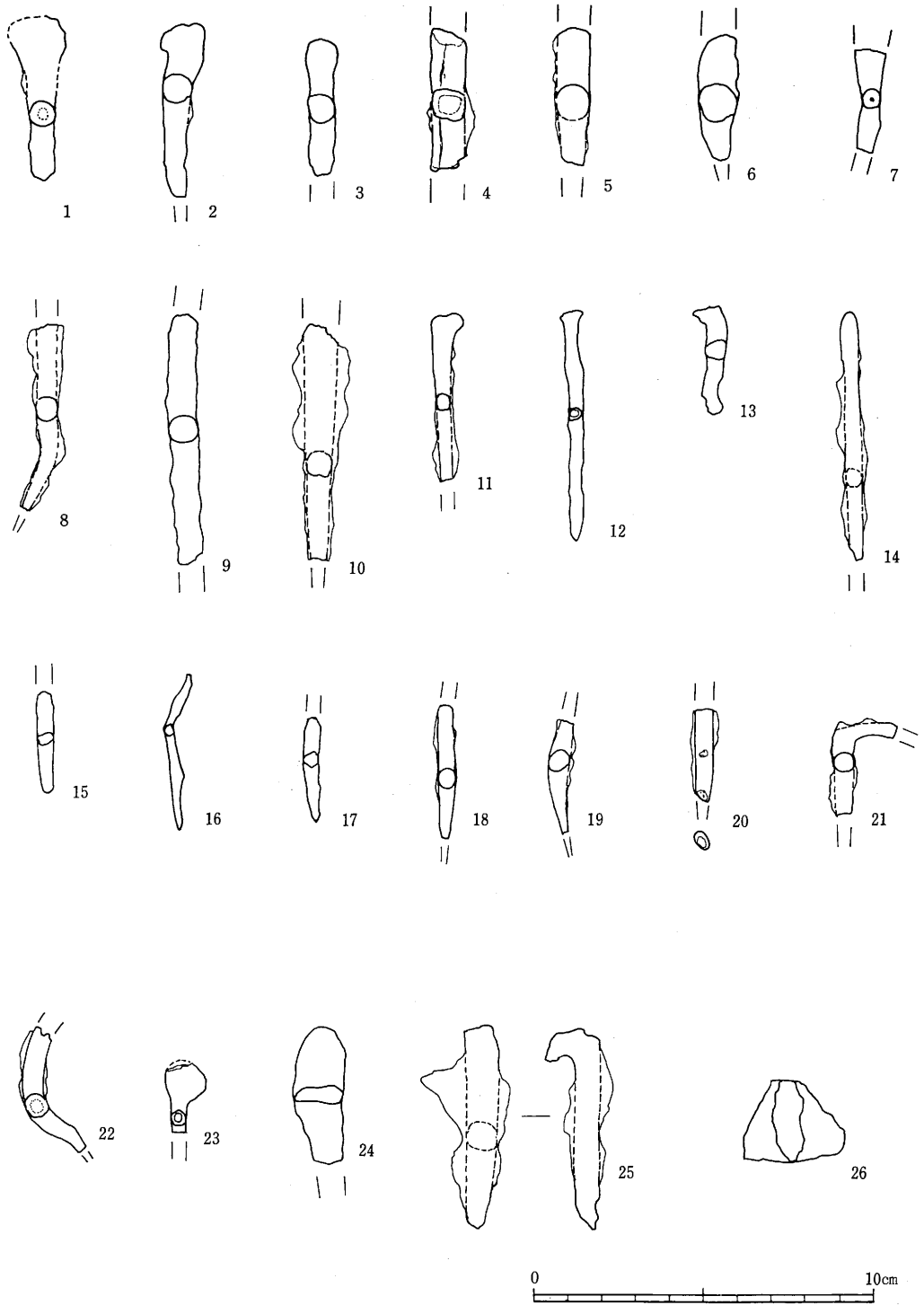
これらを総括してみると比較的鉄器の多い遺跡と言えるが、ただ時代の決定できるものは少なく、覆土から現代物の検出がありかなり攪乱されている状況がうかがえる。古墳に属するような鉄鍬もあり、発掘調査後に古墳があったことと考え合わせると、縄文・古墳・平安などの各時代にわたる複合遺跡ということが出来る。

第5表 鉄器一覧表

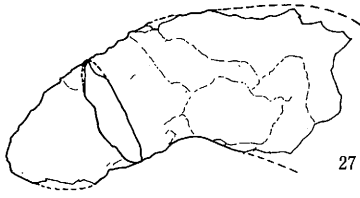
図 No.	出土遺構	品名	寸法 (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	巾	厚さ		
1	I区溝1	棒状鉄器	(4.9)	0.8	0.7	5.35	3つに折損・接合
2	2住	"	(5.1)	0.9	0.8	7.15	
3	1住東南	"	(4.1)	0.8	0.9	4.50	
4	1住	"	(4.2)	(1.0)	(0.9)	7.20	
5	"	"	(4.0)	(0.9)	(1.1)	9.53	
6	"	"	(3.8)	1.2	1.1	6.93	
7	I区土坑11	"	(3.1)	0.5	0.6	2.81	先後欠
8	I住東ベルト	"	(5.5)	(0.6)	(0.7)	7.20	2つに折損・接合
9	I区土坑11	"	(7.3)	0.9	0.8	11.72	先後欠
10	I区検出面	"	(7.0)	(0.8)	(0.7)	15.14	"
11	2住	釘状鉄器	(4.9)	(0.4)	(0.5)	4.22	2つに折損・接合
12	I区検出面	"	6.8	0.4	0.3	2.04	"
13	1住東南	"	3.2	0.6	0.6	1.64	"
14	II区検出面	"	(7.4)	(0.5)	(0.6)	6.49	"
15	1住東北	"	(3.0)	0.4	0.3	2.83	
16	1住南中	"	4.6	0.3	0.3	0.71	2つに折損・接合
17	1住東南トレンチ	"	(3.1)	0.4	0.4	1.11	頭部欠
18	2住	"	(3.9)	0.5	0.6	1.85	先後欠
19	1住北中	"	(3.3)	(0.6)	(0.6)	1.55	"
20	I区土坑36周辺	"	(2.8)	0.5	0.6	1.55	"、断面中空
21	1住ベルト	"	(2.8)	(0.7)	(0.6)	3.10	"、3つに折損・接合
22	1住東北	"	(4.0)	0.6	0.7	2.83	"
23	I区溝2	不明	(2.1)	0.4	0.5	1.31	頭部つまみ状
24	1住覆土	"	(4.1)	1.4	0.6	7.46	南西トレンチ
25	I区溝1	"	6.1	(0.9)	(0.8)	16.35	先端カギ状
26	1住南西	"	3.0	2.4	0.9	8.36	
27	2住	鎌	(9.7)	3.1	0.8	25.52	2片接合 先端部
28	1住床面	"	11.5	3.1	0.7	47.61	茎部
29	3住	鎌	(10.1)	3.3	1.2	51.75	
30	I区溝1	刀子	(5.9)	(1.9)	(0.7)	10.99	
31	II区土坑6周辺	かんじき	16.8	16.6	1.3	260.62	馬用

第6表 銭貨一覧表

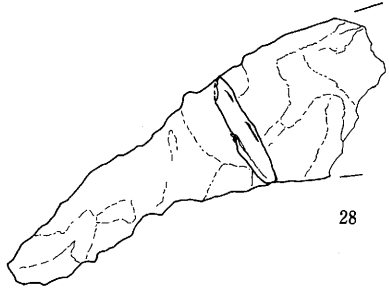
No.	出土遺構	名称	径(mm)	重量 (g)	備考
32	2住覆土1	天聖元宝	25.6	1.79	二片・楷書
33	"	天禮通宝	21.7	1.28	" "
34	I区構1	熙寧元宝	23.0	1.81	完・草書
35	I区北東検出面	皇宋通宝	23.7	2.54	"・隸書
36	1住 No.3	元豊通宝		1.09	縁欠・"
37	I区北検出面	"	24.4	1.97	完・草書
38	6住	不明		1.46	縁欠
39	2住	元豊通宝		1.24	縁欠・隸書



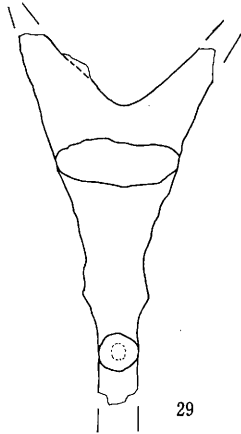
第39図 鉄器



27



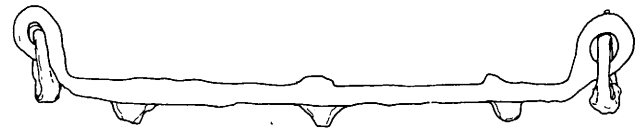
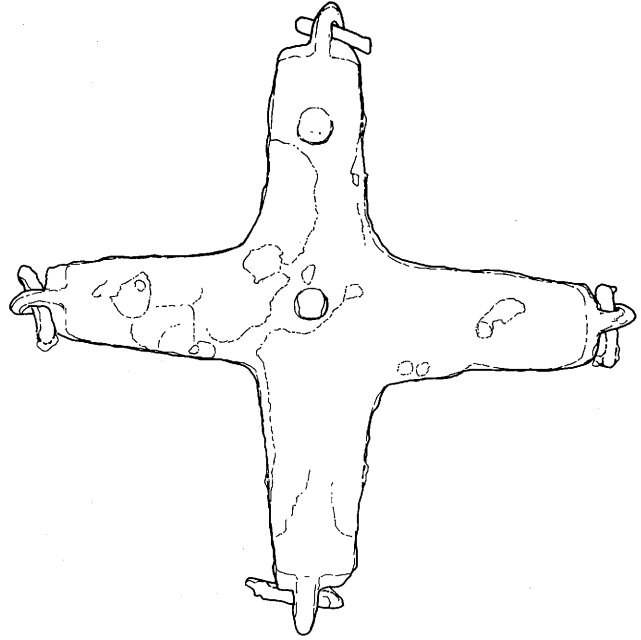
28



29



30



31



32



33



34



35



36



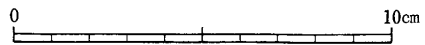
37



38



39



第40図 鉄器・銭貨

V 南方古墳の調査

1. 調査の概要

南方古墳は、ほ場整備中に偶然発見されたものである。現在まで古墳の存在すら知られていなかったが、調査後、改めて地形図を見直すと、やはり墳丘を思わせる弧状の突出部分がブドウ園の南西隅に見られた。しかし実際にはブドウ園下に埋もれた状態であり、墳丘そのものの隆起は認められなかった。また東側側壁の土層観察によっても古墳築造当時の旧地表面と考えられる黒色土層は見られず、構築材を据えるため黄褐色土層(地山)まで掘り込まれたと思われる落込みが確認された。

一方天井石は抜き取られており、石室内には黒褐色土が堆積していた。そこで調査は全体の土を除去し、石室を掘り出す作業からはじめられた。石室は西側側壁の大半が重機により壊されたが、全体として残りがよく、おそらく胴張りの片袖式石室であったと思われる。作業が進み石室が現われるにつれて、遺物も姿を見せた。それら副葬品はかなり良く残っており、奥壁脇に横一線に置かれた土師器1点、須恵器5点は完形であった。また壺罍、杏葉等の馬具、701点を数える金環・勾玉・切子玉などの装身具、銅鏡とセットで使用されたと思われる承盤は松本平の古墳では比類なきものである。そのほかに鉄鎌・直刀・刀子なども出土している。

周溝はごく一部が確認され、形状から考えると、本古墳は径24mの円墳となろう。

2. 調査結果

1) 墳丘

残存している部分が奥壁、東側側壁、そして西側側壁、羨道の一部であるため全体を述べることは不可能である。しかし東側壁外側にいた2本のトレンチの土層観察によっても高塚古墳に見られる古墳築造当時の旧地表面である黒色土層は見られなかった点、墳丘状の隆起が確認されなかった点、また羨道部脇に黄褐色土(ローム)面で検出された縄文時代中期の石囲炉から羨道部構築面まで約20cmであることから旧地表面を掘削した根拠となろう。いわば自然地形(段丘)を利用した横穴式石室墳といえるかもしれない。

2) 石室の構築状況

石室の側壁構築にはX層まで掘込んで基盤となる石を据え、埋め戻しながら二段三段と石を積んでいった状況が窺える。奥壁部分はブドウ園にかかっているため未調査であるが、おそらく同様の方法がとられたものと思われる。

奥壁 最大幅約90cm、長さ120cm以上の円礫および角礫を2枚用いている。石室の構築材のなかでは最大のものを使っている。形状は台形を呈し、石室が持ち送り状になるのに適した素材を選ん

ているということが出来る。石室の主軸方向は N-44°-E である。奥壁幅は164cmを測る。

側壁 東側壁は整形された60~70cm台の角礫と河原石を併用している。全体に石は不揃いであり、隙間には拳大ほどの礫を充填している。側壁は持ち送り状になっている。奥壁から袖石までの長さは5.40mを測る。

西側壁は奥壁からわずか1.20mを残すのみである。しかし全体形から推測して片袖式石室であったと思われる。玄室は胴張りであり、最大幅で2.00mほどであろう。玄室内は天井石が抜き取られたために暗茶褐色土が厚く堆積していた。遺物は奥壁の石の頂部から約60cm下から出土し、それより上部からの出土物はない。

床面 床面は人頭大ほどの河原石が敷かれている。奥壁から玄室中央までは顕著であるが、玄門寄りになると石がまばらになる。この部分には土器がまとまって置かれていることから、追葬時にかたづけられたものと思われる。

羨道 羨道部分の閉塞石にはひと抱えもある角礫や円礫を積み上げている。その礫を除去すると羨道が現われた。羨道部の幅は1.28mを測る。羨道部の用材は80×80×40cmの角礫を使用している。袖石から羨道部までの残存長は3.40mである。

3) 周溝

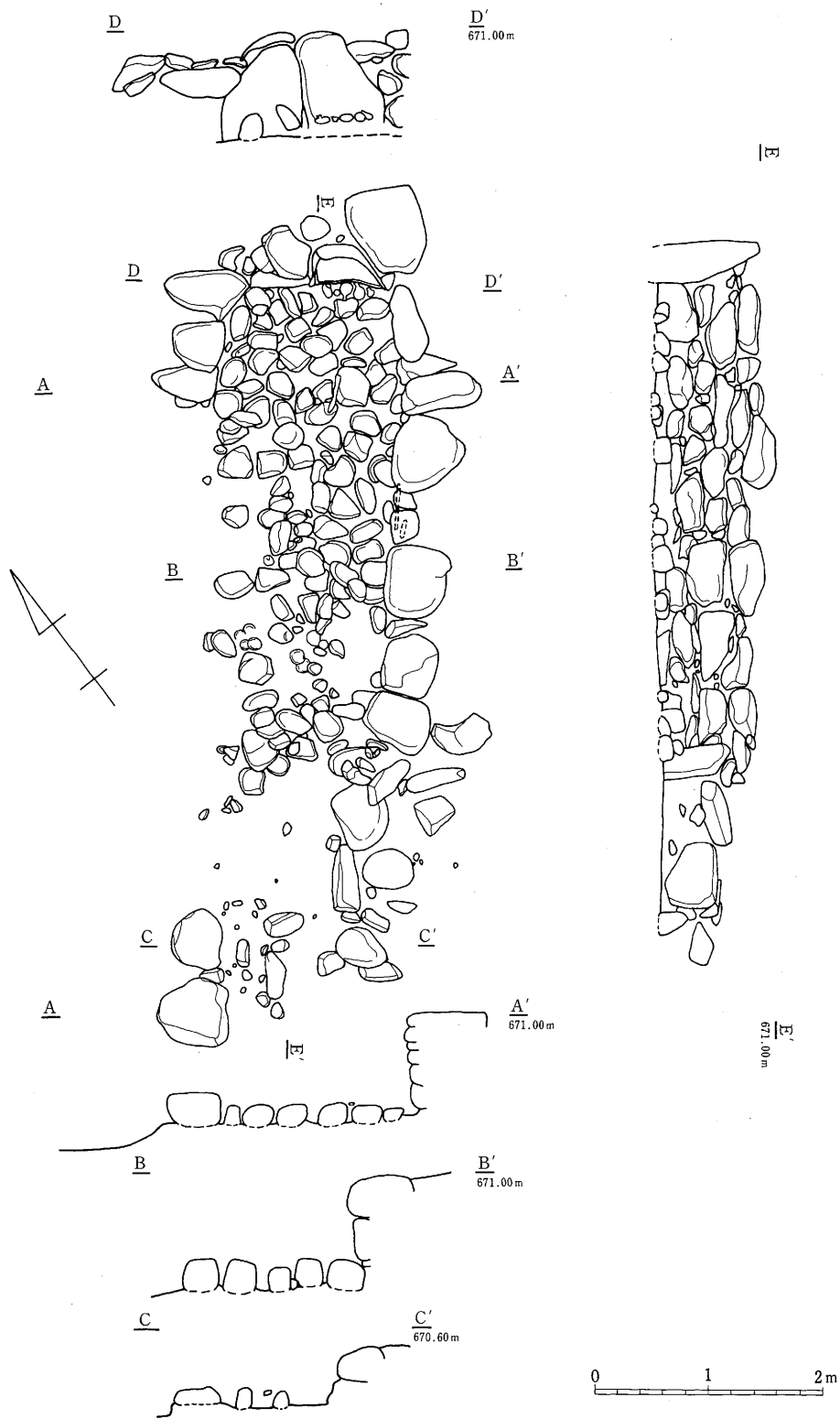
石室南西隅に一部検出された。土坑210を切り、土坑202に切られている。全長は4.44m、幅62~72cm、深さ15~27cmを測り、黄褐色土の地山面に掘込まれている。覆土は暗褐色粘質土である。検出部分のごくわずかに過ぎないが、この周溝の状態から推測すると、径24mの円墳になると思われる。

4) 遺物出土状況

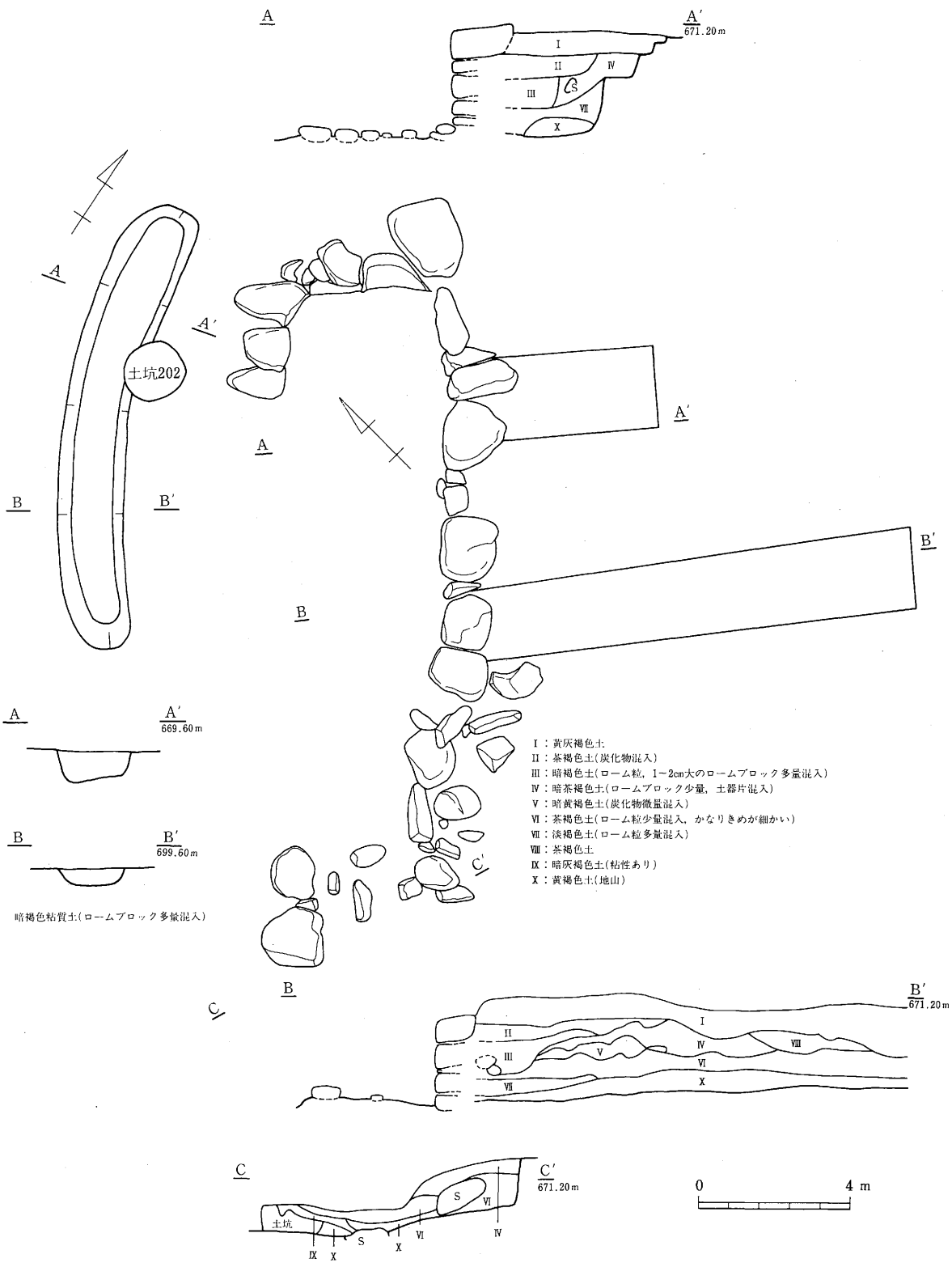
土器は納置された位置で4つに大別される。1) 奥壁脇に置かれたもの、2) 西側壁寄りのもの、3) 玄門寄りのもの、4) 羨道部のものである。1) 高坏、罍、フラスコ瓶、平瓶(1~6)、2) は小有台坏(16)、坏(54・70)、椀(71)、3) は蓋(12~14)、小有台坏(15)、高坏(36)、長頸壺(46)、高坏(65)、4) は蓋・坏(9・19)、有台坏(17・18・25)である。また玄門部・羨道部間での接合資料に畿内系の坏(59)がある。

装身具は疎密の差はあるが、奥壁から羨道部まで出土がある。これらはおよそ4群に大別できる。第1群は奥壁脇、第2群は東側壁寄り、第3群は西側壁寄り、第4群は玄門寄りである。第1群は全体的に高いレベルで出土し、小玉が中心である。第2群は勾玉・白玉・金環がほぼ同一レベルで出土している。第3群は他群と比較してもかなりの密集度であり、勾玉・切子玉が中心である。第4群は第2群と同一レベルでまとまり、小玉が中心となっている。また管玉・平玉・算盤玉が各1点出土している。

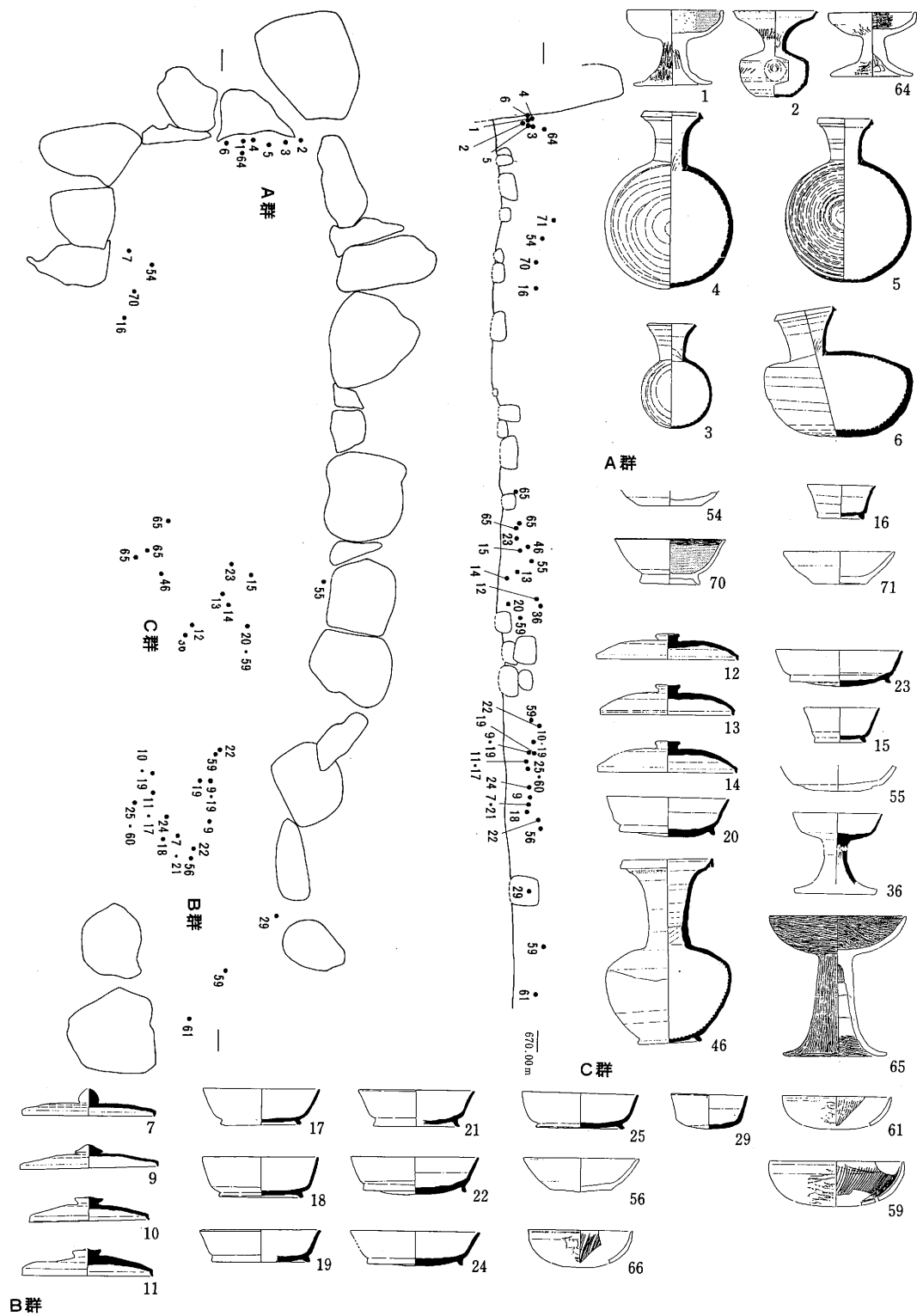
一方、周溝からは検出面で印刻入の青磁碗底部が出土している。覆土中より高坏(37)、平瓶(41、43)、大甕(52)、坏(57)、鉢(58)、土師器の高坏(62、67~69)が出土し、鉸具も1



第41图 南方古墳石室平面図及び断面図



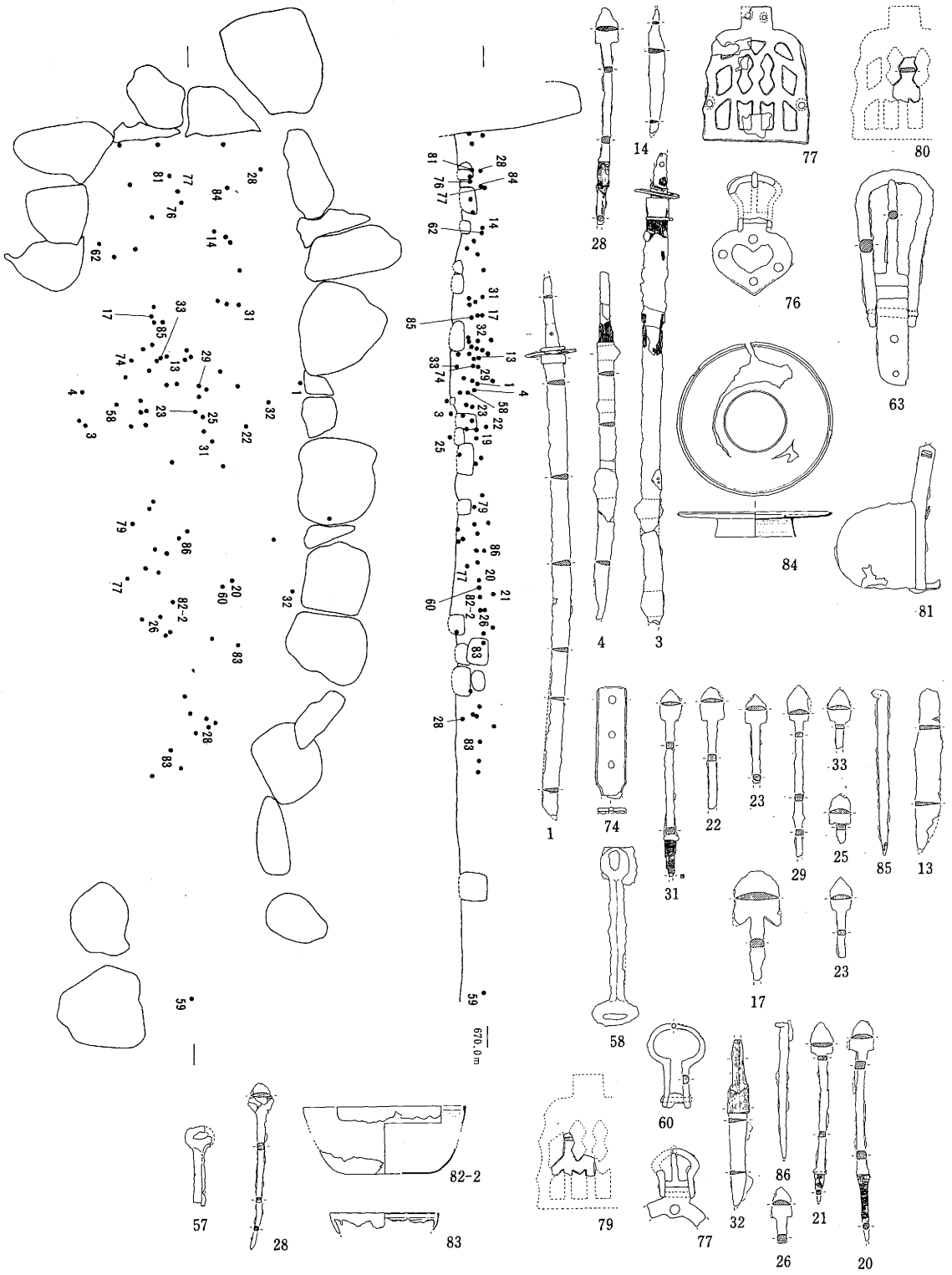
第42図 南方古墳墳丘・周溝平面図及び断面図



第43图 石室内土器出土状况



第44图 石室内装身具出土状况



第45図 石室内金属製品出土状況

点出土している。

金属製品は種別によって傾向をつかむことができる。直刀は奥壁から玄室中央部分で破片散乱の範囲が納まる。しかし現位置を保っているものもあれば、人為的な移動を受けているものもあると思われる。鉄鏃は石室内全体に散乱しているが、集中部分は玄室中央部分である。

馬具は3群に分けることができる。1群は奥壁寄り、2群は玄室中央西側壁寄り、3群は玄門寄りである。1群には壺鐙(81)、杏葉(78)、鉸具付心葉形杏葉(76)、鉸具(63)がある。2群は鈎舌金具(74)、轡(58)、辻金具(70)がある。3群は鉸具(64)、鉸具付心葉形杏葉(77)が出土している。その中で76は1群の77と一対となる可能性がある。また轡(59)は羨道部で単独の出土である。

一方、銅鏡は奥壁寄りで出土した承盤(84)とセットで用いられていたと思われるが、出土位置と接合関係を見ても人為的な移動および破損が考えられる。破片は口縁部片を中心とした2個体分であり、玄室中央から玄門付近まで散乱した状態にある。中でも82-1は口縁部片であるが、明らかに人為的に折り曲げられた様相を呈している。

そのほか角釘が2点(85・86)出土していることから木棺が納置されていた可能性も考えられる。

3. 遺物

§1 土器(第46図～第50図)

石室内、周溝および土坑204から、多数出土した。須恵器を中心に、土師器と若干の灰釉陶器が混じる。73点を図化・提示した。種別・器種は土師器坏(54～61・71)、椀(70)、高坏(1・62～69)、須恵器坏(26・29)、有稜坏(30～33)、有台坏(15～25)、蓋(7～14)、高坏(34～37)、高盤(38)、脚付長頸壺(39・40)、平瓶(6・41・45)、長頸壺(46)、短頸壺(47・48)、フラスコ型瓶(3～5・49)、罍(2・50)、壺(51)、甕(52・53)、灰釉陶器椀(72・73)の多種類にわたる。出土地点別に見ると、石室内(1～36・38・39・42・46・47・49～51・53～56・59～61・63～66・70～73)、周溝(41・43・57・58・62・67～69)、土坑204(40・48)、石室内と周溝で接合したもの(37・52)、石室内と土坑204で接合したもの(45)、周溝と土坑204で接合したもの(44)、となり石室内出土が最も多い。さらに、出土状態と遺存度合いで次に述べるように、A～Dのグループにまとめることができる。それ以外は破片・小片が多く、また組成としての資料的価値も劣る。

第46図は石室奥壁直下に一括してまとめられていた一群である(A群)。土師器の高坏1点(1)、須恵器の罍1点(2)、平瓶1点(6)、小形フラスコ型瓶1点(3)、大形フラスコ型瓶2点(4・5)の計6点で、いずれも完形品であり、意図的に一括納置されたものと判断できる。特に3点のフラスコ型瓶は胎土、焼成、自然釉付着などの状態が酷似しており、同時に生産された製品の可能性がある。

次に、羨道部（B群）と、そのやや奥の石室内（C群）の2か所にも土器の集中が見られた。いずれも遺存状態がよく、前者は須恵器有台坏（17・19・21・22・24・25）、蓋（7～11）、土師器坏（59・60）、後者は須恵器有台坏（20・23）、小有台坏（15・16）、蓋（12～14）、高坏（36）、長頸壺（46）、土師器坏（55・59）、高坏（65）で構成される。これらの中の須恵器有台坏類と蓋には極めて類似する胎土、焼成状態、器形を呈し、同一産地、あるいは同時焼成を想起させるものがある。具体的には、7の蓋と17・18・25の有台坏、10の蓋と21の有台坏、8と9の蓋、12～14の蓋と20・23の有台坏および15・16の小有台坏で、しかもこれらの組み合わせは2か所の土器の集中をまたぐことはない。

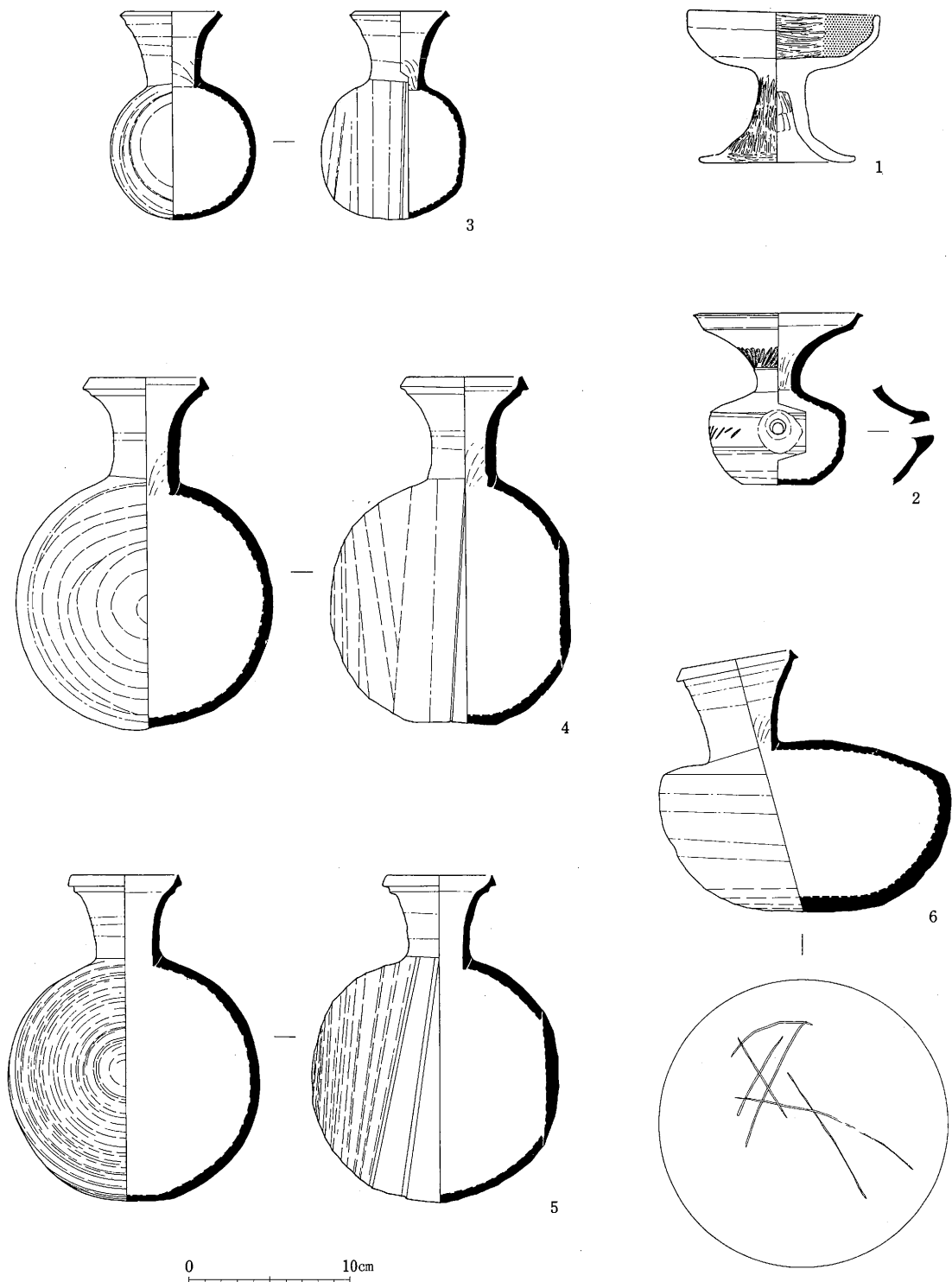
この他に、周溝および土坑204にも若干の土器の集中が見られ、須恵器平瓶、短頸壺、脚付長頸壺が主に出土した（D群）。

以上のように本古墳出土土器は出土地点から見ると基本的にA～Dの4つの群で捉えることができる。各群土器の所産時期は全体的にみると、フラスコ型瓶や脚付長頸壺の様相から見てA群、D群が7世紀中頃～後半に、また有台坏とその蓋が中心となるB群、C群が7世紀末～8世紀初頭に求められると考える。すなわちA群が築造時に近いもの、B・C群は両者に前後差があるかは不明だが、追葬に伴うものとみることができよう。

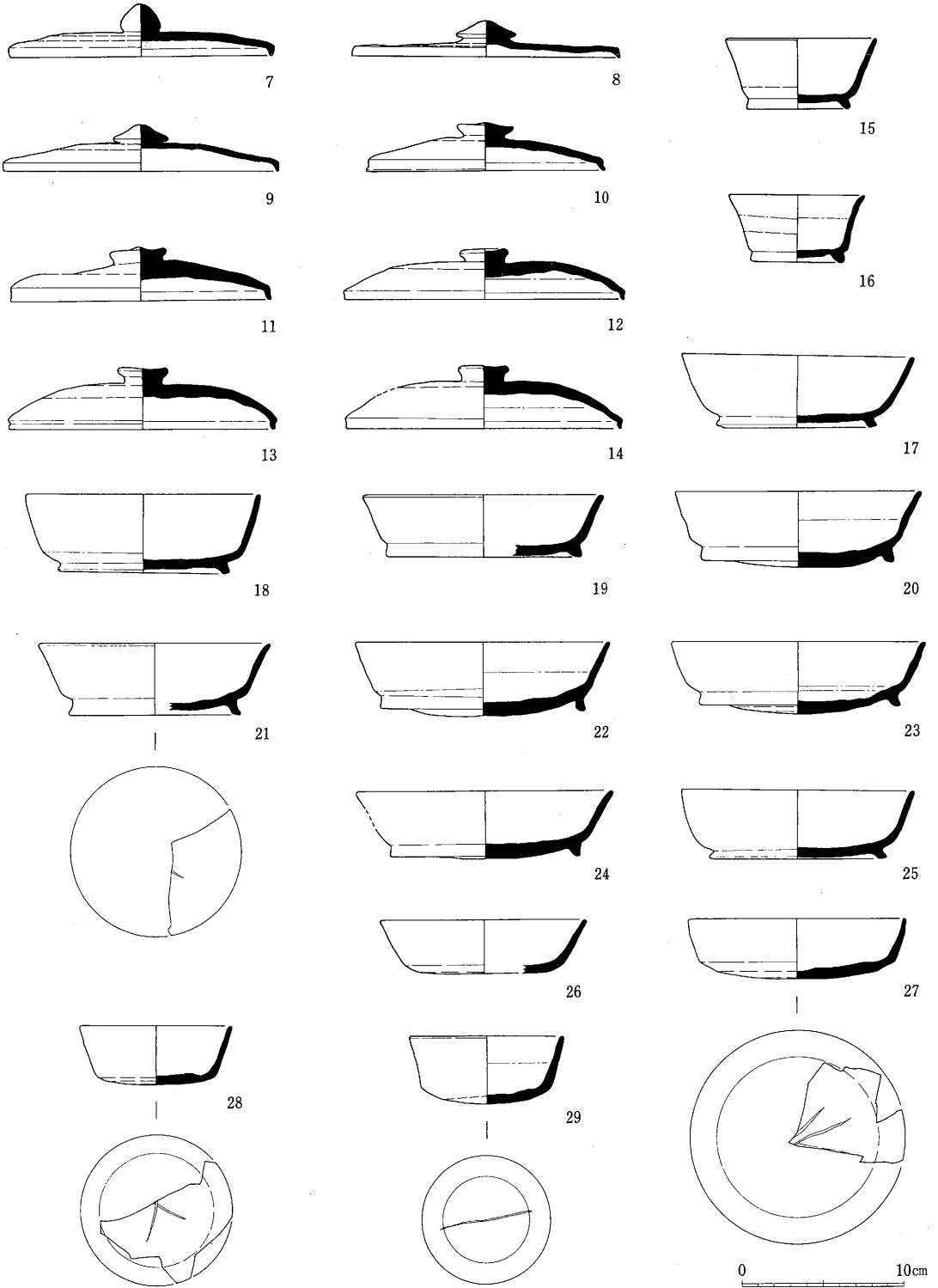
他に、奥壁寄りの石室内覆土中に、10世紀台の土師器・灰釉陶器がまとまって出土した地点があり、横穴式石室の後世の利用に伴うものと推測される。また主に周溝内から、古墳時代中期に遡る土師器高坏（66～69）の出土をみたが、これらが本古墳の築造時期を示すものとする、これに続く土器との間に時期的な断絶がありすぎるうえに、古墳の石室の構造とも矛盾が生じる。

個々の器種で特記すべきものもいくつかある。第50図59～61は畿内系の土師器坏で、3点とも破片であるが特異な胎土と体部内面に一段の斜放射暗文、同底面に螺旋暗文をもつ。復元した器形の径高指数は31前後で7世紀中頃の様相を示すと考えられるが、出土地点からするといずれも羨道部およびそのやや奥の石室内の土器集中に伴っていた可能性が高い。第49図46は丸い肩の胴部を持つ長頸壺で、口頸部が長く、口縁部直下にフラスコ型瓶の同様部分のごとく凸帯が巡り、定型化するこの種の長頸壺の初源的な形態を現わしている。平瓶類は6点を図化・提示してあるが、口縁端部の形態には、稜をもって立ち上がるものと、そのまま収まるものの2種類がみられる。

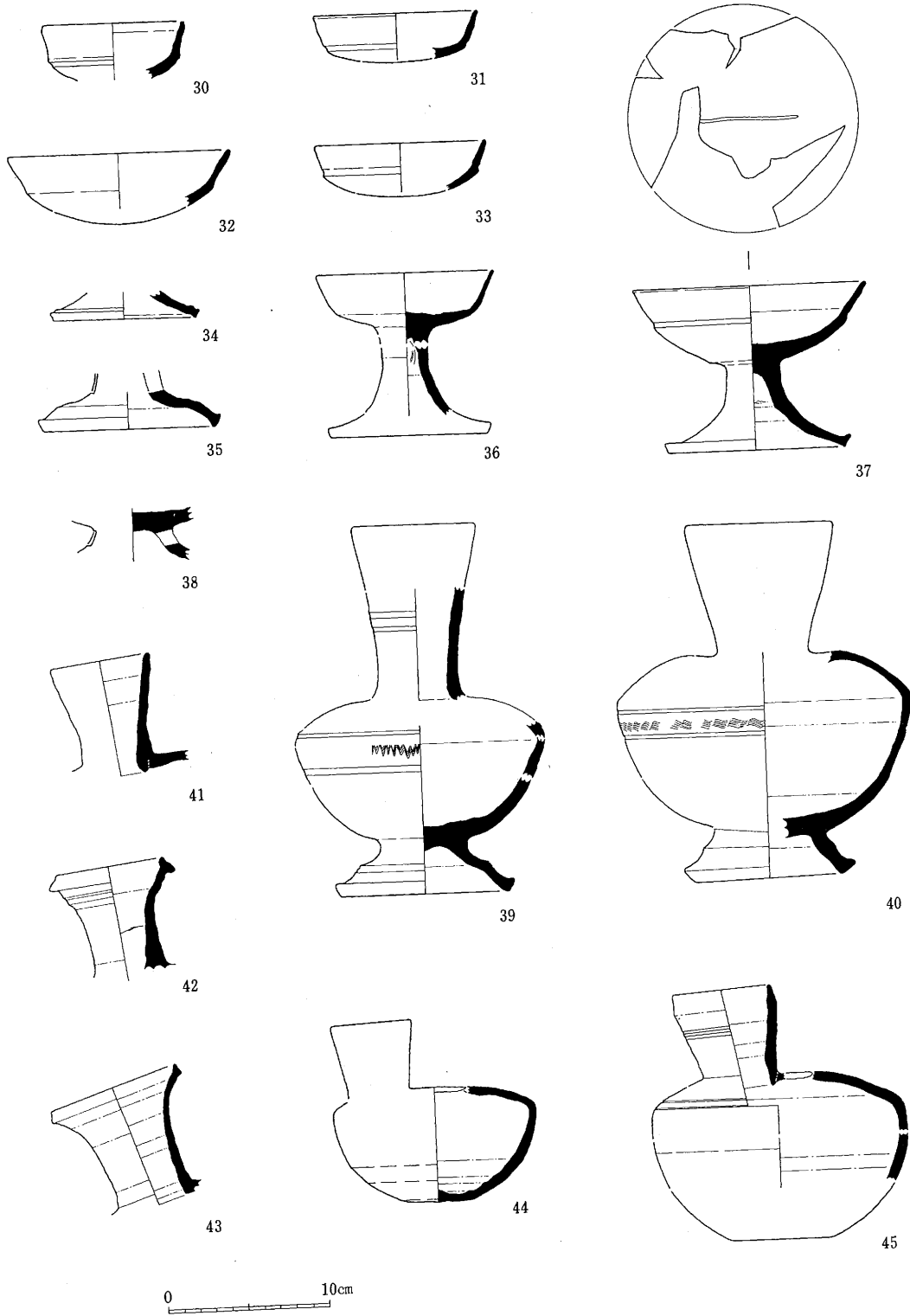
本古墳出土の土器を全体的にみると、須恵器の機種数の多さ、特に壺・瓶類の種類と数の多さが目立ち、典型的な後期後半の古墳の様相を呈しているといえよう。一方、一般的に当地方の末期（すでに8世紀代に入っている）の古墳は出土する土器の器種を急激に減じ、しかも集落遺跡から出土する器種とほとんど変わらなくなるのだが、同期に下る本古墳のB・C群の土器もそれに近い組成となっている。A群とB・C群の土器組成の差は、普及するに従い副葬品としての性格が薄れていく須恵器に替わって、今回同時に出土した佐波理の承盤に象徴される金属製品にその役割が与えられると共に、薄葬化していった状況を如実に物語るものといえる。



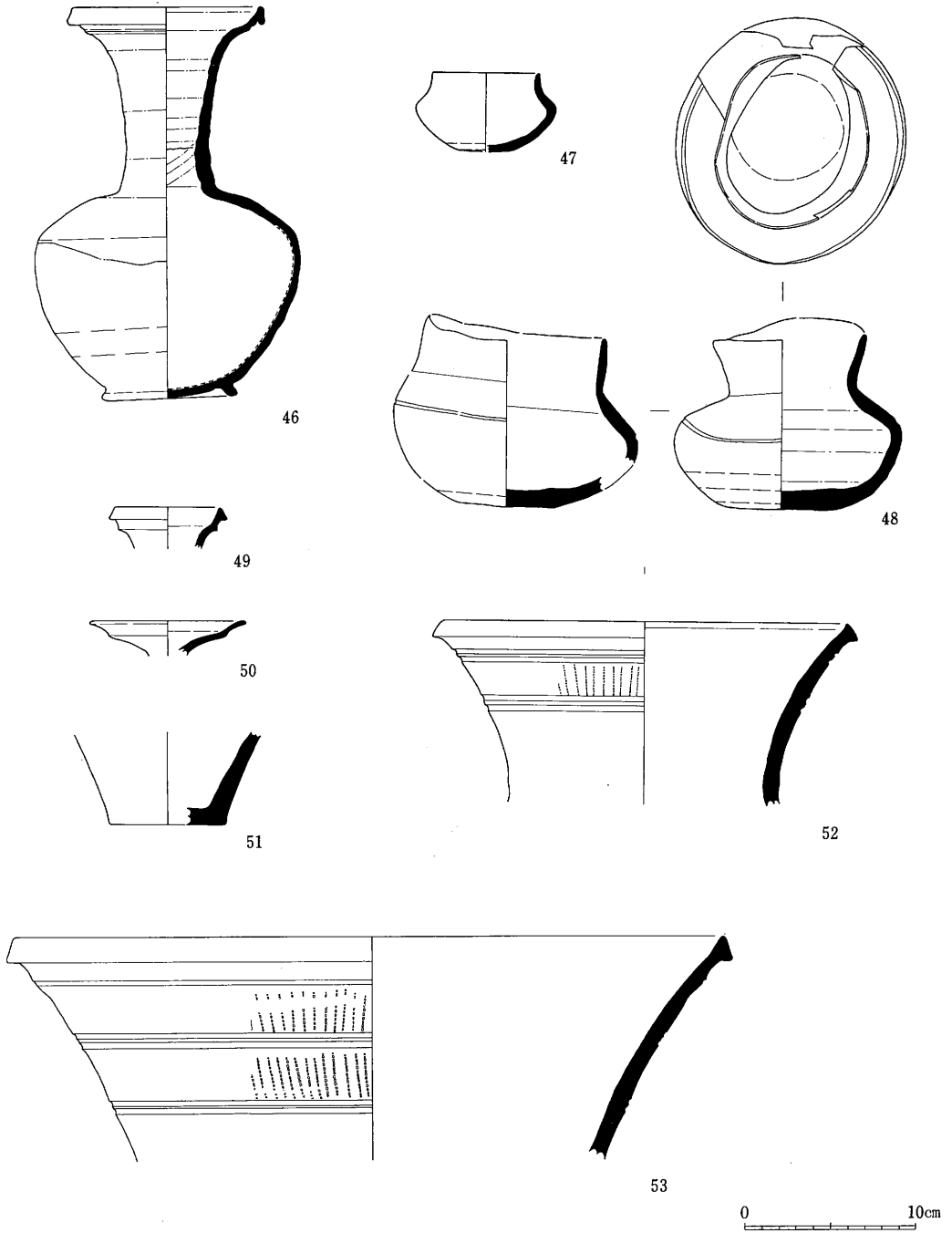
第46图 古墳出土土器(1)



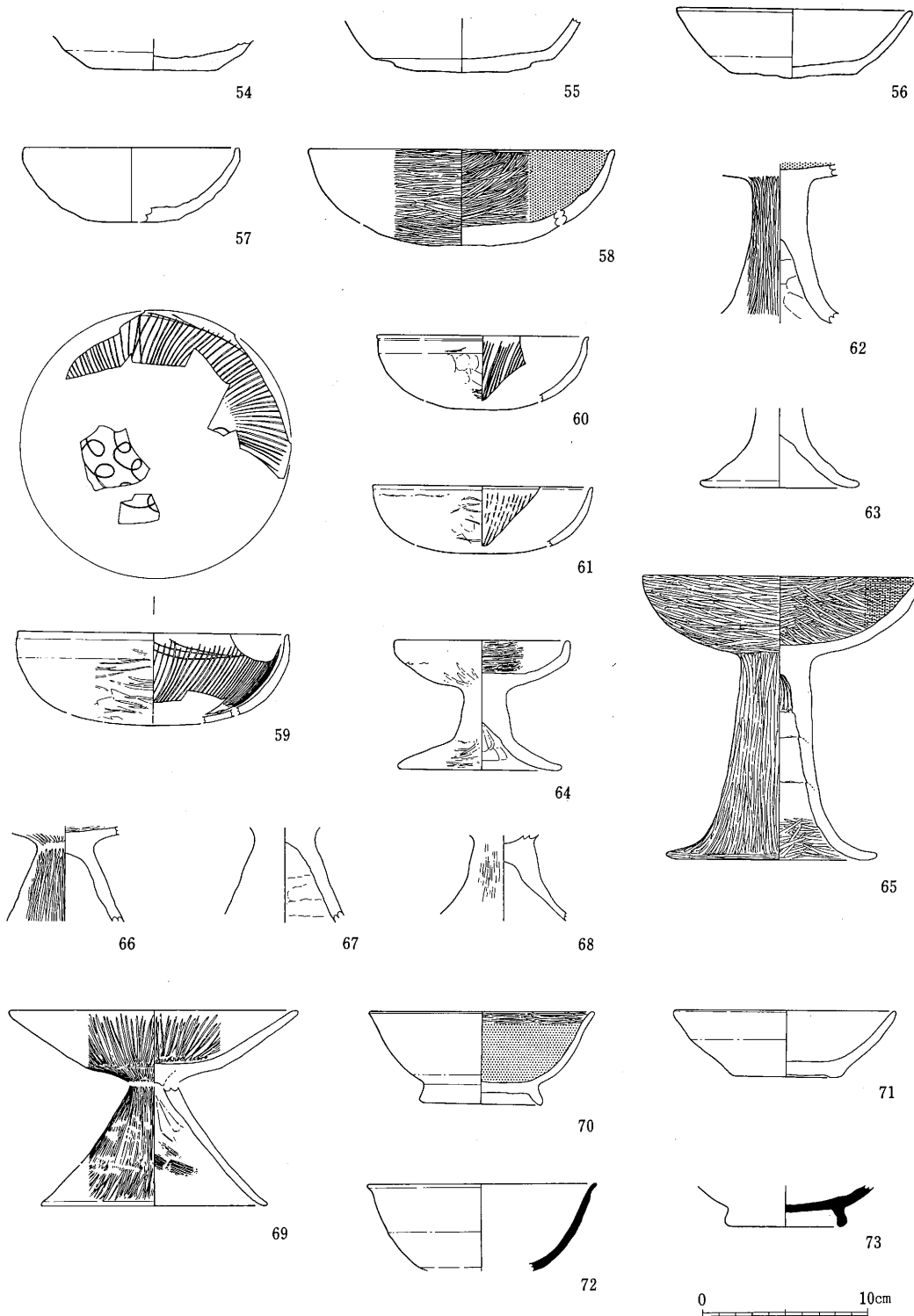
第47図 古墳出土土器(2)



第48图 古墳出土土器(3)



第49図 古墳出土土器(4)



第50图 古墳出土土器(5)

§2. 金属製品・石製品

横穴式石室の内部から多種多量の金属製品と石製品が出土している。このうち装身具については次項で述べることにする。実測については全形をうかがえるもの、特徴的なものを中心に行っている。記述は頁数の関係で種類毎に概要を簡単に記すに留めている。なお、金属製品は完形品がほとんどない上、複合部材からなる馬具等が多いこと、錆のため重量測定の有効性に問題があることなどから一覧表は作成していない。必要と思われる部分の寸法などについては本文中で提示している。

(1) 金属製品

南方古墳の発掘調査で出土した金属製品は以下の通りである。

武器		(馬具)	
直刀	4点(残片数10点)	飾金具(鉄地金銅張製)	1点
刀装具(金銅製)	3点(圭頭太刀の柄頭)	飾金具(金銅製)	1点
刀装具(鉄製)	1点	釣舌金具(鉄地金銅張製)	2点
刀装具(鉄・金銅製)	残片数点	立聞破片(鉄地金銅張製) <small>たちぎき</small>	1点
刀子(鉄製)	3点	鉸具付杏葉(鉄製) <small>かこつきぎようよう</small>	2点
鏃(鉄製)	25点以上(残片約40点)	鐘形杏葉(鉄地金銅張製)	3点
馬具		鎧(鉄製)	1点
轡(鉄製)	2点	食器	
鞞(金銅製) <small>しおで</small>	2点	銅碗(青銅製)	2点
鞞(鉄製)	1点	承盤(青銅製)	1点
鉸具(鉄製) <small>かこ</small>	3点	その他	
鉸具残片(連結棒)	8点	釘(鉄製)	5点(残片数点)
辻金具(鉄地金銅張製)	2点	銭貨(熙寧元宝)	1点

上記のうち、銭貨と釘を除いたものは古墳の副葬品と考えられるものである。これらは大きく武器・馬具・食器とその他の金属製品にわけることができる。以下では種類別に記述していく。

1) 武器

①刀(1~4) 直刀4本が出土している。1は両端をわずかに欠くだけの残存長95.9cmの脰切先の太刀である。刀身部は鏝から82.1cmを計り、刃部最大幅3.4cmである。刀装具は鉄製の3点が装着されている。倒卵形鏝は長9.1cm、推定幅7.0cm、厚さ6mm前後で、4~8mm×2mmの狭長な透かし窓が8箇所^{かこ}に設けられている。鞘口金具は4.4cm×1.6cm、鏝縁金具は4.3cm×3.1cm、厚さ5mmを計る。茎部は残存長13.2cm、幅1.4cm~2.4cmで、目釘が1本打たれている。2は残存長41.7cm、最大幅3.1cmの刀身部片である。錆による剥落が激しく、断面や全体の形状は不明である。3は残存長84.0cmの金銅製の刀装具を伴う装飾太刀である。刀身部は鏝から76cm以上あるが、切先は不明である。六角窓倒卵形鏝は8.1cm×6.0cm、厚さ2mmを計り、鏝の端部には幅3mmの金銅製縁板が巡らされている。

鞘口金具は3.9cm×2.5cmで、鐔と鞘口金具の間には3.6cm×2.3cm、厚さ4.5mmの縁金具がついている。また、鞘口金具に接して、直径5mmの紐通し孔のついた5.0cm×2.7cmの足金具がある。このほかに刀身部の3箇所に金銅板の付着がみられ、鐔側から足間金具、鞘間金具、鞘間飾板と考えられる。特に、鞘間金具周辺には黒色の光沢を帯びる物質が観察されるが、黒漆の可能性を考えている。また、鞘間飾板については円形透かしが2つ残存していた。なお、鞘間飾板から切先側の2箇所に身幅が長くなる部分がある。これについては錆ぶくれとは考えられないことから鉄製の刀装具が装着されていた可能性が考えられる。茎部は7.3cmが残存し、目釘2本が打たれている。4は先端を破損している全長61.7cmの直刀である。刀身部は残存長49.2cmを計る。茎部は12.5cmで、木質部をよく残している。刃関は斜めに切れ込んでいる。刀装具は鉄製で2.9cm×2.3cmの楕円形の金具(8)が伴出している。また、刀身部の3箇所には幅と厚さが大きくなる部分があり、鉄製の刀装具の装着が考えられる。鐔側から鞘口金具・足間金具・鞘間金具が装着されていたと考えている。

②刀装具(5~11) 圭頭太刀の金銅製装具(5~7)が3点出土している。5は柄頭で残存長6.8cm、最大幅5.4cmを計る。鐔側端部から1cmの所に直径8mmの孔が両面にある。6・7は柄頭の端部に接続して装着された刀装具である。6は5.3cm×3.3cm、厚さ2mmの切羽状の金具、7はやや小形で最大幅2.7cmを計る金具である。前述の直刀のうち3だけが金銅製の刀装具を伴っていることから、これらの刀装具は3に伴うものと考えている。8は直刀4に伴っていた刀装具である。このほかに、9~11の刀装具破片を図示している。特に、10・11は内側に木質部が付着していることから鞘または柄に伴う付属具と考えられる。また、図示していないが鉄・金銅製の刀装具の小破片数点が出土している。

③刀子(12~14) 3点が出土している。いずれも武器としては小形品で、工具として扱った方がいいかもしれない。12は現存長11.7cmの両端をわずかに欠くだけのほぼ完形の刀子である。身部は長6.5cm、幅0.7~1.3cmを計る。関から先端にかけて棟側は直線的だが、刃側は急激に幅を減じている。茎部の木質部は良く残っている。関の形状は不明。13は現存長11.4cmであり、4.1cmの短い茎部がつく。関は棟関で、無関の刃側はゆるやかに幅を減じている。身部は最大幅2.0cmを計る。14は先端をわずかに欠くが、現存長8.7cm、身部の最大幅1.1cmの小形刀子である。茎部は1.7cmと短い。両関の刀子で、棟側は直線的に、刃側は外湾しながら急激に幅を減じている。

④鍔(15~57) 鍔の各部の名称については、尖端から関(または逆刺)にあたる部分を「鍔身部」、関から^{のかつぎ}筥被までの部分を「頸部」、筥被から下の部分を「茎部」という術語を使用している。鍔は破片が多くて副葬された点数が確認できない。ただし、個体数を確認することが可能な鍔身部19点・筥被部25点・茎部21点が出土しているので、本来は25点以上の鍔が副葬されていたことがうかがえる。鍔は鍔身部の平面形によって分類することができる。

I類(15・16) 平面形が柳葉状を呈し、無関で鍔身部と頸部の区別がつかない長頸鍔。15は鍔身部~筥被まで11.7cmを計る。筥被は^{とげ}棘筥被で5cm前後の短い茎部が続くと考えられる。16は鍔身部と頸部の境でわずかに幅が減じている。2点とも身幅0.9cm前後の尖根式である。

II類 (17) 先端が尖らない幅広の鎌で、^{たぐり}腸袂をもつもの。鎌身部長4.1cm、最大幅3.4cmで断面が両丸の大形の平根式の鎌である。関から3.3cmの所に最大幅があり筥被と考えられる。

III類 (18・19) 片刃鎌。18は片側辺に刃がつくもので、鎌身部長3.4cm、同幅9.3mmを計る。2点とも筥被以下が不明であるが長頸鎌と考えられる。

IV類 (20~24) 平面形が隅丸の五角形を呈し、鎌身部が逆刺をもたずに関をもつもの。全形をうかがえるものは2点ある。20は鎌身部長2.05cm、同幅1.65cm、頸部長8.6cmの長頸鎌である。棘筥被で先端をわずかに欠くが4.7cmの短い茎部をもつ。21は鎌身部長2.21cm、同幅1.57cm、頸部長8.5cmで、現存長2.2cmのさらに短い茎部がつくものである。鎌身部の断面は錆ぶくれが激しいので断定はできないが平または扁平な両丸と考えられる。

V類 (25・26) 平面形はIV類と同じであるが、小さな逆刺をもつもの。鎌身部と頸部の一部が出土しているだけである。鎌身部長2.10cm、同幅1.45~1.58cmの断面が扁平な両丸の鎌である。

VI類 (27・28) 平面形が五角形を呈し、小さな逆刺をもつもの。28は現存長15.5cmを計り、鎌身部長2.45cm、同幅1.67cm、頸部長8.33cmの長頸鎌で、棘筥被をもっている。鎌身部の断面は平または扁平な両丸である。

VII類 (29~33) 平面形は五角形を呈し、逆刺をもたずに関をもつもの。鎌身部の最大幅は下端でなく、中央よりやや先端よりあることを特徴とする。鎌身部の断面は平または扁平な両丸である。鎌身部長2.14cm~2.52cm、同幅1.41cm~1.65cmを計る。29~31では6.9cm~8.4cmの頸部をもつ。30では端をわずかに欠くが5.7cmの茎部が残存している。

VIII類 (34) 平面形が菱形を呈し関や逆刺をもたないもので、全長11.9cmを計る。鎌身部は長2.18cm、幅1.67cmあるが、錆による破損やゆがみが大きい。筥被はみられず鎌身部以下9.7cmを計る。

上記のほかに頸部以下の破片が多数出土している。35~39は長頸鎌の頸部である。筥被はすべて棘筥被である。茎部については48が唯一先端までを残して4.3cmを計る。なお、頸部には植物質が残っているものが多く、矢柄との装着法が推定できる。残存植物質の断面観察によると、茎部を最初に細い植物繊維で横巻きしてから矢柄を装着し、その上を再び植物繊維で横巻きして矢柄を固定しているようである。

2) 馬具

①轡 (58・59) 2点が出土している。58は引手の部分で長さ12.7cmで、棒状部は1辺0.8~1.0cmの断面方形を呈す。手綱と連結する円環部は幅3.21cm、^{はみ}銜と連結する円環部は幅2.10cmを計る。鏡板は板状のものが残存しているが、小片のため形状は不明である。59も手綱に連結する部分の引手である。58よりも小形で棒状部の断面が1辺0.7cm前後の方形を呈している。

②鞞^{しおで} (60~62) 刺金をもたない円環形式の鞞^{しおで}が3点出土している。60・61は同形式のもので全長6.1cmを計る。円環部は金銅製で最大幅3.9~4.1cmあり、両脚を鉄製の横棒で連結している。連結部には鋌脚を取り付けた痕跡はあるが、脚の長さなどは不明である。62は鉄製で円環部の推定長6.2

cm、推定最大幅4.6cmの^{しおで}鞍である。鋌脚部は破損部まで3.3cmを計る。

③鉸具(63~69) 63は全長15.5cmの大形品で、壺鐙を吊り下げのためのものと考えられる。全長11.3cm、最大幅5.5cm、厚さ9mmのU字形金具の両端を長さ7.6cmのT字形の刺金と横棒で連結したものである。さらに横棒部には幅2.1cm、厚さ2.5mmのU字状の吊下金具を装着している。吊下金具は2箇所^{かこ}に厚さ3.8mmの横棒で連結されている。64・65は刺金をもたない鉸具である。64は全長6.1cm、最大幅4.9cmを計る。1辺8mm前後の断面方形の鉄棒を台形状に折りまげて両端を重ねあわせたもの。65は長8.1cm、最大幅4.8cmで、1辺約6mm四方の断面方形を呈するU字形金具に長さ4.9cm、直径1.2cmの横棒を連結したものである。66~69は鉸具の両脚を連結するための横棒と考えられるものである。いずれも長さ3.0~3.1cmの断面円形の棒状を呈している。構造的には両端がやや太い棒に、薄い鉄板を巻きつけた後、鉄板の両端をほぼ直に折り曲げている。そのため、横からみると花卉様に鉄板が突出している。おそらくはこの部分で、鉸具の両端を留めていたと考えられる。また、横棒に木質部の付着しているものがある(66・69)。また、69は横棒にとりつけた脚部がわずかに残存している。この他に同形式の横棒4点^{かこ}が出土している。

④辻金具(70) 2点^{かこ}が出土している。70は鉄地金銅張製の有脚半球形辻金具であるが、4脚とも接合部で破損している。鉢部は現存部径5.1cm、飾鋌も含めた高さは4.0cmである。鉢部の下半には3条の凹線が巡らされている。頂部には宝珠形の飾鋌がついている。このほかに同形態の鉢部残存片1点^{かこ}が出土している。

⑤飾金具(71・72) 71は鉄地金銅張製。短辺の片側が丸くなる長方形を呈し、鋌2個が打たれており、鋌脚は折り曲げられた状況を呈している。表面の鋌間は1.1cmでわずかに膨らんでいる。72は金銅製で、2段の半球状を呈する残片である。

⑥釣舌金具(73・74) 2点とも鉄地金銅張製。74は現存長7.9cm、幅2.15cmの長方形を呈する。金銅板で2枚を重ねた鉄板を被い、縁部を鉄板の間に折り込んでいる。鋌は3個が打たれていて、鋌間は1.75cmである。下側で屈曲しながら幅を狭めているが全形は不明である。73は同形式の上端部破片である。

⑦立聞(75) 鉄地金銅張製で長方形を呈する。金銅板の縁は鉄板の裏面に折り込まれている。孔の短辺は7mmあるが長辺は不明。上部に鋌留孔の痕跡をもっている。

⑧杏葉(76~80) 鉸具付心葉形杏葉と鐘形杏葉の2種類^{かこ}が出土している。

鉄製の鉸具付心葉形杏葉(76・77)は2点^{かこ}が出土している。身部は長4.7cm、幅5.5cmの一枚作りで内側に輪郭と同様に心葉形の透かしをもつ。上下左右には鋌4個が打たれている。鉸具は長3.5cm、推定幅3.7cmで刺金をもつものである。構造的には鉸具の両脚をT字形の刺金と横棒で連結した後、その間に身部上部の鉄板を通して、裏面へ折り曲げて鋌1個を打ち込んで固定している。

鐘形杏葉(78~80)は3点^{かこ}が出土している。78は立聞をわずかに欠くだけの全長9.7cmの鉄地金銅張製。身部は側辺に3つの稜をもつ8.1×7.4cmの鐘形を呈し、表面には菱形や四辺形の文様があ

る。構造的には台板と立聞付きの透かし文様のある縁金具を重ねて、金銅板で被っている。金銅板の縁は縁金具の裏面に折り込まれている。そして、両側やや下寄りを2個の鉾で留めている。立聞は1.5×2.2cmの方形で2個の鉾で留める形式のものである。79・80はいずれも78と同形式の杏葉の透かし文のある縁金具の残片である。中央の2連の菱形文の一部が重複しているので2つは別個体と判断することができた。

⑨鑑 (81) 鉄製壺鑑が1点出土している。壺部の奥および右側面を破損しているが、全長26.4cm・現存部幅19.0cm・厚さ2.5～3.0mmを計る。構造的には鑑^{みずお}鞆を受ける柄と舌部を伴う輪部に、壺部を挿入して固定している。壺部は高さ15.5cm、内面高13.9cm、幅16.1cmで、底部は平坦面をもっている。踏み込みの補助としての舌は幅13.0cm、奥行4.9cm、厚さ1.0cm前後で、左右9条・前後2条にわたって厚みの薄い部分があり、条と条の交差する部分には方形の穴18個があいている。輪部は幅1.6～2.0cmあり、柄に接続する部分に最大幅がくる。また、輪の前面は平坦であるが、端部から壺部に接する部分にかけては緩く湾曲している。柄は残存長10.4cm、幅2.7～3.0cmの長柄である。先端部の破損面がわずかに突出しており、突起をもっていた可能性がある。鑑鞆受けの孔は1.8×1.0cmの方形を呈し、吊下げ用金具が残存している。

3) 食器

①銅鏡 (82・83) 2点が出土している。82は口縁端部と底部の小破片から器形を復元したもので、推定で直径17.2cm、器高7cm前後の大形の銅鏡である。特に、口縁部は破片6点が出土し、2つの破片に接合できている。このうちの1点(82-1)は口縁部が蛇行状に折り曲がっていて、人為的な破壊・変形を受けていることが明らかである。口縁端部の内面は肥厚している。83は小形の銅鏡で承盤のセットと考えられるもの。直径11.6cmを計る。口縁部から高2.2cmしか残存していないので底部などの形状は不明である。2点とも内面にはロクロを使用した整形痕が観察される。

②承盤 (84) 銅鏡をのせるための器台で、直径16.3cm、器高2.7cmある。口縁の端部は肥厚し、断面三角形を呈する。内側には直径6.5cm、高さ2.5mmの突起が巡っている。脚部は上部径7.9cm、底径8.5cm、高さ2.0cmを計る。内外面にはロクロ使用の整形痕が残る。

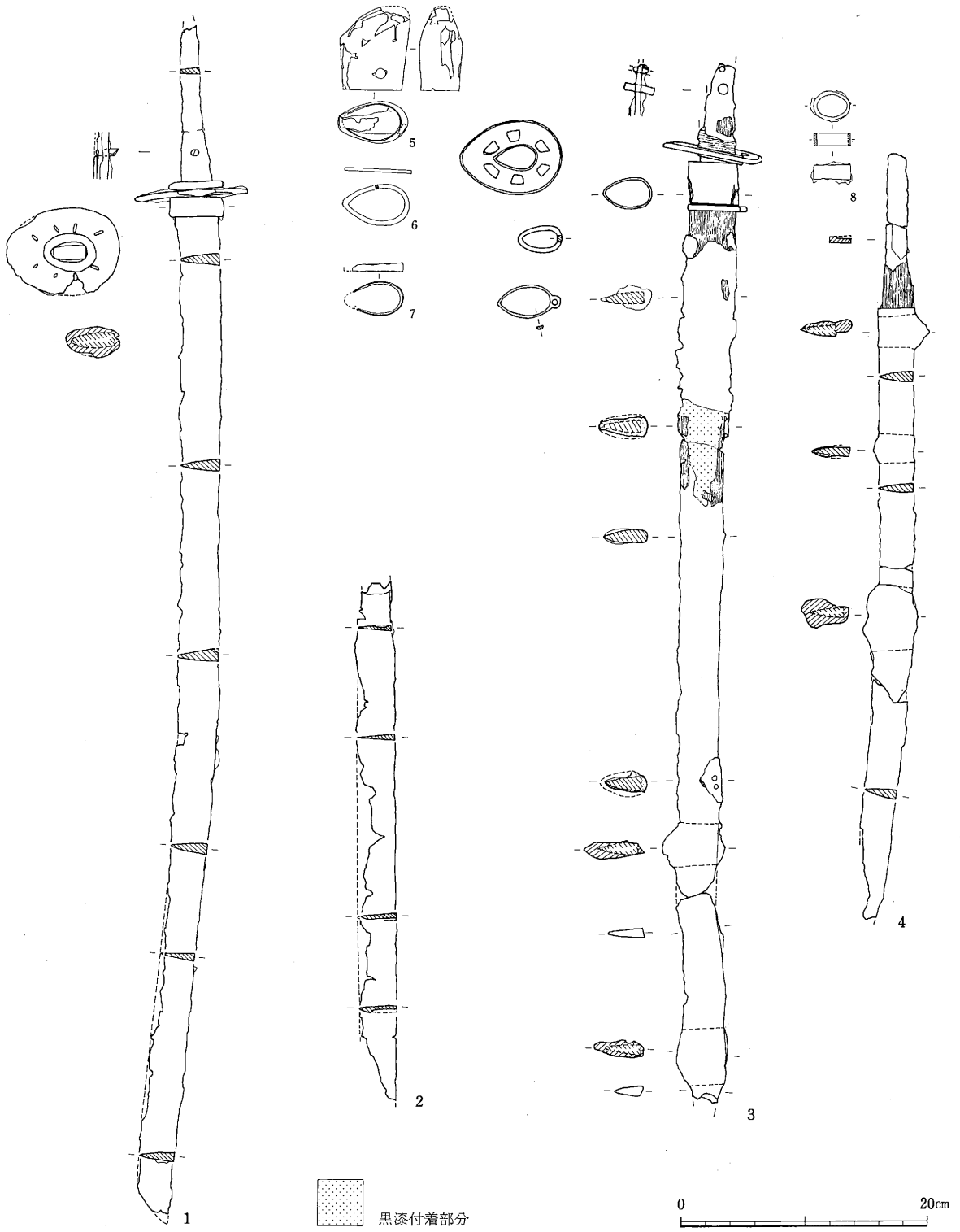
4) その他

①釘 (85～88) 4点が出土している。85は全長11.8cmの完形の角釘、86は尖端をわずかに欠くが長9.6cmの角釘である。いずれも頭部は直角に折り曲げて平坦面が作り出されている。他に両端を欠いた2点がある。88は角釘、87は断面が丸い釘である。

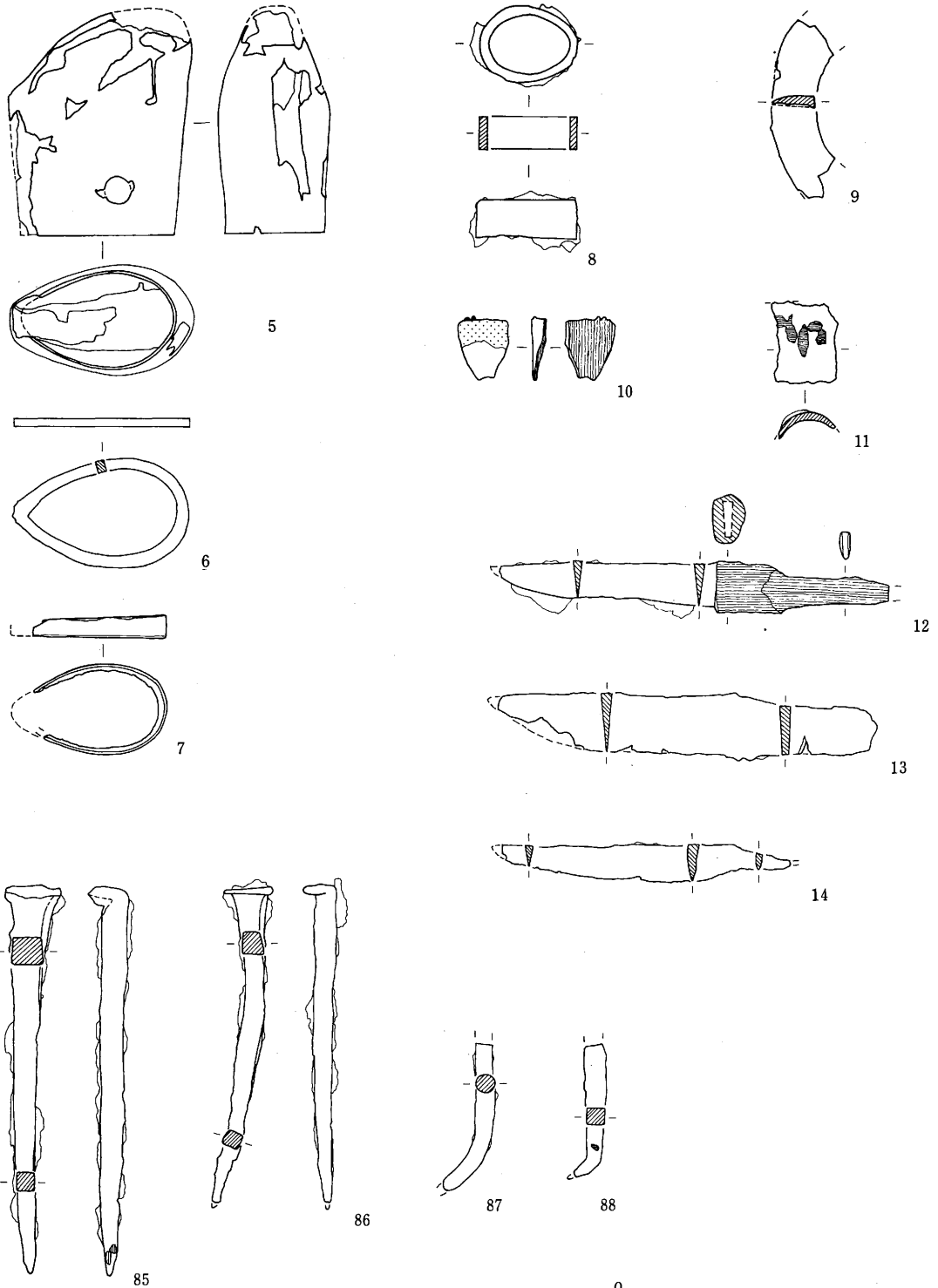
②銭貨 (89) 初铸年1068年の熙寧元宝が石室内の上層から出土している。11世紀後半以降の石室内への侵入者の存在をうかがわせる資料である。周囲をわずかに欠くが直径2.15cmを計る。

(2) 石製品

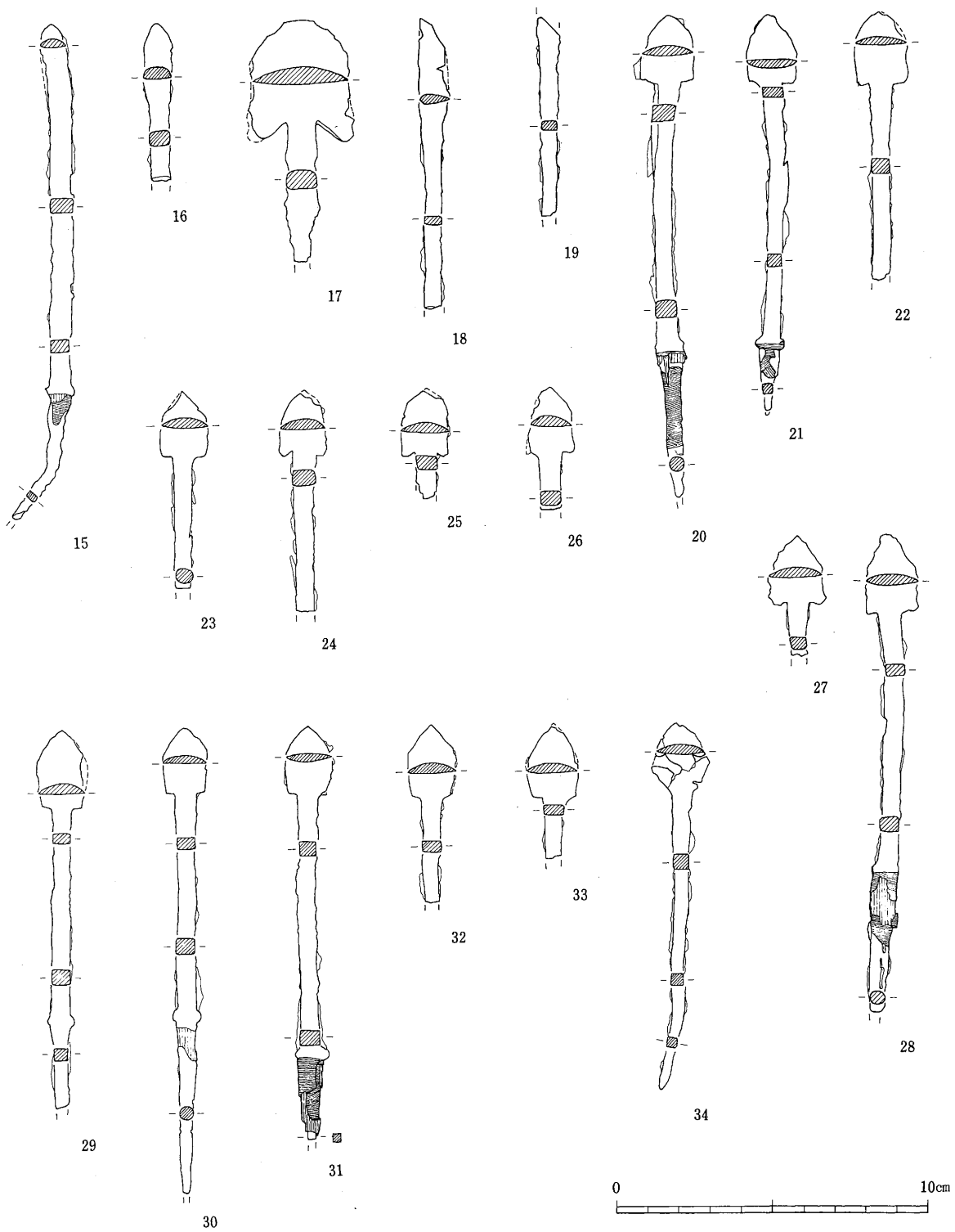
紡錘車 (90) 緑色凝灰岩製で、截頭円錐形を呈するもので、最大径3.8cm、高さ2.3cmを計る。両面穿孔の穴があげられている。表面には研磨による線条痕が観察される。



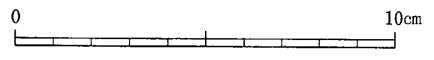
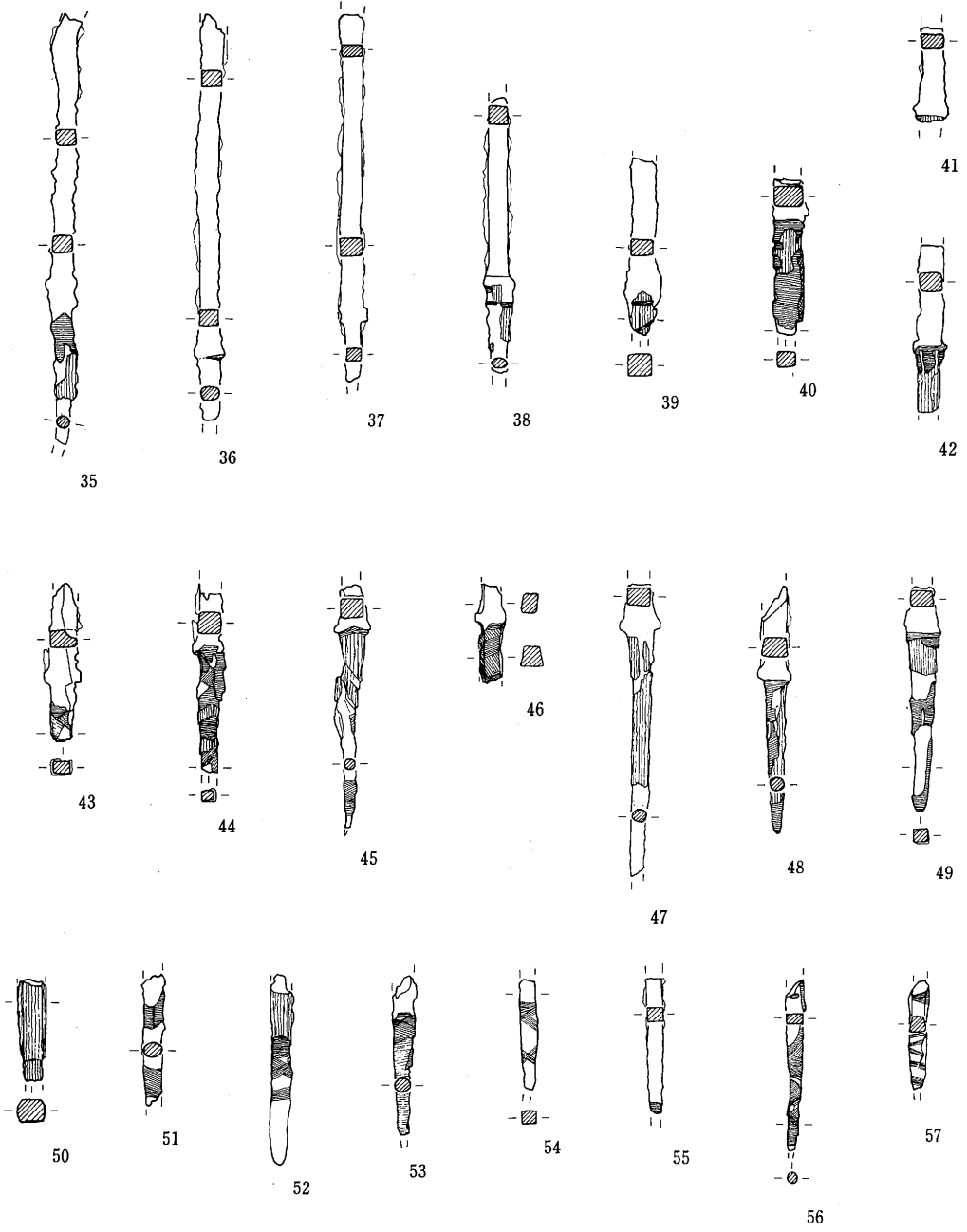
第51図 金属製品(1) 直刀(1~4) 刀装具(5~8)



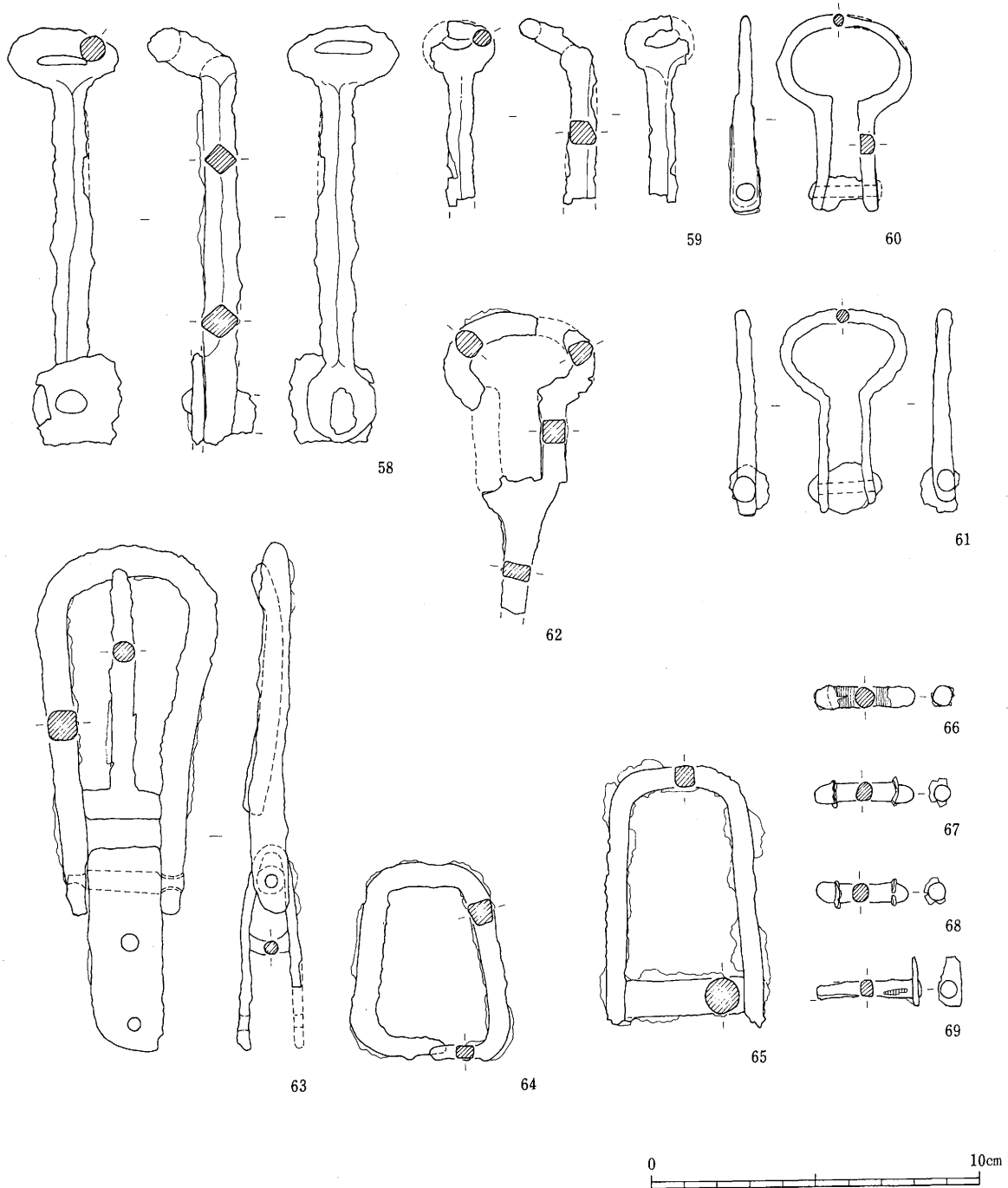
第52図 金属製品(2) 刀装具(5~11) 刀子(12~14) 釘(85~88)



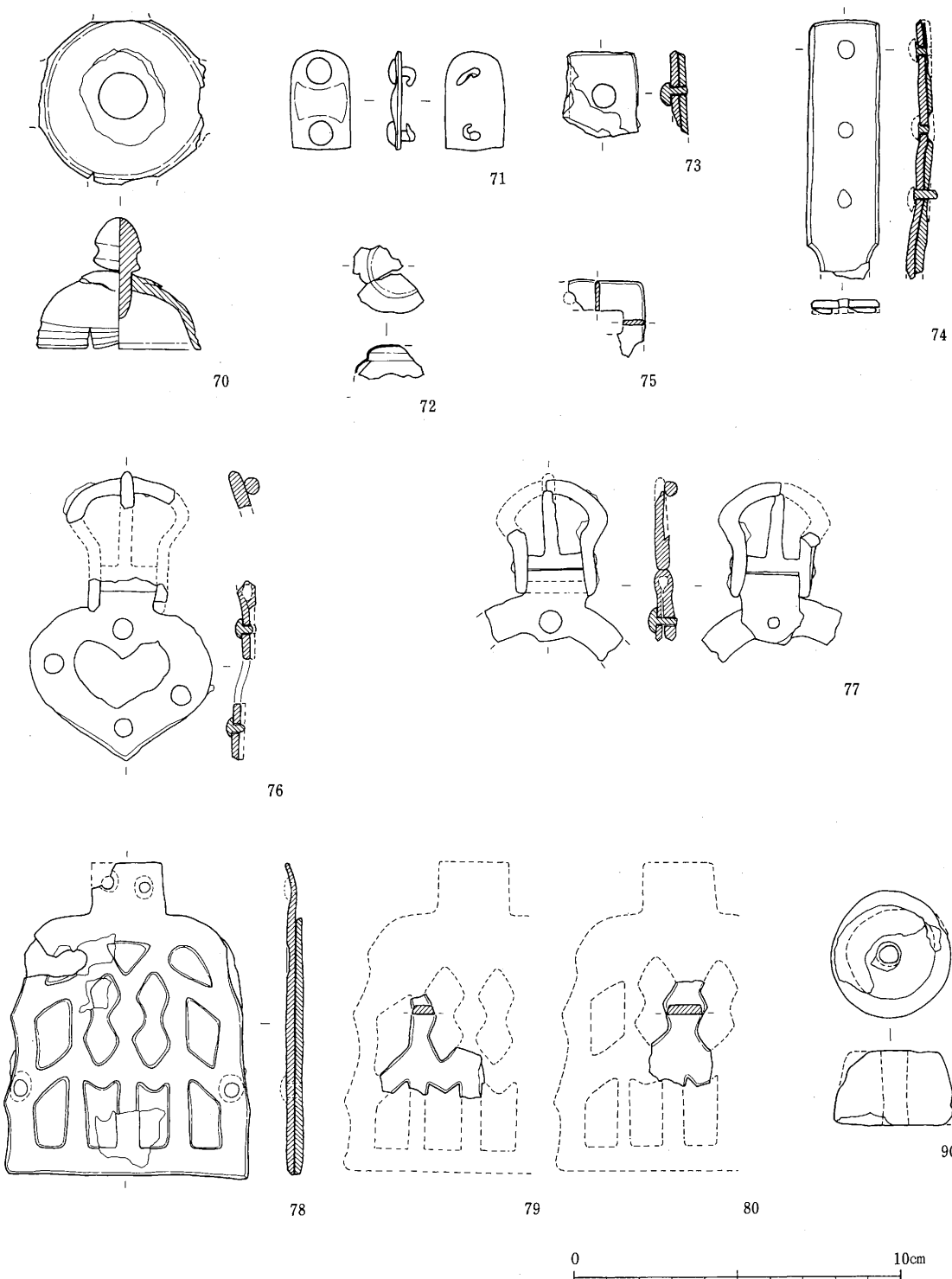
第53図 金属製品(3) 鐵(15~34)



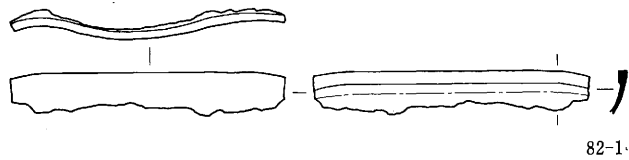
第54図 金属製品(4) 鐵(35~57)



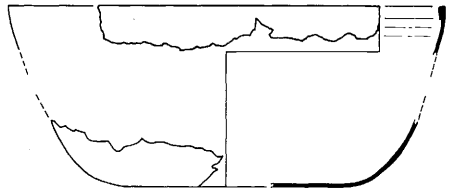
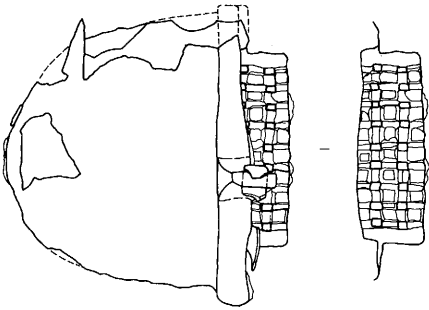
第55图 金属製品(5) 轡(58・59) 鞵(60~62) 鉸具(63~69)



第56図 金属製品(6)・石製品 辻金具(70) 飾金具(71・72) 釣舌金具(73・74)
立聞破片(75) 杏葉(76~80) 石製紡錘車(90)



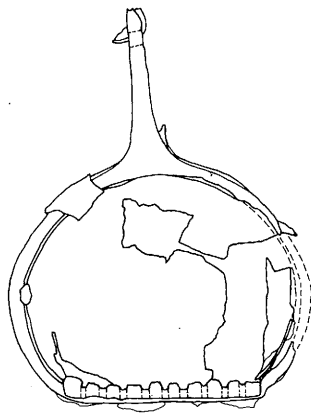
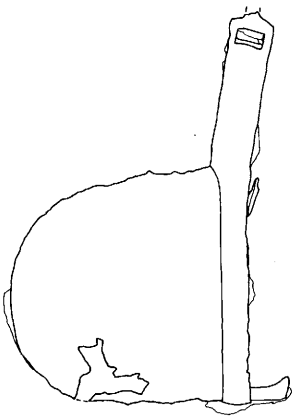
82-1



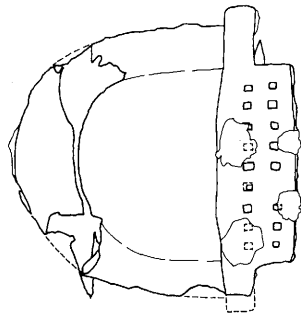
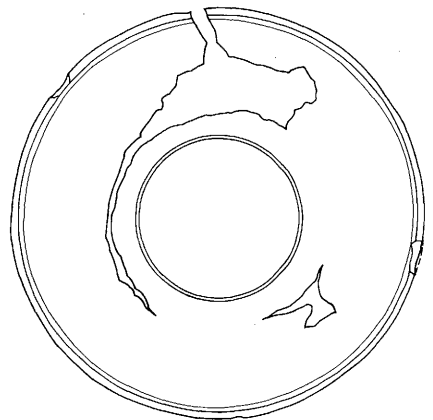
82-2



83



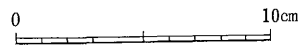
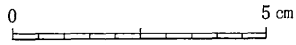
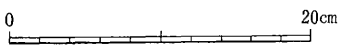
81



84



89



第57図 金属製品(7) 壺鐙(81) 銅鏡(82・83) 承盤(84) 錢貨(89)

§3. 装身具

総計727点（以上）が出土している。このうち原形をとどめている701点について実測・計測を行っている。また、すべてについて寸法・重量・材質等を一覧表に登載している。さらに、ガラス製品の色調については一般的な色名とマンセル色記号を併記して客観的な報告に努めた。

分類は形態別に行ったが、ガラス製品はまとめて扱ったため、丸玉と白玉は石製品とガラス製品の2項にまたがっている。なお、勾玉・管玉はガラス製が各1点しか出土していないので、石製品と一緒に扱っている。記述は頁数の関係で、種類毎の概要を簡潔に記すに留めざるを得なかった。

①耳環（1～6） 6点が出土。1～3・5は金銅環である。銅製の棒を円形に折り曲げた後に、金鍍金している。このうち1は、銅と金箔の間に暗紫色の物質の付着がみられる。2・3は寸法・重量から1対のものである。4は銀銅環である。6は小形の金銅環に知恵の輪状の付属具がつくもので、垂飾付耳環の一部と考えている。このほかに、6の小形金銅環と同径をもつと考えられる小破片が1点出土している。

②勾玉（7～32） 26点が出土している。実測図は左に側面、右に正面図を配している。材質別に記述する。ヒスイ製は3点が出土。いずれも腹側がC字形を呈し、頭部は片面穿孔である。碧玉製は1点が出土。腹側は縦長のC字形を呈し、頭部は片面穿孔である。蛇紋岩製は1点が出土している。腹側はC字形を呈している。頭部は両面を浅くくぼませたのち、両面穿孔で穴をあけている。瑪瑙製は20点が出土。形態的には、ヒスイ製と同様な腹側がC字形を呈して側面に綾をもたないものと、腹側が縦長のC字形またはU字形を呈し側面に綾をもつものがある。頭部の穴はいずれも片面穿孔であるが、後者については片面を浅くくぼませた後に、反対側の面から穿孔しているものが大半を占めている。この2者のあり方については、時期差や製作集団の違い等を考えることができる。ガラス製は1点が出土。風化が激しく表面の大部分は白色化しているが、緑色を呈する鉛ガラス製である。周縁を破損して全形はうかがえないが、腹側はC字形を呈している。

③管玉（33・34） 2点が出土。碧玉製は全長1.41cmの片面穿孔である。ガラス製は風化による白濁化が一部にみられ、鉛ガラスと考えられる。空色を呈し、孔軸に平行する触像が観察される。

④平玉（35） 1点が出土。碧玉製で両面に平坦面をもつ扁平な円盤状を呈する。片面穿孔⁽²⁾。

⑤棗玉（36・37） 2点が出土している。いずれも琥珀製で両面穿孔である。大形の37は全長35.6mm、幅17.9mmで両端が平坦に仕上げられている。

⑥切子玉（38～63） 26点が出土している。いずれも水晶製である。これらは、全長が23～35mmの大形品（38～46）、全長17～21mmの中形品（47～57）、全長15mm未満の小形品（58～63）に分類することができる。孔はすべて片面穿孔である。研磨は孔軸に対し直交する方向で行われる。なお、49は唯一7角形を呈している。また、石室内の覆土中層からは水晶の原石1点が出土している。

⑦算盤玉（64・65） 2点が出土。64は青色のガラス製で内部には散在する気泡が観察される。65は水晶製の片面穿孔のものである。

⑧丸玉（66～74） 9点が出土。両面穿孔の滑石製7点と片面穿孔の水晶製2点（66・74）がある。

⑨白玉（75～84） 10点が出土している。すべて滑石製で大形品（76・78・83）と中形品（82・84）、小形品（77・79～81）がある。

⑩ガラス製玉類（85～701） 丸玉・白玉・小玉が総計617点出土している。これらについては、種類毎に直径と厚さ・色調・表面の触像や内部の気泡の状態³から、さらに小分類を行っている。

（1）丸玉（85～122） 直径6mm、厚さ5mm以上の球形を呈する玉で38点が出土している。

A類（85～104） 青色を呈し、直径11.4～12.6mm、厚さ7.8～9.4mmの大形の一群。薄い青色を呈し孔に対して同心円または螺旋状にめぐる触像が観察されるA1群（85～102）と濃青色でガラスの内部に気泡が散在しているA2群（103・104）がある。

B類（105～110） 緑色を呈し、直径11.5～13.9mm、厚さ8.6～11.2mmの大形の一群。直径13mm未満で透明間のある緑色を呈し、孔に対し同心円状にめぐる気泡列をもつB1群（105～108）と、直径13mm以上で不透明な緑色・青緑色を呈し、内部に散在する気泡をもつB2群（109・110）がある。

C類（111） 直径12.9mm、厚さ9.4mmで、孔の周囲にわずかな平坦面をもち青色を呈する。片側の孔端からU字形に伸びる触像が観察される。内部には気泡が散在している。

D類（112～115） 青色を呈する中形の一群。直径9.8～10.8mm、厚さ8.2～9.0mmの青色を呈し、孔に対して同心円状にめぐる触像をもつD1群（112～113）と直径11.0mm、厚さ8.5mm前後で青紫色を呈すが、触像・気泡が観察できないD2群（114・115）がある。

E類（116） 直径8.8mm、厚さ8.3mmとほぼ球形を呈する青色の丸玉。表面には孔に対し同心円状にめぐる触像が観察される。

F類（117） 直径7.9mm、厚さ3.8mmの薄緑色を呈し、孔に対し螺旋状にめぐる触像が観察される。

G類（118・119） 黄色を呈する丸玉で2点出土している。118は直径7.6mm、厚さ5.4mmの透明感のある黄色で、孔軸に平行する気泡筋が観察される。119は直径6.5mm、厚さ4.9mmのやや小形で、不透明な黄色の丸玉である。触像・気泡の状態は不明である。

H類（120～122） 鉛ガラス製と考えられる、風化による白色化の激しい一群。122はごくわずかに緑色の部分が残っている。

（2）白玉（123～230） 孔軸の両端部に平坦面をもつガラス玉で、108点が出土している。

A類（123～172） 青色を呈し、孔軸に平行する明瞭な気泡筋が認められる大形の一群。直径7.4～10.4mm、厚さ4.8～7.3mmの青色（多）・青紫色（少）を呈するA1群（123～154）と直径7.2～10.2mm、厚さ5.1～7.6mm 青紫色を呈するA2群（155～172）がある。

B類（173～181） 直径5.1～5.8mm、厚さ2.5～4.9mmの小形の白玉である。色調は青・青紫・紫・空色と多彩である。内部には孔軸に平行する気泡列を持つものと点在する気泡が観察されるものがある。点数が少ないため一括で扱ったが、細分可能な一群である。

C類（182～191） 直径5.3～5.9mm、厚さ3.2～3.8mmを呈する。平坦面の稜はB類に比べてなだらか

である。色調は薄青色～青色を呈し、内部には孔軸に平行する気泡列が観察される。

D類 (192～230) 直径5.7～6.7mm、厚さ3.5～6.3mmの中形、緑色を呈する白玉で、A～C類に比較して、やや胴長の感のするもの。内部には孔軸に平行する太くて明瞭な気泡筋が観察される。なお、219は片方の平坦面が突起をもっているが、管状ガラスの切断の際の痕跡と考えられる。

(3) 小玉 (231～701) おおむね直径4mm未満、厚さ3mm未満の小形の玉で471点が出土している。

A類 (231～679) 449点が出土している。このほかに、個体として確認できる小破片24点がある。直径4mm、厚さ2.5mm前後、色調は青色を呈するものが大半であるが、濃淡による違いや薄青緑色・透明感のある空色の小玉も少数ある。内部は気泡列が観察されるものも少数あるが、気泡が散在しているものが大半である。なお、表面には孔端付近が突出し、管状ガラスを切断した痕跡と考えられるものが少数ある。また、表面には微少な突起が観察されるものが多いが、内部の気泡に関係するものと考えられる。

B類 (680～688) 9点が出土。直径3.6～4.4mm、厚さ2.2～3.2mmの透明感のある青・青緑・空色を呈する一群。内部には孔軸に平行または球面のカーブに沿って伸びる気泡筋・列が観察される。

C類 (689・690) 直径3.6～4.2mm、厚さ2.0～2.2mmの不透明の緑色を呈する1群。689の内部には孔軸に平行する気泡筋が観察できる。他に計測・図化不能な1点がある。

D類 (691) 直径4.9mm、厚さ2.2mmの透明感のある淡い灰色を呈している。内部には、孔軸に平行する気泡列が観察される。

E類 (692～701) 孔の両端に平坦面を持つが、直径5mm未満で最大径に対する平坦面の径が、白玉としたものより小さく平坦面の綾も緩やかなもの。青色を呈し、表面には孔軸に平行する触像、内部に孔軸に平行する気泡筋をもつものが多い。

以上、ガラス製玉類を細分したが、これらについては副葬の時期差や製作工人の違い・製作技術の違いなどが反映しているものと考えている。なお、ガラス玉表面の触像や内部の気泡のあり方から、玉の製作方法を推測すると、孔軸に対し同心円または螺旋状の触像が観察されている丸玉のA1・B1・D1・E・F類は、巻付け法によって製作されたと考えられる。なお、A2・B2・D2類も大きさから同様の手法がとられた可能性が強い。また、丸玉G類・白玉・丸玉は孔軸に平行する触像・気泡筋などが観察されることから管切り法によって製作されたと考えられる。

まとめ 南方古墳の700点を超える装身具は、現在のところ松本平で最多である。これらは1人の被葬者に副葬された装身具ではない。土器形式や発掘時の所見から追葬の存在が確認されている。仮に被葬者ひとりにつき金環が2個一対で副葬された場合、垂飾付耳飾り(の付属部)2点を除くと、4種類5点(うち2点は1対のもの)の耳環から4人以上の被葬者の存在が考えられる。

註1 暗紫色の物質については、森義直氏から漆の可能性を指摘していただいた。この場合、漆を使用して金を張る技術的系譜が問題になる。

2 県内では小県郡東部町二子塚古墳、下伊那郡豊丘村家の上古墳で類例の出土がある。

3 ガラス製玉類の用語(触像・気泡筋・気泡列など)は次の文献に依っている。

小瀬康行 1987 「管切り法によるガラス小玉の成形」 『考古学雑誌』第73巻第2号

第7表 装身具一覧表

金属・石製装身具

NO	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	現重量 (g)	孔径(mm)	材質	備考
1	耳環	19.4	20.7	6.6	4.7		金・銅	金銅環
2	"	22.3	24.0	5.9	3.3		"	"
3	"	22.3	23.4	6.3	3.3		"	"
4	"	23.4	(25.6)	6.0	(7.7)		銀・銅	銀銅環
5	"	27.4	29.7	9.5	8.0		金・銅	金銅環
6	"	32.5	15.9	9.0	2.3		"	垂飾付耳飾
	"	(一)	(一)	(一)	(0.35)		"	" ?
7	勾玉	31.2	17.4	8.9	6.1	2.4	メノウ	
8	"	30.6	19.7	10.3	7.5	2.5	"	
9	"	34.3	20.9	10.2	9.0	2.8	"	
10	"	29.1	17.3	7.8	5.3	3.8	"	
11	"	32.7	19.4	9.2	7.2	2.6	"	
12	"	29.9	18.6	9.6	5.0	2.8	"	
13	"	31.2	19.2	9.3	8.0	2.8	"	
14	"	36.2	18.1	8.8	7.3	2.5	"	
15	"	27.6	16.9	9.2	5.6	2.4	"	
16	"	29.3	18.2	12.0	10.4	2.8	ヒスイ	
17	"	30.7	(17.0)	9.7	(6.5)	1.8	メノウ	
18	"	36.6	22.6	10.0	10.5	3.6	"	
19	"	35.1	20.0	9.8	9.1	2.6	"	
20	"	34.1	19.8	10.0	8.4	2.7	"	
21	"	25.8	15.8	8.8	5.7	2.6	ヒスイ	
22	"	30.4	19.3	9.0	7.1	3.0	メノウ	
23	"	36.0	22.6	12.9	15.7	4.5	ヒスイ	
24	"	31.5	17.1	8.9	6.3	2.8	碧玉	
25	"	33.2	18.1	9.3	7.3	3.1	メノウ	
26	"	29.4	15.9	7.4	4.5	2.6	"	
27	"	25.8	16.0	7.0	3.6	2.6	"	
28	"	33.4	20.1	10.2	8.8	3.8	"	
29	"	27.1	(14.9)	7.2	2.3	(4.1)	蛇紋岩	
30	"	23.7	12.8	7.4	2.9	3.0	メノウ	
31	"	29.7	18.5	8.9	6.8	2.7	"	
32	"	(21.1)	(13.6)	(7.1)	(3.4)	(3.0)	ガラス	G (10GY 5/6)
33	管玉	(15.5)	4.5		(0.3)	1.8	"	SB (5 B 6/6)
34	"	14.1	5.5		0.8	1.6	碧玉	
35	平玉	18.5	19.8	10.3	5.85	3.7	"	
36	棗玉	22.0	14.5	12.7	(2.3)	2.8	琥珀	
37	"	35.6	17.9	12.8	(5.3)	5.2	"	
38	切子玉	26.5	17.3	16.2	10.5	4.7	水晶	
39	"	25.9	15.5	14.9	7.3	3.8	"	
40	"	23.7	16.1	14.0	7.6	3.4	"	
41	"	25.4	15.3	13.8	6.8	3.6	"	
42	"	24.0	15.6	14.3	7.5	4.5	"	
43	"	31.0	16.7	16.2	11.3	3.8	"	
44	"	26.0	17.0	15.6	8.9	3.4	"	
45	"	22.9	15.1	14.0	6.3	3.7	"	
46	"	35.4	15.8	14.5	10.2	4.0	"	
47	"	18.2	12.7	12.2	3.6	3.1	"	
48	"	21.1	13.3	11.9	4.1	5.0	"	

NO	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	現重量 (g)	孔径(mm)	材質	備考
49	切子玉	20.0	16.8	15.9	7.1	3.9	水晶	7角形
50	"	19.8	14.6	13.6	4.7	4.6	"	
51	"	18.9	16.0	14.9	6.5	3.8	"	
52	"	20.8	13.5	12.4	4.5	3.8	"	
53	"	(18.8)	(15.2)	(14.3)	(5.2)	3.7	"	
54	"	21.5	13.3	12.2	4.4	3.7	"	
55	"	19.2	12.0	11.1	3.2	3.2	"	
56	"	20.8	14.1	13.2	4.9	4.2	"	
57	"	17.0	12.3	10.8	3.0	3.2	"	
58	"	14.5	3.2	3.0	3.4	4.1	"	
59	"	13.3	10.5	9.7	1.9	3.3	"	
60	"	11.7	10.6	10.3	1.9	3.0	"	
61	"	11.7	11.8	10.8	2.0	3.4	"	
62	"	15.0	11.4	10.8	2.4	3.3	"	
63	"	10.6	9.8	9.2	1.3	3.3	"	
64	算盤玉		10.1	10.1	1.5	3.6	ガラス	B (7.5B 4/6)
65	"		10.1	10.9	1.5	3.3	水晶	
66	丸玉		8.7	7.6	0.8	3.1	"	
67	"		9.3	8.5	0.9	3.4	滑石	
68	"		10.4	9.3	0.9	3.0	"	
69	"		9.9	9.0	1.1	3.0	"	
70	"		8.1	8.2	0.6	2.6	"	
71	"		(10.2)	9.4	(1.0)	2.8	"	
72	"		9.8	9.3	1.1	3.0	"	
73	"		10.1	9.2	1.1	3.0	"	
74	"		12.3	10.3	2.0	3.2	水晶	
75	白玉		9.6	6.8	0.8	2.7	滑石	
76	"		13.4	10.3	2.3	3.5	"	
77	"		7.9	6.3	0.6	2.1	"	
78	"		13.0	10.0	(3.5)	(1.12)	"	
79	"		8.2	6.7	0.55	3.2	"	
80	"		8.6	6.9	0.7	3.0	"	
81	"		10.0	7.6	1.0	3.0	"	
82	"		10.3	6.2	0.95	3.0	"	
83	"		12.5	8.5	1.6	3.3	"	
84	"		11.6	7.8	1.7	3.6	"	

ガラス製玉類

凡例

分類 丸一丸玉、白一白玉、小一小玉 色記号 マンセル色記号

色 B一青、G一緑、Y一黄色、P一紫、BG一青緑、bg一薄青緑、PB一青紫、LG一薄緑、SB一空色、BR一灰色

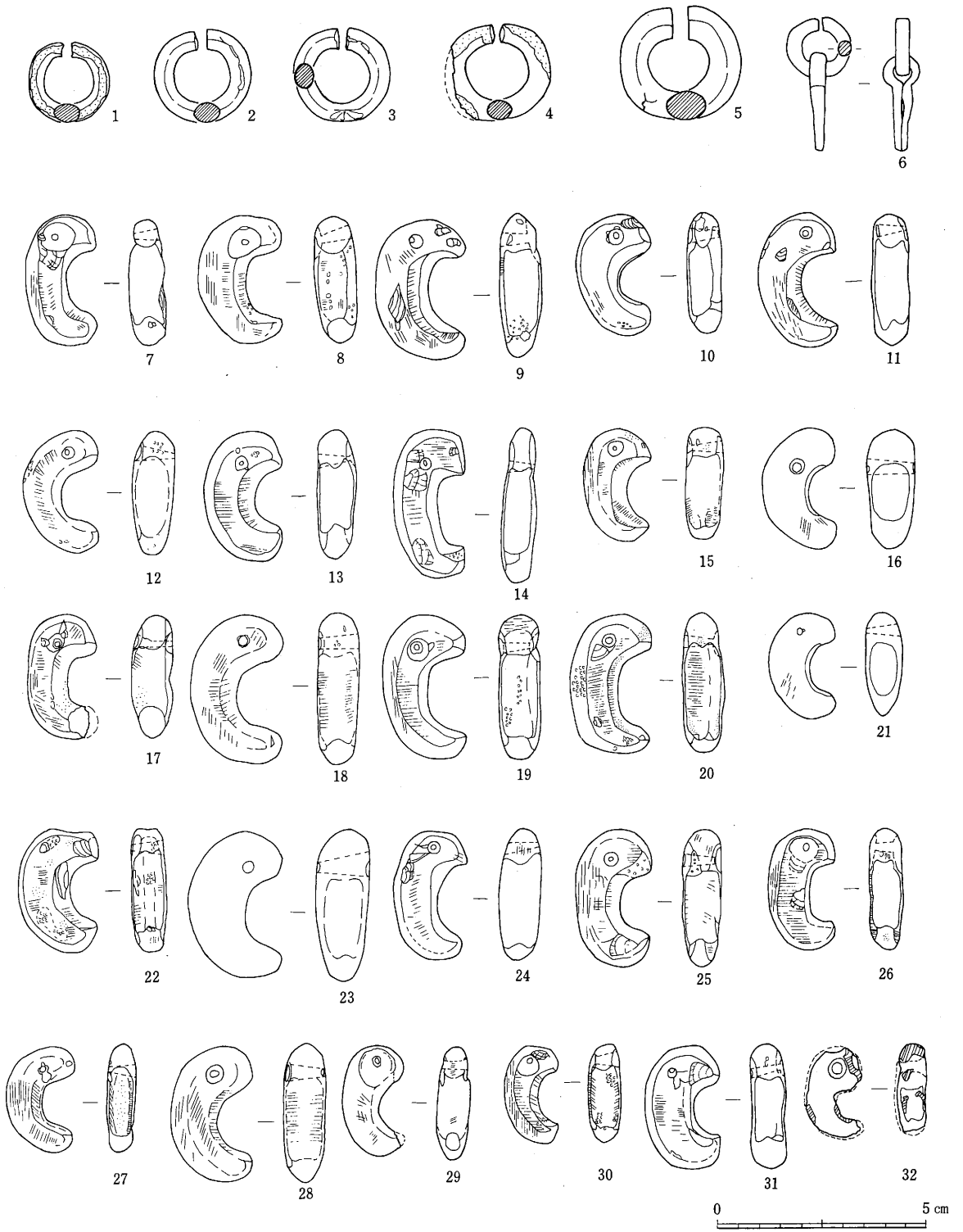
NO	分類	色	色記号	最大径	最大厚	現重量	孔径	NO	分類	色	色記号	最大径	最大厚	現重量	孔径
85	丸A1	B	2.5PB 5/8	12.3	8.9	1.8	3.7	101	丸A1	B	2.5PB 5/8	12.5	8.5	1.7	3.6
86	"	"	"	12.0	8.7	1.6	3.6	102	"	"	"	11.4	8.5	1.4	3.6
87	"	"	"	11.5	8.7	1.5	3.5	103	丸A2	PB	7.5PB 2.5/8	12.0	8.8	1.76	3.6
88	"	"	"	12.0	9.2	1.7	3.5	104	"	B	5PB 3/8	12.4	9.3	1.95	2.3
89	"	"	"	12.1	8.8	1.7	3.6	105	丸B1	G	7.5G 4/6	12.6	11.0	2.3	3.0
90	"	"	"	12.6	9.3	1.9	3.5	106	"	"	"	12.9	11.2	2.4	3.5
91	"	"	"	12.0	8.7	1.6	3.8	107	"	"	"	11.5	9.8	1.7	3.3
92	"	"	"	12.3	9.0	1.7	3.7	108	"	"	"	12.2	10.4	2.1	2.8
93	"	"	"	12.0	9.1	1.7	3.7	109	丸B2	BG	7.5B 3/2	13.3	11.2	2.5	3.0
94	"	"	10B 4/6	11.4	7.8	1.3	2.0	110	"	G	7.5G 4/4	13.9	8.6	2.2	3.9
95	"	"	2.5PB 5/8	12.0	9.3	1.7	3.8	111	丸C	B	5PB 3/8	12.9	9.4	1.8	5.1
96	"	"	"	12.2	8.8	1.6	4.0	112	丸D1	"	5PB 4/10	9.8	8.2	0.8	4.1
97	"	"	"	12.1	8.9	1.6	4.2	113	"	"	5PB 3/8	10.8	9.0	1.3	3.3
98	"	"	"	11.7	8.6	1.5	3.8	114	丸D2	PB	7.5PB 3/10	11.1	8.3	1.4	2.5
99	"	"	"	11.4	9.4	1.5	3.0	115	"	"	"	(11.0)	(8.5)	(1.2)	(3.5)
100	"	"	"	12.7	9.1	1.9	3.3	116	丸E	B	5PB 3/8	8.8	8.3	0.75	2.5

NO	分類	色	色記号	最大径	最大厚	現重量	孔径	NO	分類	色	色記号	最大径	最大厚	現重量	孔径
117	丸F	LG	10GY 7/6	7.9	3.8	0.52	4.3	192	白D	G	5BG 5/8	6.6	4.5	0.25	1.6
118	丸G	Y	5Y 7/8	7.6	5.4	0.37	3.0	193	"	"	"	6.2	5.0	0.2	1.5
119	"	"	7.5Y 8/6	6.5	4.9	0.29	1.3	194	"	"	"	5.8	5.2	0.2	1.7
120	H	?	—	(8.2)	(4.9)	(0.67)	(4.4)	195	"	"	"	6.9	5.3	0.3	1.5
121	"	?	—	(7.5)	(3.9)	(0.29)	(3.6)	196	"	"	"	6.2	6.3	0.35	1.2
122	"	G?	—	(9.4)	(6.1)	(1.15)	(5.2)	197	"	"	"	5.8	7.0	0.35	1.4
123	白A1	B	5PB 4/8	8.2	5.1	0.47	2.3	198	"	"	"	6.5	5.7	0.3	1.3
124	"	"	5PB 4/8	9.0	6.2	0.65	1.7	199	"	"	"	6.3	5.0	0.25	1.5
125	"	"	5PB 3/8	9.2	5.7	0.7	1.8	200	"	"	"	6.5	4.1	0.25	1.6
126	"	"	5PB 4/8	7.5	5.6	0.45	1.6	201	"	"	"	6.1	5.2	0.25	1.8
127	"	"	5PB 3/8	8.3	4.9	0.55	1.8	202	"	"	"	6.4	4.8	0.3	1.4
128	"	"	5PB 4/8	9.1	6.2	0.7	2.4	203	"	"	"	6.4	4.6	0.25	1.4
129	"	PB	7.5PB 3/10	7.4	5.0	0.4	1.6	204	"	"	"	5.7	5.3	0.25	1.4
130	"	B	5PB 4/8	7.8	5.7	0.55	1.8	205	"	"	"	6.1	4.8	0.25	1.5
131	"	PB	7.5PB 3/10	7.8	4.8	0.45	2.0	206	"	"	"	6.7	5.3	0.3	1.8
132	"	"	7.5PB 3/10	8.5	6.4	0.6	1.8	207	"	"	"	6.0	5.1	0.25	1.5
133	"	B	5PB 4/8	8.6	7.0	0.65	1.9	208	"	"	"	6.0	5.4	0.25	1.7
134	"	"	5PB 4/8	7.6	6.0	0.5	1.6	209	"	"	"	6.0	6.3	0.27	1.7
135	"	"	2.5PB 4/8	8.0	4.9	0.45	1.8	210	"	"	"	6.2	3.5	0.2	1.5
136	"	"	2.5PB 5/8	7.1	5.8	0.45	2.0	211	"	"	"	6.2	5.5	0.3	1.3
137	"	"	5PB 4/8	8.8	6.0	0.6	1.6	212	"	"	"	6.2	5.3	0.24	1.8
138	"	"	5PB 3/8	8.9	6.7	0.7	2.7	213	"	"	"	6.1	5.3	0.3	1.4
139	"	"	5PB 4/8	8.3	6.6	0.6	1.8	214	"	"	"	6.3	4.7	0.3	2.1
140	"	"	5PB 3/8	10.4	6.1	0.8	1.8	215	"	"	"	6.2	5.8	0.25	1.7
141	"	"	"	8.5	6.0	0.65	1.4	216	"	"	"	6.6	4.7	0.25	1.7
142	"	"	"	9.4	5.1	0.6	2.2	217	"	"	"	6.2	5.0	0.26	1.6
143	"	"	"	8.3	6.4	0.6	2.4	218	"	"	"	6.0	3.8	0.2	1.7
144	"	"	"	8.0	7.3	0.7	1.8	219	"	"	"	7.2	5.2	0.3	2.2
145	"	"	"	8.5	5.5	0.55	2.0	220	"	"	"	5.9	4.9	0.2	1.7
146	"	"	"	8.3	5.4	0.5	2.4	221	"	"	"	5.9	5.7	0.28	1.3
147	"	"	"	7.5	6.5	0.5	2.0	222	"	"	"	5.7	4.3	0.23	1.8
148	"	"	"	7.9	4.5	0.4	2.0	223	"	"	"	6.3	5.0	0.26	3.0
149	"	PB	7.5PB 3/10	8.3	6.3	0.65	2.2	224	"	"	"	5.7	5.2	0.25	1.6
150	"	B	5PB 3/8	8.1	6.1	0.6	1.8	225	"	"	"	5.7	5.3	0.25	2.1
151	"	"	5PB 4/8	8.5	6.0	0.68	1.8	226	"	"	"	5.9	6.3	0.32	1.8
152	"	"	2.5PB 5/8	7.0	4.9	0.37	2.0	227	"	"	"	6.7	4.8	0.3	2.3
153	"	"	5PB 3/6	9.2	5.8	0.7	1.7	228	"	"	"	6.4	5.0	0.3	1.9
154	"	"	5PB 3/8	8.7	6.2	0.65	1.6	229	"	"	"	6.0	5.0	0.27	1.7
155	白A2	PB	7.5PB 2.5/8	9.7	6.4	0.7	1.8	230	"	"	"	6.3	4.5	0.22	1.5
156	"	"	"	8.5	5.4	0.55	2.3	231	小A	B	2.5PB 5/6	3.9	2.4	0.05	2.0
157	"	"	"	7.8	7.6	0.6	1.7	232	"	"	"	4.1	2.6	0.08	1.3
158	"	"	"	8.9	6.6	0.7	1.8	233	"	"	"	3.9	2.6	0.06	1.5
159	"	"	"	7.7	5.5	0.5	2.1	234	"	"	"	3.9	2.5	0.06	1.4
160	"	"	"	9.1	6.0	0.8	1.8	235	"	"	"	4.0	2.5	0.06	1.7
161	"	"	"	9.2	6.7	0.7	2.0	236	"	"	"	4.0	2.5	0.07	1.5
162	"	"	"	9.3	6.6	0.82	2.6	237	"	"	"	4.0	2.3	0.06	1.2
163	"	"	"	8.6	6.0	0.7	2.1	238	"	"	"	3.9	3.1	0.08	1.4
164	"	"	"	7.2	5.1	0.4	1.9	239	"	"	"	4.1	2.8	0.06	1.4
165	"	"	"	8.3	5.9	0.54	2.1	240	"	"	"	4.1	2.4	0.06	2.0
166	"	"	"	9.2	7.1	0.8	2.3	241	"	"	"	3.8	2.5	0.04	1.5
167	"	"	"	8.5	6.3	0.55	1.6	242	"	"	"	3.9	2.3	0.05	1.8
168	"	"	"	9.2	6.3	0.7	2.2	243	"	"	"	4.0	2.6	0.05	1.8
169	"	"	"	8.1	6.5	0.55	1.8	244	"	"	"	3.8	2.6	0.06	1.0
170	"	"	"	7.3	5.8	0.38	3.7	245	"	"	"	3.7	2.9	0.07	1.4
171	"	"	"	9.6	5.7	0.7	2.0	246	"	"	"	4.0	2.4	0.07	1.7
172	"	"	"	10.2	5.5	0.75	2.5	247	"	"	"	3.7	2.2	0.04	1.5
173	白B	B	5PB 4/8	5.1	4.0	0.14	1.4	248	"	"	"	3.9	2.3	0.06	2.0
174	"	"	5PB 3/8	5.6	4.5	0.18	2.6	249	"	"	"	4.0	2.3	0.06	1.3
175	"	"	"	5.3	3.2	0.14	1.6	250	"	"	"	3.9	2.7	0.08	1.6
176	"	"	5PB 4/8	5.3	4.9	0.21	1.3	251	"	"	"	4.0	2.5	0.06	2.1
177	"	P	10PB 3/8	5.0	3.7	0.13	1.7	252	"	"	"	4.0	2.7	0.07	1.3
178	"	SB	2.5PB 6/8	5.5	3.0	0.14	1.5	253	"	"	"	4.0	2.8	0.07	1.8
179	"	B	5PB 4/8	(5.3)	(4.3)	(0.15)	(1.3)	254	"	"	"	3.9	2.5	0.05	1.5
180	"	PB	7.5PB 3/8	5.8	3.9	0.21	2.0	255	"	"	"	4.0	2.4	0.05	1.5
181	"	SB	2.5PB 6/8	5.5	2.5	0.12	2.4	256	"	"	"	4.1	2.8	0.08	1.2
182	白C	B	5PB 4/8	5.3	3.4	0.14	1.2	257	"	"	"	4.0	2.7	0.07	1.3
183	"	"	"	5.9	3.5	0.16	1.6	258	"	"	"	4.0	2.9	0.07	1.2
184	"	"	5B 5/6	5.6	3.7	0.18	1.4	259	"	"	"	4.1	2.8	0.07	1.6
185	"	"	5PB 4/8	5.5	3.6	0.15	1.3	260	小A	"	"	4.0	2.6	0.07	1.4
186	"	"	"	5.9	3.5	0.17	1.4	261	"	"	"	3.9	2.4	0.06	1.4
187	"	"	5B 5/6	5.5	3.4	0.16	1.35	262	"	"	"	4.2	2.6	0.07	1.3
188	"	"	5PB 4/8	5.4	3.8	0.18	1.0	263	"	bg	2.5B 7/4	3.9	2.2	0.06	1.2
189	"	"	5B 5/6	5.5	3.5	0.16	1.0	264	"	B	2.5PB 5/6	3.9	2.4	0.06	1.7
190	"	"	5PB 4/8	5.6	3.2	0.14	1.25	265	"	"	5PB 4/8	3.7	2.15	0.05	1.3
191	"	"	2.5PB 5/8	5.4	3.5	0.13	1.5	266	"	"	"	3.7	2.1	0.05	1.2

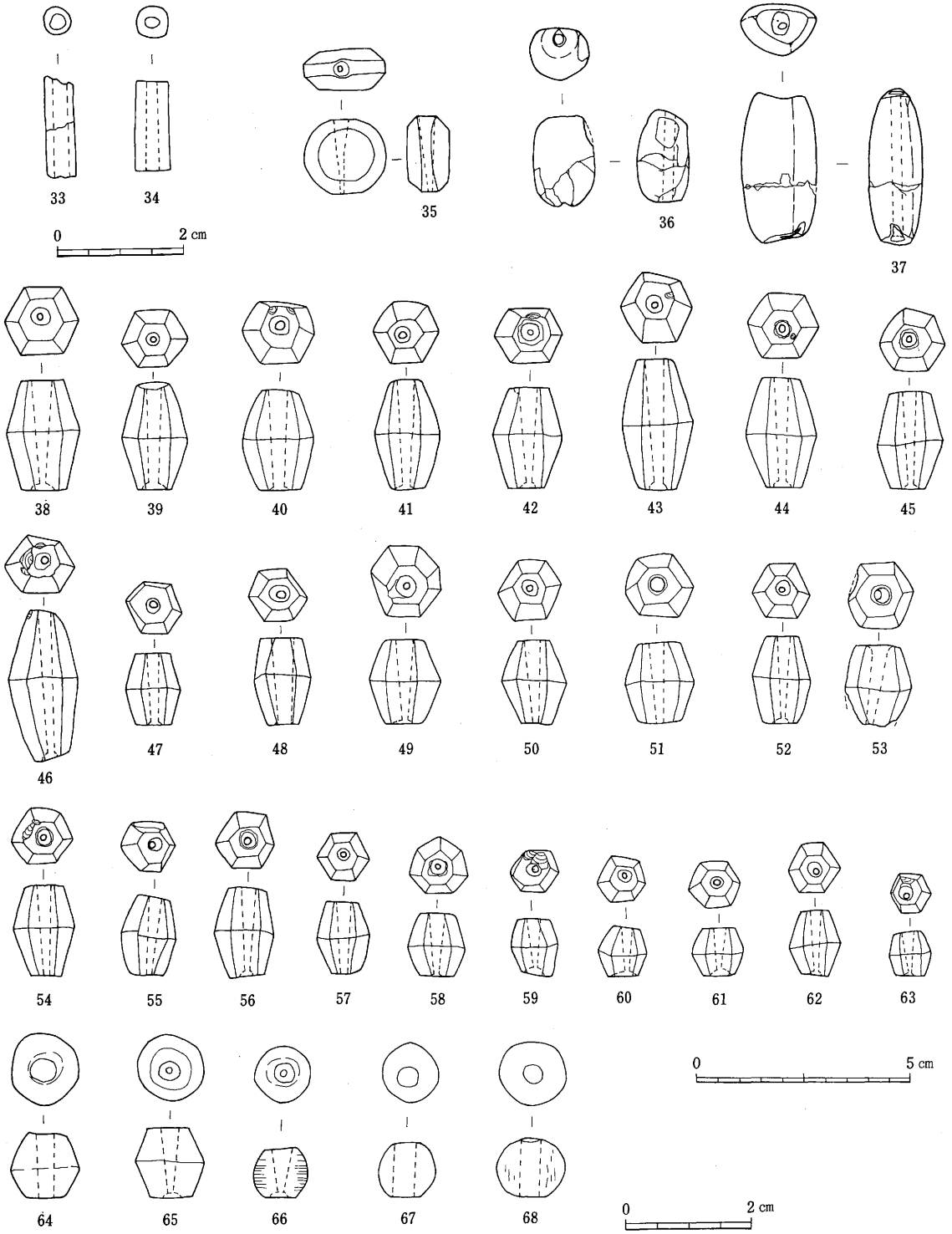
NO	分類	色	色記号	最大径	最大厚	現重量	孔径	NO	分類	色	色記号	最大径	最大厚	現重量	孔径
267	小A	B	5PB 4/8	3.7	1.9	0.05	1.4	342	小A	B	5PB 4/8	3.9	2.6	0.05	1.25
268	"	bg	2.5B 7/4	3.8	2.05	0.05	1.3	343	"	"	2.5PB 5/6	3.8	2.4	0.05	1.5
269	"	"	"	3.8	2.1	0.05	1.2	344	"	"	"	4.1	2.6	0.05	1.3
270	"	B	5PB 4/8	3.7	2.3	0.06	1.25	345	"	"	5PB 4/8	4.0	2.5	0.05	1.3
271	"	"	"	3.8	1.9	0.05	1.4	346	"	"	2.5PB 5/6	4.3	2.6	0.05	1.2
272	"	"	2.5PB 5/6	3.8	2.3	0.05	1.2	347	"	"	5PB 4/8	4.0	2.5	0.06	1.3
273	"	"	"	4.0	2.3	0.07	1.5	348	"	"	2.5PB 5/6	4.0	2.4	0.05	1.0
274	"	"	"	4.1	2.2	0.05	1.5	349	"	"	5PB 4/8	4.2	2.9	0.07	1.0
275	"	"	"	4.0	2.6	0.05	1.2	350	"	"	2.5PB 5/6	4.2	2.4	0.07	1.2
276	"	"	5PB 4/8	4.0	2.4	0.05	1.2	351	"	"	"	4.25	2.6	0.07	1.2
277	"	"	"	3.7	2.0	0.06	1.2	352	"	"	"	4.1	2.8	0.06	1.2
278	"	"	"	4.0	2.1	0.05	1.2	353	"	bg	2.5B 7/4	4.2	2.5	0.06	1.2
279	"	"	"	3.7	(2.6)	(0.05)	1.5	354	"	"	"	4.25	2.7	0.06	1.25
280	"	"	2.5PB 5/6	3.9	2.4	0.05	1.3	355	"	B	2.5PB 5/6	4.4	2.7	0.06	1.5
281	"	"	"	4.0	2.5	0.06	0.9	356	"	"	"	4.1	2.8	0.06	1.25
282	"	"	"	3.9	2.6	0.06	1.2	357	"	"	"	4.3	2.8	0.06	1.1
283	"	"	5PB 4/8	3.7	2.5	0.04	1.2	358	"	"	"	4.2	2.8	0.06	1.4
284	"	"	2.5PB 5/6	3.8	2.5	0.05	1.4	359	"	"	5PB 4/8	4.2	2.8	0.06	1.3
285	"	"	5PB 4/8	3.8	2.0	0.04	1.3	360	"	"	2.5PB 5/6	4.0	2.5	0.06	1.2
286	"	"	2.5PB 5/6	3.9	3.0	0.05	1.3	361	"	"	"	4.0	2.6	0.05	1.4
287	"	"	"	4.4	3.0	0.05	1.5	362	"	"	"	4.5	2.7	0.07	1.3
288	"	"	"	3.9	2.1	0.05	1.4	363	"	"	"	4.1	2.8	0.06	1.2
289	"	"	"	3.8	2.1	0.05	1.2	364	"	bg	2.5B 7/4	4.0	2.2	0.06	1.2
290	"	"	"	4.1	2.5	0.05	1.4	365	"	B	2.5PB 5/6	4.1	2.5	0.06	1.0
291	"	"	"	4.0	2.4	0.06	1.4	366	"	"	"	4.0	2.6	0.06	1.1
292	"	"	"	4.2	2.2	0.06	1.2	367	"	"	"	4.2	3.0	0.06	1.3
293	"	"	"	4.1	2.8	0.06	1.2	368	"	"	"	3.9	2.6	0.05	1.2
294	"	"	"	3.9	2.3	0.05	1.1	369	"	bg	2.5B 7/4	4.2	2.4	0.05	1.2
295	"	"	"	3.8	2.0	0.05	1.4	370	"	B	2.5PB 5/6	4.1	2.5	0.05	1.2
296	"	"	"	4.0	2.3	0.05	1.3	371	"	"	"	4.1	2.5	0.06	1.2
297	"	"	5PB 4/8	3.6	2.5	0.05	1.3	372	"	bg	2.5B 7/4	4.1	2.0	0.05	1.0
298	"	"	"	3.7	2.1	0.05	1.2	373	"	B	2.5PB 5/6	4.1	2.9	0.05	1.1
299	"	"	2.5PB 5/6	3.85	2.2	0.045	1.1	374	"	"	"	4.0	2.4	0.05	0.9
300	"	"	"	4.0	1.9	0.05	1.4	375	"	"	"	4.1	2.7	0.08	1.3
301	"	"	"	4.1	2.5	0.05	1.4	376	"	"	"	4.1	2.7	0.05	1.2
302	"	"	"	3.8	2.7	0.05	1.15	377	"	"	"	3.6	2.4	0.05	1.2
303	"	"	"	4.0	3.0	0.06	1.4	378	"	"	"	3.7	2.7	0.05	1.4
304	"	"	5PB 4/8	3.8	3.0	0.05	1.1	379	"	"	"	3.8	2.6	0.04	1.6
305	"	"	"	4.0	2.3	0.04	1.2	380	"	"	"	3.9	2.5	0.05	1.2
306	"	"	2.5PB 5/6	4.0	2.2	0.05	1.3	381	"	"	"	4.0	2.4	0.06	1.5
307	"	"	"	4.0	2.2	0.05	1.1	382	"	"	"	3.7	2.2	0.05	1.2
308	"	"	"	4.2	2.6	0.06	1.3	383	"	"	5PB 4/8	3.9	2.1	0.05	1.6
309	"	"	"	3.8	3.3	0.07	1.1	384	"	"	2.5PB 5/6	3.4	2.2	0.05	1.2
310	"	"	"	4.0	2.1	0.05	1.0	385	"	"	"	3.8	1.9	0.04	1.5
311	"	"	"	4.0	2.3	0.05	1.2	386	"	"	"	3.7	1.8	0.04	1.4
312	"	"	"	4.0	2.3	0.05	1.1	387	"	"	"	4.3	2.3	0.06	1.4
313	"	"	"	3.7	2.7	0.05	1.2	388	"	"	"	4.5	2.6	0.06	1.3
314	"	"	5PB 4/6	3.7	2.5	0.05	1.1	389	"	"	"	3.8	2.3	0.06	1.3
315	"	"	2.5PB 5/6	3.9	2.4	0.05	1.25	390	"	"	"	4.0	2.2	0.06	1.3
316	"	"	"	4.0	2.2	0.05	1.1	391	"	"	"	4.0	2.9	0.05	1.5
317	"	"	"	3.8	2.8	0.05	1.4	392	"	"	"	(4.8)	3.0	(0.06)	1.2
318	"	"	"	3.7	2.5	0.05	1.4	393	"	"	"	3.9	2.7	0.05	1.2
319	"	"	"	3.8	2.3	0.05	1.2	394	"	"	7.5B 4/6	4.5	3.7	0.08	1.0
320	"	"	"	4.0	2.7	0.06	1.1	395	"	"	"	4.8	3.7	0.08	1.3
321	"	"	"	3.6	2.3	0.05	1.5	396	"	"	2.5PB 5/6	4.1	2.4	0.06	1.3
322	"	"	5PB 4/8	4.0	2.6	0.05	1.4	397	"	"	"	4.1	2.6	0.06	1.3
323	"	"	2.5PB 5/6	3.7	2.0	0.05	1.35	398	"	"	"	3.7	2.3	0.05	1.2
324	"	"	5PB 4/8	3.6	1.7	0.04	1.25	399	"	"	"	4.1	2.3	0.05	1.4
325	"	"	"	3.9	2.3	0.05	1.2	400	"	"	"	4.0	2.4	0.05	1.4
326	"	"	2.5PB 5/6	4.0	2.4	0.06	1.3	401	"	"	5PB 4/8	3.6	1.6	0.03	1.5
327	"	"	"	3.8	2.7	0.05	1.2	402	"	S B	2.5PB 6/8	3.7	2.2	0.06	1.4
328	"	"	"	3.9	3.2	0.05	1.3	403	"	B	2.5PB 5/6	4.7	2.9	0.08	1.5
329	"	"	"	3.7	2.6	0.05	1.15	404	"	"	"	4.0	2.7	0.05	1.1
330	"	"	"	3.9	2.5	0.05	1.4	405	"	"	"	4.1	2.8	0.06	1.3
331	"	"	"	3.9	2.6	0.05	1.4	406	"	"	"	3.9	2.7	0.05	1.5
332	"	"	"	3.85	2.75	0.05	1.4	407	"	"	"	3.9	2.4	0.05	1.4
333	"	"	5PB 4/8	4.0	2.6	0.05	1.2	408	"	"	"	4.0	2.0	0.05	1.4
334	"	"	"	3.95	2.3	0.05	1.3	409	"	"	"	3.9	2.7	0.05	1.5
335	"	"	2.5PB 5/6	3.8	2.15	0.05	1.3	410	"	"	"	3.8	3.0	0.06	1.3
336	"	"	"	3.75	2.3	0.05	1.3	411	"	"	"	3.8	2.7	0.05	1.3
337	"	"	5PB 4/8	3.9	2.1	0.05	1.3	412	"	"	"	3.9	2.7	0.05	1.5
338	"	"	2.5PB 5/6	4.0	2.6	0.05	1.5	413	"	"	"	3.9	2.7	0.05	1.1
339	"	"	5PB 4/8	4.1	2.3	0.05	1.3	414	"	"	"	3.9	2.7	0.05	1.7
340	"	"	2.5PB 5/6	3.8	3.2	0.06	1.0	415	"	"	"	4.0	2.6	0.06	1.7
341	"	"	5PB 4/8	4.1	2.8	0.07	1.3	416	"	"	"	3.8	2.9	0.05	1.4

NO	分類	色	色記号	最大径	最大厚	現重量	孔径	NO	分類	色	色記号	最大径	最大厚	現重量	孔径
417	小A	B	2.5PB 5/6	3.9	2.7	0.05	1.5	492	小A	B	2.5PB 5/6	3.9	2.5	0.06	1.3
418	"	"	5PB 4/8	3.6	2.1	0.04	1.3	493	"	"	"	3.9	3.0	0.06	1.3
419	"	bg	2.5B 7/4	4.3	2.4	0.06	1.5	494	"	"	"	3.9	2.5	0.05	1.6
420	"	B	2.5PB 5/6	4.0	2.2	0.05	1.3	495	"	"	"	3.9	2.4	0.05	1.2
421	"	"	"	4.3	2.8	0.05	1.7	496	"	"	"	3.9	2.6	0.05	1.1
422	"	"	"	4.2	2.6	0.06	1.1	497	"	"	"	4.4	2.7	0.06	1.3
423	"	"	"	3.7	2.4	0.04	1.2	498	"	"	"	4.1	2.8	0.07	1.4
424	"	"	"	3.7	2.3	0.04	1.6	499	"	"	"	4.1	2.3	0.06	1.4
425	"	"	"	4.0	2.8	0.05	1.2	500	"	"	5PB 4/8	3.9	2.35	0.07	1.2
426	"	"	"	3.8	2.3	0.05	1.2	501	"	"	2.5PB 5/6	3.9	2.6	0.06	1.5
427	"	"	"	4.2	2.9	0.07	1.3	502	"	bg	2.5B 7/4	4.2	2.2	0.07	1.2
428	"	bg	2.5B 7/4	3.8	2.2	0.04	1.2	503	"	B	2.5PB 5/6	4.3	3.0	0.09	1.4
429	"	B	2.5PB 5/6	3.8	2.5	0.05	1.5	504	"	"	5PB 4/8	3.6	2.8	0.06	1.3
430	"	"	5PB 4/8	3.8	1.9	0.05	1.3	505	"	"	2.5PB 5/6	3.9	3.0	0.07	1.2
431	"	"	2.5PB 5/6	4.0	2.1	0.05	2.2	506	"	"	"	4.2	2.9	0.07	1.7
432	"	"	"	4.0	2.9	0.07	1.4	507	"	"	"	4.2	2.9	0.08	1.3
433	"	"	"	3.9	2.3	0.05	1.5	508	"	"	"	4.8	3.0	0.10	1.5
434	"	"	"	4.0	2.8	0.05	1.7	509	"	"	"	4.3	3.0	0.09	1.2
435	"	"	"	4.2	2.2	0.05	1.2	510	"	"	"	4.1	2.5	0.08	1.3
436	"	"	"	4.0	2.3	0.05	1.7	511	"	"	"	4.5	2.7	0.08	1.7
437	"	"	"	3.5	2.2	0.05	1.5	512	"	"	"	4.0	2.6	0.07	1.2
438	"	"	5PB 4/8	3.3	1.6	0.03	1.7	513	"	"	"	4.2	2.7	0.07	1.4
439	"	"	2.5PB 5/6	3.9	2.3	0.05	1.8	514	"	"	"	4.1	2.6	0.08	1.4
440	"	"	"	3.9	2.7	0.05	2.0	515	"	"	"	4.1	2.4	0.08	1.5
441	"	"	"	4.1	2.7	0.06	1.5	516	"	"	"	4.4	2.6	0.06	1.4
442	"	"	"	3.9	2.5	0.05	1.9	517	"	"	5PB 4/8	3.9	2.0	0.06	1.5
443	"	"	"	4.1	2.1	0.05	1.4	518	"	"	2.5PB 5/6	4.3	2.9	0.07	1.4
444	"	"	"	4.1	3.1	0.07	1.1	519	"	"	"	4.3	2.6	0.07	1.5
445	"	"	"	3.9	2.9	0.06	1.4	520	"	"	"	4.5	3.0	0.08	1.9
446	"	"	"	4.3	2.8	0.05	1.4	521	"	"	"	3.9	2.3	0.05	1.2
447	"	"	"	3.9	2.2	0.05	1.4	522	"	"	"	3.8	2.0	0.04	1.2
448	"	"	"	3.8	2.6	0.04	1.5	523	"	"	5PB 4/8	4.3	2.2	0.05	1.2
449	"	"	"	4.0	2.7	0.05	1.6	524	"	"	2.5PB 5/6	3.8	2.4	0.05	1.7
450	"	"	"	4.0	2.7	0.05	1.7	525	"	"	"	3.8	2.8	0.06	1.1
451	"	"	"	4.1	2.7	0.06	1.4	526	"	"	5PB 4/8	3.7	2.2	0.05	1.5
452	"	"	"	4.0	2.7	0.06	1.6	527	"	"	2.5PB 5/6	4.1	2.6	0.07	1.2
453	"	"	"	3.9	2.5	0.05	1.1	528	"	"	"	3.9	3.0	0.07	1.8
454	"	"	"	3.9	1.9	0.04	1.3	529	"	"	"	3.7	2.0	0.04	1.3
455	"	"	"	3.7	2.1	0.04	1.2	530	"	"	"	4.4	2.5	0.05	1.9
456	"	"	"	4.0	2.4	0.05	1.6	531	"	"	"	4.3	2.6	0.07	1.5
457	"	"	"	4.1	2.7	0.05	1.2	532	"	"	"	4.2	2.6	0.05	1.5
458	"	"	"	4.1	2.8	0.05	1.2	533	"	"	"	4.2	2.3	0.05	1.8
459	"	"	"	2.6	4.1	0.05	1.7	534	"	"	"	4.2	2.9	0.07	1.3
460	"	"	"	4.1	2.8	0.05	1.5	535	"	"	"	4.2	2.7	0.06	1.5
461	"	"	"	3.9	2.5	0.05	1.3	536	"	bg	2.5B 7/4	3.9	1.8	0.04	2.0
462	"	"	"	4.0	2.6	0.05	1.6	537	"	"	"	4.2	2.2	0.06	1.7
463	"	"	"	3.6	2.2	0.05	1.3	538	"	"	2.5PB 5/6	4.1	2.7	0.07	1.5
464	"	"	5PB 4/8	3.8	2.2	0.05	1.3	539	"	B	5PB 4/8	3.7	2.1	0.04	1.6
465	"	"	2.5PB 5/6	3.8	2.8	0.06	1.3	540	"	"	2.5PB 5/6	4.0	2.3	0.04	1.5
466	"	"	"	4.0	2.9	0.05	1.4	541	"	"	"	3.7	2.4	0.04	1.7
467	"	"	"	3.9	2.2	0.04	1.7	542	"	"	5PB 4/8	3.9	2.1	0.04	1.6
468	"	"	"	3.3	1.8	0.03	1.4	543	"	"	2.5PB 5/6	4.6	3.0	0.07	1.2
469	"	bg	2.5B 7/4	3.2	1.6	0.03	1.1	544	"	bg	2.5B 7/4	3.8	2.1	0.05	1.7
470	"	B	2.5PB 5/6	4.6	2.8	0.07	0.8	545	"	B	5PB 4/8	3.7	2.2	0.07	1.3
471	"	"	5PB 4/8	4.5	3.4	0.09	1.1	546	"	"	2.5PB5/6	3.9	2.3	0.07	2.0
472	"	"	2.5PB 5/6	4.0	2.7	0.06	1.1	547	"	"	"	3.9	2.1	0.05	2.0
473	"	"	"	3.9	2.4	0.05	1.2	548	"	"	"	4.3	2.5	0.07	1.9
474	"	"	5PB 4/8	3.9	2.1	0.05	1.6	549	"	"	"	4.0	2.6	0.06	1.3
475	"	"	2.5PB 5/6	4.0	3.0	0.06	1.1	550	"	"	"	(3.8)	2.8	(0.07)	1.6
476	"	"	"	3.8	2.7	0.05	1.5	551	"	"	"	3.8	2.8	0.07	1.6
477	"	"	"	3.8	2.1	0.05	1.4	552	"	"	"	3.9	2.7	0.06	1.7
478	"	"	"	4.2	2.9	0.07	1.6	553	"	"	"	3.8	2.5	0.06	1.5
479	"	"	"	4.2	2.8	0.07	1.6	554	"	"	"	3.9	2.8	0.07	1.5
480	"	"	"	4.1	2.8	0.07	1.5	555	"	"	"	4.0	2.4	0.06	1.9
481	"	"	"	4.0	2.3	0.05	1.4	556	"	"	"	4.0	2.7	0.09	1.9
482	"	"	"	4.1	2.5	0.05	1.5	557	"	"	"	4.2	2.9	0.09	1.2
483	"	"	"	4.0	2.7	0.06	1.6	558	"	"	"	4.0	2.8	0.08	1.7
484	"	"	"	4.7	2.8	0.07	1.7	559	"	"	"	3.7	2.5	0.07	1.3
485	"	"	"	4.1	2.7	0.06	1.5	560	"	"	"	4.0	2.3	0.06	1.6
486	"	"	"	3.9	2.5	0.06	1.6	561	"	"	"	3.8	2.5	0.07	1.6
487	"	"	"	4.0	2.6	0.07	1.5	562	"	"	"	4.2	2.5	0.07	1.5
488	"	bg	2.5B 7/4	4.3	3.2	0.07	1.1	563	"	"	"	4.2	2.4	0.06	1.6
489	"	B	2.5PB 5/6	4.0	2.5	0.06	1.3	564	"	"	"	4.0	2.6	0.06	1.6
490	"	"	"	3.6	2.6	0.06	1.2	565	"	"	"	3.9	2.1	0.06	1.4
491	"	"	"	4.0	2.6	0.06	1.7	566	"	"	5PB 4/8	3.7	2.1	0.06	1.7

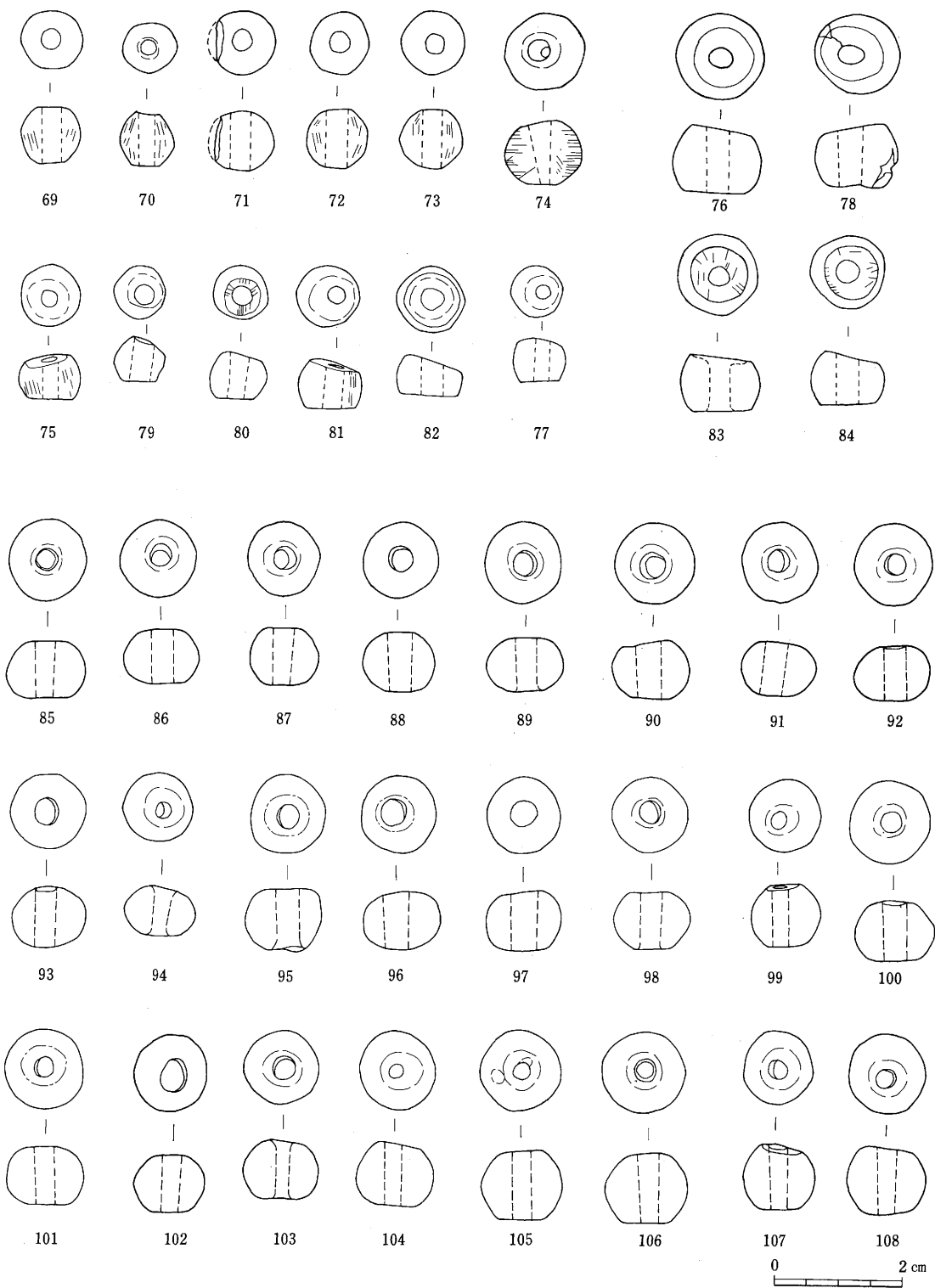
NO	分類	色	色記号	最大径	最大厚	現重量	孔径	NO	分類	色	色記号	最大径	最大厚	現重量	孔径
567	小A	B	2.5PB 5/6	3.9	2.6	0.06	2.4	642	小A	B	2.5PB 5/6	4.0	2.4	0.06	1.6
568	"	bg	2.5B 7/4	4.0	2.8	0.06	1.7	643	"	"	"	4.0	2.8	0.05	1.8
569	"	B	5PB 4/8	3.7	2.1	0.04	1.3	644	"	"	"	4.2	2.5	0.06	1.4
570	"	"	2.5PB 5/6	4.3	2.8	0.07	1.2	645	"	"	5PB 4/8	4.2	2.7	0.07	1.3
571	"	"	"	4.0	2.6	0.05	1.7	646	"	"	2.5PB 5/6	3.9	2.7	0.06	1.4
572	"	"	"	4.0	2.6	0.05	1.5	647	"	"	"	4.1	2.8	0.07	1.3
573	"	"	"	4.1	3.0	0.07	1.3	648	"	"	"	4.0	2.8	0.06	1.1
574	"	"	"	4.1	2.5	0.05	1.7	649	"	"	"	3.9	2.6	0.06	1.9
575	"	"	"	4.3	3.0	0.06	1.4	650	"	"	"	3.8	2.4	0.05	1.2
576	"	"	"	4.1	2.5	0.05	1.2	651	"	"	5PB 4/8	4.0	2.7	0.07	1.4
577	"	"	"	3.9	2.4	0.05	1.3	652	"	"	5PB 3/8	3.1	2.0	0.03	1.2
578	"	"	"	4.3	2.5	0.07	1.3	653	"	"	2.5PB 5/6	4.3	2.8	0.08	1.3
579	"	"	5PB 4/8	3.8	2.5	0.05	1.3	654	"	"	"	4.2	2.4	0.06	1.7
580	"	"	2.5PB 7/4	3.8	2.3	0.04	1.5	655	"	"	5PB 4/8	4.0	2.3	0.07	1.6
581	"	"	2.5PB 5/6	3.9	2.2	0.04	1.5	656	"	"	"	3.5	2.1	0.04	1.1
582	"	"	"	3.9	2.5	0.05	1.8	657	"	"	2.5PB 5/6	4.0	2.2	0.05	2.0
583	"	"	5PB 4/8	3.7	2.2	0.05	1.2	658	"	"	5PB 4/8	4.1	2.7	0.07	1.1
584	"	"	2.5PB 5/6	3.9	2.7	0.05	1.1	659	"	"	2.5PB 5/6	4.0	2.7	0.07	1.6
585	"	"	"	3.8	2.2	0.05	1.2	660	"	"	5PB 4/8	4.3	2.7	0.07	1.8
586	"	bg	2.5PB 7/4	3.8	2.2	0.05	1.4	661	"	"	2.5PB 5/6	3.7	2.2	0.04	1.4
587	"	B	2.5PB 5/6	3.9	2.6	0.06	1.3	662	"	"	"	4.0	2.6	0.05	1.4
588	"	"	"	3.9	2.9	0.06	1.6	663	"	"	5PB 4/8	4.2	2.7	0.07	1.4
589	"	"	"	4.0	2.7	0.05	1.2	664	"	"	2.5PB 5/6	3.8	2.3	0.05	1.2
590	"	"	"	3.8	3.2	0.07	1.7	665	"	"	"	3.7	2.2	0.04	1.3
591	"	"	"	3.8	2.6	0.04	1.2	666	"	"	"	4.3	2.8	0.07	1.5
592	"	"	"	3.8	2.6	0.06	1.5	667	"	"	"	4.0	2.7	0.06	1.2
593	"	"	"	3.8	2.4	0.05	1.5	668	"	"	"	3.7	2.2	0.04	1.4
594	"	"	"	3.6	2.5	0.05	1.3	669	"	"	"	3.9	2.7	0.06	1.5
595	"	"	5PB 4/8	3.8	2.8	0.06	1.7	670	"	"	"	4.1	2.8	0.06	1.7
596	"	"	2.5PB 5/6	3.8	2.5	0.06	1.3	671	"	"	"	4.2	2.8	0.07	1.5
597	"	"	"	4.0	2.7	0.07	1.2	672	"	"	5PB 4/8	3.6	2.1	0.04	1.2
598	"	bg	2.5B 7/4	3.5	2.2	0.05	1.3	673	"	"	2.5PB 5/6	4.3	2.5	0.08	1.9
599	"	B	2.5PB 5/6	4.0	2.3	0.06	1.2	674	"	"	"	4.0	2.3	0.06	1.5
600	"	"	"	4.2	2.4	0.05	1.8	675	"	"	"	4.5	2.5	0.08	1.6
601	"	"	"	4.1	2.5	0.06	1.4	676	"	"	"	4.2	2.7	0.08	1.7
602	"	"	"	4.2	2.7	0.07	1.3	677	"	"	7.5B 4/6	4.0	3.2	0.09	1.0
603	"	"	"	3.8	2.2	0.05	1.4	678	"	"	2.5PB 5/6	4.2	2.7	0.09	1.5
604	"	"	5PB 4/8	3.8	2.0	0.05	1.6	679	"	"	"	3.9	2.5	0.06	1.3
605	"	"	2.5PB 5/6	3.7	2.7	0.06	1.6	680	小B	G	5BG 5/6	4.3	2.3	0.06	1.8
606	"	bg	2.5B 7/4	3.7	2.0	0.05	1.2	681	"	"	2.5B 6/6	4.0	2.2	0.06	1.4
607	"	S B	10B 7/4	4.0	2.1	0.06	1.5	682	"	B	2.5B 7/6	4.2	2.1	0.04	1.6
608	"	B	2.5PB 5/6	3.2	2.3	(0.04)	1.3	683	"	bg	7.5BG 7/4	4.0	2.9	0.04	1.2
609	"	"	"	3.8	3.0	0.07	0.9	684	"	B G	2.5B 6/6	4.7	2.7	0.11	1.7
610	"	"	"	4.0	2.5	0.07	1.3	685	"	S B	5B 6/6	4.4	3.2	0.10	1.3
611	"	"	"	3.7	3.2	0.07	1.2	686	"	B	5B 5/6	3.9	2.5	(0.06)	1.3
612	"	"	"	4.5	2.5	0.07	1.9	687	"	S B	5B 7/6	3.6	2.6	0.05	1.1
613	"	"	"	3.6	2.8	0.05	1.6	688	"	B G	2.5B 6/6	4.2	2.2	0.07	1.7
614	"	"	"	4.1	2.5	0.05	1.6	689	小C	"	"	3.6	2.0	0.05	1.2
615	"	"	"	4.0	2.8	0.06	1.5	690	"	"	5BG 5/6	4.3	3.0	0.07	1.4
616	"	"	"	3.7	2.4	0.05	1.8	691	小D	B R	10B 7/1	4.9	2.2	0.09	1.6
617	"	"	"	4.1	2.6	0.05	1.6	692	小E	B	5PB 4/10	4.2	2.5	0.08	1.6
618	"	"	"	4.2	2.4	0.07	1.4	693	"	"	"	4.7	2.3	0.06	1.7
619	"	"	"	4.1	2.2	0.05	1.7	694	"	"	"	3.6	2.2	0.04	1.1
620	"	"	"	4.3	2.7	0.07	1.6	695	"	"	"	3.5	1.9	0.03	1.4
621	"	"	"	3.7	2.9	0.06	1.5	696	"	"	"	4.1	2.7	0.06	1.2
622	"	"	"	3.8	2.9	0.06	1.5	697	"	"	"	4.7	3.4	0.09	1.8
623	"	"	"	3.7	2.2	0.05	1.3	698	"	"	"	4.4	2.7	0.08	1.7
624	"	"	"	4.0	2.9	0.07	1.1	699	"	"	"	4.4	3.2	0.11	1.7
625	"	"	"	4.4	3.0	0.08	1.3	700	"	"	"	4.6	3.0	0.10	1.5
626	"	"	"	4.0	2.8	0.07	1.5	701	"	"	"	3.6	2.5	0.07	1.1
627	"	"	"	3.9	2.3	0.05	1.1								
628	"	"	"	4.0	2.7	0.06	1.1								
629	"	"	5PB 3/8	4.4	2.7	0.08	1.4								
630	"	bg	2.5B 7/4	3.5	2.9	0.05	1.5								
631	"	B	5PB 4/8	3.6	2.4	0.04	1.3								
632	"	"	2.5PB 5/6	3.9	2.3	0.05	1.4								
633	"	"	"	4.0	2.3	0.06	1.3								
634	"	"	"	3.9	2.5	0.06	1.0								
635	"	"	5PB 4/8	4.0	2.6	0.06	1.4								
636	"	"	2.5PB 5/6	4.2	2.7	0.06	1.7								
637	"	"	"	4.0	2.5	0.06	1.4								
638	"	"	5PB 4/8	4.1	2.6	0.06	1.4								
639	"	"	2.5PB 5/6	3.9	2.8	0.06	1.3								
640	"	"	"	4.1	2.5	0.07	1.4								
641	"	"	5PB 4/8	3.9	2.6	0.06	1.4								



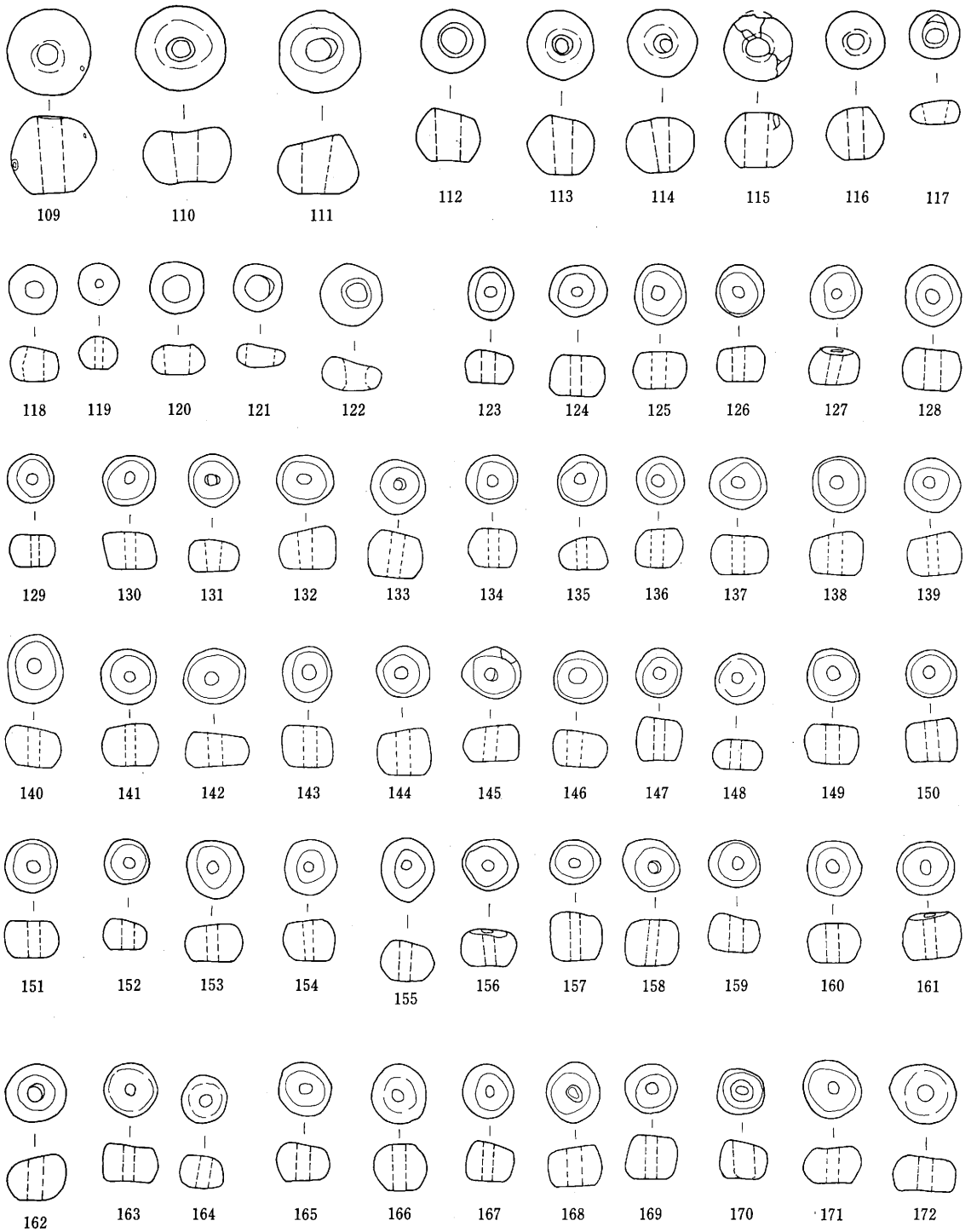
第58图 装身具(1) 耳環(1~6) 勾玉(7~32)



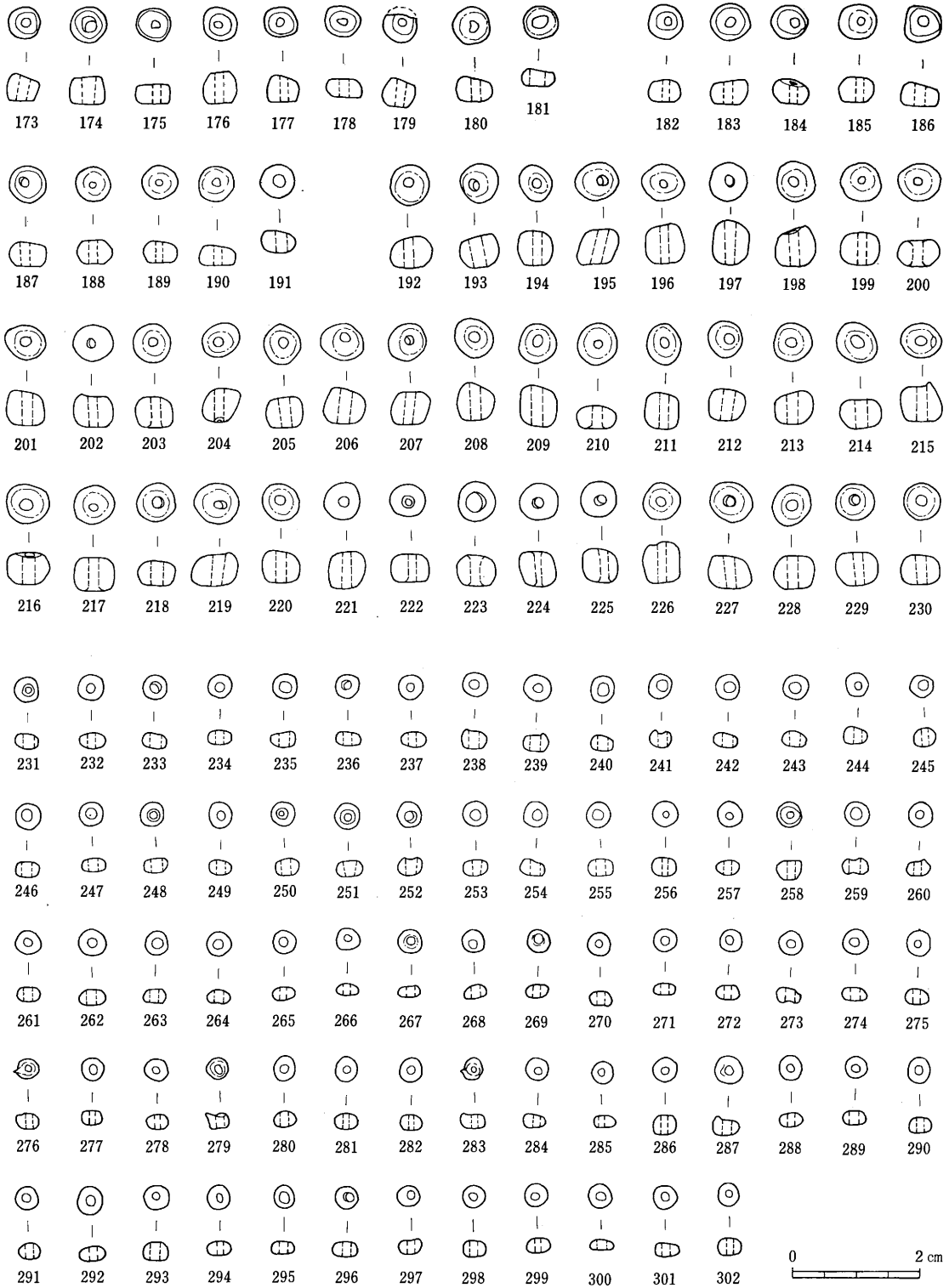
第59图 装身具(2) 管玉(33·34) 平玉(35) 棗玉(36·37) 切子玉(38~63)
算盘玉(64·65) 丸玉(66~68)



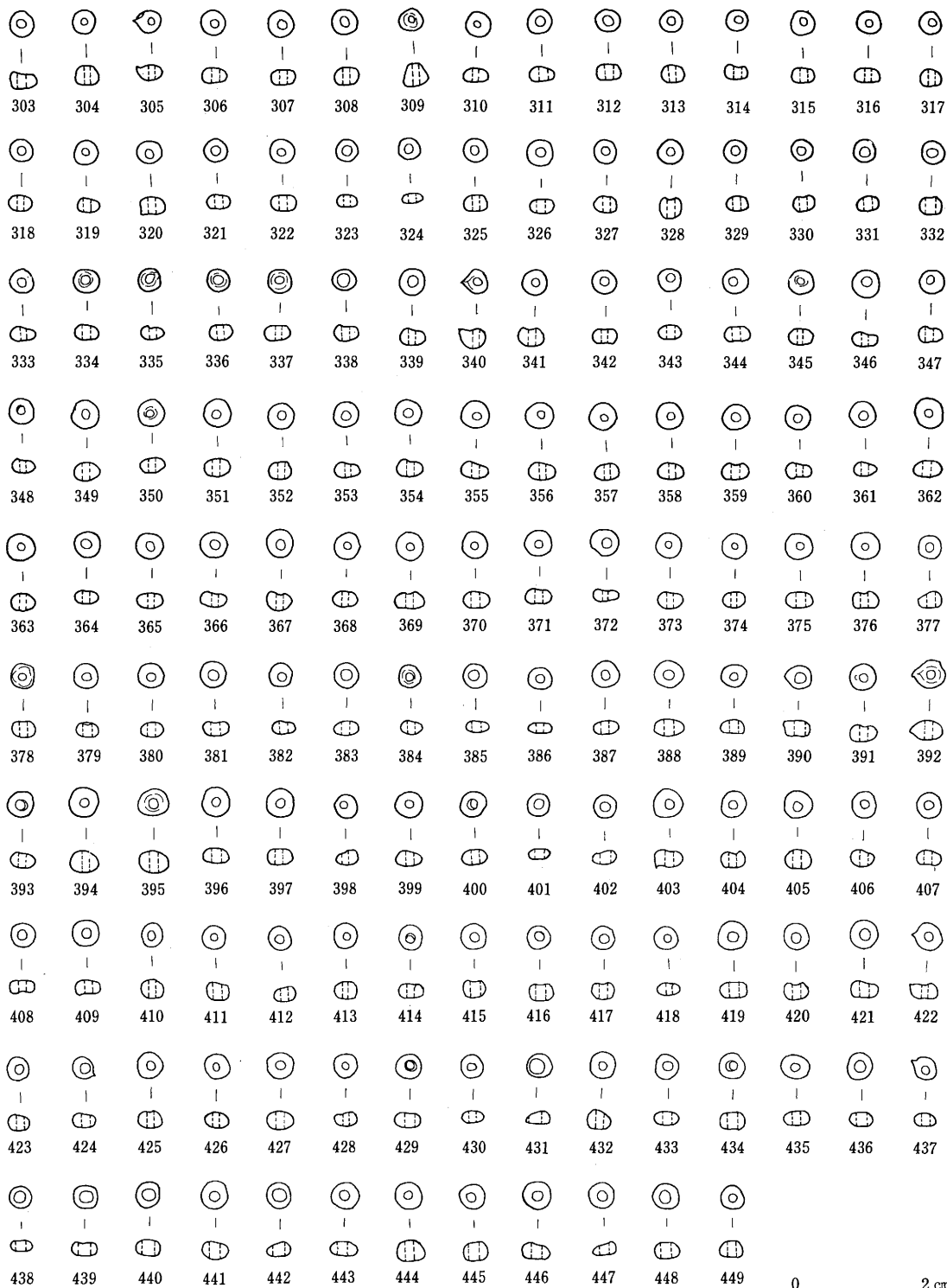
第60図 装身具(3) 丸玉(69~74) 白玉(75~84) ガラス製丸玉(85~108)



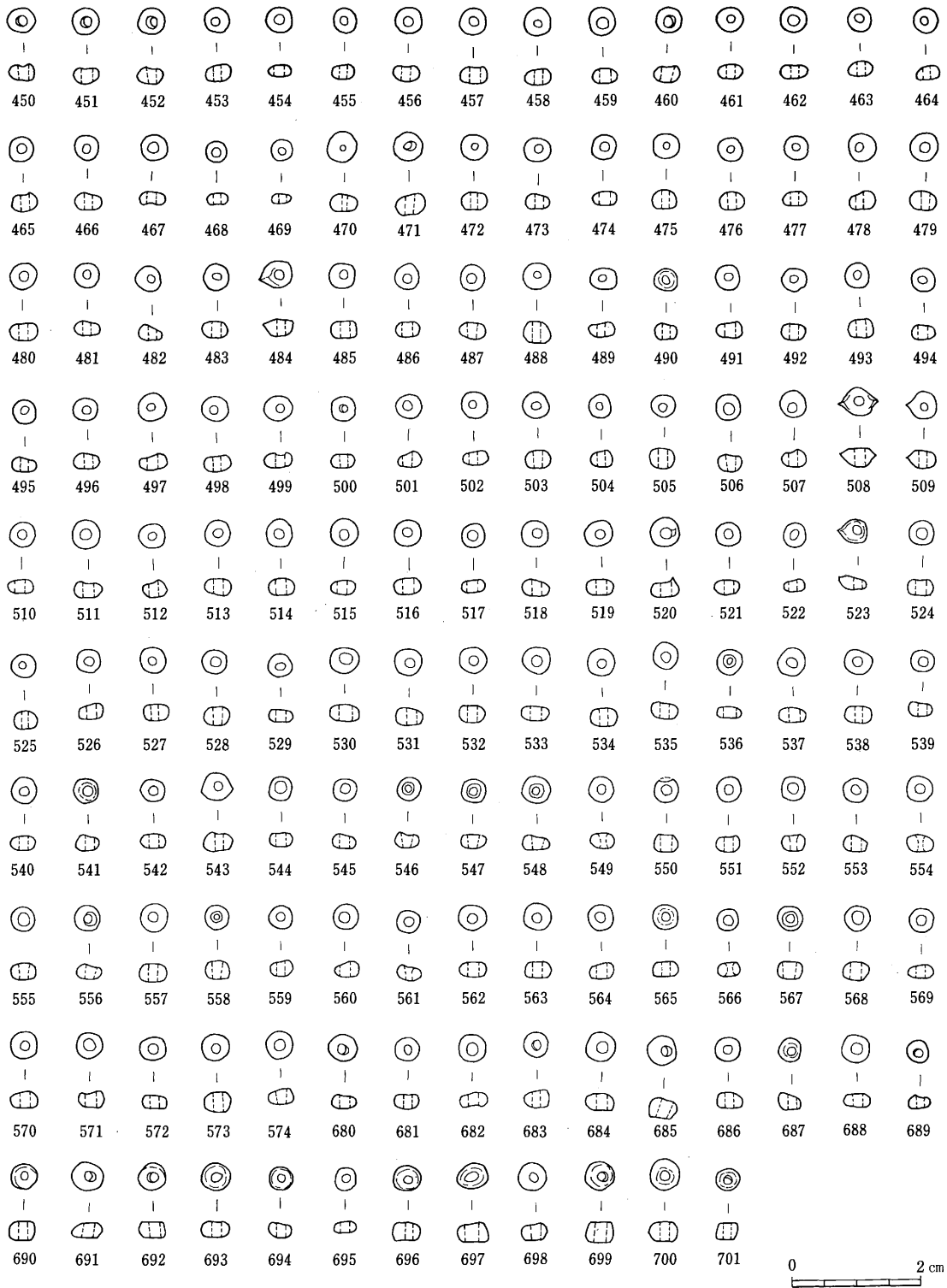
第61図 装身具(4) ガラス製丸玉(109~122) ガラス製白玉(123~172)



第62図 装身具(5) ガラス製白玉(173~230) ガラス製小玉(231~302)



第63図 装身具(6) ガラス製小玉(303~449)



第64図 装身具(7) ガラス製小玉(450~574, 680~701)

VI 調査のまとめ

薄川右岸の積石塚古墳について

かつて松本市街を西流する薄川の河岸段丘上には5基の積石塚が存在していた。それらは上流から古宮古墳、猫塚古墳、針塚古墳、大塚古墳、荒町古墳である。松本市の埋蔵文化財地図によると古宮1・2号、大塚1・2号といった記載があり、遺跡地図にも位置が記入されているが、墳丘規模等のデータは一切残っていないため、ここでは前記の5基について扱うこととする。

薄川右岸の積石塚は昭和63年度に調査された大塚古墳と平成元年度に調査された針塚古墳を除いては正式な発掘調査という方法を採用していないため、これら積石塚の位置付は古宮古墳出土の直刀と轡によって後期古墳ということにされてきた⁽¹⁾。また本報告による大塚古墳も墳中より直刀が出土したとの伝承があり、後期古墳とされた⁽²⁾。

今回の県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査により、薄川右岸の積石塚の性格が明らかになることが期待されたが、大塚古墳の調査結果は既述の通り、後世の破壊を顕著に受けているようであり、墳頂部から基底部まで銭貨が出土し、主体部の痕跡すら確認できなかった。ただ調査期間に制約があり、密度の濃い調査はできなかったが、墳裾北側で一部検出した周溝も弧状に巡るようであったことから、現在報告されている方墳ではなく、円墳であった可能性もある。

一方、今年度発掘調査された針塚古墳は、大塚古墳と同様、方墳であり三段築成の積石塚といわれていた⁽³⁾。しかし、墳裾東側に入れられたU字溝埋設のための溝部分に周溝の一部が懸ったため、墳形確認のために行った周溝調査で、円形の周溝を持つことが明らかになり、針塚古墳は円墳の可能性が強くなった。そして周溝から出土した有段口縁の壺形土器によって、本古墳の年代も6世紀後半から5世紀後半に100年以上も遡り、主体部も竪穴系の石室であることが予想された。次いで主体部確認調査に移行し、墳丘にトレンチを入れながら礫を除去していくと、床面に鉄平石が敷かれた礫層が確認された。

この針塚古墳の調査によって、薄川右岸の積石塚古墳の年代についても、新しい見解がなされつつある。針塚の調査がなされるまで5基の古墳が同一時期に造られたものと考えられてきたが、現段階では針塚古墳が中期古墳であることはほぼ間違いないだろう。とすると築造順序は針塚古墳がまず築かれ、あとの4基の前後関係は不明であるが、後に築造されたことになり、遺物の出土のある古宮・大塚古墳に関しては疑いないことである。

墳丘内部構造について、大塚古墳は副葬品その他の遺物の出土状況を考えても、内部に至るまで破壊を受けている可能性が高い。そのため調査結果から、大塚古墳は基底部から墳頂部まで礫を用いている積石塚であるのに対し、針塚古墳は旧地表面に盛土をし、その上に積石を施していたものである。こうした事実によると根本的に構造が異なるものであるようだ。しかし、大塚古墳の基底

部から、近世陶磁器の出土があること、古墳本来の副葬品、須恵器坏片、鈿、鉄鏃、ガラス製勾玉、ガラス小玉が四散した状態で出土していることを考えると、現状のままで残っていたとは考えにくい。また積石をすべて積み直すといった理由も考えられないため、少なくとも基底部の礫だけは築造当時のままであると考えたい。

次に主体部の構造であるが、墳丘は礫のみ、土石混合といった相違はあるが、この薄川右岸の積石塚は横穴式石室を持っていたという話は聞いていない。それに基底部の積石が残されている古宮古墳もその痕跡すら残っていない。

今年度調査された針塚古墳は、主体部が河原石を3～4段積み上げた、長軸2.3m、短軸1.3mで床面には鉄平石が遺骸を置かれたと思われる部分を中心に敷かれていた。又、こうした礫層様の石室を持つものに松本市浅間にある桜ヶ丘古墳、妙義山2号古墳などがある⁽²⁾。大塚古墳の場合も付近に横穴式石室の構築材となるような石材は見当たらないため、これらと同様、竪穴系の石室の可能性が高いのではないか。

薄川右岸の積石塚古墳の中で針塚古墳については、良好な資料を得ることができた。しかしその他の積石塚は大塚古墳を除いて発掘調査を経ていないこともあり、主体部・遺物については不明な点が多い。針塚古墳はこれら積石塚の中で初源の位置に置かれることは事実となろうが、それ以上の資料究明の進展性は資料に限界があり望めないことである。

南方古墳の副葬品について

南方古墳の重要性を説くと、やはり副葬品の豊富さということになろう。本文中で既述の通り、本古墳は調査時まで存在が知られていなかったこともあり、未盗掘であった。それだけに土器、金属製品、装身具といった副葬品の数の多さは松本平の後期古墳のなかで群を抜く見事なものである。土器は遺存状態が良好なこと、器種が豊富なことで古墳出土の一括資料として一級品である。

また馬具では壺鐙が出土し長野県内ではコウモリ塚古墳出土例に次いで2例目である⁽³⁾。そのほか鉸具、杏葉、辻金具等も出土している。

装身具は金環・銀環・勾玉・白玉・丸玉・小玉等玉類総数700点以上を数える。

以下、個々の種別ごとに見ていくことにする。土器は種別、器種は豊富であって、土師器坏、椀、高坏、須恵器坏、有稜坏、有台坏、蓋、高坏、高盤、脚付長頸壺、短頸壺、フラスコ瓶、甗、壺、甕、灰釉陶器椀がある。これらは石室内および周溝内から出土したものが大半である。この土器類は石室内の分布によると3乃至4群に分けることができる。それらは奥壁脇(A群)、玄門寄(C群)、羨道部(B群)である。また性格は異なるが、西側壁寄に一群を数えることができる(E群)。この中でA～C群が副葬品として納置された一群であり、E群は後世の石室利用に伴うものであるようだ。本古墳は調査時には石室内に黒褐色土が堆積した状態であったため、少なくとも10世紀にはまだ、E群土器の出土レベルより、埋葬面は上がっていたものの空間があったことは明らかである。

武器は直刀・鉄鏃が出土している。直刀は奥壁寄と玄室中央部両脇に置かれており、散乱範囲も玄室中央部ではほぼ納まる。破片の接合関係は奥壁脇と玄室中央部のものが接合するため、人為的な破壊および移動が考えられる。一方、鉄鏃は大きく片刃鏃とそうでないものに分けられる。集中部分は玄室中央部であり、玄門部付近にも点在する。

銅鏡は2個体分の破片が出土しているが、本来ならば奥壁付近で見つかった承盤とセットで使用されたものと思われるが、銅鏡片は玄室中央部から玄門部付近に散乱しており、玄室中央部のものと玄門部付近のものが接合することから、明らかに人為的移動が考えられる。また口縁部片の中には人為的に折り曲げられているものもあり、後世に人為的折損を受けている。

馬具は出土位置より3群に分けられる。1群は奥壁付近、2群は玄室中央西側壁寄、3群は玄門部寄である。轡が2個体出土していることから、馬具は2個体分以上あると考えられる。特に群によって傾向をとらえることはできないが、1群と3群の鉸具付杏葉が一对となる可能性があることから、納置された現位置を保っているとは思われない。また全体の傾向として1～3群の遺物が玄門部までに集中し、羨道部で轡が単独で出土しているのは、金属製品の特徴であろう。

次に装身具であるが、平面及び垂直分布によると4群をとらえることができる。勾玉・切子玉・金環は玉類の中では重量があるため、比較的現位置を保っていると考え、一群としてとらえる時の考慮に入れた。その中で2・3群を構成する装身具は、2群は勾玉中心、3群は勾玉・切子玉中心であり、現位置を保っていると考えたい。4群は白玉と小玉が中心であり、移動しやすと思われるが、垂直分布においてもほぼまとまる傾向を示しているため、一群としてとらえても問題ないと思われる。

以上、石室内の副葬品について述べてきたが、副葬品すべてを概観してみると、出土位置は土器を除いてはほぼ玄室内からのものが大半である。これは本古墳が調査時まで知られていなかったこと、また、ある時期を境に石室内に黒褐色土が堆積したことで古墳自体が守られてきたのであろう。そのため、土器をはじめとした副葬品の良好な資料が得られたと思われる。

註

- 1 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻上
- 2 長野県松本市本郷村教育委員会 1967 『信濃浅間古墳』
- 3 長野県考古学会 1966 『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告 長野県考古学会研究報告書』



I 地区全景
(西から)



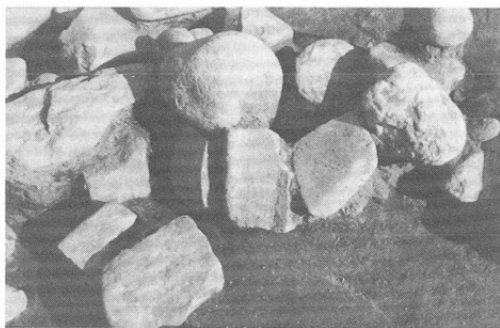
II 地区全景
(北から)



IV 地区
(南西から)



第1号住居址(東から)



第1号住居址遺物出土状況(東から)



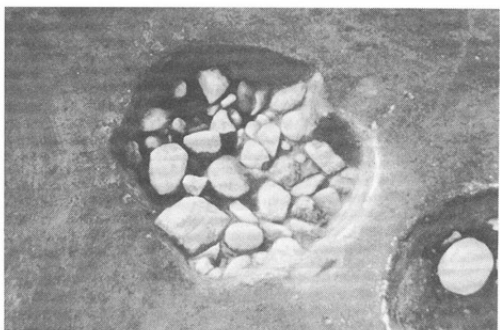
第3号住居址(西から)



土坑14磔出土状況(北東から)



第4号住居址(西から)



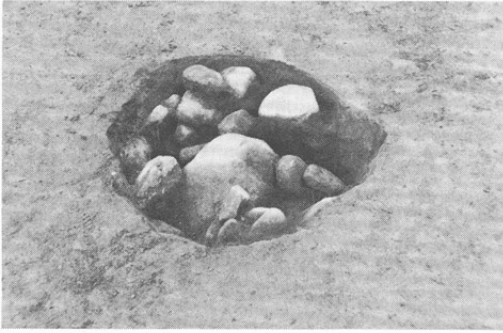
土坑16磔出土状況(南から)



第5号住居址(東から)



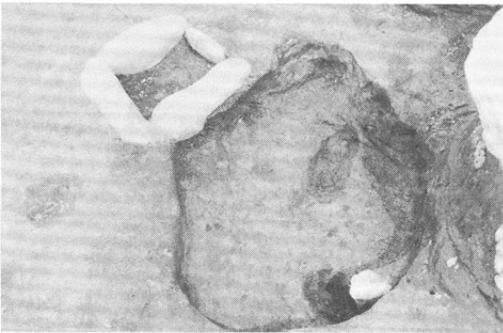
土坑21(西から)



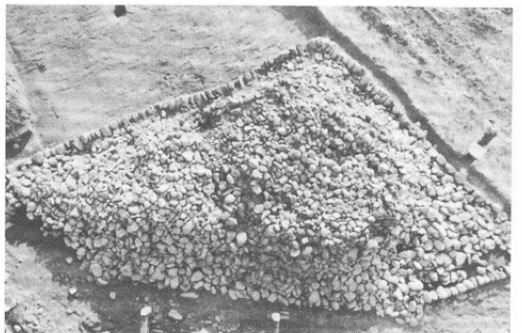
土坑21(西から)



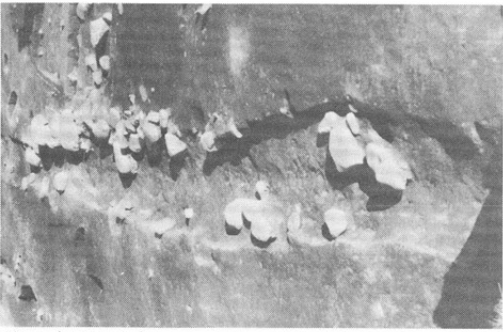
大塚古墳積石状態(東から)



土坑212(北西から)



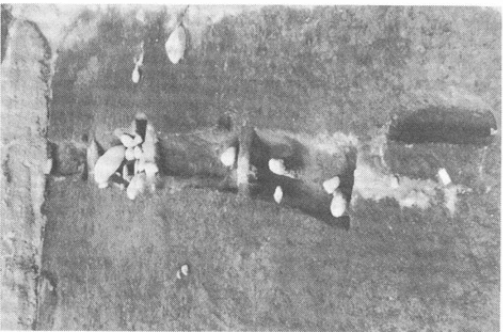
大塚古墳(上空から)



溝1(西から)



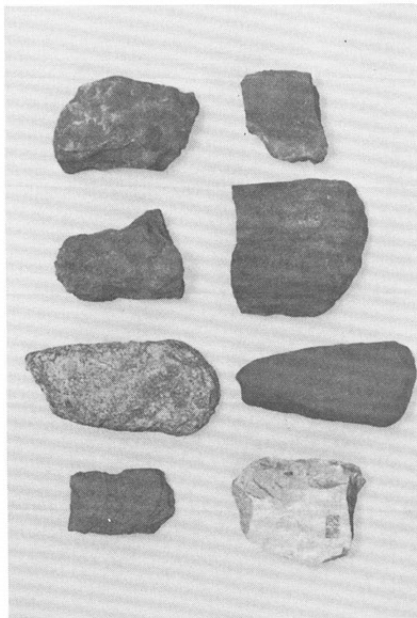
南方古墳石室(南西から)



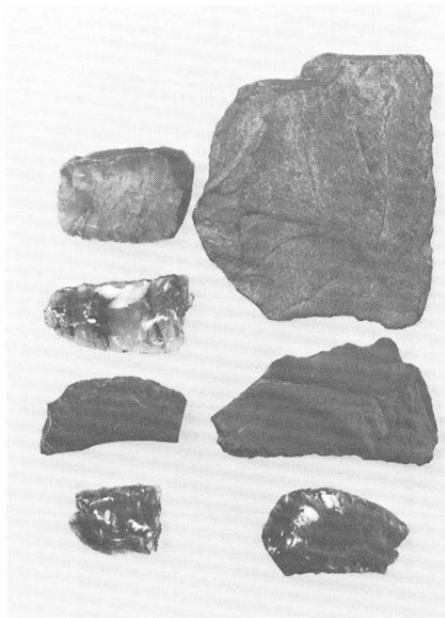
溝2(東から)



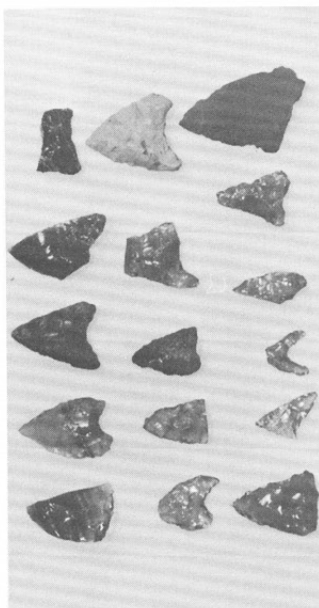
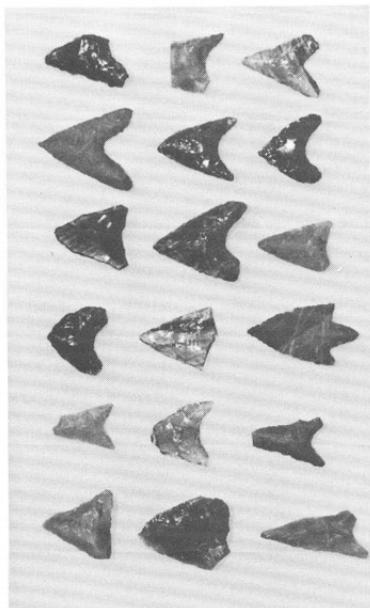
南方古墳A群土器(西から)



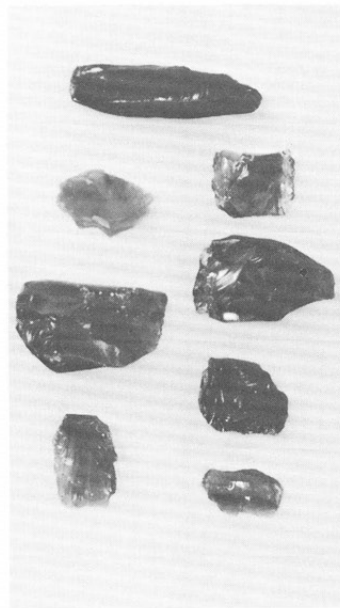
打製石斧



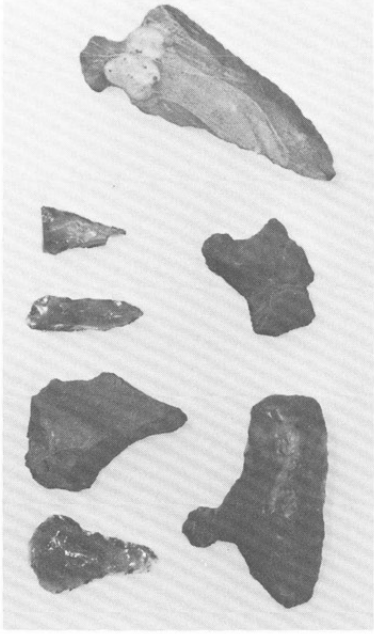
スクレイパー



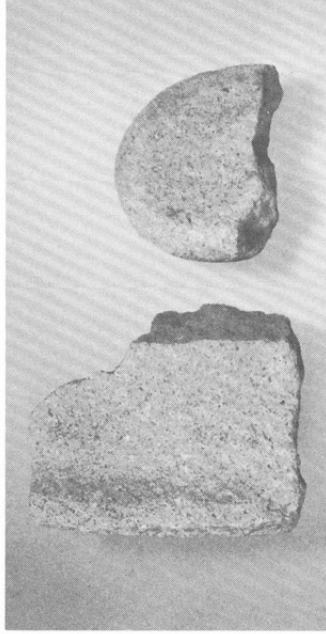
石鏃



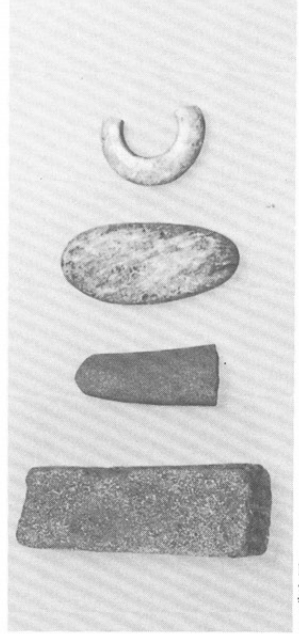
ピエス・エスキュー



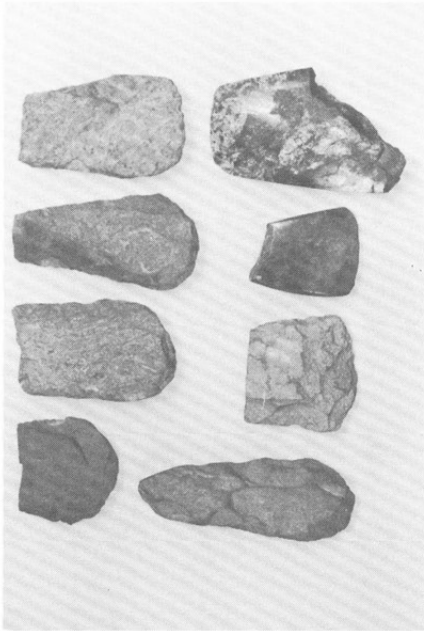
石匙



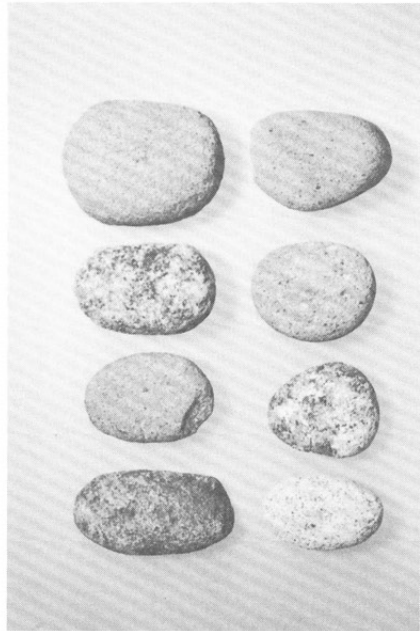
石皿



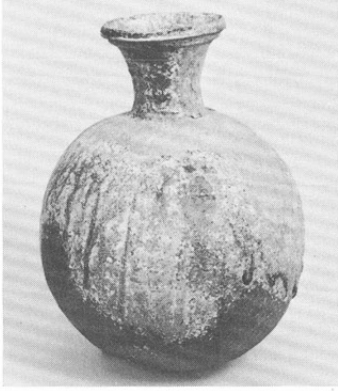
石製品



打製・磨製石斧



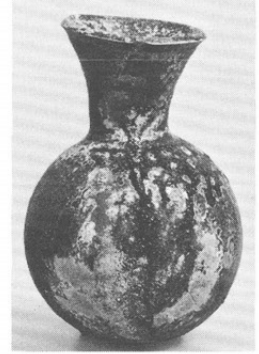
磨石・凹石・敲石



5



1



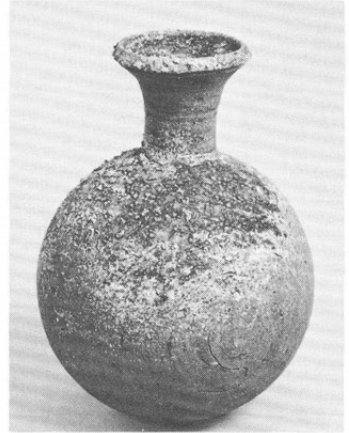
3



6



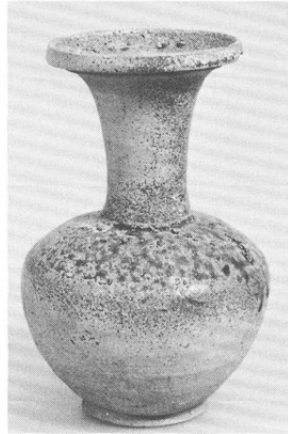
2



4



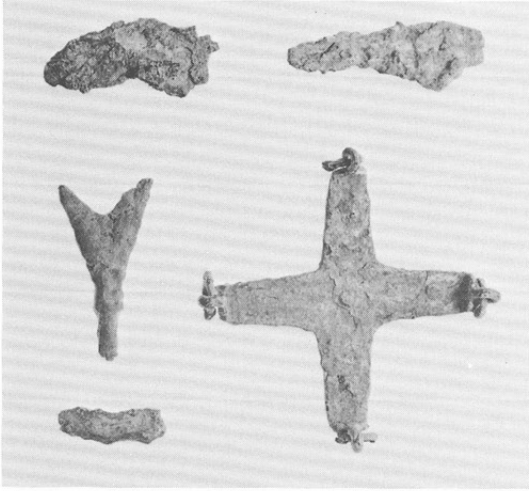
65



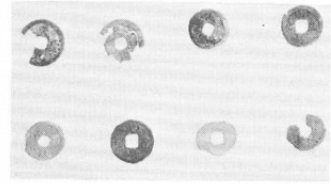
46



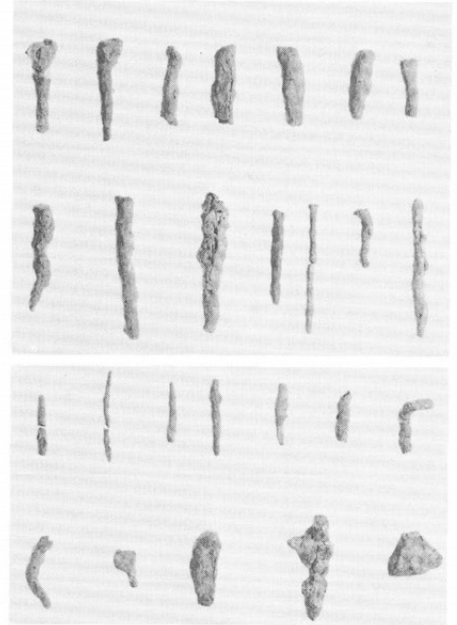
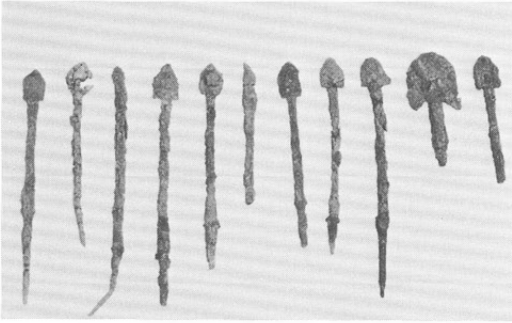
48



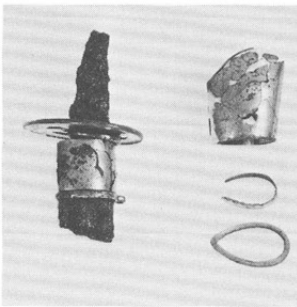
1 鉄器



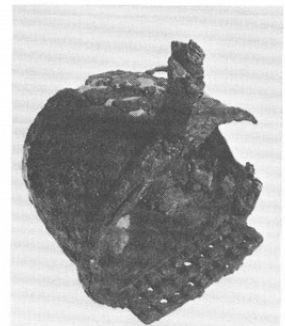
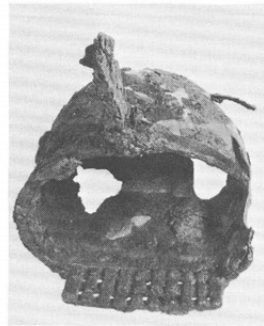
2 錢貨



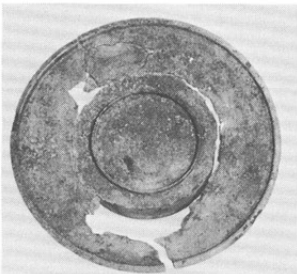
3 不明鉄器



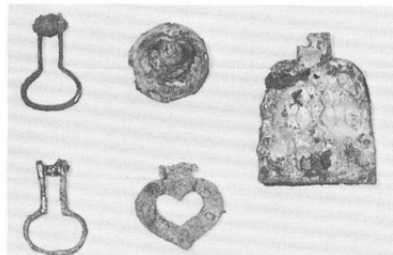
4 裝飾大刀



5 壺鎧

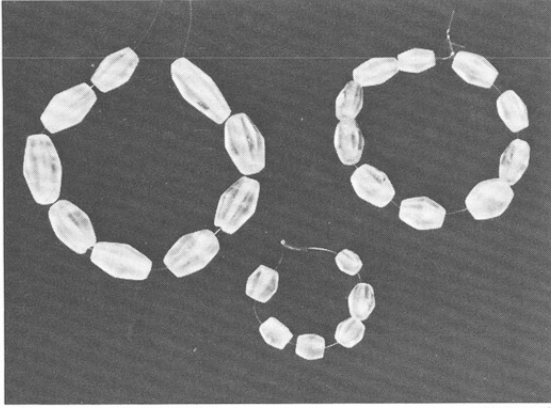


6 承盤



7 馬具

第7図版 南方遺跡(1~3)・南方古墳(4~8)出土金属製品



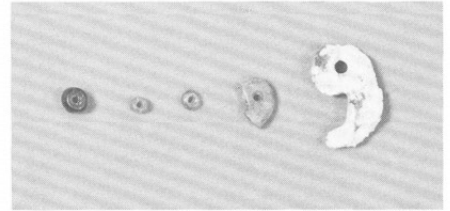
切子玉



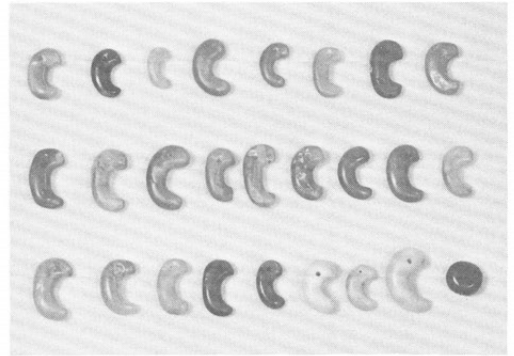
白玉・管玉



石製丸玉・白玉



ガラス小玉・ガラス製勾玉



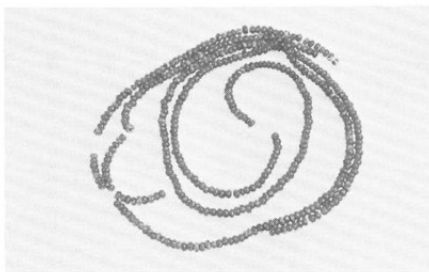
勾玉(石下は平玉)



石製白玉



金環



ガラス小玉

松本市文化財調査報告 No.74

松本市

大 塚 古 墳
南 方 古 墳
南 方 遺 跡

平成2年3月20日 印刷

平成2年3月20日 発行

編集 松本市教育委員会

〒390 長野県松本市丸の内3-7

Tel 0263(34)3000

発行 松本市教育委員会

印刷 アサカワ印刷株式会社

